阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2003年4月20日発行

月刊 きんもくせい

03年4月創刊号
(50+36+NO. 1)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■現場に真実はあり、細部に神は宿る

小林　郁雄（まちづくり会社コー・プラン代表）

師・水谷頴介の口癖であった「時流に乗るな、多数派になるな、在野精神」という村野藤吾さんのことばを、噛み締めて飲み込もうとする時に、舌に残るのが「現場に真実はあり、細部に神は宿る」という現場主義具体自律宣言である。「時流」という時間軸でも、「多数派」という空間軸でも、孤立無援の自律主義人生をかろうじて支えたのが、現場（リアリティ）であり細部（ディテール）であった。それが水谷さんからことあるごとに学んだ核であったと、今にして思う。

参画協働の声がかまびすしい。確かに２１世紀の市民活動社会（市民まちづくり）の基本はその倫理的論理的基盤である「合意形成」をもとにした参画と協働である。民主主義の本義に従えば、間接代議制のまやかしから、戦後５０年にしてようやく辿り着いた結論である。個人の「自律と連帯」が政治、経済、社会の基底にあることを確認すれば、自ずから政治、経済、社会への「参画と協働」が行動原理になる。そして、それを支える情報技術（IT）がやっとそれに応じた環境をつくることができるようになったからと、いえよう。

自律連帯にもとづく参画協働は、結局、直接民主主義の手法であるといえる。だから、地域主権・情報共有が重要である。「地域主権」とは、自分たちの住み活動する時空間である地域を、自分たちで計画し作り上げ運営していく（その運動を「市民まちづくり」という）、それを自分たちが中心になり自律的に進めることである。国家の効率的運営のための「地方分権」といった矮小化されたことではない。

「情報共有」とは、そうした地域における自律的な市民まちづくりが進められる基礎条件である。その地域に関係する情報が構成している地域の市民に共有されていなければ、自律も連帯もない。官僚などがかき集め溜め込んできたものを、公開請求にやっと「情報公開」などといった姑息なことではない。

参画協働社会は、地域に主権があり、情報を共有することが、必要不可欠である。

地域の主権を支えるのは現場主義である。刑事は行き惑ったら現場に戻るという。中坊公平さんの行動原点は現場である。現場に真実がある。

情報の共有は細部へのまなざしに他ならない。すべての構築物は詳細部分の集積である。細部を知らねば全体の理解はあやうく、細部に神は宿る。（030413 記）

＊　＊　＊

「きんもくせい」再復刊の巻頭頁はリレー論文にします。この１年間、連歌のように「参画協働のまちづくり」をテーマに、論議を続けて行くようにしていただけたらと考えます（もちろん、突然にテーマが変わることもアリですが）。

次号は、ひょうご市民活動協議会（HYOGON）代表の野崎隆一さん（遊空間工房）よろしく。

（小林郁雄→野崎隆一→）

■全国に広がるコレクティブ住宅

石東　直子（石東・都市環境研究室）

阪神大震災後に全国初として事業化された公営コレクティブ住宅「ふれあい住宅」（10地区、341戸）は、入居してからもう5年半から4年になる。震災直後の復興公営住宅という状況から、必ずしも協同居住を指向した人たちが入居したわけではなく、さらに、被災高齢者のためにシルバーハウジング制度で建設されたものが多いので、コレクティブ住宅＝高齢者住宅である、または、生活援助員つき住宅であるという曲解されたイメージを広めてしまった。

本来のコレクティブ住宅は70年代ごろから北欧を中心に進められてきた住まい方で、個人の自由な生活を基本に、家事や育児の協働による合理化、協同で住む安心感と楽しさをもつ住まい方を指向する人たちが住まい、居住者たちで住運営をしている。建物形態は個人の独立した住まいに加えて、必要とされる共用空間や設備を備えている。

●ふれあい住宅の今

ふれあい住宅は入居してから数年が経ち居住者の入れ替わりも少なくなく、各ふれあい住宅の協同生活の現状はさまざまである。下町長屋のように隣人との往来がある住宅、月ごとに食事会や誕生会をして和やかなひとときをもっている住宅、忘年会や新年会、雛祭りなどが恒例になっている住宅、愛好者たちがガーデニングを楽しんだり、ボランティア登録をして活動をしている住宅もある。一方、居住者全体の高齢化が一段と進み、共同活動のエネルギーがなくなっている住宅もある。しかし、復興公営住宅に移り住んで既に150人にも及んでいるという孤独死は、ここではない。

昨秋、ふれあい住宅連絡会が企画した一日バスツアーの参加者に行ったアンケートによると「ふれあい住宅の住みごこち」については60人の回答者のうち77%の人が「住んでよかった」と答えており、20%が「あまりいいとは思わない」と答えている。

●公営コレクティブ住宅の全国展開

被災地コレクティブ住宅は高齢者対応住宅のひとつのモデルとして、各地の自治体から注目を集め、視察が相ついだ。まちづくり協議会、福祉ボランティア組織および個人やグループの視察も少なくない。

被災地型と同じシルバーハウジング制度による公営コレクティブ住宅の事業化は、大阪府営門真御堂ふれあいシルバーハウジング(20戸、2001年1月入居)、長崎県営本原すこやか住宅（14戸、2001年5月入居）、豊橋市営旭本町高齢者住宅(8戸、2001年5月入居)がある。シルバーハウジング制度によらない一般公営住宅の多世代コレクティブ住宅は埼玉県営蕨ふれあい住宅（19戸、2002年4月入居）や豊橋市営池上住宅（第1期40戸、2002年8月入居。第2期46戸、2004年5月入居予定）がある。いずれの事業も、計画段階や入居募集前から入居後に至るまで、新しい住まい方周知のための説明会やワークショップを行っている。

なお、大阪府は府営住宅居住者の単身高齢世帯や高齢者夫婦のみ世帯の増加が進み、今後も増加が予測されることから、被災地コレクティブ住宅を検証し、「ふれあいハウジング整備事業」を創設して、シルバーハウジング型、集住型（自立型コレクティブハウジング）、集会所型（ふれあいリビング）の3種の事業を推進している。集会所型ふれあいリビングは既設府営住宅に集会所とは別に「協同生活の場」を整備し、運営は住民の自主運営に委ねるもので、コレクティブ住宅の共同室を別棟にもったスタイルである。現在3ヶ所が事業化され、活発な活動が進められており、週に6日間午前10時から午後4時ごろまで、子どもの遊び場、各種サークル活動や住民のたまり場として活用され、有料の喫茶や軽食サービスがある。図書コーナーやコンピューターコーナーも備えている。

これらの事業に際して、事業主体の大阪府は民間コンサルタントにコーディネイト業務を委託契約し、担当の府職員と協働して居住サポートを行っている。

●民間コレクティブ住宅の展開

民間の多世代コレクティブ住宅の展開も始まっている。

2002年6月に入居した「芦屋17℃」は17戸のコーポラティブ方式の分譲コレクティブ住宅である。事業にあたって参画者を募り（共同建設組合を設立）、入居までの2年近くにわたって建物建設のための会合と協同居住のイメージを共有するための会合を重ねてきた。1階に共用リビング（170㎡）と屋上に庭園があり、住戸は50㎡～100㎡の広さがあり、良好な地域環境に建つ5階建ての集合住宅である。現在（03年3月）の入居世帯は10世帯と1設計事務所でまだ空住戸があるが、幼児のいる若い世帯、成人した子どもの

いる世帯、初老夫婦世帯、キャリアウーマンや70歳台の単身世帯など多様な世帯構成である。ライフスタイルとして協同居住を指向した人たちの集まりなので協同居住運営に前向きの歩調が感じられる。

東京都荒川区に 28 戸の多世代型賃貸コレクテイブハウス「かんかん森」が今年6月の入居を目指して進められている。早期に居住者グループを募り、居住者の意向を計画に反映させ、協同居住の学習等ワークショップの開催を3年近くに及び続けている。コレクティブ住宅の研究や啓発活動を続けてきた専門家たちがＮＰＯコレクティブ社を設立してコーディネイトし、理想のコレクティブ住宅をつくりあげようとしており、入居後の展開が楽しみなプロジェクトである。

◉コレクティブ住宅の検証

現在、わが国でコレクティブ居住を推進する意図は、公営コレクティブ住宅と民間コレクティブ住宅とでは若干の違いがある。

公営コレクティブ住宅は少子・高齢社会での福祉・住宅施策のひとつのモデルとして、主として高齢者向け住宅が供給されている。自室に閉じこもりがちな高齢者の日常生活を快適にし、生きがいづくりを促す住まい方として、日常生活の中で自然に隣人たちとふれ合う仕掛け「共同室」を備えた住宅の供給である。

民間コレクティブ住宅はまだ事例が少なく、検証するには今後の展開を待たねばならないが、紹介した2事例は多世代コレクティブ住宅であるが、欧米の先進事例のように食を中心とする家事や育児等の日常生活の一部の協同化を積極的に進めていこうとするものではない。小家族や単一家族では味わえない大家族のような楽しみを共有し、何か手を貸してほしい時には互いが助け合える関係をつくり、安心した暮らしができる住まい方で、社会の変革期にある日本的なコレクティブ住宅と言えよう。あるいはわが国でのコレクティブ住宅勃興期のスタイルとみるのが適切なのかもしれない。

◉コレクティブ住宅の展望

90 年代から加速した少子化、高齢化、単身世帯化は今後も続くであろう。特に大都市では老若男女を問わず単身世帯が全世帯の 30 パーセント近くを占めるようになり、ライフスタイルに大きな変化が見られるが、住まい方に関してはそれに対応するものがなかなか見えてこない。

今後、この日本型コレクティブ住宅は、さらに日本的特性を深めて、住いづくりの枠を越えたまちづくりや豊かな生涯生活設計づくりへと連携し、現在かかえる諸課題の解決策に有効に機能すると考える。

例えば、60 年代から 70 年代に開発された団地はオールドタウン化し、近隣センター等の空店舗も目立ち、町全体が衰退の様子を示し、団地再生が緊急課題となっている。コレクティブ住宅の導入は団地再生の有効なツールとして機能し、地域再生、コミュニティ活性化につながると思われる。高度経済成長期に大量に建設され、建替え時期を迎えようとしている集合住宅は、建替えに際して一部にでもコレクティブ住宅を導入すれば、住戸面積をそんなに広げることなく対応できるし、高齢世帯や単身世帯にも建替えが受け入れやすいであろう。また、街中の集合住宅の低層階に通りに面してコレクティブの共同室が位置していると、通りに温かな景観を醸し出してくれる。さらに、一人、二人ではなかなか実行しにくい地球環境に負荷をかけない暮らし方が協同居住なら実行しやすい。

コレクティブ住宅を単なる新しい住いづくりという視点だけでとらえるのではなく、地域再生、コミュニティの活性化、地球環境と共生する持続可能なまちづくりの視点としてとらえると、日本型コレクティブ住宅の更なる展開につながるのではないだろうか。



居住者が仲よしの子育てグループを招いての定例の集い



大家族のようなクリスマス食事会／どちらも「芦屋17℃」

震災復興で加速する企業と地域の新たな関係を考える

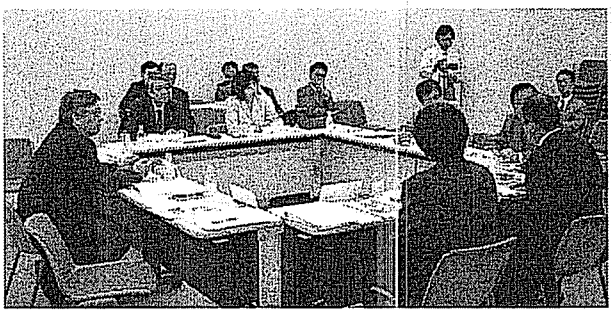
■企業文化と地域社会イノベーション

加藤　恵正（神戸商科大学）

阪神・淡路大震災からの復興過程において、NPO やボランティアといったいわゆる市民セクターの台頭は特筆すべき現象であった。震災後 1 年間に活動したのべ 130 万人のボランティアの活動は、これまでの地域社会経済システムのあり方を再考・再編する契機となったことは論をまたない。こうした市民活動は、これまでにもその活動は仔細に紹介され、98 年の NPO 法の成立ともあいまって新たな主体としての認知は確立してきた。しかし、被災地における復興を展望すると、いわゆる既往主体である「企業」や「行政」にも大きな変化があるようだ。とりわけ、企業はこれまで「まちづくり」という観点からは必ずしも積極的に関与する主体として議論されなかったこともあり、被災地における新たなまちづくりの視座を提供しているように思われる。次回以降、「きんもくせい」においてこうした企業を数回事例としてとりあげ、震災後に地域との関係づくりについて再考し今後の地域社会経済システムのありかたについて若干の考察を行いたいと考えている。

企業文化が都市・地域経済の再生と関連してその重要性・課題が議論されたのは、1980 年代の民活全盛期であった。たとえば英国における都市開発公社やエンタープライズ・ゾーンといった企業活力に大きく期待した政策では、民間企業を主体とする都市再生事業がもたらす功罪を「企業文化」という観点から論じていた。もともと企業文化という概念は、経営学における組織全体の外部環境適応に関わるキイワードのひとつとして 1970 年代に登場したものである。どちらかというと企業の内部構造のあり方に関わる議論として位置づけられてきた「企業文化」は、現下における社会経済システムにおける評価のありかた（コーポレイト・ガバナンス）に関わる議論の展開ともあいまって、企業と外部環境、より具体的には都市や地域との相互的関係のなかで捉えなおす必要があろう。たとえば、従来企業内部で行ってきた R&D も、企業外部の様々な主体との情報共有を行いつつイノベーションの突破口を切り開くことを指向する地域イノベーション・システム構築に向かいつつあることは周知の通りである。さらに、こうしたことと関連して地域社会における直接的には企業ビジネスと関わりを持たないようにも見える主体や活動との相互的学習（collective learning）は、企業と地域コミュニティが連動して地域内部に「社会イノベーション」を創出する可能性を示唆していると考えてよい。

今回の連載は、現代における企業文化を、企業活動と地域社会との関係から見出すべく、被災地に所在する企業を事例としてファクト・ファインディングを試みるものである。これまで、地域づくりにどちらかというと「排除」され「無関心」でもあった企業が、どのような形で地域社会との関係を持ちつつあるのか、こうした新たなまちづくりの主体の登場によってコミュニティ形成にどのような変化がもたらされているのか。かかる課題について企業や企業家の具体的な姿から、地域社会の将来像を考えようとするものである。



被災者復興支援会議Ⅲ　「地域と企業」フォーラム 030408
（支援会議では、復興の残された大きなテーマとして地域と企業の関係を問い直している。左端が筆者）写真／小林郁雄

■京都市都心再生に向けた取り組み

第 25 回　都市公団まちづくり研究会　2003 年 3 月 26 日／講師・岸田里佳子（京都市都市づくり推進課）

田中　貢（都市公団）



岸田里佳子さん

あの京都ホテル・京都駅ビル問題の景観問題、また料亭と都心マンション反対運動など、ここ 10 数年何かと話題を集めていた京都市内の「（まちなみの景色）京町家再生」について、行政が住民意向を受けながら約１年半かけて一つの方針を纏め上げた。

将来目指すまちの有り方を、公開の場で、市民の注視の元、共に議論しながら作り上げた。この「新しい建築ルール」の作成プロセスそのものが、市民参加の合意形成の形である。

また、岸田氏は最近「職住共存の都心再生」（学芸出版社）、「造景 35」の 2 冊の本を出されている。京都の町家をどのようにして合法的にまた、合理的に残し、観光資産として生かすかという行政側の視点。そして住まい手側としては、自信をもって住みつづける文化の視点。また「よそ者」「若者」がそのスタイルが楽しいと古家に住み働く場所となり楽しむ視点。などが見えるのではと思います。

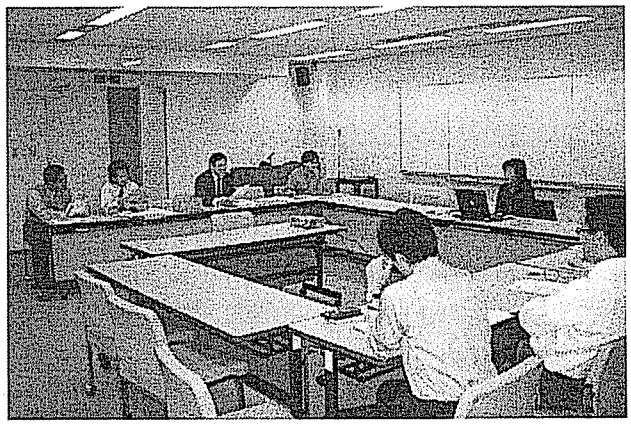
そこで本日の研究会では、国の都市再生プロジェクト推進費調査や京都市条例（４０条＋市条例による区域取りで準防火を外す）など京町家の最近の取組状況に加え、４月１日施行の京都都心部の新しい建築ルール（規制強化）などの取組、都市再生本部事務局主催の「歴史的たたずまいを継承した街並み・まちづくり協議会」との連携などについて、説明していただきました。

一貫している主張は「全ての建物を町家にするわけではなく、中高層の建築物もある中で、まちに賑わいがあり、持続可能なまちなみをつくっていく」という思想であると思います。随一のベスト追求ではなく、そこそこのベスト（モアベスト）論が住民合意をこなしていくためにも必要な判断でありそうである。

歴史的まちなみの保存について、京都人に「こだわり」がある人もいる。若い人が古臭さも感じていない。この町家は使ってナンボ。住みながらにして全国発信したい。このような「京都ブランド」の力も、一過性の文化でないようにしないと、将来にその反動が起こる可能性を潜めている。

最後に、この研究会では過去、国の関係者に 2 回話してもらった、どちらも女性である。明快に切って捨てる分析力と行動力にまったくこちらがひれ伏すばかり。これからもいかんなく持てる力をおおいに発揮していただきたいし、今回もしがらみのない「よそ者」であるからこその力を見せてもらったような気がする。

（なお、この記録は私の記憶に基づくものであり、まったく思い込みで記載した箇所もあるかもしれない、断りを入れさせていただきます。当日の記憶メモと配布資料は、m-tanaka01@udc.go.jp へ連絡を）



講義風景' 030326

■大都市大震災軽減化特別プロジェクト（大大特）はじまる

大西　一嘉（神戸大学図学教室）

文部科学省研究開発局企画課防災科学技術推進室が主導する研究委託事業として平成１４年度から１８年度までの５年間で実施される研究プロジェクト（通称、大大特）がある。ローカルな（?）まちづくり誌にすぎない本誌にいきなりこんなお堅い話で恐縮だが、実は、きんもくせいの発行主体である「阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク」をアンブレラ組織として、私たちで当該プロジェクト公募に申請したところ委託研究開発に参画できるようになったことから、せっかくの機会なので支援ネットワークの諸活動を通じて積極的に研究成果を公開し、議論する場としても活用していこうという話になり、それが「きんもくせい」復刊のきっかけとなったという経緯がある。復刊を心から願っていた私としては、まさに思惑通りの展開に持ち込めたと密かに悦にいっている次第である。結果的には任意団体の受託行為にクレームがつき㈱コープランに受託契約窓口をお願いしたが、近いうちに支援ネットワークそのものをNPO化することも関係者間で合意されたので、NPO 登録後は種々の問題にも幅広く対応できる心積もりである。筆者は当該研究プロジェクトの取りまとめ組織の一つである地域安全学会広報理事も務めており、復刊にあたっては最初にスポンサーサイドの話も含めてプロジェクトの全体像を説明しておくべきであろう、ということで簡単にその概要について紹介したい。

そもそも今回の研究開発事業は、文部科学省が掲げる「新世紀重点研究創生プラン」（RR2002：″Research Revolution 2002″）において位置付けられた重点５分野において、産官学の国家的な研究開発機関をつくり委託事業として進められるものである。重点課題研究の中核となるコア組織をあらかじめ定め，公募チームとの連携により効果的な研究推進体制をつくることになっている。

【重点５分野】

１．ライフサイエンス　２．情報通信　３．環境　４．ナノテクノロジー・材料　５．防災

ここで防災分野は都市再生プログラムの一環として位置付けられており、研究対象地域として特に首都圏（南関東）や近畿圏の大都市圏での大地震による人的・物的被害の半減を目指して科学的・技術的基盤の確立を大きな目的としている事から「大都市大震災軽減化特別プロジェクト」（大大特）と名づけられた。防災分野だけで平成14年度で27億円の研究費が投入されたといわれる。科学技術・学術審議会研究計画・評価委員会が評価選定を行なうという形式を取っているが、実質的にはその下に設けられた「防災分野の研究開発に関する委員会」で議論が行なわれ、コア組織として旧・科学技術庁系の独立行政法人・防災科学技術研究所を始め、東大地震研究所、京大防災研究所などが指定され公募が行なわれた。

大大特はさらに、４つのプログラムにより構成されており、研究費の大半は、かつての地震予知研究の流れを汲む活断層調査(Ⅰ)と、日本産業界が世界に誇るロボティクス技術を駆使した期待の星レスキューロボット開発(Ⅲ)に流れているとみてよいだろう。

Ⅰ）地震動の予測「大都市圏地殻構造調査研究」　１４億円
　大規模ボーリング調査等による活断層調査、地震動予測図、断層モデル等の作成

Ⅱ）耐震性の向上「震動台活用による耐震性向上研究」）　３億円
　実大三次元震動破壊実験施設（E-ディフェンス）運用体制整備、建物崩壊の実大実験
　原発対策という側面もある

Ⅲ）被害者救助対応戦略の最適化「災害対応戦略研究」　Ⅳとあわせて１４億円
　レスキューロボット開発、ITを活用した先端的シミュレーション開発
　川崎市と神戸市に屋内大規模テスト場（NPO国際レスキューシステム研究機構）

Ⅳ）地震防災対策への反映「地震防災統合化研究」
地方自治体等の防災対策の指針となる「地震防災対策標準ガイドライン」作成を念頭におきながら、上記

の３つの研究開発成果を統合し具体的な防災対策に活用できるように研究を進めるものとされており、この統合化研究は以下の３課題で構成される。「３．復興・復旧」については分科会での様々な議論の中で設定されたと聞く。研究費のウェートは小さいものの政策科学的側面も併せ持つ意義の高い課題である。

Ⅳ－１．事前対策（木造住宅耐震補強政策研究）／東大生産技術研究所

Ⅳ－２．災害情報（確率的地震予測，報道，デマ）／東大社会情報研究所

Ⅳ－３．復興・復旧／筑波大学・地域安全学会

復旧・復興課題の推進にあたっては、被災地の復興過程から得られる知見を最大限取り入れてこれまでの復興まちづくり現場での教訓を体系的に再整理し、次なる大都市災害への備えとして生かすべきであろう。この復興復旧分野は下記課題で構成され、関西地域の機関からは６課題が選ばれている。

①コミュニティ自律的救済　②住宅喪失世帯への対応　③被災集合住宅復旧・復興　④被災戸建住宅補修支援プログラム　⑤住宅再建支援プログラム　⑥生活再建フローと支援メニュー　⑦復旧復興評価手法　⑧事前復興計画の立案・策定　⑨地域経済復興支援（以上９課題はH.14～H.18の５年間継続）

⑩震災復興政策評価　（H.14～H.16の３年間で終了）

（以下の２課題はH.15年度以降に順次参画予定）

⑪避難所計画の有効性評価システム　⑫（テーマ未定）：防災科技研・地震防災フロンティアセンター（牧）

当支援ネットワークは上記の課題⑨「地域経済復興支援」に取り組んでいる。小林郁雄氏を筆頭に、天川雅晴（アップルプラン）、上山卓（コー・プラン）、久保光弘（久保都市計画事務所）、中沢孝夫（姫路工業大学）、山本俊貞（都市問題研究所）及び筆者が加った７人の侍が勢ぞろいし、顧問に小森星児先生を迎え、心やさしい天川佳美さんのサポート（監視？）下で工業、商業、業務の各分野に分かれて共同研究を継続中である。復興まちづくりに精通されている専門家ならではの発想や得難い教訓の数々に触れることは一介の研究者である私にとってなかなか刺激的な経験である。

今後、本誌上で他研究課題も含めた最新動向紹介コーナーも設ける予定であり、読者からの忌憚のないご意見や主張を期待している。さらに、これまで定期的に開催していた支援ネットワーク会議も最近はやや息切れ気味であったので、新年度から隔月で我々の研究会活動報告の場として活用する事にした。行政や実務専門家、研究者、市民も含めて広く議論をしていきたいと考えている。巻末のニュース欄でも案内記事があると思うが、さっそく５／２（金）６時～　最初の合同報告会を、新装オープンした人と未来防災センター別館のお披露目を兼ねて開催することになっている。ご関心のある方は是非ご来場願いたい。

平成７年５月に出された科学技術会議の報告においても、今後の研究開発の方向として重視すべき点が次のように述べられている。阪神・淡路大震災の経験として、第１に被害を前提としつつ総合的な被害軽減対策をとること、第２に生活や経済活動等、機能集中する都市では、生命確保と共に社会の諸機能への影響を最小化し迅速な復旧を図ること。第３に大震災の事象を十分調査し因果関係を解明すると共に、膨大なデータを有効に活用して研究開発を行うことが重要である。このような観点から、耐震性向上などハード面のみならず、避難、復旧活動等に有益な情報や手段の提供、災害に強い都市づくりを支える計画技術等、特にソフト面での研究開発がより重視される。即ち、スムーズな復旧復興にあたって必要な事項を復興まちづくり現場の実態に則して体系化し発信する事が、被災地にとって今後も重要な役割であることは論を待たない。

一方、これまで主に基礎研究を担ってきた大学では国立大学独立法人化が目前に迫り、全ての研究者が自ら競争的資金獲得に奔走せざるを得ない状況に追い込まれている。研究分野では何が何でも防災に結び付けて予算獲得を狙うまさに「防災バブル」的状況に陥っているかの感もあり、地道に地域防災研究に取り組んできた者としてかなり複雑な心境ではある。とはいえ、きんもくせい復刊を喜ぶ一人として、産官学の連携が地域の力に結び付けられるのであれば、これもひとつの契機として受け止め、可能な限り力を蓄積して次なる災害に備えていきたい。本誌が今後も神戸の「まちづくり力」発信に一役買うことを願ってやまない。

■作麼生！スタンダード！

小野　幸一郎（元まち・コミ代表、雲水／修行僧）

私はまち・コミュニケーションの元代表の小野と申します。まち・コミについてはここであえてくどくど述べませんが、現在も神戸市長田区御蔵通で活動継続中のまちづくり支援グループであります。先日、過分にも御蔵のまち協と共に「防災まちづくり大賞」を頂きました。関係各所の皆様のご尽力、深謝いたします。

さて、私は活動を２年ほど前に離れて、現在は仏教は禅宗の１つである臨済宗の修行道場に身を置き、仏道を学ぶ雲水（修行僧）として日々を送っております。ご存知の方はご存知でしょうが臨済宗は禅宗のなかでも修行が厳しくて有名でして、普段は修行道場から“外界”に出ることも厳しく制限されます。閉ざされた環境の中で「自分を見つめる」為にそうする訳なのですが、そんな私に無謀にも小林さんは不定期でいいから原稿を書かないかとお誘い下さいました。そして、私もまた無謀にもそのお話しを受けさせて頂いちゃった次第なのであります。しかし、先に述べたような環境であるのは事実ですし、本筋の修行（「見つめる」うんぬんですね）が最優先ですので、本当に不定期になるかとは思いますが、何はともあれ駄文を綴らせて頂こうかと思います。（しかし、ホントに現役雲水としてはホメられる話ではないので、もしこの文章を仏教関係者の方がご覧になりましたら、どーかくれぐれもご内密に・・・）

さて、それで、こんな私が何を書いたらよいかということになる訳ですが、法話の類は修行の身なので当然パス（というか話すことができない）でありまして、修行そのものの“内幕物”というのも考えられるけど、何も「きんもくせい」で書くこともないだろうし・・・そう、まさに復刊したきんもくせいにふさわしいテーマは何かと、そこで思いついたキーワードが“スタンダード”であります。

震災９年目にしてきんもくせいが復刊したのは何故か。裏事情は知る由もありませんが、これはつまりは復興まちづくり（のもつ要素）がスタンダードー標準であることを宣誓するに等しいのではないか、と私は勝手に解釈しました。それで、よくよく考えてみたら、仏教だって生活に染み込んでいるという意味で日本の宗教のスタンダードだし、うーん話があった！という訳でかなりこじつけが入ってはいますが、“まちづくりのスタンダード”とは何じゃということで、題して（ちょっと禅僧ちっくに）「作麼生（“そもさん”と読みます）！スタンダード！」というのでいかがでしょう、小林さん。

皆様ご存知の通り、一言「スタンダード」と申しましても、これがなかなか単純ではありません。例えば、身近な仏教ひとつとっても、実は“生きている人に向けての教え”である事が存外知られていない、みたいに“認識されている内容”と“実際”がかけ離れてしまうというのはよくある事です。だけれど現実は先祖供養を始めとした“人が死んでからの儀式”によって坊さんが飯を食えているのもまた事実だったりします。

ではまちづくりはどうでしょう。私が僧堂に入った時、当然前は何をやっていたか聞かれる訳ですが、「（阪神・淡路大震災の被災地で）まちづくりの手伝いをしていた」と言うと「ああ、ボランティアね」という反応が返ってきた。もしかしたら「震災」という言葉に反応したのかもしれないけど、なるほど、そういう捉え方もあるか、とは思いました。

まちづくりという言葉は浸透しています。けれどもその解釈となるといろいろでありましょう。いろいろであって全然いいのかもしれませんが、しかし、スタンダードを標榜するのならやはり一本ビーンッと通ったものが欲しい気がします。（解釈が入り乱れた時は原点を見つめろと言う話しもあって、そうすると「まちづくり教の教祖」とかというとんでもなく恐ろしい肩書きを名刺に刷り込まれている御仁の顔が思い浮かんだりもしますが、それはとりあえず脇に置いて・・・）。

さて、そんな訳で、次回から色んな角度から“まちづくりにおけるスタンダードとは”を模索しようかと思いますが、ともかく拙僧、“素人に毛が生えた”まち・コミ出身者である上に、何度も繰り返して主張しますが、今は情報収集が極めて困難な状況であります。本誌を手に取られているかなりの方がプロ・専門家であり現場に身を置かれている方々だと思いますが、よろしかったら是非皆様の考えられている“スタンダード”をお聞かせ下さい。メールであれば読むことが出来ます（DQK04247@nifty.ne.jp）。別に“問答”を臨んでいる訳ではないのであしからず。ではまた次回。（小林さん、こんなんでよいのでしょうか！？）

空き地からはじまる物語1

椅子

中川 紺

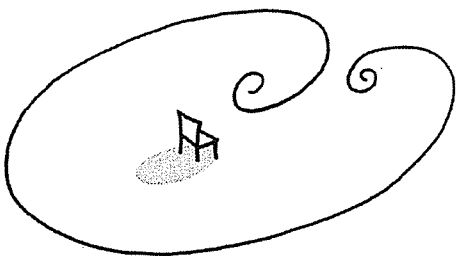
その椅子が空き地に置いてあることに気づいたのは、夕方、駅から歩いて5分のワンルームマンションの自宅に帰る途中だった。いつからそこにあったのかは分からない。朝は電車の時間ギリギリで駅まで猛ダッシュ、帰りは残業続きで、少々早めに仕事が終わっても、そのまま飲みにいってしまうから終電ばかり。家は寝る場所でしかなく、日の高いうちにこの空き地の前をゆっくりと歩いて通ったのは、本当に、1ヶ月ぶりくらいだった。

木製でニス仕上げを施してある椅子は、脚の長さが30センチ程度しかなく、小さな背もたれがなければ、単なる台かと見間違うようなもので、雑草が生い茂った小さな空き地の中で、その椅子は合成写真のように異質な雰囲気を持っていた。

さらに分からなかったのは、椅子が、空き地の三方を囲んだ真新しい戸建て住宅群の中の一件、窓のほとんどないベージュの壁を見るような形で置かれていることだった。

●　●

数日後、出張で早朝に家を出た僕は、いつものように空き地の前を通り過ぎようとして、あの椅子に腰掛けている人物がいることに気がついた。――あれは、たしか裏手に住んでいる一人暮らしのおばあさんじゃなかったかな。休みの日に時折駅前のスーパーで見かけることがある――好奇心に駆られて、知らない間に僕の足はおばあさんに近づいていた。靴が踏む草のかさこそという音に、おばあさんは振り返って少し微笑むと「おはようございます」と小さいけれどしっかりした口調で声をかけてくれた。それで少し緊張が解けた僕は、何を見ているのかを、思いきって尋ねてみることにした。



「あら、あなたも座ってごらんなさい」

小さな椅子に足が余ってしまう。目の前には壁があるばかりだ。一体何を？

「ほら、あそこ、あのすきまよ」

おばあさんの深い皺が刻まれた指の先に低いブロック塀の飾り穴があった。

そこから真っ白な…猫がのぞいている。

「毎朝、あそこに来てくれるのよ。でも腰をかがめないとよく見えない高さでしょう？それでこうやって座ってみることにしたの。この椅子ね、昔息子が高校の授業で作ったもんなんだけど、ちょうどいい高さなのよ」

椅子の脚を愛しそうに撫でながら続ける。

「猫はね、近づいたらだめなのよ。すっとひっこんじゃって。やっぱり野良よね。警戒してるみたいで。それにわたし、食べ物を持っていないでしょう。余計にね」

謎が解けてから、もう一度おばあさんに席を代わった。その時だ。壁からするりと白いものがすべり落ちた。

白猫がゆっくりとこちらへ歩いてくる。

「あら、まあ」

つぶやくように声をあげたおばあさんに応えるように、猫がにゃあんと鳴いた。

僕には一瞬、おばあさんと猫の間に暖かい帯のようなものが見えた気がした。（完）

なかがわ・こん　神戸生まれ。神戸のまちづくりコンサルタント事務所に約6年間勤務した後、本格的に書き物を始める。今の題材はまちやモノに潜む物語。
イラスト／やまもと・かずよ　神戸生まれ。神戸の建築設計・まちづくりコンサルタント事務所に7年間勤務した後、現在イラストを中心に多様に活動展開中。

■「きんもくせい」を再び復刊します

大震災24日後の1995年２月10日に阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワークの広報機関誌として、月２回Ａ４版全４頁で、神戸・阪神間の震災からの復興まちづくりへの「市民」の取り組みを伝えてきました。ネットワークの相互連絡メディアであると共に、全国のまちづくり関係者にニュースとしてＦＡＸを中心に送り、1997年８月27日第50号で終刊しました。

1999年４月、震災５周年をめざして、兵庫県・神戸市を中心に多くの復興検証の取り組みが進められ、私たち支援ネットの活動も緊急対応段階からそれらの結果の成果失敗を確認し、再び全国の方々にお知らせする義務があると思い「報告きんもくせい」として復刊し、2002年３月50＋36号まで３年間月刊で発行しました。

１年間休みましたが2003年４月より、震災から生まれたネットワークが本当の「市民まちづくり」にこれからも取り組んでいくことを改めて宣言し、「月刊きんもくせい」として再復刊します。だから50＋36＋第１号です。少なくとも「大大特研究」が続くであろう2007年３月までの４年間４８号までは月刊で発行することを約束します。

「市民まちづくり」に取り組む多くの人々やそれを支援する人々のための、小さくとも輝くメディアをめざします。あるいは、小さいからこそ輝くことのできるミニコミであり続けていくつもりです。また、2003年秋までに支援ネットは特定非営利法人化し「ＮＰＯきんもくせい」とする予定です。その機関誌としても「月刊きんもくせい」は機能することになるでしょう。（小林郁雄／030410記）

■情報コーナー

●第６３回水谷ゼミナール
・日時：４月２５日(金)18:30～
・場所：こうべまちづくりセンター６階会議室
（中央区元町通４丁目2-14）
・テーマ：公園、まちかど広場
・内容：発表者、演題等は未定
・問合せ：ジーユー計画研究所
（TEL. 078-251-3593、FAX. 251-3590）

●2002年度／平成14年度大大特研究発表会（神戸）
・日時：５月２日(金)18:30～21:00（～22:00）
・場所：人と防災未来センター（防災未来館）５階プレゼンテーションルーム
（TEL. 078-262-5060、http://www.dri.ne.jp/）
・参加費：無料（あふたー研究発表会：500円）
・内容：
・趣旨説明、参加者紹介／小林郁雄（コー・プラン）
・地域経済復興支援方策の開発研究
概要／小林郁雄、地域経済復興と中心市街地活性化／中沢孝夫（姫路工業大学）
・震災復興政策総合評価システムの構築に関する研究
概要／永松伸吾（人と防災未来センター）、復興評価の政策学的視点／林敏彦（大阪大学）
・被災集合住宅の復旧復興に関する研究
概要／大西一嘉（神戸大学）、８年目を迎えたマンション再建／梶浦恒男（平安女子大学）OR野崎隆一（遊空間工房）
・全体討議
・あふたー研究発表会／５階ロビーで缶ビール交歓会
・問合せ：コー・プラン（TEL. 078-842-2311、FAX. 842-2203）

●ネットワーク連絡会について
2003年４月より、神戸市民まちづくり支援ネットワーク及び阪神白地まちづくり支援ネットワークの各連絡会は、統合して新たに阪神白地まちづくり支援ネットワーク連絡会として開催することになりました。
偶数月の第２金曜日午後６時30分から開催します。参加ご希望の方は、事務局（ＧＵ計画研究所／北中、TEL. 078-251-3593、FAX. 078-251-3590）までご連絡ください。

●新しいまちづくりの雑誌にご協力下さい
（有）クッド研究所・元造景編集部　八甫谷邦明
（株）学芸出版社　前田裕資（京都市下京区木津屋橋通西洞院東入　TEL. 075-342-2600 FAX. 075-342-2605）
私たちは、次のような特色を持つ「まちづくりの雑誌」を創刊したいと考えています。①多様に広がった担い手が職種や立場といった殻に笹らず、共通の言語を持つことを目指し、②豊かで美しく人が生き生きとするまちづくりを中心に、③従来のマスコミのように外側から報道するのではなく、まちづくりの現場（内側）から、その悩みや試行錯誤も含めて発信することによって、④まちづくり活動を支援するコミュニケーション誌。
つきましては、検討中の雑誌の体裁・定価、特集や連載スタイル、地域情報に割くページ数や取り上げるべきテーマなどについて、皆様の忌憚のないご意見をお伺いできればと存じます。

●「きんもくせい」のｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www.hyogo-iic.ne.jp/~INS93031/

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク　事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2003年5月16日発行

月刊 きんもくせい

03年5月号
(50+36+NO. 2)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■市民エンパワー社会実験としての参画協働

野崎　隆一（ひょうご市民活動協議会代表）

再開きんもくせいで小林さんから「参画協働」というお題をもらいました。「地域主権を支えるのは現場主義である」全く同感です。そして、まちづくりという視点から現場にいる私達が、細部に宿る神をいかに見出せばよいのか考えてみたいと思います。

昨年１０月に「草の根NPOの挑戦～シアトル発日本着まちづくりの思想」というテーマで、インターネットを使ったテレビ会議を開催しました。日本側は、世田谷区、津市、神戸市からNPO・行政が参加しました。その中で印象に残った発言を二つ紹介します。

「協働という新しい結果の見えない取り組みをするに際して、我々は、とにかくやってみる、やって失敗してみるしかない。そして、実験から多くを学ぶことこそが大切だと考えている。」

－世田谷区生活文化部　田中参事－

「市民参画というのは、基本的に行政がフレームを決めて市民に参画を求めているのであって、市民やNPOが求めているものではない。市民やNPOのエンパワーを目的に作った協働がシアトルのマッチングファンドである」

－前シアトル市ネイバーフッド課　ジム・デアスー

二人の行政マンの発言は、いまかまびすしく議論されている参画協働の隠れた基本を捉えていると言えます。一般に市民・NPOはプロセス指向で行政は結果（実績）指向であるとよく言われますが、参画と協働の論議は、まさにこの二つの指向性（文化）のぶつかりあいです。だからこそ行政と市民・NPOの「協働」は実験として取り組まなければという世田谷区行政マンの発言は、極めて重要で的を得ていると言わざるをえません。また、ともすれば公共事業の合理化や財政負担の軽減といった結果側面で参画協働が議論されがちですが、ここで「協働」の最終目的は、プロセスにおける市民のエンパワー（地域力向上）であるというシアトルの指摘の重要性が浮き彫りになるように思えます。

しかし、我々は、ここで過去の社会実験を振り返っておく必要があるのではないでしょうか？かって行政は、必ずしも今のような強い結果指向を持っていたわけではないようです。３０年前に手探りの社会実験として取り組まれたコミュニティ構想、真野・丸山はどうだったのか？行政と市民の思いはどのように、交差したのか？今回のことを一過性の参画協働騒ぎにしないためにも、先駆的といわれたこれらの事例を検証することが重要であるように思います。(030502記)

＊　＊　＊

リレー論文、次は「石川賞」を受賞された宮西悠司さんよろしく。

（小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→）

■野田北部はどこへ行くのか？

河合　節二（野田北ふるさとネット、野田北部まちづくり協議会）

野田北部地区は99年3月の「コミュニティ宣言」後、いわゆるハード整備からソフト重視へと、まちづくり活動の根幹を移行するという、新たなスタートを切ることになった。

本稿ではそれからの動きと、今野田北部は、これから何をやろうとしているのかを報告したい。

99年「コミュニティ宣言」を行うにあたり、まち協内でも様々な想いが交錯した。これは復興宣言と捉えられてしまう不安(支援の打切り)と、今復興を語るにはまだ現実的ではないとの思いがあったからである。（そのため、自治連合会長が宣言する草稿には復興の文字は削除されたのだが、当日の宣言は錯誤により変更前の原稿、すなわち復興の文言入りになってしまった）

当時の野田北部は、区画整理事業エリアの海運町2、3丁目が、災害公営(受皿)住宅の完成を迎え、仮換地もほぼ指定を受け事業完了の頃であり、また本庄・長楽2～4丁目は「街並み環境整備事業」による細街路美装化整備事業が、ようやく端緒についた頃でもあった。

当時を思えば、唐突に「ソフト重視」「さらなるコミュニティ」と云えども、何を何が？の状態で、危うくまちづくりのロストワールドに嵌りかけたのである。しかし地域とすれば、細街路美装化整備事業は、毎年着実に路線を増やし続けているため、余計なことを考える時間もなかったことが幸いした。また、本来ハード事業と思われる細街路整備は副産物として、度重なる説明会等を通じ「近隣同士・まち協・行政」の三位一体というコミュニティを生んだことである。日頃野田北部は、コミュニティの一環と称しイベントばかり精を出しているように見えるが、それだけではないのである。（ちょっとくさいかなあ）

その後「コンパクトタウン」長田区モデル地区として、地域内の各団体（自治会・婦人会・長寿会・子ども会・NPO等）を、縦割り行政に先んじて、地域をネットワークする組織「野田北ふるさとネット」を創設した。（代表は野田十勇士の智将：林博司である）そのことで同じコンパクトタウンモデル地区と地域間交流の機会を得、現在大沢町(北区)、六甲アイランド地区(東灘区)との出会いが始まっている。

一方、まちづくりを持続するための先立つものの話しとしては、神戸市のまちづくり助成や、目的を持った事業への助成金(生活復興県民ネット等)を仰ぐ傍ら、自らが稼ぎ出すスキルとして委託事業の受託ほか、まちづくり株式会社コー・プラン小林郁雄先生監修による「ワークショップグッズ」セットの販売等を行い、活動資金を捻出しているところである。それら事業をぶらさげて、これからNPOにすべきか否か、はたまた1円で株式会社を設立したものか、またもや無駄な悩みにあれこれと無い知恵を絞っている。

最後に最近のトピックスとして「神戸ミニヤード」との出会いを報告しておこう。

（次頁下へ続く）



■菜の花プロジェクト顛末記（その１）

大塚　映二（神戸市）

神戸に＜菜の花ロード＞が誕生－ハーバーランドから七宮交差点に抜ける都市計画道路湊町線がついに全線開通した。都市計画決定から57年、事業化から18年のことである。ハーバーランドに隣接した下町密集市街地＝西出・東出・東川崎地区の住環境整備事業の一環で整備したものである。

かの地では協働のまちづくりが進められてきた（と言えばかっこいいが、住民参加のまちづくりのモデルとして神戸市主導で強力に推進してきた）。幅員が 27mある都市計画道路が地区内を貫通することについて、地元ではいろんな意見があったが、ともかく行政と住民が協力して事業を進めることができ、めでたく完成となった。

湊町線の開通を機に、地元としても何らかの記念イベントをしたいという思いはあったが、私は、「せっかくの大きな節目だから、協働のまちづくりにふさわしい取り組みをしませんか」と、みんなで菜の花を育て咲かせることを提案した。湊町線沿道をはじめ、あちこちに空き地が目立つ地区なので、そこを黄色の菜の花で埋め尽くそう、すべて手作りでやろうと呼びかけた。

花を育てるだけ、しかし、みんなで力を合わせて働かないことには進まない、文字通り身体を使った協働作業である。「みんなで花道をつくろう」－単純さとわかりやすさを前面にスタートした。（このノーテンキさがパワーであり、時には暴走となり、時にはあたふたと走り回ることになる。あたかも“がれきばばあ”こと天川佳美さんの無謀さをまねするかのように。）



満開となった菜の花を前にした作業メンバー　'030321

（前頁より）

ミニヤードは、元外国航路船長の有限会社ノヴァ研究所代表鈴木清美氏考案の新しいゲームで、当初船上でもできるビリヤードとして開発された直径 85cm の回転台でスプリングキューを使用し、コイン状の玉を弾いてプレーするもので、子供からお年寄り障害者の方でも楽な姿勢で遊べ、また指を動かすことでのリハビリ効果や、ゲーム展開を考えることで頭の刺激にもなる楽しいゲームである。人と人とのつながりから出会った話だが、ここからが野田北部のおそろしいところで、この「神戸ミニヤード」の普及に乗り出すことになってしまったのである。（市内の公共・福祉関連施設の方はご用心！じゃなくってご協力のほど）

鈴木代表の夢は、神戸発の新しいゲーム「神戸ミニヤード」の第１回全国大会を神戸で開催すること。そのため「日本ミニヤード協会」を設立し、本年５月 11 日[注)]に地元大国公園で設立記念大会を行うことになった。そんなことで、またまた不安と期待が交錯する始末。まちづくりなるものは、やはり人と人とのつながりから。（雨天のため順延）

つなぎつないで、果して野田北部はどこまで行ってしまうのだろうか。

そして、その最たるもの「日本ミニヤード協会」初代理事長は、あの総帥こと浅山三郎なのである。

■『コンパクトシティ』を考える1－今なぜコンパクトシティか

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

地方の時代がさけばれてから久しい。東京ばかりが注目を浴び、ますます東京への一極集中が進んでいるようだ。これでよいのか。

日本の社会構造を変えなければならない。それまで築いてきた日本の成長神話が、バブル崩壊で崩れ、日本は将来の方向を示す指針を失った。それまで日本が歩んできたパラダイムを一から見直さなければならなくなった。経済構造、政治構造、教育構造など、戦前から、あるいは戦後から一貫して貫かれてきたシステムを変える構造改革が必要だ。

９０年代に入り、構造改革は政治命題として、常に内閣の優先課題として、取り上げられてきた。国民は変革を期待しつつも、遅々としてしか進まぬ改革の実態ぶりに、あきれつつも、決して期待をやめたわけではない。確かに、大きな変革は、既得権益との調整を図るという、きわめて日本的な政治風土の中にあって、思い切った成果が見られていない。しかし、いくつかの選挙や地方での制度創設の中にあって、国民の意思が形になった現象が広がりつつある。

ところがである。構造改革が漸進的に進んでいる中で、経済改革だけは、急激に進んでいる。グローバル・スタンダードといわれる米国経済のやり方が、今や世界標準になって、それに合わない経済体制や制度は、生き残れないからだ。戦時体制下に始まり、高度経済成長を誘導し、８０年代には世界的にも評価された護送船団方式や系列方式と呼ばれた政府主導型の金融・産業システムは、皮肉にも一転して、日本の経済構造の癌となった。様々な内部からの膿が顕在化中で、不良債権や隠蔽工作の問題が明らかにされたからである。

米国からの外圧を受け、結局経済改革だけは進み、銀行などの再編や、企業の合併、合理化という名の下の雇用環境の見直しというより切り捨てが起こっている。終身雇用どころか、会社自体が定年までに存続しているかが怪しくなった。

結果的に何が起こったか。市場原理が機能し、大きな企業がより大きくなって（必ずしもより強くはなっていないが）、東京に再集中し始めた。品川駅の再開発、汐留の再開発、六本木等の再開発で、超高層ビルがあれよあれよという間に建設された。都市再生という手法が後押ししている。確かに、不良債権問題の空き地が、再開発されて、惨めだった都市の姿は改善された。一方で、東京では２００３年問題だという。何をか況やである。

こうした東京の“光”の部分に対して、地方は“陰”の部分が問題になってきた。東京への企業再編のあおりで、本社機能ばかりか、銀行に代表される支店機能すら地方部で統廃合化され、地方都市からなくなっていく。中心市街地のビルは空き室が目立つようになり、就業者は減る一方である。増えるのは外資系のファースト・フード店やコーヒーショップと、１００円ショップである。フリーターとパート労働者だけが増加している。地方経済はバブル時代を頂点に、下り坂を止まることなく、下がり続けている。

地方都市及びその周辺地域は存立基盤自体すら怪しくなっている。本来農業を中心とした産業から、経済成長時の工場の地方進出により、工業出荷額、雇用が確保され、所得の拡大、消費の増大で、３次産業が下支えする産業構造に転換した。しかしながら、バブル崩壊に併せて、冷戦の終焉で、安価な労働力を求めて、生産基盤はとりわけ中国に移転を余儀なくされた。かつての、安い地価と労働力を地方都市に求めた構造が、日本の数十倍、いや百倍も安い中国へ、そのまま移動している。百円ショップで驚きを持って手にする商品は、こうした産業構造の変化があるからだ。工業だけではない。農業も同じ緯度や気候の中国の農

業地帯で生産されると、はるかに安い穀物どころか、生鮮食物すら輸入されるという。

構造転換の行き先には、地方の時代の到来があるはずだが、現状ではそれどころではない。どういうことなのか。

日本の戦後経済は、冷戦構造に支えられる形で、日米安保を基調に、米国市場に工業製品を売るための効率的な資本活用と生産システムで、高度成長を図ってきた。日本独自の『開発型資本主義』と呼ばれた、政府主導による、いわゆる『工業化社会』の実践であった。東京と大阪を2眼レフと呼ばれた集中構造により、そのツリー構造の中に、政令都市をサブ中心として、地方を一つの大きな構造の中に組み込むものであった。政府は護送船団方式で、1番歩みの遅い産業や企業系列が確実に生産性を上げられるように、規制をしながら、支えてきた。これを可能にしたのは、冷戦構造と日本が極東の島国であり、厳しい国際競争力にさらされなかったからである。

こうして繁栄は永遠に続くものと錯覚した。特に地方は、経済成長の間に、中央政府の支援をよりどころとしたシステムに安住してしまい、かつての徳川時代の“藩”のような独自性と創造性を見失ってしまった。“金太郎飴”化した地方は、何を構造改革すればよいのか、まさに茫然自失である。

構造改革は否応なく進むであろう。必ず、東京一極集中から地方分散・分権の確立がなされなくてはならない。かくなる上は、中央に頼らず、地方自体が自らの足下から見直さなければならない。あらためて、地方や地域の特徴は何か。いかなる優位性を持っているか。地方として成り立つための規模はいかなるものか。主権者として“市民”の責任と行動を生み出すことができるのか。

これらの課題を取り組む都市のあり方として、私たちは『コンパクトシティ』というテーゼにぶつかることとなった。コンパクトシティは欧米では決して新しい概念ではないが、前市長の笹山氏が、神戸の震災復興後の新しい都市のあり姿として理念を取り入れたものである。神戸は、コンパクトシティを実現できる要素を十分に持っている。その具体化が復興後のその先の神戸の姿を示すものであるに違いない。

私を含めて、何人かで、コンパクトシティの概念の整理や、日本的あるいは神戸的なモデルを模索をするべき勉強会を、過去数年間地道に細々とであるが、活動を続けている。その中から、コンパクトシティは、単なる都市構造のコンパクト性だけではなく、日本の地方が求めなければならない、あるいは明治維新後、戦後経済システムの過程で喪失してしまった自立性の追求を、3つの“COMPACT”に求めることとした。まだまだ荒削りな考え方に過ぎないが、連載できる機会を得たので、問題提起型でチャレンジさせていただきたい。



神戸市総合計画課
発行のパンフレット

2000年3月発行
（完売）

■Dr.フランキーの街角たんけん　第1回　兵庫南部のレトロ・モダン

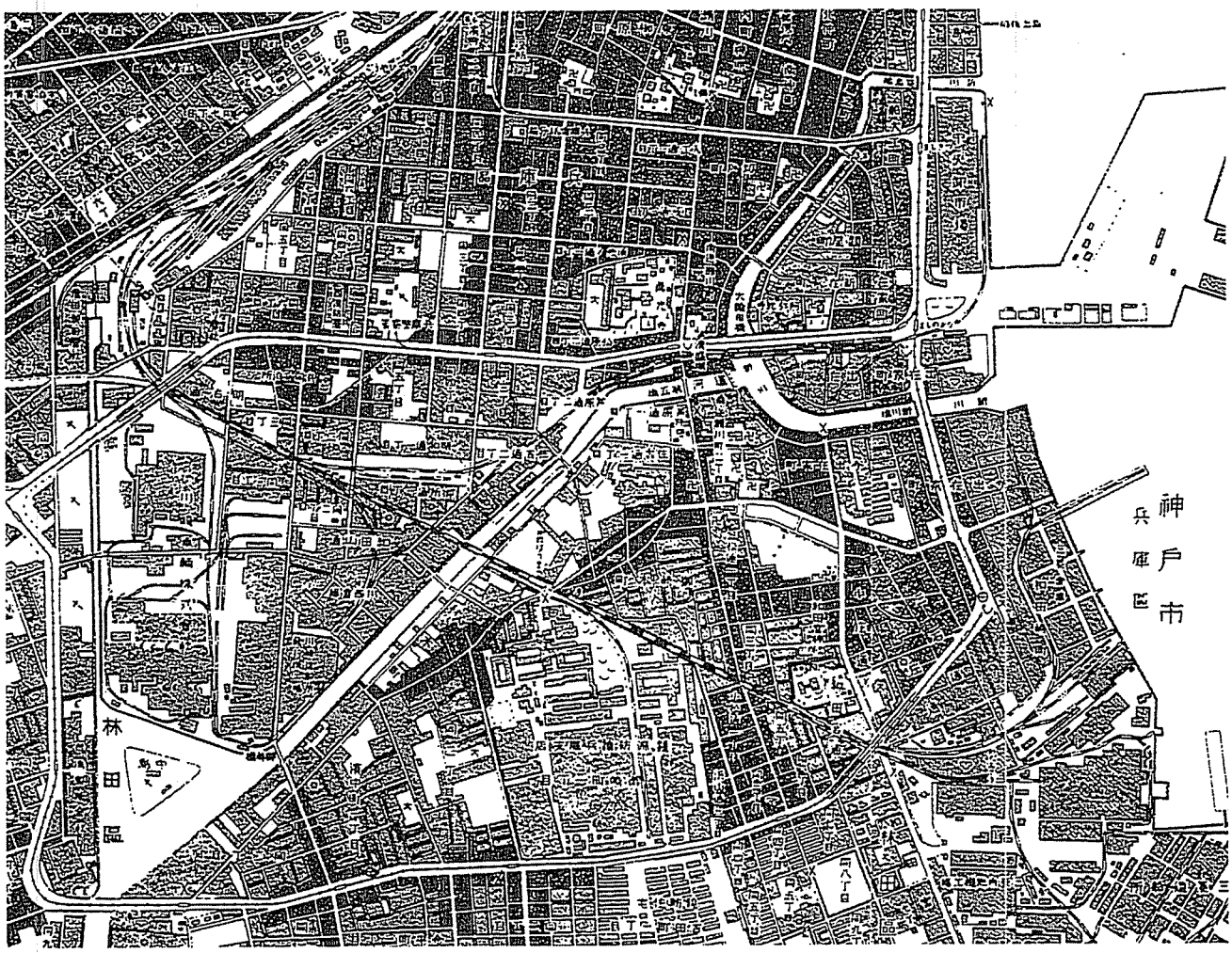
中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

「兵庫津の道」に隠れがちな近代化遺産を訪ねようと思い立ち、ＪＲ兵庫駅から歩き始めることにした。（写真1）

ＪＲ神戸駅やＪＲ三ノ宮駅のこれ見よがしのレトロ演出に隠れがちだが、ここのホームや通路も、昭和初期の面影を色濃く伝える。（この間、改札前コンコースが大幅に改装されたが。）昭和5年竣工の駅舎は、鉄道省営繕本来のテイストであるインターナショナルスタイル。駅南のキャナルタウンの高層街区のプロムナードを抜けて、堀上橋へ向かう。

キャナルタウンの南西端には約10年前まで明治20年代に山陽鉄道の機関車庫として造られた煉瓦躯体が倉庫上屋になって残っていた。そこで使われていたカーネギー社製鉄骨は、現在プロムナードの入り口にモニュメントとして残され、跡地の芝生公園にはイメージ保存なのか煉瓦造風のオブジェが点在する。その向こう側には、巨大なサイロ。明治39年に増田増蔵により開設された増田製粉所の本社工場である。（写真2、3）

兵庫運河の延伸部分をまたぐ堀上橋を渡ると、震災後の神戸では滅多に目にしない高い煉瓦塀が見えてくる。城山三郎の「鼠」に、米騒動の頃、三井物産がこの会社をダミーにして穀物の買占めを展開したという話が紹介されている。鈴木商店焼き討ち事件の「隠れた震源地」



昭和7年頃の兵庫駅周辺（出典：「明治前期・昭和前期　神戸都市地図」柏書房）

だったわけである。工場施設は神戸大空襲で大きな被害を受けたが、煉瓦塀や正門脇の煉瓦造タンクが往時の姿を偲ばせる。付け加えると工場の西側のキリスト教会は、昭和８年に竣工した元同本社屋で置塩建築事務所の設計。

東尻池の交差点を目指して歩く。周囲は戦前の面影を残す長屋が軒を連ね、数百メートルだけ「昭和の神戸の下町」を味わえる。（写真 4）

大型車がひっきりなしに行き交う国道を小走りで横断。町工場の間の細い道を抜けて尻池橋から兵庫区へ戻る。和田山通・御所通一帯は、維新の頃には水田だったが、兵庫運河開削以後、川崎造船所（現川崎重工業）兵庫工場や川西機械製作所（現富士通テン）、阪東調帯（現バンドー化学）などの工場が建設された。

いまや「世界の鉄道車両工場」の様相を呈する川重兵庫工場の敷地の内には、河合浩蔵が設計したと考えられる明治末期の煉瓦造上屋のファサードが一部残っている。川崎重工業の航空機部門が設立された当時の、昭和初期の機能主義的デザインのＲＣ造事務所建築が集中して残っているのも特徴で、これらはいずれも置塩建築事務所の設計、中島組の施工である。（写真 5、6）

また富士通テンの「祖先」・川西機械製作所は、中島知久平と袂を別った川西清兵衛が大正 14 年に航空機製造を目指して設立した経緯を持つ。というわけで、ここは関西の航空機産業胎動の地といえよう。（写真7）

いるか設計集団設計の市立浜山小学校を右に、ＪＲ和田岬線の旋回橋を左に見て材木橋から兵庫運河の本線を渡る。ウイングスタジアムのドームが眩しかった。

中尾嘉孝（「ドクターフランキー」）

1970 年、兵庫区山田町小部生まれ。15 の春、近代化遺産の魅力に開眼、以来、学業、部活、本職の合間を縫って、京阪神間のまち探険に勤しむ。
「港まち神戸を愛する会」世話人。
「全国町並み保存連盟」会員。

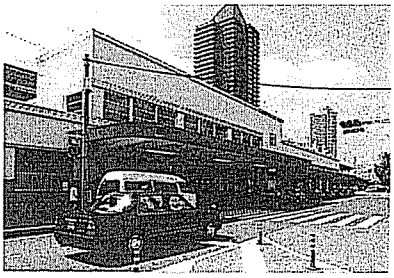


写真 1：ＪＲ兵庫駅（設計：鉄道省、竣工：昭和５年）

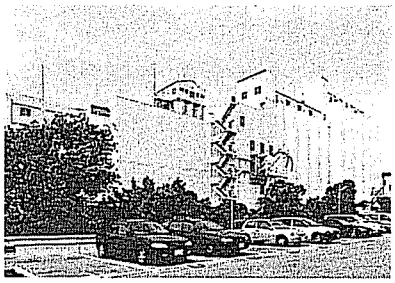


写真２：増田製粉所のサイロ

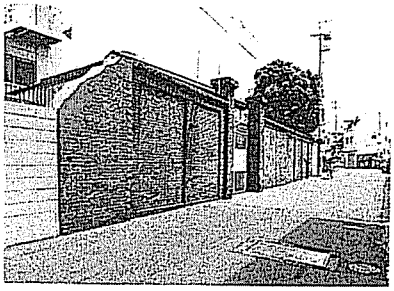


写真３：増田製粉所の煉瓦塀

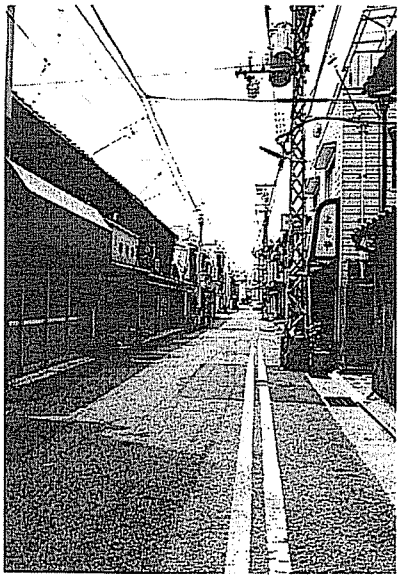


写真４：東尻池町の町並み

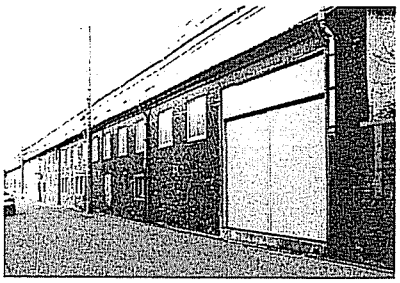


写真 5：川崎重工兵庫工場の創建期の遺構

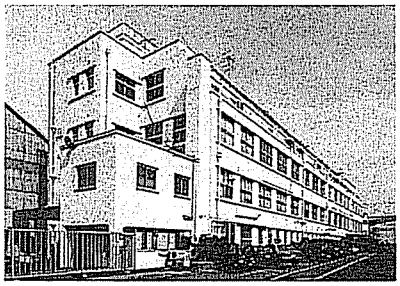


写真 6：川崎重工兵庫工場事務所（設計：置塩建築事務所、竣工：昭和8 年頃）

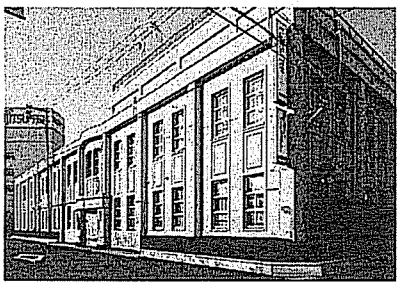


写真 7：富士通テン本社（川西機械製作所、設計不詳、竣工：大正 14 年？）

■あしや散策　阪神間倶楽部発足

河崎　晃一（芦屋市立美術博物館）

何となくあやしげな？　何をするのか名前だけではわからない集り「阪神間倶楽部」。その設立にむけての準備会が始動したのが、昨年の秋のことだった。メンバーの顔ぶれを見るとなんとなく納得できる人は、参加すべき集いかも知れない。日本の歴史上まれにみる住民文化が栄華を極めた 1920～30 年代の阪神間地域（と、言っても過言ではあるまい）を研究し、好む人たちがいて、その時代に勝るとも劣らないこれからの阪神間文化を生み出していこうする人たちの集いである。今後何回かの地域の散策、研究会を経て阪神間文化の現状を踏まえ、21 世紀に発信する新しい阪神間を創造していくことにつながればと願うばかりである。

その第 1 回の散策は「あしや散歩」。4 月 6 日、日曜日昼。快晴。桜満開の芦屋川沿いの散策には、30 数名が集った。最初の訪問地山手町の旧山邑邸（ヨドコウ迎賓館）では、大阪芸術大学山形政昭氏によるフランク・ロイド・ライト（旧山邑邸設計者）の時代的背景に基づく解説にはじまり、続いて邸内の見学を行った。3 階のテラスから見た芦屋川の桜は、絵に描いたような「芦屋俯瞰図」の趣きであった。

再び阪急芦屋川駅を経て右岸を南下、JR 線沿いの仏教会館を見学。昭和 2 年に建てられた仏教（宗信会）の寺院であって財団法人、造りはキリスト教会風とユニークな建物である?しも花まつりの甘茶のサービスを受け、内部を自由見学。圧巻は、屋上からの芦屋 360° のパノラマだった。海側は、埋め立てが進み、高速湾岸線が走りその風景は変わってきたが、山側は、東の甲山から連なる六甲の稜線が昭和初期と変わりない姿を見せている。写真で知る昔の山並みと違うところは、はげ山だった当時と比べ緑が多くなったこと。そして住宅地が這うように山を登ってきていることだろう。毎日この前を通りながら、この屋上からの風景があることを知らなかったのは不覚だった。

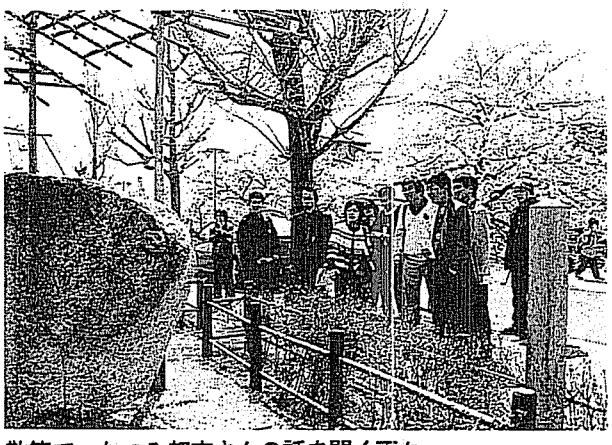
その後自由行動で美術博物館まで徒歩約 30 分の道のりを歩いた。そこで不肖私が 1954 年に芦屋で始まった前衛美術グループ「具体美術協会」についての話をさせていただいた。気がつくと旧山邑邸を出て数名が早退したにも関わらず、参加者が増えていたことに驚いた。途中に出会った友人を巻き込んでの散策の終点となっていたのである。熟年層の参加の多いなか、学生や若い層の参加が多かったことは将来への期待が持てる。

春の空気と青空のもと「いいところ」を見ながらの散策は、ゆったりとした一日を提供してくれた。「阪神間倶楽部」は、引率者らしき人はいるものの、個人の行動にまかせるスタンスがある。参加者それぞれが阪神間の印象を語り、街を見極めていくことこそ「勘違い」のないこれからの阪神間文化を育んでいくことになるだろう。数年後には「阪神間倶楽部」が、その活性化に一役買うことを期待している。

次回の散策は、6 月 1 日河内厚郎氏の企画で西宮の酒蔵の中心『白鷹緑水苑』（2F ホール 13：30 受付～16：30）へ出かけることとなっている。



山邑邸 3 階テラスより見た芦屋川の桜



散策で、たつみ都志さんの話を聞く面々

空き地からはじまる物語2

明日の匂い

中川　紺

「匂いの空き地」と私が勝手に呼んでいる場所がある。名付けたのは、もう二十年以上も前のことだ。

●●

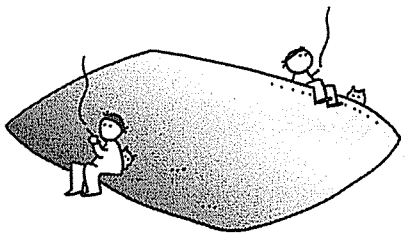
国立大学の文学部に通う女子大生だった私は、天気のいい日は時折、下宿していたアパートから隣町の大学まで、約三十分かけて歩いていた。

空き地はアパートと大学のまん中くらい、閑静な住宅地の小さな十字路の東南の角にあった。昔は大きなお屋敷か何かだったと思われる大きな雑草の絨毯を、私は「近道」と称して斜めに横切る。同じことをする人が多いせいか、草がほとんど生えない「けもの道」ができていた。

ある日、いつものように緑の絨毯に足を踏み入れた。中ほどまで来た時だろうか。ふと梅の香が漂ってきた。匂いはすぐにかき消えてしまったが、まわりのどこにも梅の花は見当たらない。次の日、隣の大家さんが「ほら見て。庭の梅が初めて花をつけたのよ」と、嬉しそうに報告してくれた。

こんなこともあった。空き地で潮の香りがした。海からは十キロ以上も離れているはずなのに。その翌日、入院していた祖母が亡くなり、葬儀の手伝いで田舎に出かけた。小さな漁師町で、家の前まで海の匂いが漂っていた。

柑橘類の匂いをかいだ次の日には、母から荷物が届き、箱にはぎっしりと実家で栽培している甘夏がつまっていた。



そのうちに、私は空き地の「匂いの法則」に気が付いた。明日の匂いを私におしえてくれることに。

●●

今、私は卒業以来二十三年ぶりに「匂いの空き地」に立っている。付近の木造アパートは姿を消して様子がすっかり変わってはいたけれど、三十歳の時に仕事でフランスに渡った私には、久しぶりの日本のまちの空気がとても心地よく、懐かしい。帰国の時には必ずこのまちを訪ねようと決めていた。

「匂いの空き地」は五階建てのマンションとなり、曲り角にあたる部分に小さな公園ができていた。

ライオンを模した遊具に腰掛けて、遊んでいる親子連れをぼんやり眺めている私の鼻先に、不意にたばこの匂いが漂ってきた。

同時に私は、昔ここで同じ匂いをかいだことを思い出した。そうだ。修一と会う前の日の匂い。修一のたばこの匂い。卒業後しばらくして別れた私達は、結局生きて再会することはなかった。……彼は五年前、自動車事故で亡くなっていた。まだ四十の若さで。

過去の空気に浸る私の横を、一人の大学生がたばこを燻らせながら通り過ぎた。横顔があの頃の修一によく似ている気がした。

背中を見送りながら、学生の歩き方が修一とそっくりなことに気がついて、私はがく然とした。

「やっと再会できたんだね」

間違いなく修一の息子であろう男の子の後ろ姿に私はそっと呼びかけた。

それから私は「匂いの空き地」に行っていない。

（完）

■阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第３１回連絡会報告

今回のテーマは、「持続するまちづくりー『タウンマネージメント』の事例についてー」。４月１１日（金）ひょうごボランタリープラザで行われました。

まず、ネットワーク世話人の後藤祐介さん（ジーユー計画研究所）から趣旨説明があった後、次の３名から実例を報告していただきました。所属とテーマは以下の通り。

①出口幸治さん（神戸市産業振興局商業課）／「『神戸ながたＴＭＯ』中心市街地活性化・新長田の事例

②吹田徹治さん（みなとがわ未来㈱）／「『ハートフルみなとがわ』商業再開発ビルのマネージメント」

③古田篤司さん（新開地まちづくりＮＰＯ事務局長）／新開地のまちづくりとタウンマネージメント

出口さんからは、まず中心市街地活性化をめぐる法制度や課題について概略を述べられたあと、（株）神戸ながたティー・エム・オーがこれまで行ってきた、全国リサイクル商店街サミットや修学旅行の誘致、お好み焼き・ぼっかけマップづくりなど、地域資源を生かした取り組みについて報告されました。

吹田さんからは、小売市場の再開発ビルを管理運営する株式会社の専従職員という立場で、これまでの多くの経験を語っていただきました。「再開発が終わって自分の権利が確定したらその後の運営に関わらない商売人が多い」「商売人の気質が分からないとマネジメントが出来ない」など、実感のこもった発言が印象的でした。

古田さんからは、かつての神戸の中心地であった新開地のまちづくりについての報告がありました。これまでのまちづくり活動の経緯を総括的に述べられたのちに、新開地まちづくりＮＰＯが行ってきた数々の事業ー新開地にふさわしい店舗の誘致や音楽イベント、行政との協働の状況などーについて、バイタリティあふれる報告を行っていただきました。

（中井　豊／中井都市研究室）



報告者の方々。向かって左から出口さん、吹田さん、古田さん。

■情報コーナー

●阪神間倶楽部 第２回見学会・研究会

・日時：６月１日(日) 13:30受付開始,16:30終了予定
・場所：白鷹禄水苑２Ｆホール（西宮市鞍掛町5-1、TEL. 0798-39-0235、阪神西宮駅南出口より南へ徒歩7分）
・テーマ：阪神間の文学･映画,トレンディドラマについて
・内容：谷崎に関するビデオ２本上映予定、阪神文学史年表等の資料を用意しています。
・参加費：７００円(ビデオ,資料代)
・問合せ：河内厚郎事務所（TEL. 06-6345-8271、FAX. 06-6345-8272）、まちづくり会社コー・プラン（TEL. 078-842-2311、FAX. 078-842-2203）

●灘中央まちづくり協議会／第５回まちづくりマーケット

・日時：６月８日(金)10:00～14:30（雨天中止）
・場所：稗田公園
・内容：フリーマーケット、模擬店、淡河の特産品、「なつかしき心のまちかど」イベント、他
・問合せ：灘中央まちづくり協議会 新･まちづくりハウス（TEL. 078-882-3457）

●第３２回阪神白地まちづくり支援ネットワーク連絡会

・日時：６月１３日(金)18:30～
・テーマ：公的住宅の実状と役割
・場所、内容：未定
・問合せ：ジーユー計画研究所
（TEL. 078-251-3593、FAX. 251-3590）

◆トピックス

・・・・宮西悠司さん、都市計画学会賞・石川賞受賞！

住民まちづくりの草分けである真野地区（神戸市長田区）で３０年以上にわたってコンサルタントとして携わってこられた宮西悠司さん（コー･プラン取締役）が、本年度の都市計画学会賞・石川賞を受けられました。大変名誉なことで、ネットワークとしても共に喜び合いたいと思います。

●「きんもくせい」のｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www.hyogo-iic.ne.jp/~INS93031/

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2003年6月25日発行

月刊 きんもくせい

03年6月号
(50+36+NO. 3)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■真野から生れた神戸市まちづくり条例

宮西　悠司(まちづくりプランナー)

野崎さんは「参画協働」を過去の事例から学ぶ必要性を指摘して、バトンタッチをされた。

はからずも、このたび宮西は平成14年度日本都市計画学会石川賞を貰った。推薦者の推薦の内容は置くとして、学会の選考理由は「神戸市真野地区における一連のまちづくり活動」を表題として、以下のように述べられている。

宮西悠司氏がコンサルタントとして、そしてまちづくりの実践的指導者として、1970年から現在まで一貫して取り組んできた神戸市真野地区における継続的な一連のまちづくり活動は、我が国都市計画の進歩、発展に顕著な貢献をした独創的、啓蒙的な業績であると考えられ、石川賞にふさわしいものである。

現都市計画法が制定され都市計画の計画体系が漸次整えられつつあった時期、地区レベルの都市計画のあり方が、重要課題とされていた。1980年には地区計画制度が創設され、その後も多様に発展、制度の充実が図られてきたところである。この地区計画制度創設、制度充実のプロセスにおいて、真野地区の実践は常に先行指標の一つとして影響を与えつづけるとともに、現在においても全国各地区の実践をリードする存在でありつづけている。それは、真野地区の実践が、常に制度を超え制度にとらわれない創造性豊かな先見的内実を持ちつづけてきたからである。

1978年から始められた地元住民による“真野地区まちづくり構想”策定というまちづくり提案は、神戸市の地区計画・まちづくり条例の制定に生かされるとともに、最近の都市計画法改正における都市計画提案制度の嚆矢をなす事例となった。

このように、宮西氏の神戸市真野地区における一連のまちづくり活動の業績は、草の根運動でありながら一地区の成果のレベルをはるかに超えて、我が国都市計画の進展に大きく寄与したものと評価する。

神戸市における「まちづくりの市民参画のフレーム」の一つには神戸市まちづくり条例がある。この条例は、真野の構想づくりの経過を下敷きにしている。正確には地区計画の手続き条例として位置付けられるが、他都市に先駆けて1981年に制定されている。(82年施行)

2001年5月に都市計画法が改正され、市民に都市計画(地区計画)の発議権があたえられた。具体的には都市計画法第16条(公聴会の開催等)の3項に「市町村は、前項の条例において、住民又は利害関係人から地区計画等に関する都市計画の決定若しくは変更又は地区計画等の案の内容となるべき事項を申し出る方法を定めることができる。」というものである。神戸の条例は20年以上前の当初から市民の発議権を認めていた。いかに先行的な条例であったかがわかる。

発議権というのは市民の要望を行政が条例に基づいて受取る、受止めるということである。「参画協働」を考えるうえで神戸市民にとって貴重な先人の贈り物といえる。

震災後、8年半を経過し100以上も設立されたまちづくり協議会の多くは、当初の目的を遂げ、自然消滅しようとしている。しかし、神戸市から与えられた「市民の発議権」までも手放してしまうのはどうか。「参画協働」制度を身近なモノにして行くために、具体的な論点を提供させてもらった。

＊　＊　＊

リレー論文、次は東灘区深江地区まちづくり協議会の佐野末夫さん　よろしく。

(小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→)

■まちづくりシステムの研究（１）

久保　光弘（久保都市計画事務所）

１．「新長田駅北地区（東部）土地区画整理事業まちづくり報告・第２部：まちづくりシステムの研究」にあたって

――「復興」とはなにか、そしてどこまでをいうのであろうか。

区画整理事業は、従前の借家層を残すことは難しく震災前に６割を占めた借家世帯の大部分はこの地から去らざるを得ない。それでも換地手法は地権者の権利を継続させるもので住民主導のまちづくりの手法になりえる。

区画整理地区の地権者は、土地を売却することも可能であり、建物移転補償費（金は建物再建に限らず何に使っても良い。）も発生する。地区に居住しない多くの借家を所有していた地主にとっては、長く塩漬けされていた土地が開放されることになる。この結果、区画整理は、大きく土地の流動化を促すことになる。

震災被害や区画整理はこれまでの積み上げてきた個人の蓄積や生活設計の予定をリセットする。この結果は生活弱者にはとりわけ厳しいものであり、この点は明らかにされるべき研究課題であるが、ここでは触れない。まちづくりは前向きにとらえるものであるとすれば、流動化した土地や金が新しい資源として、地域産業の再構築や住環境に再投資される機会であり、地域に固定化して内在していたひずみの是正の機会でもある。まちづくり協議会によるまちづくりビジョンは、個々の地権者の力の結集を願ったまちづくりの方向を示すものである。

しかし、個々の土地は、個人または、個々の事業者が利害を判断し、利用や処分を決定するものであり、換地時の社会的環境も大きく影響する。

居住者やケミカルシューズ等事業者の高齢化が進む新長田駅北地区東部（以下当地区という。）にあって、震災以降のますますの経済環境の悪化という状況下での土地利用は、個人の生活設計や企業経営を色濃く反映したものとなる。経済環境の悪い状況での区画整理は、個人のハッピーリタイアの道への選択と企業のリストラの進行を促す側面がある。高齢居住者が住宅再建より、土地を処分してこれを今後の生活資金に借家に入った方が良いとの判断するケース、事業者がこれまでの借金を返し、事業の縮小や廃業を行うケースは、特殊なものでない。（経営者が高齢化し、仕事が少なくなり、単価が切り下げられ、借金もあることが稀でないコンサルタント業界人にはよくわかる話。）

神戸化学センタービル、神戸シューズサークルビルなどの大型シューズ協同組合は組合を解散し、長田特有の民間工場アパートは姿を消し、大手の靴卸商社も本社機能を地域外に集約し当地区から去った。増し換地となる新長田駅北区画整理区域の飛び地・鷹取北エリアに移転した事業所もある。これらはいずれも企業にとって合理的なリストラの選択、身動きできなくなってきた状況の解消のチャンスであったとも言える。かくして、町からはケミカル事業所は目に見えて姿を消しつつあり、空き地が残り、町は持家住宅地の方向に向かっているようにみえる。町は社会的環境とあいまって「変わり続ける生きもの」であり、元に戻すなどというものでない。

そうしたら、５年ほど前に企業や土地所有者らが集まり、その実現を信じて作られたシューズギャラリー構想やアジアギャラリー構想は意味が無かったかといえば、そうとは言いえない。これらの構想が、協議会活動の多面的展開を促し、協議会の商工部会の地道な活動につながり、シューズプラザやアジアギャザリー神戸が苦戦しながらも新しい展開を模索している。ケミカルシューズ事業所は、見えて少なくなったといえ、建物の奥でケミカル関係の事業はまだ根強く残っている。これらの種火は、ニッチ（隙間）産業を生み出し、空き地の新しい活用と関係して，新しい展開に開花するかもしれない。未来のことは誰にも予測できない。長田には地域産業が必要であり、そのためには、部分的でも継続して最善を尽くすしかないのである。

多数の個と社会的環境の中で進むまちづくりは、まちづくり構想を機械的に実現できるものでなく、構想の予定調和を図るものでない。PLAN・DO・SEE の循環であり、ビジョンをつくり続けることがまちづくりであるといえる。

震災前の借家住民や事業所に変わり、新住民が入りつつある。当地区の復興に献身的に活動されてきた役員の中にもこの町から離れていった人も多く、それに

連れて協議会への参加する役員も減り、まちづくりの経過を知らない住民の割合も増えていく。町は土地利用や構成員を入れ替えつつも生きて続けるものである。

町の進化に影響をもたらせる協議会は、またも新しいターニング・ポイントの時期を迎えつつあるといえる。単一協議会の中には、新住民を取り込んで活動を初めているところがあり、新しい兆しも感じられる。

さて、当地区のまちづくり報告は、きんもくせい誌において 16 回にわたる連載をさせていただいた。＊まちづくりと同時進行的な記述は客観的な「まちづくり報告」といえるものでなく、地区に関わるコンサルタントの私的なノートでしかないと早い段階で気づいたが、そのままにしておいた。この連載は混沌とした私の頭の整理であった。読み返すと気になるところが多々あるが、その時々の状況と気持ちを反映しており、今からでは決して書くことはできない。

この連載や多くのフォーラム等を通じて、まちづくりとは何なのか序序に考えるようになってきた。

まちづくり協議会が活動を停止するとまちづくりはそれで終わること、しかも協議会活動は容易に活動を停止しやすい生きものであること、しかしその中にあって小規模協議会どうしの連携による活動は、地区の秩序と協議会活動の活力をつくるものであること、震災復興まちづくりのプロセスは不可逆で一旦タイミングを失うと取り返しのつかないものであること、まちづくりの結果は計画の予定調和でなく予測はできないものであること等々。

そのような折、土井幸平先生に当地区のまちづくりについて論文としてまとめることをお勧めいただいた。先生から数々のアドバイスをいただきながら、コンサルタントとしての実践の理論化を試みた「新長田駅北地区（東部）区画整理事業における住民主導のまちづくりシステムの研究」を学位論文（大阪市立大学）とすることができた。

本稿「まちづくり報告・２部」では、研究論文のポイントを提示しながらも、その時々の状況と考えを自由にノートし、その内容を更新していきたい。今回からの連載では、映画で言えばカメラを思い切り引いた視点から、マクロにまちづくりの全体やまちづくりシステムについて考えるものとする。といってもコンサルタントである私自身がまちづくりの現場で実際に役に立つもの、現場から感じるリアリティをモデル化したものとして書き留めたい。

「月刊きんもくせい創刊号」（03 年 4 月号）で小野幸一郎さんが提案された復刊きんもくせいのテーマ「スタンダード」に供することができれば幸いである。

2．まちづくりの定義

「まちづくり」という用語は、ノンフィジカルな住民活動の領域や官公庁が主導する都市計画事業などにも使われており、その意味は多様で曖昧である。

小野幸一郎さんが言われるように、その解釈はいろいろあってよい、ただ、きんもくせい界隈では、ある程度共通して理解できる解釈が無いと議論が進まないことになる。

すでに震災復興の現場から小林郁雄さんが「まちづくり」の定義として、「地区の改善を持続的に行う住民主導の活動」と定義された。越沢明先生は小林さんの「まちづくり」の定義をうけて、「都市計画」とは、「整備によって都市または、地域全体の社会資本、都市環境を改善する。同時に土地や建物の使い方についてのルールづくりを法律により行うこと」が本質であるとされている。（市民まちづくりブックレット No.7,p92）

復興まちづくりは、まちづくりと都市計画の双方がどのように役割分担をし、連携をすべきかを問いかけた。

小林さんの「まちづくり」の定義は、端的にまちづくりの本質を示しているが、区画整理まちづくりを中心に論ずる本稿では、さらに以下のような点を踏まえて定義を詳細化する。

まず、個々に異なる利害を集約し調整する地区の合意形成組織の存在が重要な要件である。第２に合意形成組織の活動が、具体的に地区の空間形成、物的な施設の計画・実現・管理やコミュニティ形成に発現させるプロセスまで含めて、まちづくりにおける命題を明らかに表示する必要がある。

以上から、本稿における「まちづくり」の定義を、「市街地形成、コミュニティ形成に関する地区住民の活動、及びその活動により計画や市街地の姿へと発現するプロセス」とする。

＊ 報告（I）～（4）は「きんもくせい」（創刊号～50 号）を、（5）は「論集きんもくせい」第4号を、（6）～（16）は「報告きんもくせい」第３～33 号を参照してください

震災復興で加速する企業と地域の新たな関係を考える

■インナー神戸再生と新しい企業文化

ー地域との「普段」の交流を目指す：三ツ星ベルト㈱ー

加藤　恵正（神戸商科大学）

神戸のなかで早くから市街地を形成し、用途的には住・工・商の土地利用が混在している地区をここではインナー神戸と呼ぶことにする。インナー神戸の形成は、明治期にある。神戸の開港場としての地の利を背景に、マッチ、ゴムなどの輸出雑貨工業が発展したが、その後合成樹脂を素材にファッション性が高いケミカルシューズ産業が発展した。同時に、1909 年にはダンロップ護謨（住友ゴムの前身）が設立され、タイヤ製造技術の向上に大きく貢献するとともに、日本ゴム工業の本格的発展の契機となった。神戸に本社を置く三ツ星ベルトやバンドー化学など日本の産業用ベルトのトップメーカーも、こうした海外の進んだ技術の刺激と第一次世界大戦による需要増は背景に基礎がためを行った。

しかし、インナー神戸の産業空間は、大きな転換期にあることも閑却できない。ひとつには、1995 年における阪神・淡路大震災によるダメージである。インナー神戸に立地する中小零細事業所群は、一時的にせよ壊滅的な状態に陥り、その後の復興も業界・地区による格差をともないつつ、全体としては必ずしも順調ではなかった。第 2 に、近年における急速なグローバリゼーション・情報化の潮流のなかで、多くの産業・企業がその存立基盤を弱体化させている。こうした影響は、従来から形成されてきたいわゆる地域産業コンプレックス（職住一体型地域）の再編を必然化している。今回は、こうした急速な変化の渦中にあるインナーシティにおいて、地域との普段の交流を続ける三ツ星ベルトを紹介することにしたい。

従業員約 1300 人を擁する三ツ星ベルト㈱は、国内外 13 ヶ所に工場を持つ屈指の産業用ベルトメーカーである。神戸本社及び事業所が立地する真野地区は、長田区南東部に位置し、住工混在問題への取り組みを全国的に先駆けて試みてきたところでもある。真野地区は、阪神・淡路大震災において大きな被害を受けた地区のひとつであるが、震災直後に発生した地区内の火災にたいし、同事業所の消防隊がいち早くこれを消火し地域内での延焼を防いだことはよく知られている。1980 年以降、同社では総務部長が「真野まちづくり推進会」役員として参加。いわば企業市民としてまちづくり活動の一翼を担ってきた。一時ハーバーランドへ移転していた本社を、震災後真野にもどすことを契機に、地域住民にも開放したコミュニティ・レストラン「エムエムコート」を開設している。昼食時には、同社社員と地域住民が一緒に食事をする光景が見られるという。また、ジャズ・フェスティバルなども行われている。さらに、新築された本社玄関ホールを使ったコンサートや「たなばたまつり」の開催など、地域と連携したイベントが絶えず行われている。

また、同社は「人を想い、地球を想う」というスローガンのもと、神戸市内の小中学校にビオトープを設置する活動を行っている。もともと、震災前に小学校からの依頼に応じて、自社の遮水シートを用いてビオトープを無償提供したことがきっかけであったが、震災後子供たちへのプレゼントとして、ビオトープの設置から環境形成までをすべて社員によるボランティアによって行っている。

同社ははやくからまちづくりにたいし大変協力的な姿勢を持ちつづけてきた。震災時には、同社の消防団が地域の火災を食い止めると同時に、それは自社への被害をも食い止めたことも意味している。「企業と地域の普段の交流こそが重要」との同社幹部の指摘は、地域の防災や安全を考えるうえで大変示唆的である。いまひとつ印象的なことは、地域イベントやビオトープ設置は、同社社員のボランティアによってすべて運営されていることだろう。社員がこうした活動に参加することにたいするインセンティブはないが、参加者の満足度は大変高いという。それは、ボランティア活動自体の満足とともに、たとえば同社他部署で勤務している同僚と新たに知り合うきっかけとなるなど、企業内での社員の融和にも貢献していることもあるという。また、社会的責任投資という観点からも、かかる活動が及ぼす地域へのインパクトは大きいし、こうした観点からの地域における企業にたいする評価と支援のあり方なども今後重要な課題となろう。

■菜の花プロジェクト顛末記（その２）

大塚　映二（神戸市）

まずはおめでたいお知らせから。６月は、国土交通省等が推進する「まちづくり月間」であるが、その行事として行われる「まちづくり功労者・大臣表彰」に、西出・東出・東川崎地区まちづくり協議会が選ばれた。１５年以上の長きにわたる一連のまちづくりが評価されたものだが、協働のまちづくりの集大成とも言える今回の菜の花プロジェクトのインパクトは大きかったと思っている。関係者一同で喜び合いたい。

さて、単純で取っつきやすいということで始めた菜の花プロジェクトだったが、今回は、それを証明するかのようなまちの人々のうれしい反応の数々をあげておくことにしよう。

・まず、草ぼうぼうの空き地がきれいになるものだから、いままで閉口していた近所の方が喜んでくれて、差し入れが相次いだ。ジュース、パン、コーヒー、みかん、せんべい、などなど。みんなで汗を流しての作業が報われるひとときであった。（作業皆勤賞の大塚は一番の恩恵を受けた。）

・これまで「まちづくり」と言えば、何かむずかしいことを議論していると受け止めて参加していなかった住民の方々が、次々と輪に加わってくれた。ずいぶんおおぜいの方と知り合いになれた。

・たくさん育つ苗を見て、うちにも分けてほしいという方が続出した。また、「あそこにも植えてあげる」という申し出も多く、文字通りまちじゅうが菜の花でいっぱいになった。

・３月１日に開催した「菜の花フォーラム」では、東川崎町婦人会のみなさんが菜の花を使った料理に挑戦してくれた。菜の花寿司や間引いた苗を使ってつくったマヨネーズ和えなどが会場に並び、みんなで舌鼓を打った。

・そして、一番のすばらしい展開は、「菜の花せんべい」の誕生である。稲荷市場にある宝栄堂という煎餅屋さんを営む大畑さんが、実った種（なたね）をせんべいの材料に取り入れたのである。その名も＜菜の子ロール＞。人通りの少ない市場で細々と売るよりも、思い切ってハーバーランドに店を出せば大ヒットするのではないかと思うくらい、実においしいせんべいの誕生だ。

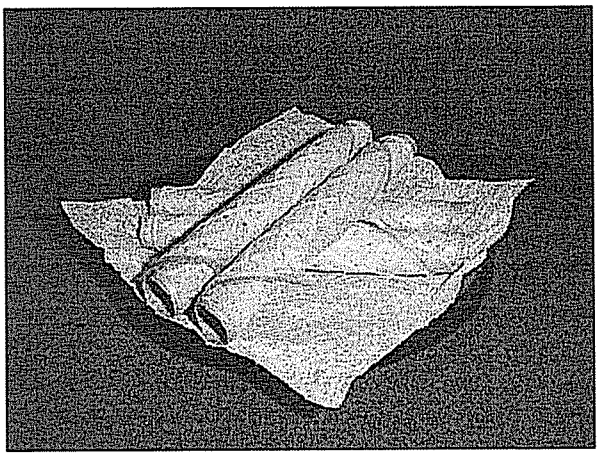
ちなみに、この大畑さん、まちの名物として「ビリケンせんべい」を出しましょうよと言う提案を受け止めてくれて、みごとに商品化した進取の精神旺盛な方である。この二つの新商品を武器に、インターネットを使った販売戦略もあるかなと思う。

※菜の花プロジェクトの概要は、神戸市「協働と参画のプラットホーム通信」第４号を参照されたい。

URL=http://www.kobe2001.or.jp/pdf/plat04.pd



“菜の子ロール”と“ビリケンせんべい”を手にした大畑夫妻



これがうわさの“菜の子ロール”

■阪神文学と阪神間文化

河内　厚郎（文芸評論家）

阪神大震災の折、黒岩重吾（故人）、藤本義一、小田実、陳舜臣、筒井康隆、宮本輝、田辺聖子、山崎正和、永田耕衣（故人）といった被災文士のなまなましい肉声が現地から届けられて、阪神間には今も多くの文学者がいることを知らしめてくれた。

パリのポンピドゥー・センターでは、世界の名作をフランス語に訳して自国の名優に朗読させたカセットテープを売っている（今はカセットテープではないかもしれない）。日本文学ではどんな作品が選ばれているのかと見れば、最初に出たのが井上靖の『猟銃』で、芦屋を舞台にしたメロドラマ風の書簡体小説である（同じく阪神間を舞台にした、谷崎潤一郎の『卍』や、宮本輝の『錦繍』も、手紙のやりとりで心の秘密が明らかになるという構成だ）。他には野坂昭如の『火垂るの墓』、谷崎潤一郎の『猫と庄造と二人のをんな』、遠藤周作や川端康成の作品もある。『火垂るの墓』は御影や夙川、遠藤周作の『黄色い人』は夙川や仁川、『猫と庄造と二人のをんな』は阪神沿線の打出が舞台で、どれも「阪神文学」と呼んで差し支えない。足元の文学が欧米でこれだけ翻訳されているということを、阪神市民はほとんど意識していないであろう。

なぜ、阪神文学が盛んに翻訳されているのか？

芦屋市に虚子記念文学館を建設した稲畑汀子氏（虚子の孫）から話をうかがう機会があった。彼女は小林聖心女学校で遠藤周作の母にあたる女性から音楽を習ったという。二年上級には『ミラノ　霧の風景』で女流文学賞をとる須賀敦子がいた。ヨーロッパで何十年と生活して日本文学を翻訳していった須賀敦子は、自身が芦屋・夙川で育ったせいか、井上靖、遠藤周作、谷崎潤一郎ら阪神地域を舞台にした小説をイタリア語やフランス語に翻訳してくれていたのである。すぐれた翻訳があったから広まったわけだ。

それにしても、阪神間はもっと自らの文化を外へ発信すべきだと思う。滋賀県の豊郷小学校の件で建築家ヴォーリズの遺産が注目されているが、夫人が神戸女学院の第一期生だったこともありヴォーリズの名建築は阪神間に多数存在している。西宮にはヴォーリズ村ともいわれたほどの町（雲井町周辺）もあるにも関わらず、こうしたことへの情報発信や報道が少ない。戦前は、日本初のファッション誌『ファッション』や映画誌『キネマ旬報』が阪神間から刊行されて全国レベルで話題を集めたことを考えると、この地の情報発信力を向上させていくことが重要であろう。

また、観光地としては地味な印象を持たれている尼崎ですら観光タクシーが走っているのだから、芦屋や西宮で営業しているタクシー会社も観光集客サービスに挑んでくれないものかと思う。街で人気のケーキ屋、関西学院をはじめとするキャンパス街、オルゴールの美術館、酒蔵レストラン、えべっさんや門戸厄神など由緒ある寺社、有名料亭の「播半」……魅力的なコースはいくらでも考えられる。「細雪エレガント・ツァー」とでも銘うったら如何？　本当は、観光用のループバスがあってもおかしくないくらいの環境をそなえていると思うのだが。

阪神間倶楽部　第２回研究会（第４回準備会）の記録

○日　時：2003年6月1日（日）14：00～16：30
○場　所：白鷹禄水苑ホール
○参加者：20名（うち新聞記者2名）

阪神間倶楽部の第2回研究会は西宮の白鷹酒造、禄水苑ホールにて開催いたしました。

14:00 に河内厚郎さんのお話のあと、谷崎の足跡を稲畑汀子さんの解説でたどるビデオ鑑賞。次に 1959 年の「細雪」の１部、その後にたつみ都志さんがお持ち下さったサンテレビの番組のビデオを拝見し、「鎖欄閣」復元に向けての話をお聞きしました。

河内さんからは、細雪に代表される阪神間が舞台の映像の数々や、その風景や暮らし振りに影響を受け阪神間にあこがれた関東の方々の話や、「細雪」はプライベートな世界を描いた 60 年前のトレンディドラマではないかというお話。今後の宝塚映画祭のことなどを伺いました。

また、この日お借りしたホールの辰馬朱満子（たつうますみこ）さんからホールを創られた経緯や活動、今後のこととして、このホールが単に民俗資料館としての役目だけではなく、かつて造り酒屋の旦那衆が地域文化の応援団だったように時代が変わっても「旦那語り」として文化を地域に残し、活用したいという意気込みをお聞きしました。

（天川佳美・記）

■大大特合同研究発表会開催される

濱口善胤、藤原祥子、吉田明弘（神戸大学大西研究室）

５月２日人と防災未来センターにおいて大大特合同研究発表会が開催されました。内容とその感想について述べたいと思います。

１）地域経済復興支援方策の開発研究

概要／小林郁雄

地域経済復興と中心市街地活性化／中沢孝夫

帯広市屋台村の数々の取り組みや兵庫県上郡町における事例等から、中心市街地活性化に結びつく「まち」と「ひと」との多くの「物語」のもつ地域再生への力が重要であるという指摘がなされました。

中沢先生から、路地空間での高揚、見通せない道での発見のすばらしさについてお話がありました。私たちも下町のあたたかさというものに共感し、憧れを抱いています。しかし、整然としたビジネス街・住宅街で育ち、それがよいとされ、実感を持っていない世代でもあります。中沢先生も紹介されていた J. Jacobs の「アメリカ大都市の死と生」にあるような混用性のあるまちはいいまちだという理論は、頭では理解できるのですが実感がわかず、それに回帰することがよいことなのか疑問を感じるところもあります。

２）災復興政策総合評価システムの構築に関する研究

概要／林敏彦

間接被害概念を用いた復興評価指標開発について／永松伸吾

行政・法学・経済学の分野からそれぞれアプローチし、震災復興政策総合評価システムの構築を目指されるということでした。今回の研究会では、直接被害の裏に隠れてそれほど議論されることのない間接被害に着目し、その軽減を考える為の第一段階として評価モデルに関する発表がありました。

復興評価指標として間接被害という基準は当然研究されるべきものなので、感心しました。ただ、いまだリアリティをもったものではないので概念的な研究から現実味を帯びたプログラムの実現へとつながるよう期待しています。

３）災集合住宅の復旧・復興に関する研究

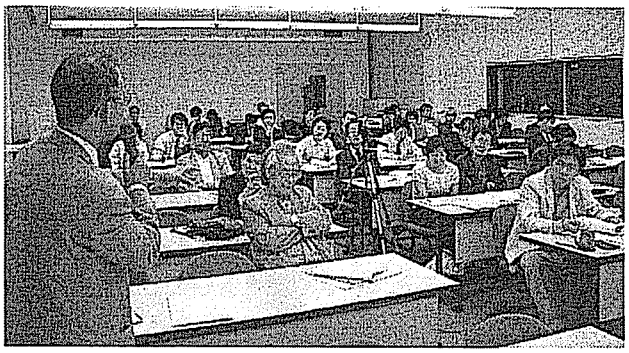
概要／大西一嘉

８年目を迎えたマンション再建／大西一嘉

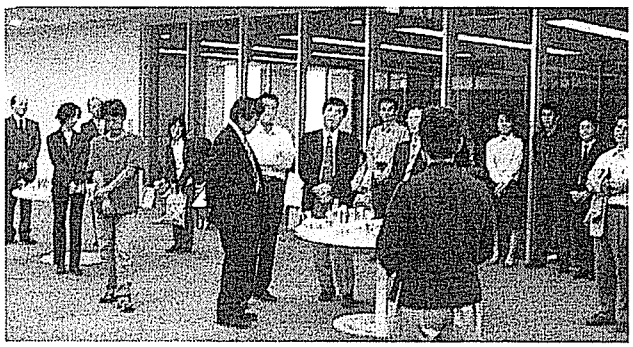
災害時における、集合住宅の建替えや補修には様々な問題を抱えていました。今後、社会問題となっていくであろう集合住宅の老朽化に備えて法律・専門家の職能・理事会の運営等から適正な運営システムを考えることが課題でした。

災害直後という非常事態で、マンションの補修・建替えの決定が急がれる際、住民が十分な情報を得、正確な判断を下すのは難しいものです。迅速かつ円満な意思決定のため、事前のシステム構築が望まれます。

およそ２時間半の研究発表会の後、ロビーにて懇親会が行われました。学生の身ではたくさんの専門家の方々とお話する機会は少なく、貴重な体験でした。石東さんからの「研究者のための研究」という指摘があり、なんと正直に意見が述べられる場なんだと思いました。私たち学生も、研究者とそうでない人との中間的立場からの視点を持てる存在として、熱意をもって研究会に参加したいです。



研究発表会（左端が中沢孝夫さん／姫路工大）



懇親会（中央が大大特Ⅳ-3 代表の熊谷良雄さん／筑波大）

■都心回帰に未来を託せるか

小森　星児（神戸山手大学）

1）　近年、都心人口の回復が注目されている。たとえば東京の場合、都心３区の人口はほぼ半世紀ぶりに増加に転じた。大阪市の人口も、この２年間、40 年ぶりに年間１万人を越える増加があり、最盛期の４割まで減じた都心６区の人口も回復に転じた。この現象は地方の政令指定都市クラスにも認められ、長く続いた都心のドーナッツ化＝郊外のスプロール化は転機を迎えたかのように見える。

神戸でも、昨年、新築戸数で中央区が首位を占めた。三宮駅前には 43 階の超高層マンションが近く着工され、居留地や北野でも 10 階以上のマンションの建設が進んでいる。他方、かつて花形だった六甲アイランドや西神中央では、神戸市住宅供給公社が売れ残りのマンションを５割引、６割引で再分譲している。

周知のように、クラッセンは都市圏の人口集中・分散の循環モデルにおいて、再都市化でサイクルが完結するとの見通しを示した。しかし、この現象が持続的な都市発展にとり好ましいものかどうかの検討抜きに、クラッセンモデルに結びつけるのは危険であろう。

2）　まず用語について吟味しよう。Google で都心回帰を検索すると、３千件以上ヒットする。もはや一般用語として定着しているので無用の詮索かもしれないが、回帰とは「もとの所に（ひとまわりして）戻ること」（新明解）であり、鮭の回遊や子どもの身長がしばしば例に挙げられる。しかし、都心で増加している人口が回帰と言えるかどうか裏づけの資料は乏しく、幼少時の生活体験からの説明（故郷回帰）は難しいと思われる。したがって都心回帰という表現は必ずしも適切ではない。

3）　都心回帰の直接の原因が、既成市街地における民間中高層住宅（マンション）の大量建設にあることは疑問の余地がない。たとえば東京都区内のマンション建設戸数は、平成５年まで年間５千戸で推移していたが、７年に２万戸を越え、12 年には３万５千戸に達した。20 階以上の超高層マンションに限ると、平成 14 年まで４千戸/年であったが、今後３年は 1 万戸/年、18 年には２万戸になると予測されている。大阪市内でも、今年の 20 階以上のマンション新築戸数は 2500 戸を越えると見込まれている。このような変化の背景には、地価暴落、リストラによる企業の遊休所有地の放出、容積率の緩和、商業業務床需要の低迷などの要因が指摘されている。その結果、大阪市内のマンション（75 平米）分譲価格は 9000 万円から 3500 万円に下がったという。

4）　需要側に眼を転じると、シニア世代の購入意欲の高さが注目される。子育ての間は郊外に向かった流れが、都心の便利さや老後の安心を求めて都心に還流したものと考えられる。ファミリー向けに特化した郊外は、住宅ストック、ショッピング、生活リズムなどの面で画一化が著しく、遠距離通勤は耐え難くなる。配偶者に先立たれると郊外戸建に住み続けるのは重荷であり、阪神大震災では老朽戸建住宅の耐震性についての不安が高まった。関西圏の 45～64 歳にたいして都市公団が実施した調査によると、ついの住処として都心を選ぶ回答は男 48%、女 65%であったのも頷ける。団塊の世代が引退の時期を迎えるここ数年は、老後の安住の地を求める動きが一層顕在化するものと考えられる。

5）　都心高層マンションは、行き届いたサービス、耐久性、耐震性、温熱環境、プライバシー、眺望、可変間仕切り、バリアフリーなどさまざまな付加価値を商品化し、また劇場、美術館、音楽会、ショッピング、レストラン、カルチャーセンターなどへの利便性、病院や老人福祉施設の整備などを謳っている。また、クルマを必要としないのもメリットであろう。なお、首都圏白書（平成 13 年度）は、都心マンション入居者の分析から、これまで結婚・育児を契機に郊外に流出した層が職場に近い場所を指向する傾向を明らかにしたが、土地神話の崩壊にともない資産形成としての持家取得動機が失われたことも見逃せない。

6）　いわゆる住宅双六説では、郊外の庭付き戸建住宅が上がりであった。しかし、欧米ではリゾートや田園地域への移動がその先に生じている。都心回帰と田園志向が両立するマルチハビテーションも、さまざまな形態で展開している。なぜ、わが国では都心回帰に傾くのであろうか。高齢社会にとって、都心居住はそれほど魅力的で、経済的にも有利であろうか。物理的には 100 年持つと保障している超高層マンションでは、フィルタリングダウン現象は生じないのであろうか。次世代継承についての明確なプログラムを欠いた千里や明舞など第一世代ニュータウンがかかえる課題、それは高齢入居者が多い災害復興公営住宅が直面している課題でもある。高度成長を支えたシニア層に生き甲斐と安心を提供する環境をいかに整備するか、いま改めて検討することが必要であろう。

空き地からはじまる物語3

切り株の気持ち

中川　紺

いつものようにワシは空き地で昼寝をしていた。昼間からこうやってごろごろしていても、道ゆく人は誰も気にしている様子はない。何せワシはニレの切り株だ。気にするのは散歩中の犬くらいだろう。

●●

一ヶ月くらい前に、地主のばあさんが業者を連れてきて、この空き地を売ってしまった。業者のマンション計画でどうやらワシも処分されるらしい。とうとう、ここともお別れだ。まあ、いいだろう。八十年前、新居を建てた男と家族に植えられて…その息子が事業に失敗して土地を売って…切られてから四十年ほどになるかな。ここも駐車場や資材置き場になったりしたが、よくまあ今まで処分されずに残ってこれたもんだ。ワシは思い出に浸りながら、あとわずかな空き地での時間をゆっくりと過ごすことにした。

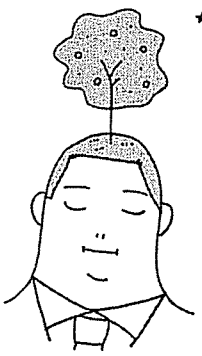
●●

昼寝から覚めた時、一人の男が空き地にやってきた。歳の頃は五十すぎくらいか。驚いたことにこちらに向かって「藤島」と名乗って話し掛けてきた。どうやらワシは昔の夢を見ながら、人間の姿になっていたらしい。

「こんなところで何をされてるんですか？」

「ほう。ワシが見えるかね」

「ええ…ただ…不思議ですね。腰掛けている切り株が透けて見えますよ。こういうのって、何ですかね、幽霊っていうんですかね。もっともあなたはあんまり怖そうじゃない。いや、何だか親しみさえ感じますけどね」



「幽霊じゃあない。本体はこれだよ」

ワシは切り株を指し示してやる。

「……そうするとあれですか……あなたはこの木の……ニレの精とでも？」

「何とでも。どうせもう先は長くない」

藤島はしばらく何か考えるような顔をしていたが、「お邪魔しました。それでは、これで」と一礼して立ち去っていった。

数日後、藤島がやって来て持っていたマンション計画のラフスケッチを見せて言った。

「ほら、残すことにしたんですよ。あ、実は私、今度のマンションの設計担当なんです」

設計を変更したという。図面の中の中庭の様な空間に「切り株（既存）」とある。

「工事の邪魔にならんのかね？」

「何せ、あなたと、こうやって話までしてしまいましたからね……それに、大好きだった祖父によく似てるんですよ。まあ、これからもここに居て、時々私と話をしてもらえませんか」

そう言って差し出された手を握った瞬間、ヤツの幼い頃の記憶が流れ込んできた。

（ああ、昔ここで遊んでいたあの子か…）

●●

ワシを植えた男の孫と業者は、「ニレの切り株」を上手く中庭の設計に取り込んでデザインして、マンションを売ってしまった。

完成したマンションに住民が住みはじめると、来る、と言っていた藤島はぱったり姿を見せなくなった。もしかして販売促進に利用されたかな、と思わないこともないのだが、毎日たくさんの家族がワシのまわりでにぎやかに過ごしていて、こういうのもまあ悪くないかなと思う今日この頃である。　（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第３２回連絡会報告

今回のテーマは「高齢者住宅の最近の話題」で、６月 13 日（金）ひょうごボランタリープラザで行われました。

まず石東直子さん（石東･都市環境研究室）より、テーマ解説があったのち、次の２つの報告がありました。

報告①：「最近の高齢者向け住宅の状況」／石東直子(前掲)

報告②：「復興公営住宅のコミュニティ調査について」／上山卓（まちづくり（株）コー・プラン）、菅磨志保（人と防災未来センター専任研究員）、福留邦洋（同）

◇報告①について

高齢者住宅を巡る最近の状況として、「神戸市営の復興公営住宅の高齢化の状況」「高齢者住宅事業における新たな展開」「変わる不動産事業ー不動産活用と高齢者住宅事業」の３点について、統計資料や新聞・雑誌等からの資料を示しながら報告されました。

◇報告②について

「災害復興公営住宅団地コミュニティ調査」は、県下の復興公営住宅（約 27,000 戸）を対象にしたコミュニティに関する大規模な調査で、国の緊急雇用対策事業による計４０人の調査委員の各棟・各戸訪問により、「団地環境調査」「居住者調査」「自治会代表者調査」「外部支援者調査」の４つの調査（2002 年９月～03 年３月）が行われました。

居住者が超高齢化している実態や自治会運営における問題点及びうまくいっている場合の条件など、多岐にわたり報告されました（最終まとめは現在作成中）。

討論の中では、「統計的なものだけではなく、コミュニティがうまくいっている具体的な事例が知りたい」、「被災地で起こっていることは、１０年後の我が国の高齢社会の問題を先取りしていると言われるが、今回の復興公営住宅の実態は、必ずしも今後の一般的な高齢社会のモデルケースとはならない」などの意見が出されました。

（中井　豊／中井都市研究室）



報告者の方々。写真上／向かって左から菅さん、福留さん、写真下／向かって左から石東さん、上山さん。

■ 情報コーナー

●第６４回水谷ゼミナール

・日時：６月 27 日(金)18:30～21:00
・場所：こうべまちづくり会館６階（神戸市中央区元町通４丁目 2-14、TEL. 078-361-4523）
・内容：「地域経済のﾏﾈｰｼﾞﾒﾝﾄ」
①生きがいしごとサポートセンター阪神の活動／金森康（宝塚 NPO センター、神戸商科大学）、②〈まち育て〉を運営･経営していく組織と仕掛けづくり／岩崎俊延（プランまちさと）、③タクシー会社は地域企業である／森崎清登（近畿タクシー）
・会費：１，０００円（学生無料）
・問合せ：ジーユー計画研究所（TEL. 078-251-3593、FAX. 251-3590）

●阪神間倶楽部 第３回研究会

・日時：７月 19 日（土）14:00～
・場所：旧甲子園ホテル(現武庫川学院第３学舎、西宮市戸崎町 1-13)
・内容：生活美学研究会に参加
・参加費：無料
・問合せ：コー・プラン（TEL. 078-842-2311、FAX. 078-842-2203）

●大大特第１回検討会

大都市大震災軽減化特別プロジェクト「地域経済復興支援方策の開発研究」
・日時：７月 23 日(水)18:30～21:00
・場所：ひょうごボランタリープラザ（クリスタルタワー（JR 神戸駅南側）10 階セミナー室）
・テーマ：「都市観光の再生」
・内容：北野地区の報告／山本俊貞（（株）地域問題研究所）、他
・問合せ：コー・プラン（TEL. 078-842-2311、FAX. 078-842-2203）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http：//web. Kyoto-inet. or. jp/org/gakugei/kobe/index. htm
◆ http：//www. hyogo-iic. ne. jp/~INS93031/

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca. mbn. or. jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2003年7月20日発行

月刊 きんもくせい

03年7月号
(50+36+NO. 4)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■住民が主体のまちづくり

佐野　末夫(深江地区まちづくり協議会　会長)

“真野から生まれた神戸市まちづくり条例”に続き、1993年6月1日に、神戸市長より認定団体（第12号）の指定を受けた「深江まちづくり協議会」が登場することになりました。

90年7月に「深江まちづくり協議会」が結成され、当時は地域の面積111ha、世帯数8,200世帯、人口22,000人で、住民合意はアンケートにより意見徴集徴集を行い「庶民的で住みよい街への改善」を基本目標に活動の展開を進めてまいりました。

今思い出すと、基礎調査やアンケート集計に追われて「あー」という間の数年であったと思う。住民の目には見えない活動に対し、「まちづくりは、何をやっているのか」などの苦情の御意見も沢山頂きました。

神戸市から、まちづくり認定団体の認定を受け、「深江まちづくり構想」を神戸市に提案し、「まちづくり協定」についてもアンケート調査を実施、神戸市長との締結を2月に控えた95年1月17日の未明に起きた阪神淡路大震災により、深江地域の45～6%の4,230棟が全半壊、259名の犠牲者を出し、阪神高速道路が横転するなどの大被害を被り、街に残った建物は鉄筋の集合住宅だけとなり、夜間は真っ暗でスラム街そのものになってしまいました。

地域の小学校には、2,000人からの被災者が集まり、死体が運び込まれ、負傷者は救急車で病院に運ぶなど、生き地獄そのままを目の当たりにして、救援物資の到着を待ったあの日のことが、昨日のように蘇ってきます。

その一週間後には「深江地区まちづくり協議会」としての活動を再開し、地域の地図を片手に、個々の被害を記録するために時間を掛けて調査をして周り、一ヵ月後の2月19日には、地域に残っている委員に参加を呼びかけ「震災復興委員会」を立ち上げ、復興にむけて「住宅再建のための相談所」を設置、住民の不安を解消し再建に向けての活動の推進を図ることが出来ました。

そんな時、地域に「パチンコ屋が3軒も出店しそうだ」とのニュースが入り「深江地区まちづくり協定」を早期に神戸市長と締結をする必要に迫られたが、パチンコ屋の出店までには期間が無く取り急ぎ防止策としての、「パチンコ店、出店防止」の署名運動を実施、一週間で7,320名の署名を持って、神戸市長・市議会・県議会・県警本部等に陳情し、1店舗の進出のみで押さえることが出来たのも、深江地区の住民が「自分達の街」を守るために協力して頂いた成果であると感謝しています。

震災後のまちづくり協議会の活動は、「まちづくり協定」の締結・「緑と花の市民協定」・みどり豊かで安全な街への復興をテーマに「まちづくり構想」の再提案・花とみどりのまちづくり活動・なごりの松や旧西国浜街道の顕彰碑建立など、歴史を活かしたまちづくり、住民への地域情報の伝達等々、活発で先進的な活動の積み重ねで、『神戸景観ポイント賞』や『人間サイズのまちづくり賞』などを受賞しました。

これらは地域の住民が率先して参加をし汗を流した結晶だと感謝しています。

＊　＊　＊

リレー論文、次は神戸まちづくり協議会連合会事務局長（松本地区まちづくり協議会会長）の中島克元さん　よろしく。

（小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→）

■「青木南地区まちづくり協議会」の紹介

後藤　祐介（ジーユー計画研究所）

はじめに－連載にあたって

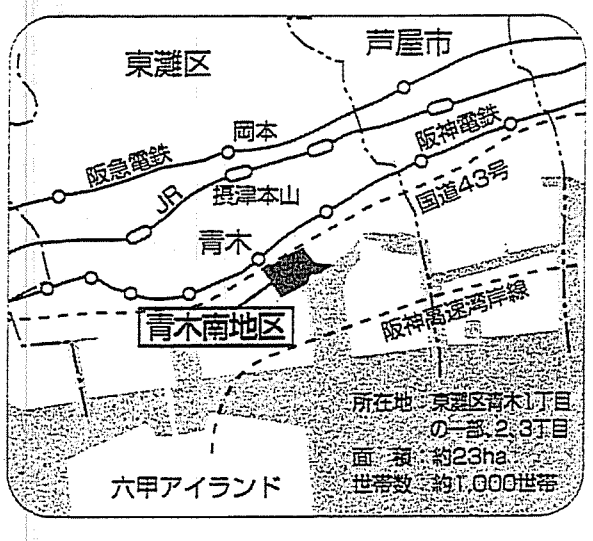
今回のきんもくせい第３弾においてもまた連載形式で何か書かせてもらうことになった。

小林編集長からは「新しいまちづくり協議会の活動？」（仮題）でどうかと誘いをかけてもらった。この「新しい」という意味としては、ポスト震災復興まちづくり協議会ということも含まれているであろうし、私が「仕事」として経済的に苦しいながらも“同時・多地区まちづくり協議会支援型コンサルタント”をしていることを見越して、このテーマなら書きやすいだろうと思われたのだろうと思う。

ご推察のとおり、ポスト震災復興としての新しいまちづくり協議会を紹介していく連載なら苦にならないし、他人のためにはならないかもしれないが、自分の為には整理になると思い、このテーマに準じて書かせてもらうことにした。内容としては、何故そのまちづくり協議会が立ち上がったのか、何を目的にしているのか、どういうきっかけで私が支援することになったのか等を書きたいと思い、連載タイトルに「いろいろなまちづくり協議会の立ち上げ」等を考えてもみたが、今回は単純に「私が支援しているまちづくり協議会の紹介」とすることにした。

１）「まちづくり協議会」立ち上げのきっかけ

青木南地区は、阪神・淡路大震災以前は、神戸市東灘区の臨海部に位置する「フェリー埠頭のあるまち」であった。その後、明石架橋の開通により、フェリー埠頭が廃止され、その跡地にウォーターフロント型の大規模ショッピングセンターが建設されることになった。この大規模商業施設の開発にあたり、“近隣環境問題”で、地元住民と開発者との間でかなり激しいやりとりがあったらしい。



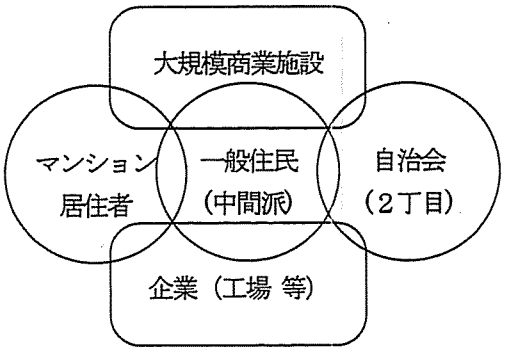
平成12年の４月頃、この問題をきっかけに地元有志が、自分達の住むまちは自分達の力で守らなければ、とする「まちづくり意識」に目覚め、「住民参加のまちづくり」を目指し、こうべまちづくりセンターに相談されることになった。

当時、私は青木南地区に隣接する深江地区で、震災以前からまちづくり協議会の支援をしていたので、地元有志の方が、私のことを聞かれお会いすることになった。

２）「まちづくり協議会」の立ち上げまで

「まちづくり」に対する地元の事情を聞いてみると、フェリー埠頭跡地の大規模商業施設開発に対し、地元では、３グループの対応があったらしい。一つは、開発抑制派のマンション居住者グループ、一つは開発容認派の青木２丁目自治会グループ、もう一つは、３丁目自治会を含む中間派グループである。私が最初に話を聞いた時は、既に大規模商業施設開発問題は概ね決着していたが、今回の問題を教訓に“予防”を含めたまちづくりに取り組みたいと立ち上がられたのは、中間派の村上氏、森下氏、酒井氏達であった。

国道43号以南のこの小さなまちで、「まちづくり協議会」を立ち上げるためには３つのグループと大規模商業施設及び地区内に立地する企業（工場等）が一つのまちづくりにまとまる必要があったことはいうまでもない。



即ち、「まちづくり協議会」の立ち上げにあたっては、前記5つのグループが一つにまとまる必要があり、私も支援し、中間派の有志が調整を図った。そして、“青木南地区を住みよく、働きよい健全なまちにしよう”ということで、一つにまとまることができ、平成12年11月にまちづくり協議会の設立総会に漕ぎつけた。

しかし、残念なことに開発問題の“しこり”が残り、自治会幹部からの出席は得られなかった。

3)「まちづくり協議会」の構成

青木南地区まちづくり協議会の区域は、下図に示す約23haで、一般住宅、マンション、工場、大規模商業施設が含まれている。

会員の構成は、居住者及び地区内で事業を行う者及び、地区内の土地、建物所有者で、これには所有権がある地区外居住者も含めている。

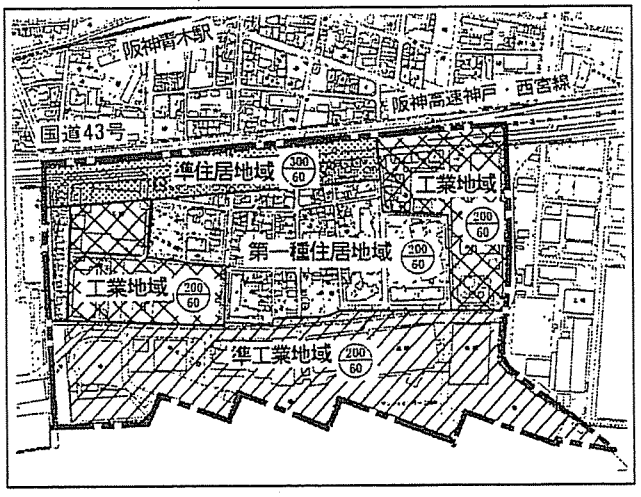
役員は、一般住民及びマンション居住者、企業(工場等)から約30名を選出し、執行部としての会長、副会長、事務局長、会計は、一般住民及びマンション居住者がこれに当たられている。具体的には、先の開発問題が、今も少し“しこり”を残しており、中間派の3人が中心になって活動をリードされている。

4)「まちづくり協議会」の主要課題

国道43号以南の青木南地区は、神戸市東部の臨海工業地域にあり、用途地域は居住ゾーンの第一種住居地域を中心に、準住居地域、準工業地域、工業地域が取り囲んでいる。

用途地域上の環境保全条件としては、極めて不安定な条件にあり、一刻も早く居住環境保全のためのルール(「まちづくり協定」or「地区計画」)づくりが必要な地区である。

・区域及び用途地域図



5)「まちづくり協議会」の進め方・内容

神戸市には、まちづくり協議会の進め方を条例として定めた「神戸市地区計画及びまちづくり協定に関する条例」(これを略して「神戸市まちづくり条例」と呼んでいる。)がある。これは、乱開発や、公害問題をかかえる地区において、環境を保全する目的のまちづくりを前提としており、当青木南地区まちづくりにおいても適合性が高い。従って、当まちづくり協議会の推進にあたっては、この条例に基づき、地域住民全員参加型の協議により、まず「まちづくり基本構想」を策定し、これを実現するためのルールづくりとして、「まちづくり協定」の締結を神戸市長と行ってきた。この間、地域住民全員を対象としたアンケート調査を3回実施し、これが認められて、平成14年11月には、神戸市まちづくり条例に基づく「まちづくり協議会認定」を受けた。

また、神戸市からは協議会に対しまちづくり活動助成を、コンサルタントの私には、アドバイザー派遣やコンサルタント派遣等の支援をもらっている。

6)「まちづくり協議会」の経過概要

協議会の立ち上げを含めた青木南地区のまちづくり協議会の経過概要は、以下の通りである。

年、月、日	事　　項
H12. 3以前	・フェリー埠頭跡地開発問題の協議、調整
H12. 4～5	・有志によるまちづくりの取り組みの発意
H12. 6～9	・地区内関係グループ(工場、自治会等)の調整
H12.11.19	**・青木南地区まちづくり協議会の設立**
H13. 2～3	・第1回まちづくりｱﾝｹｰﾄ調査(問題点)
H13.11～12	・第2回まちづくりｱﾝｹｰﾄ調査(構想案)
H14. 5.19	**・まちづくり基本構想の策定**
H14. 7～8	・第3回まちづくりｱﾝｹｰﾄ調査(協定案)
H14.11.12	**・まちづくり協議会認定**
H15. 2. 5	**・まちづくり提案と「まちづくり協定」の締結**

7) まとめ－「青木南地区まちづくり協議会」の特性

青木南地区のまちづくりは、大規模商業施設、公害問題等がバネとなり、住環境保全型のまちづくりが主目的であり、真野地区や、新在家南地区と同様、「神戸市まちづくり条例」に基づくまちづくりの典型例に近い協議会活動を行ってきた。即ち、青木南地区のまちづくりは、震災後新しく取り組み始めた協議会であるが、活動内容は極めてスタンダードな神戸市型まちづくり協議会と言える。

■『コンパクトシティ』を考える2－歴史から学ぶ都市のかたち

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

『コンパクトシティ』とはどんなものだろう。そこで、過去の歴史から、コンパクトな「都市のかたち」を学んでみたい。

過去のコンパクトな都市の事例として思い浮かぶのは、ギリシャ時代の『ポリス』、あるいは、ヨーロッパ中世時代の『城壁都市』である。これらは、大きな歴史の流れの中に、都市の発生と成長が当時の時代背景を通して刻まれており、その特徴の中には今日に通じる共通点がある。

1．ギリシャ時代の『ポリス』

ギリシャでは紀元前８世紀頃に、海に山が突き出す特有の地形をいかした要害の丘を中心に都市国家（ポリス）が誕生した。造船や航海技術に長け、エーゲ海から黒海にかけての海上交易による商業の発展と、さらに地中海東岸を含む沿岸部に植民市を建設し、ポリスはその富の集まる中心として発展した。アテネやスパルタに代表されるポリスの特徴は、統治システムが王政から、貴族政による寡頭政を経て、民主政に至ったことである。土地を所有する農民階層と都市経済の担い手である商工業者の市民団を中心に政治体制の変革が行われた。スパルタでは紀元前６１０年、アテネでは前５０８年に改革が実施され、古代民主主義が始まった。言論の自由、法の前の平等、さらには権力の集中する職業官僚を認めず、選挙や抽選等で最高権力者を選ぶことや、「陶片追放」のように投票で権力集中のおそれがある者を１０年間国外追放する手法など民主政治の原点となる制度を創り出した。都市空間として、市民の集会や裁判をする広場（アゴラ）や、劇場などの公共建築物、緊急の外敵に備える城壁が整備された。

民主化したポリスが発展できたのは、民主制により公私生活での権利と義務の調和が打ち出され、政治参加を保障する一方で、都市を守り戦う市民軍に市民の参加を義務づけたからである。武具の自弁が必要であったが、経済力を付けた市民は武具、槍や盾を持参し、一騎打ちが中心の時代に、大量市民兵の隊列による重層歩兵（重い武具の装備で動きは鈍いが防備力に優れる）の戦闘を可能にした。貧しい市民は、海軍の水兵（漕ぎ手）として参加し、陸・海の戦争に勝利を重ね、領土の拡張や、戦利品として大量の奴隷を獲得した。奴隷は生産の手段（今日でいう機械・動力）として、農業、鉱工業、商業に従事させ、その生産による余剰品で交易量を拡大し、市民は豊かな社会と繁栄を享受することができ、自由で創造的なギリシャ文化を謳歌した。

都市のかたちとしての『ポリス』のコンパクト性は、第一に、都市の主権者を歴史上初めて市民とし、市民が進んで政治や防衛に参加する権利と義務を明確にした民主的な統治システムにある。そして、第二には市民権は両親が市民であることで限定し、都市空間の拡大をさけ、一方で新たな土地需要を海外の植民市を開発し、ネットワークを拡大することで発展させたところにある。

ギリシャのポリスの特殊な発展形はローマ市である。一つのポリスから発展して、紀元２世紀には地中海周辺地域をすべて領土とするローマ帝国を築いた。広大な帝国を支配できたのは、戦争等で勝利した相手と同盟関係を結び、中心都市ローマの市民権を同盟国にも開放したことである。これにより、ローマの統治者にローマ以外の各地から多彩で優秀な人材が就き、長期間独裁を許さないシステムが機能的に働き、長期にわたり安定的な統治システムを確立し、繁栄を築くことができた。都市の形態は大規模になったが、統治システムにはコンパクト性が残ったのである。

2．中世時代の『城壁都市』

栄華を誇った古代ローマ帝国も、帝国の周辺にゲルマン民族やスラブ民族などの蛮族の大移動に

よる侵犯の繰り返しと、回教徒であるサラセン人の独自の文化による西地中海の支配などにより、西ローマ帝国は滅亡した。その後、近代を迎えるまでを、歴史区分で中世と称される。中世時代は暗黒時代と誤解されるが、実は現代の西ヨーロッパを築く重要な時代であり、それに中世の都市のの発展が、大きな役割を担った。

中世の都市は、西ヨーロッパに侵入した蛮族の略奪と殺戮から奥地に逃れた人々が、彼らを保護してくれた新旧の貴族や諸侯を中心に、防御を目的に集落の周辺に城壁を巡らせた『城壁都市』が典型である。交通が遮断され、自給自足の孤立分散した小社会が各地に展開した。しかも、ローマ帝国という権力の中枢を失った西ヨーロッパでは、帝国時代に公認され思想や法の源点であるキリスト教ローマ法皇と、新たな保護者となったゲルマン民族のフランク王国（後の神聖ローマ帝国）の王をローマ皇帝とする、求心力に欠ける二極の楕円の権力構造が続いた。中央と地方の権力の分裂により、支配者である国王等と領主の間に、土地を介在してご恩と奉公という中世社会の特徴である封建制度が定着し、平和の安定が維持された。

平和による社会の安定と地球の温暖化で、大規模な開墾による耕地の拡大がおこり、人口が増加し、新たな村や都市が開かれ、徐々に都市は孤立状態から脱した。新たな都市網が築かれ、商業者や旅行者の往来が増加し、都市は新たな発展・充実期を迎えた。封建領主や教会司教の支配下にあった都市に、豊かな経済力をつけた商業者が表舞台に登場し、経済的独立の要求から市民自治への闘争が興った。通行税や課税を徴収できる都市に注目した国王の支持を受けた市民は勝利し、王権との間に一種の同盟関係の都市が続々と誕生した。都市は、生産者都市であり、自立都市となった。市民は平等であり、貧富の差は生じたが階級社会ではなかった。都市を守るのは市民自身であり、軍隊を持つ権利、城壁を建設する権利を獲得し、それの経費は、市民の経済力で負担した。さらに市政を運営する役人を選ぶ権利、下級裁判権を行使する権利、貨幣鋳造する権利、度量衡を監督する権利などが付与された。このため都市に住む者全体で、誓約団体を結成した。

中世都市のもう一つの特徴は、都市美である。都市の建設にあたっては、政治的自由・都市的自由を守るために、封建権力に対する自衛と、訪問者が入市の際に都市の威厳を感じるような都市の力を外観の荘厳さで示すことも必要であった。市民の誇りの表現は、中心の広場や、教会のゴシック建築の美につきるものではなく、都市行政の中心となる荘重な市庁舎や商業者などの建物においても示された。

城壁都市は都市の空間が限定されたことで、都市は外側に向かって膨張をすることは考えず、都市の中で集住する持続可能なコンパクトな都市生活ができる創意工夫の活動を展開させた。それにより『市民自治』の精神が深く浸透し、併せて『公（パブリック）』の観念が定着したのである。

中世都市と王権の同盟関係は、イギリスやフランスでは１３世紀から王領地の拡大で王権が強大化し、自治都市は国王の支配下におかれるようになった。しかし、一方で都市の意思を反映するための代表者を送る議会制度が発展し、やがて国家統一と絶対主義の道が開かれ、それはやがて国民国家へと発展する。そして、資本主義の発達、市民革命、議会制民主主義の胎動を経て、やがて中世時代を脱し、西ヨーロッパは近代へと突入する。中世はその意味で都市の成長した時代であり、ヨーロッパ近代社会の基礎を形成する大きな動力となった。

（研究会は原則毎月第３木曜日 18:30～21:00 に「こうべまちづくりセンター」３階で開催。参加希望者は TEL078-361-4523 露口まで）

■復興まちづくりにおけるボランタリー組織の役割

第26回 都市公団まちづくり研究会 2003年4月23日／講師・宮定 章、加藤 洋一（まち・コミュニケーション）

加藤　洋一（まち・コミュニケーション）

4月23日、都市基盤整備公団関西支社で行われた公団まちづくり研究会では、神戸市長田区御蔵通地区（以下御蔵）で震災復興まちづくりの支援を続けるボランティア組織、まちコミュニケーション（以下まち・コミ）の活動を紹介させていただくことができた。

○神戸御蔵のまちづくり

はじめに、まち・コミ代表の宮定より、現在御蔵で進む古民家移築による集会所建設を中心に、まち・コミの地域における役割や、住民リーダー層の「自分たちのまちは自分たちでつくる」というまちづくりに関する意識の高さが紹介された。一方でまち・コミという新たな組織がまちづくりに関わることによって生じる地域住民との軋轢や、御蔵のまちづくりの限界、課題等が指摘された。

以降、「まち・コミとは何か？」「まちづくりNPOとは何か？」という議論が展開される。

○まち・コミとは何か？

まち・コミの運営委員の一人でもある都市公団の田中氏は、御蔵の復興まちづくりにおけるまち・コミのよそ者ゆえの役割を高く評価している。すなわち、まち・コミは地区内に存在したしがらみにとらわれることなく活動した。だからこそ彼等はどの住民とも等距離で付きあうことが出来た。土地区画整理事業の中でも、地主や地権者、借家人といった権利関係のカテゴリーに属さないがゆえに、生活者の視点まで戻って考えることを提案することが出来た。これが地区内のみならず、外部の者にまでその活動に対する同調を得ることにつながったという。

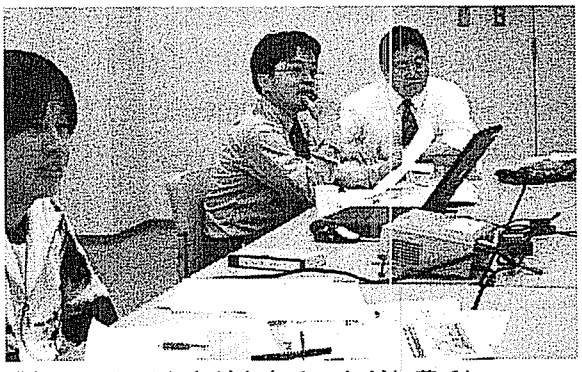
研究会には、灘中央地区の「新まちづくりハウス」の設立に協力した元神戸市住宅局のH氏も参加されていた。氏は若者が常駐し、協議会活動をはじめとした地域のサポートを行っている「新まちづくりハウス」を次のように評した。「地域には都市計画コンサルタントでは対処できない様々な問題がある。地域に密着したNPOのようなボランタリーなセクターが地域内の複雑な利害を調整し、行政や専門家、住民とを結ぶことができる。まちづくりハウスはそのテストケースである」。

その後も参加者より、まちづくりNPOのような組織に対する意見や期待が語られた。

○結びにかえて

震災以降、神戸には自治会や協議会のような地縁組織に加え、「若者」を主体とするボランタリーな存在がまちづくりに関わるという事例が多く存在する。一方で震災から8年が経過し、協議会活動が停滞していく地域も多く見られる。行政の復興施策終了後もまちづくりに関する地域住民のポテンシャルを維持することが求められ、行政もそのシステムづくりを模索しはじめた。

御蔵のまちづくりは震災による甚大な被害から、人々が以前の生活を取り戻すために始まったものである。しかしながら現在御蔵の抱える問題は、少子高齢化や産業の衰退、空き地や空き店舗の発生という日本のインナーシティ共通の問題である。被災地におけるまち・コミのようなボランタリーな組織は、後地域のなかでどの様な位置を占めていくようになるのか。これが日本が本当の意味での都市再生を達成するにあたり、大きなヒントとなっていくのではないだろうか。

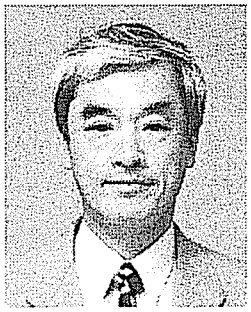


講師の二人（中央が宮定氏、左が加藤氏）

■アメリカのブラウンフィールド再生法とアフォーダブル住宅事業

都市公団まちづくり研究会 臨時報告会　2003年5月30日／講師・海老塚良吉（国際建設技術協会調査部長）

太田　亘（都市公団）



海老塚良吉氏

「公団まちづくり研究会」臨時報告会が、5月30日(金)に公団関西支社会議室で行われた。今回はアメリカにおけるブラウンフィールドの再生についての紹介。日本においても土壌汚染による人の健康への影響の懸念や対策確立への社会的要請が強まっていることから、H14年5月土壌汚染対策法が制定された。

（公布日：5月29日、施行日：平成15年2月15日）

アメリカには、ブラウンフィールド（Brownfield）と呼ばれる土地がたくさんある。これは工場や鉱山の跡地や放棄された倉庫、ガソリンスタンドなどの荒廃した土地のことである。広大なアメリカでは、いらなくなったビルや工場は必ずしも建替えない。放置したまま、よそに移転してしまうことがままある。土地は再利用されず醜い廃墟の姿をさらす。ちなみに反対語はグリーンフィールドである。文字通り緑の更地という意味である。

全米でのブラウンフィールドの数を推計することは困難であるが、会計検査院は425,000ヵ所の敷地があるとしている。ある推計によれば全米の都市内に約200万haの放棄された産業用地があるとされ、これは60の大都市の面積と同じ大きさである。特にニュージャージー州やペンシルバニア州などの東海岸やクリーブランド市などの五大湖周辺に多く見られる。いずれも産業革命以後の産業発展の中心地である。

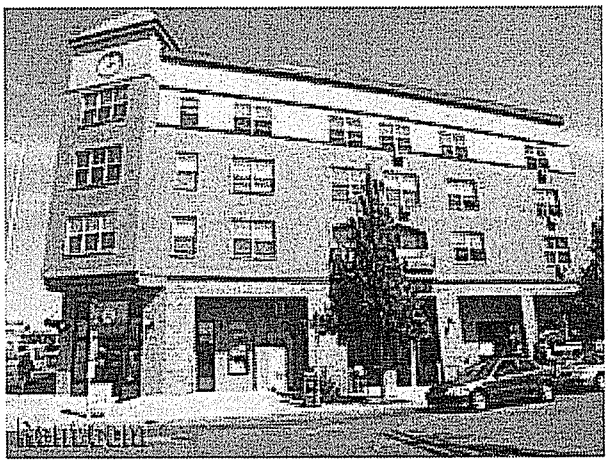
ブラウンフィールドは都市にさまざまな問題を与えている。最も深刻なのが地域住民の健康問題である。PCBなどの有害化学物質が地下水に染み込み、飲料水を汚染するといった問題が典型である。また都市の中心部がブラウンフィールドとして放置され、犯罪の温床になり、治安の悪化や失業率の増加にもつながっている。

なぜ、多くのブラウンフィールドは放置されてきたのか。理由は、第1に土地の洗浄コストが嵩むからである。第2には、環境問題の発露やそれをきっかけとする地価の下落を恐れる保守的な地域住民との協議に手間暇がかかるからである。そのため、開発はグリーンフィールドが優先される。

こうした動きに呼応して2002年に成立したブラウンフィールド再生法では、州や地方政府等を通じて、初期段階の浄化活動等に補助を与えることで対処しようとしている。特に、初期には商業・産業用途での再利用が多かったが、近年では住宅での事例も増えており、法は州政府に対して、住宅をめぐる健康的な環境とコミュニティの再生の相互利用に注目するよう求めている。

◇オレゴン州ポートランドのアルビナ・コーナー地区

約3000平方メートルの敷地で、かつては中古車の置き場や洗車場、鉛塗料やアスベストに汚染された空きビルなどがあった。1993年にゾーニングの変更により高密度の住宅と複合開発が可能



アルビナ・コーナー地区の住宅開発
http://www.rent.com/apartments/oregon/portland-salem-and-vicinity/portland/439276/　より

になり、1階には銀行、コーヒーショップ、美容院、コンビニ、画廊などの商業施設、上階はアパートとして開発できるようになった。ここには児童施設もあり、州の承認した浄化計画にもとづいて汚染物を包み込み、土地面から１０フィート隔離された2階レベルに中庭と遊び場が設置されている。

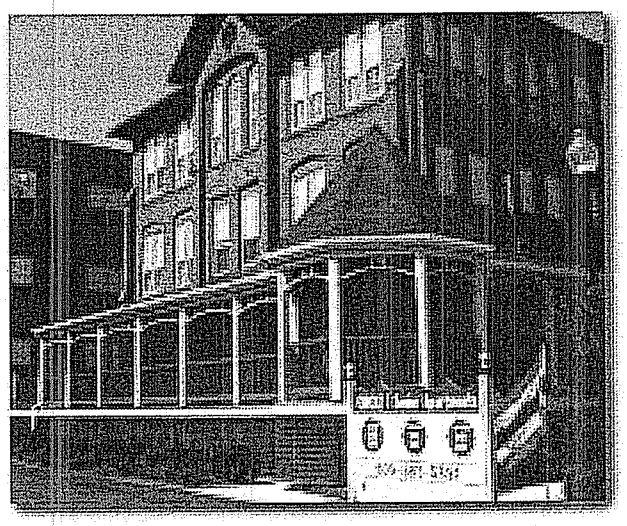
◇ニュージャージー州トレントンのサークルF地区

工場跡地の再開発事業。1990 年に工場が閉鎖され、コミュニティの衰退が始まった。トレントン市がその土地の道路に面した部分を住宅用地として使えるとして購入した。市はその後、非営利組織であるニュージャージー・ルター派社会奉仕団（LSM）を開発担当として選任した。現在、75戸のアフォーダブルな高齢者住宅と近隣地区の再生の強力な中心として活用されている。また LSM は、ナット・ウエスト銀行とチームを組むことによって、銀行から建設資金他の融資を受けることができ、連邦の低所得者住宅税控除が受けられた。

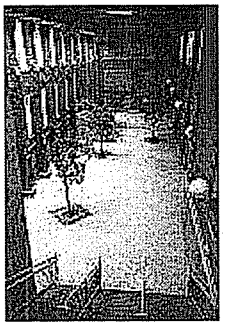
昨年 NHK スペシャル「変革の世紀」において、ペンシルバニア州ピッツバーグがとりあげられた。かつて、鉄の町として知られたこの町は、いま NPO の実験場として注目を集めている。1980 年代に入ると屋台骨であった製鉄業が衰退し、それを契機に急激に人口を失い、税収は落ち込む一方であった。職を失った住民が町を去るに従って増え続ける空家、そこが犯罪の温床となることで住民に不安が広がり、さらに人口が流出するという悪循環が続き、朽ち果てた家が取り残され、地域はゴーストタウンと化した。もはや行政や企業がその再生のすべてを請け負う力はない。教育、保健医療、環境、地域経済の研究など、様々な分野の公共サービスを市民自らの手で行う NPO が「第二の市役所」と呼ばれるまでに活躍している。

この状況に関西とりわけ大阪の姿が重なる。財政悪化の一途の行政、失業率の増加、空家率の上昇･･･。この状況を好転させるのに何をなすべきかは、市民一人一人に問われている。NPO が単なるブームではなく行政の下請けでもなく、真の市民セクターとして仕事をしていくことが問われているのではないだろうか。

＜参考文献＞
海老塚良吉著(2003)「アメリカのブラウンフィールド再生法とアフォーダブル住宅事業」
『月刊住宅着工統計 2003．6月号』
上山信一著(2002)『「政策連携」の時代』日本評論社

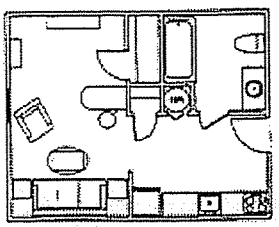


サークルF地区の高齢者住宅
http://www.lsmnj.org/ProgServ/AffordSrHous/CircleFSrAppts/body_circlefsrappts.html より

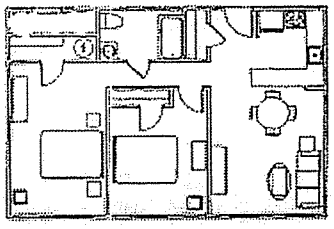




内部の様子



Studio Apartment



2 Bedroom Apartment

空き地からはじまる物語4

夜の音

中川 紺

右のこめかみが痛い。家を出て数分、バス停に向かっていた私は、空き地の前で足を止めた。どんよりとした曇り空の下に雑草が広がっている。朝から少し頭痛がした。低気圧のせいかもしれない。梅雨が早く明ければいいのに、と思う。そう思いながらも、大学受験まで残された時間がどんどん減っていくのもこわかった。

雑草畑を囲む木の杭とワイヤーを使った簡易な柵は、どこからでも入れるくらい隙だらけだった。

緑の中に無数の黄色い点々が散らばっている。よく見るとカタバミの花だった。ほかにも薄桃色のラッパのような形の花も咲いていた。まわりの草はほとんどがふくらはぎよりも低い背丈のものばかりだ。噴水のような形で葉をつけているもの、茎に赤い線が入っているもの、お馴染みのねこじゃらし。やたらに濃い緑のまとまりはヨモギだった。所々に腰までありそうな高い草が島のようにかたまって生えていた。

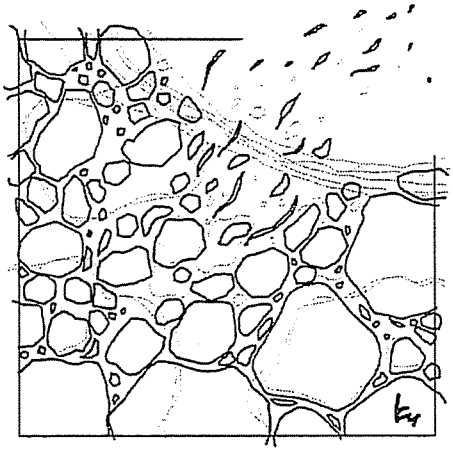
柵越しにぎゅっと詰め込まれた緑の世界で、私は頭痛と受験を少しだけ忘れていた。

●●

学校の帰り道、私が目にしたのは、雑草がすっかり刈り取られた空き地、だった。

去年はたしか、今の三倍くらいに茂って、何かの虫が大量発生して近所で一騒動起こった。業者が先手を打ったのだろうか。

あちこちに十円ハゲのような地肌が見えているのが何だか痛々しかった。



●●

その日の夜中、私は目を覚ました。時計は三時過ぎ、家中が寝静まっている。夕方から本格的にふりはじめた雨の音もしない。

(雨、もうやんだのかな)

窓を開くと、小雨まじりの少し冷えた空気といっしょにどこからか微かな音が部屋に流れ込んできた。低く何かがゆっくり這うような音、布が擦れあうような音。私は誘われるように出かけた。もちろん玄関から。

気が付くと空き地のまん中で水色のビニール傘をさして立っていた。外を歩く人は誰もいない。小雨が傘の上をさらさら流れていく。音は、私の足の下から響いてくる。地響きというものとは少し違う気がした。土の中で何かが動いて、のびて、つきあげてきて、そういうものが靴の裏に伝わってくる。こそばくて気持ちいい不思議な感覚だった。いつの間にか雨はやんでいた。

●●

知らないうちに部屋に戻ったらしく、朝、私はちゃんとベッドの上で目を覚ました。パジャマのすそに少し泥がついていた。出かける時に玄関の傘がなくなっていることに気が付いた。空き地に急ぐ。さびたワイヤーの柵に傘が引っ掛けてあった。

(やっぱり来たんだ、私)

刈り取られたばかりの空き地には、一面、新しい芽が顔を出していた。まだ小さな葉の上に、大小の銀色の露が並んでいる。

「負けるなよ」

思わず声が出た。

奥の方で何かをついばんでいたスズメがいっせいに飛び立った。梅雨が明けたように空はすっきり晴れていた。

(完)

(イラスト やまもとかずよ)

■第６４回・水谷ゼミナール報告

今回のテーマは「地域経済のマネージメント」で、６月27日（金）、こうべまちづくり会館で行われました。

まず、導入として小林郁雄さん（コー・プラン）より、「地域経済」「環境」「コミュニティ」の３つがつながって構成される「コンパクトタウン」に関する説明があったのち、次の３つの報告がありました。

①〈まち育て〉を運営･経営していく組織と仕掛けづくり
／岩崎俊延（プランまちさと）

②生きがいしごとサポートセンター阪神の活動
／金森康（宝塚NPOセンター）

③次世代のタクシー会社は地域サービス会社
／森崎清登（近畿タクシー）

岩崎さんからは、コンサルタントとして関わっておられる六甲道駅北地区（震災復興区画整理事業）において、これまでのまちづくり協議会の活動を紹介されたのち、現在取り組んでおられる自治会活動や公園の清掃活動などの多様なまちの運営や経営に関する取り組みの現状や、その過程で分かってきた地域運営の問題点などについて語られました。

金森さんからは、宝塚市を中心に活動を展開している生きがいしごとサポートセンター阪神が、中間支援組織として行っている各種講座や起業支援、就業支援等の様々な活動について、報告されました。

森崎さんからは、ご自身が神戸市長田区において経営されている地域密着を目指すユニークなタクシー会社（ロンドンタクシーの導入やお花見タクシーなど、数限りない試み）についてや、長田のまち経営に関わっておられる経験（長田のローカルな食材「ぼっかけ」を使った商品開発や修学旅行の誘致など）について、楽しく語っていただきました。

これら３つの報告を受け、森田博一さん（シティコード研究所）よりコメントがあり、「コミュニティビジネスにはパッション、ミッション、シンパシーが必要」などが語られました。　　（中井　豊／中井都市研究室）

■ 情報コーナー

●阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第３３回連絡会
・日時：８月１日(金)18:30～21:00
・場所：ひょうごボランタリープラザ（クリスタルタワー（JR 神戸駅南側）10階セミナー室）
・テーマ：まちづくりにおける地域空間像の形成
・内容：
①神戸の景観論とまちなみ形成の空間像／浜田有司（都市基盤整備公団）、②エコタウンの空間像／上山卓（コー・プラン）、他、コメンテーター森崎輝行（森崎建築設計事務所）
・問合せ：ジーユー計画研究所
(TEL. 078-251-3593, FAX. 251-3590)

●第２回「人を集める講座」
・日時：７月28日(月)17:15～19:00
・場所：こうべまちづくり会館２階ホール（神戸市中央区元町通４丁目2-14、TEL. 078-361-4523）
・テーマ：「人を集める場をつくる－都市デザインの実践とまちづくりへの提言」
・講師：国吉直行(横浜市都市計画局都市ﾃﾞｻﾞｲﾝ室長)、小林郁雄(ｺｰ･ﾌﾟﾗﾝ)
・問合せ：神戸市都市計画総局再開発課計画係／有井（TEL. 078-322-5512, FAX. 078-334-1831）

●神戸山手大学／女子短期大学
＜OPEN CAMPUS 2003／すまいづくり、まちづくり相談所＞
・日時：７月27日(日)10:30～15:00
　　８月３日(日)10:30～15:00
・場所：同大学３号館 2F、3F(神戸市中央区中山手通 6-5-2、相楽園西隣)
・内容：リフォームやマンション建て替え、まちづくり等に関する相談が、小森星児（神戸山手大学教授）、武田則明（同）、小林郁雄（同）の各氏によって行われます。また、「環境と人間の文化学」等のテーマで２日間にわたりのべ21講座が開催されます。
・問合せ：神戸山手大学／女子短期大学（TEL. 078-341-1615）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http：//web. Kyoto-inet. or. jp/org/gakugei/kobe/index. htm
◆ http：//www. hyogo-iic. ne. jp/~INS93031/

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca. mbn. or. jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2003年8月12日発行

月刊 きんもくせい

03年8月号
(50+36+NO. 5)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■「安心して安全に暮らせるまちづくり」を目指して

中島　克元(松本地区まちづくり協議会　会長)

阪神・淡路大震災からはや８年が過ぎ、震災復興政策の目玉であった震災復興区画整理事業や再開発事業は一部の地域を除くと概ね順調に推移しています。しかしながら、私は、最近になってこのたびの震災から学んだものは、一体何だったのだろうかと考えるようになりました。高度に進歩した資本主義国家であり、かつ民主主義を謳歌する我国日本にあって、過去の歴史に照らしても幾度となく大規模自然災害に見舞われてきた日本には、いまだに災害から復興するための有効かつ合理的な社会システムがありません。我々の危機管理に対する意識の低さは、もはや犯罪的であると感じています。一体何人の国民が死ななければ新たな制度はできないのでしょうか？われわれを含めて大いに反省しなければならないことであると感じます。

大規模自然災害のようなとてつもない事柄のみにあらず、日常生活の中でも危機的な状態はいくらでもありますが、これらの事柄についても実際に自分の身に災難が降りかからなければ真剣に考えようともしていません。嘆かわしいことです。かといってつね日頃から災難にあったらということばかり考えていたのでは、毎日の生活が暗くてたまりません。もっと楽しく明るく危機管理について取り組むことはできないものでしょうか。眉間にしわを寄せて口角泡を飛ばして一大議論するものでもないように思います。ようは、一部の不良な住民の勝手な行動を許さなければいい訳で、外部からの犯罪者の侵入を阻止することであると思います。広島市内から暴走族を追い出した市民活動がテレビで紹介されているのを見て、やはり住民が暴力に屈せず立ち上がることが重要であると感じました。

しからば、一体どのような取り組みをすることによって強固なコミュニティーが出来上がるのでしょうか。いちいち警察に届けを出し続けるような住民全てが密告部隊になってしまうようなことはいやですね。慈愛に満ち背伸びしない形で豊かなコミュニティーが成熟してゆくことが望まれます。

現在松本地区では「24時間安心システム」という一種のホームセキュリティーシステムの構築に取り組んでいます。このシステムは電話回線とＰＣを組み合わせ住民の個人的な身体的緊急時や犯罪から住民同士の互助を基本として取り組もうとするものです。また、公園や「せせらぎ」歩道のようなオープンスペースでの犯罪防止活動を効率よく取り組もうとしています。「安心して安全に暮らせる」まちづくりに対して、そのコストをいったいどの程度の価値観でもって認知されるのかが課題です。犯罪は警察署・災害は消防署という他力本願的な発想は駄目です。というのが震災から得られた貴重な教訓でしょうか。

＊　＊　＊

リレー論文、次はコミュニティ・サポートサンター神戸の中村順子さん　よろしく。

（小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→中島克元→）

■大倉山ふれあい住宅と修学旅行生の交流

石東　直子（石東・都市環境研究室）

6月6日に、岐阜県関市桜ヶ丘中学校の3年生 21名が若い女先生と一緒に修学旅行で、大倉山ふれあい住宅にやって来ました。

この桜ヶ丘中学校と大倉山ふれあい住宅の居住者との交流は、去年に続き2回目です。

生徒の学校紹介によると、桜ヶ丘中学校は全校生700名で3年生は240名で、学校をあげて地元各地でボランティアをしています。特に合唱がうまく、地域大会で優秀な成績をあげており、老人ホームなどとの合唱交流をしているそうです。また、アルミ缶を集めて、盲導犬育成やユニセフに募金をしたり、その他いろんなボランティア活動が活発なようです。

先生の話では、今の中学生は家族などと旅行をよくしているので、従来のような名所旧跡巡りの修学旅行は喜ばないそうです。それよりも現地の人たちと触れ合う体験学習が歓迎されるが、教師としては準備が大変とのことです。

今回の修学旅行も神戸の数ヶ所で体験学習を組んでおり、「大倉山ふれあい住宅でボランティア活動をしたい」という希望者がグループを組んで来訪しているので、別々のクラスの生徒たちです。それにしては、生徒たちはみんな親しそうで仲良くおしゃべりしながら、細かな役割分担ができていて、チームワークがとれているのに感心しました。

11時過ぎに到着して、すぐに運動着に着替えようとしたら、大倉山ふれあい住宅から男子生徒にはTシャツが、女子生徒にはエプロンが用意されていました（100円均一ショップでの掘り出し物）。

まず、震災の被害の状況とコレクティブ住宅の発想、住まい方、居住者の日々の生活などを石東が説明しました。中学3年生といえば、阪神大地震が発生した時は小学校入学前だったころで、当時のニュースなどを覚えている人はいなくて、授業で学んだそうです。熱心にメモを取りながら私の話に耳を傾けてくれました。若い先生は殊のほか熱心にメモをとっておられました。

講義の後は、早速、準備されていたバーベキューのスタートです。協同室前の広めのベランダで炭を熾しコンロを担当する人、居住者に教わりながら食材を串に刺す人、焼く人、サマーキャンプのような賑やかさです。テーブルの上には、居住者が朝5時から準備されたという大量のおにぎりとサラダがあります。頃を見計らって集まってこられた居住者にまずサービスする人、写真の記録係、AMこうべの取材インタビューに応じる人、みんなが汗ダクダクの奮闘です。私のちょっとびっくりは、何と、先生もいらっしゃるというのに、「僕もビールが飲みたい」と言う2、3の生徒の声があったことです。居住者は若いエネルギーに包まれて、食べ盛りの子供たちと話をしながら自分たちの孫と一緒にご飯をたべているように楽しんでおられました。ノートを片手に、居住者にいろいろ質問をしている生徒もいます。「何を聞いてもいいんですか？」とひとりの男子生徒が私に尋ねました。

食事が終わると、生徒たちはご自慢の合唱を聞かせてくれました。伴奏のテープ持参で、「旅立ちのと







き」「名づけられた葉」「この地球のどこかで」そして「校歌」です。女子と男子のハーモニーがとてもきれいです。すぐ涙して聴き入る居住者、それを見て涙する生徒、目を瞑って心をこめて歌っている様子の男子、感極まって泣きながら歌う女子。居住者に自分たちのメッセージが届いているということを実感しながら、丁寧に歌いつづけてくれました。その場にいた人たちみんなの心がひとつになった感動のシーンです。

合唱の後は、ボランティア活動の掃除をしてくれました。高齢居住者では日々の掃除では手の行き届かない廊下の手すりやガラス、バルコニーの床などをホースで水を引き、洗い上げてくれました。1年ぶりの埃払いです。

3時過ぎに生徒たちは三々五々、神戸の町へ出かけて行きました。夕方、宿舎のホテルに集合とのことです。楽しいひと時をありがとう！

生徒からの便り

昨年の修学旅行で訪ねてきた生徒たち19名は、帰ってからみんなが感想文を送ってくれました。コレクティブ応援団はそれを「岐阜県関市桜ヶ丘中学校3年生の修学旅行／大倉山ふれあい住宅訪問　感想文・写真集」として編集し、生徒たちにプレゼントしました。受けとった生徒の一人から次のようなお手紙が届きましたので、紹介いたします。

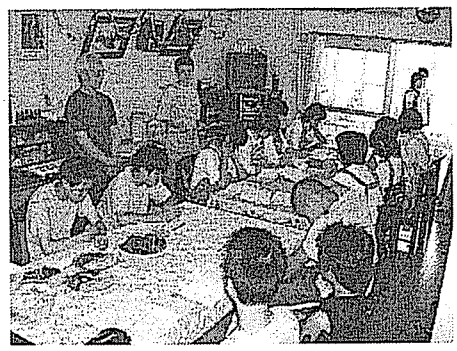
『<大倉山ふれあい住宅　感想文・写真集>を送ってくださり、ありがとうございました。この文集をもらった時、みんな驚いていました。ひとり一人の感想やその時の写真が載っていてとてもうれしかったです。わたしたちは神戸に行って、たくさんのことを学びました。代表の石東直子さん、岩崎洋三さんにはとてもお世話になり、バーベキューもしてもらい楽しい時間が過ごせました。あの時、話してくださったお話は今でも心に残っています。そして、1月17日に起きた阪神・淡路大震災のことはこれからも絶対に忘れません。わたしたち3年生は今年卒業しますが、「コレクティブハウジング」「大倉山ふれあい住宅」で学んだことを、高校へ行っても生かしていけるといいと思います。

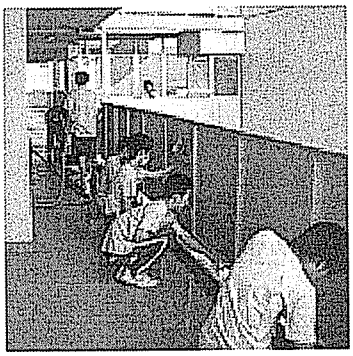
訪問した時は、本当にありがとうございました。

石東さん、岩崎さんそして大倉山住宅で生活している皆さん、これからも元気で長生きしてください。

代表　吉田桃子』

(030630記)







■ホテルと阪神間文化

角野　幸博（武庫川女子大学教授）

旧甲子園ホテル（現武庫川女子大学甲子園会館）は、阪神間モダニズムのシンボル的建築として、阪神間の文化に興味を持つ人の間では、ずいぶん知られるようになってきた。このホテル、フランク・ロイド・ライトの弟子であった遠藤新と、東京の帝国ホテルの支配人であった林愛作との合作であったといってよい。帝国ホテルを退職していた林と、ライトのもとで建設現場を仕切っていた遠藤が、建築空間、サービスともに理想のホテルを目指してつくりあげたものである。このことについては、遠藤自身が竣工間もない昭和5年6月号の「婦人の友」に、次のように記している。

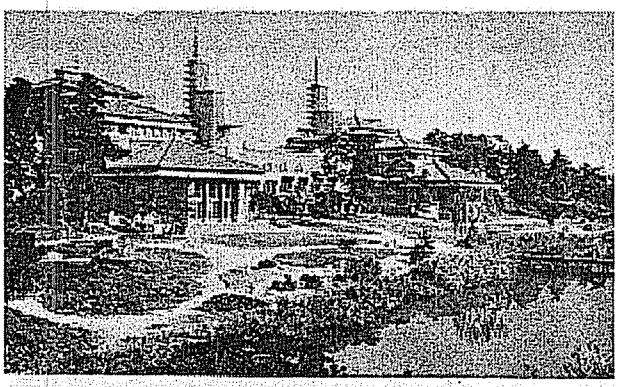
ー場所は阪神をつなぐ新國道に沿ふて稍大阪に近く位置し、砂白く松緑なる武庫川岸、舟を浮べるによろしき塘池を庭にして遥かに海と山とを併せたる風光。とにかくこんな風にして、一般の住宅よりも廊下の短いホテル、日本人の風俗慣習に適合して家庭的な趣きの、婦人にも子供にも都合のよいホテルが出來あがりました。

西洋の産物であるホテルは戦前の阪神間の生活文化に様々な影響を及ぼした。神戸オリエンタルは、明治26年頃には神戸でもっとも高級なホテルとの評価を得ており、昭和初期には阪神間の中産階級が気取って訪れる場所になっていた。宝塚ホテル（大正15年開業）、ホテル・パインクレスト（昭和6年夙川で開業）、国際ホテル（昭和14年六麓荘で開業）などは、単なる宿泊施設という以上に、地元の文化人や中産階級の交流のサロンとしての側面をもっていた。六甲山上に開業した六甲山ホテル（昭和4年宝塚ホテルの支店として開業）や、六甲オリエンタルホテル（昭和8年開業）も忘れることはできない。

甲子園ホテルはこうしたライバルたちにもまして、迎賓館、リゾートホテル、サロンとしての顔を併せ持つ存在であった。

今も阪神間の各市には、ホテルニューアルカイック（尼崎）、ノボテル甲子園（西宮）、伊丹シティホテル（伊丹）、ホテル竹園（芦屋）、そして老舗の宝塚ホテル等、街の顔あるいは交流施設として期待されるシティホテルがある。景気低迷のなか各ホテルとも苦戦しているようだが、戦前のホテルにあった矜持を忘れつつあるのは、やや寂しい。もし現在のホテルにこれを期待するのが難しいとすれば、それに代わる場をどこかに作り上げてみたい。

甲子園ホテルは大学の施設となったことで、建物を活用しながらの保存に目途がついた。公開シンポジウムや様々のイベントにも活用されている。今一番興味を持っているのが、庭園をはじめ周囲の環境がどうだったのかということである。建物はあっても敷地全体の資料がみつからない。もとはこの地で武庫川と枝川とが分流していた。戦前の絵ハガキや写真を見ると、南側に大きな池がある。この池は近世からあったらしい。松林や池をはじめ戦前の周囲の姿を再現することで、生態系の核としての今後のこの場所の役割を考えてみたい。今はカラスのお宿になってしまっているのだが…



KOSHIEN HOTEL (MIDWAY BETWEEN OSAKA-KOBE)
KAMIKOSHIEN HYOGOKEN JAPAN 上甲子園 甲子園ホテル

阪神間倶楽部　第3回研究会（第5回準備会）の記録

○日　時：2003年7月19日（土）13：00～
○場　所：武庫川学院甲子園会館（旧甲子園ホテル）
○参加者：20名弱

13：00から角野幸博さんからの旧甲子園ホテルについてのミニ講義と見学会。14：00から生活美学研究所の定例研究会にご招待いただきました。武庫川女子大学学長山本俊治先生の御講演、「ことばと心の間」をうかがいました。生活美学研究所は開設以来阪神間を舞台に多様な学際研究を続けておられます。今後ともネットワークをお願いします。

■地域商業の再生ー「都市観光の再生」について

濱口　善胤（神戸大学大西研究室）

7月23日ひょうごボランタリープラザにおいて、“地域商業の再生—「都市観光の再生」について”をテーマに第1回大大特（地域経済復興）研究検討会が行われました。その内容と感想について記したいと思います。

1）雲仙、有珠山（昭和新山）などの事例報告

木村　拓郎　氏（社会安全研究所）



観光という視点から火山災害を解説された。今回事例で挙げられた観光地は温泉地でもあり温泉と火山は切り離せない。つまり必然的に火山災害をうける地域であった。しかし、火山災害というのは一度起こってしまうとその被害は単発的なものではなく累積的なものであり、しかも長期間続く。また、観光地特有の問題があることも指摘された。

確かに、私達も旅行先をイメージで決めてしまうことが多く、その悪化は観光地にとって非常に重大な問題であると思った。それに対して実際の被害現場を体験させる方式で復興を試みた事例は、上手くいけば危険なイメージを逆手に取れる部分もあるのではないかと思う。しかし、実際は各機関がそれぞれの思いつきで観光施設を作るため脈絡がとれないという点が非常に残念だ。

2）神戸市・北野地区の事例報告

山本　俊貞　氏（地域問題研究所）



異人館という財産があるために観光地になりつつある住宅地、北野は地域住民と観光事業者側の溝が大きくある。しかし、住民も事業者側も北野という土地が持つポテンシャルに大きく依存していることに気づかずすごしていた。ところが、震災というものを経て大きく意識の上で変化が生まれてきた。

北野という街と住民がいるからこそ魅力的な町並みがあり，観光地として神戸を代表する街だからこそプライドを持ってそこに住みつづけることができる。この事実は今後、観光とは、住民とはといった多くの視点で，町並み保存やまちづくりに影響を与えるのではと思われる。

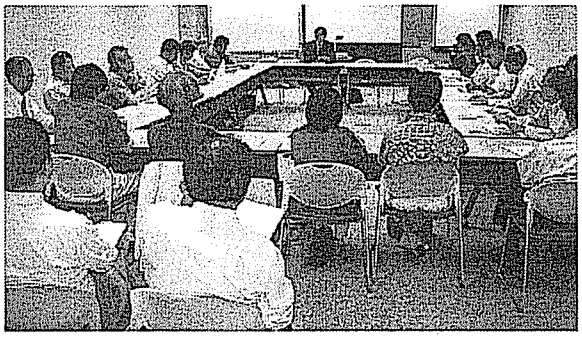
3）講演：震災復興における都市観光再生の課題

石森　秀三　氏（国立民族学博物館）



観光とはなんたるものか、現在の問題点、今後の観光はどう変容していくか等についてまず指摘され、その後、神戸観光が置かれている厳しい現状と、今後についての展望についての意見を述べられた。

先生のご指摘にもあった様に、神戸には観光名所やエンターテイメント性はないのかもしれない。ガイドマップを開くと店舗紹介ばかりだというのも納得である。しかしそれが神戸の姿であり、神戸にくる旅行者は店舗を回ることや、目当てのレストランに行くことを楽しみにやってきているのではないか？こういった形はいわゆる観光とは少し異なるかもしれないが、それが訪問の動機付けになっていることは確かだろう。神戸の観光は他と少し違ったお買い物、お食事ができる。それが立派な財産で、そこから何を見出すか。まさに“民産官学”にうってつけ？？



■Dr.フランキーの街角たんけん　第2回　第三の山手通

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

「都心回帰」の時流に乗って、神戸でも三宮周辺を中心に、時ならぬマンション建設ラッシュである。

中山手6丁目、中華同文学校北西角から、山本通1丁目の一宮神社前まで続くこの通り界隈も、ここ数年、比較的大規模で高いグレードのマンションが相次いで建ち上がっている。これらの敷地は真珠産業の業務用地等であったが、さらに遡れば、その多くは神戸財界人の御屋敷跡であった。この通り、名は、「上山手通」という。

山手通りは「下・中」が居住表示にもなって知名度が高いが、「上」は影が薄い。とはいえ、山手の市街地開発に密接に関わる役割と歴史をこの「第三の山手通」は背負っていた。

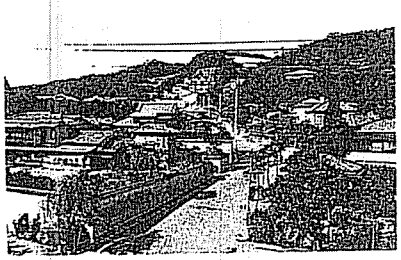
開港後、居留地建設の遅延もあり、西は宇治川、東は生田川北は山際迄の範囲で、政府は外国人と日本人の雑居を認めた。しかし、その区域の大半は田圃であり交通は畦道に頼らざるをえず不便であったため、兵庫県が国に対して山手を連絡する新道の建設を願い出て、許される。1872（明治4）年、まず下山手通・中山手通、現在のトアロードなどの開鑿が始まる。上山手通、山本通等が建設されたのは、それから16年後の1888（明治20）年である。

この時期以降、北野・山本地区での外国人住宅（異人館）の建設が本格化するが、上山手通界隈は日本人実業家が好んで居宅を構えた。その嚆矢が、明治10年代に建設が始まったと考えられる中山手通5丁目の小寺泰次郎邸（現相楽園）である。長らく、諏訪山ゴルフセンターがあった敷地は、貿易商・湯浅竹之助（湯浅商店主）邸跡で大正初期の和洋併置型の大邸宅があった。最近、マンション建設で姿を消した鉄平石貼のユーゲントシュティール調の外構は、空襲で焼失した湯浅邸唯一の遺構だった。

山本通4丁目には、川崎造船所の松方幸次郎邸が居宅を構えた。東の中山手2丁目には鈴木商店を金子直吉とともに支えた柳田富士松の邸があった。文教施設も多く、明治27年には神戸女学院が松方邸西隣に創設されている（現神港学園高校）。小寺邸東側には諏訪山・中山手小学校（現こうべ小学校）、トアロード沿いに北野小学校（現北野☆工房のまち）が開かれた。中山手カトリック教会、神戸ムスリムモスクもこの沿道にある。

神戸大空襲、高度成長期、阪神淡路大震災とこの地域にも幾多の時代の波に洗われた。高層マンションが壁のように聳え立つ通りの界隈には、しかし御屋敷街の片鱗がまだ遺されている。

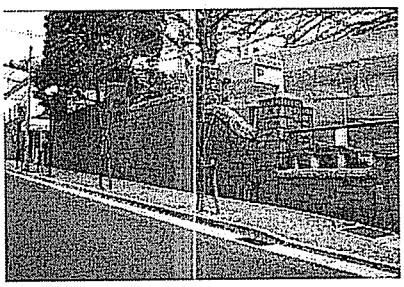
中尾嘉孝（「ドクターフランキー」）
1970年、兵庫区山田町小部生まれ。15の春、近代化遺産の魅力に開眼、以来、学業、部活、本職の合間を縫って、京阪神間のまち探険に勤しむ。
「港まち神戸を愛する会」世話人。
「全国町並み保存連盟」会員。



昭和10年の上山手通界隈
（出展：写真集「神戸100年」）



集合住宅の集会所となっている
旧K邸洋館
（山本通4丁目、明治32年頃竣工）



諏訪山ゴルフセンター時代の旧湯浅邸外構（山本通5丁目、2002年14階建マンションの建設により姿を消した。）

ある駅のホームの上で（1）

蜃気楼

中川　紺

二〇〇一年三月三日、午前十時。

土曜出勤になってしまった。もうこれで連続三回目だ、と思いつつ阪神西宮駅に向かう。低めのヒールがコンコースのタイルの上でカツカツと音を立てる。入社する時に買った革靴は一年使い込んで小さな傷が無数に出来ていたが、履き心地は抜群にいい。

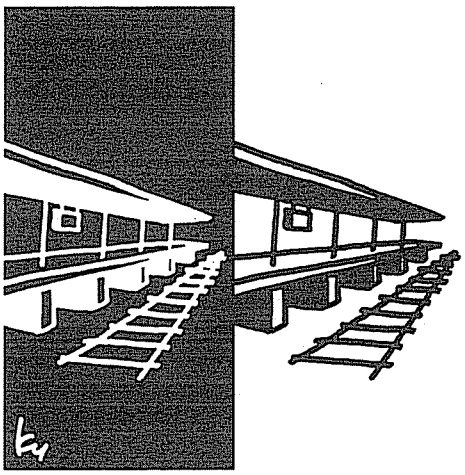
東改札のある二階のコンコースから三階のホームまで、エスカレーターがゆっくりと私を運んでいく。駅舎には工事中の箇所も残っていたが、どこも新しい匂いがした。昨日までは一つ東隣の西宮東口駅から各駅停車に乗る、というのが日課だった。高架工事が完成したことで、東口駅は西宮駅に統合された。

●　●

私は東口駅が結構好きだった。普通電車しか停まらない小さなホーム。高架工事が進んで下り線が先に地上を離れた時は、仮設ホームが高架上につくられた。エレベーターまでついていたけど、やっぱりそれも幅の狭いこじんまりとしたホームだった。そして上り線完成と同時に、役目を終えてしまった。

●　●

下りホームには電車の姿はなかった。今、出たばっかりだ、という雰囲気だけが残っている。人の姿もまばらだった。ホームの東端にある自動販売機でお茶を買う。線路の先に東口駅下りホームの小さな屋根がまだ残っている。残っている、と思って、少し違和感をおぼえた。たしかに駅間の距離はすごく近かった。駅同士が見えるし、歩いても五、六分



程度。でも、ここまで近くはない。今、私が見える東口駅は、徒歩一分くらいで行けそうだ。しかもホームの上に人がいる。五、六人で男も女も混じっているが工事関係者には見えない。何かが変だ、と思っていると、さらに向こうから普通電車の青い車体が近づいてきて東口駅に停まった。

そう、停まったのだ、廃止されたはずの駅に。もう何かが変、ではなく、確実に変だった。停まった電車に、ホームの人が乗ろうとしていた。いすに座っていた一人の女性が立ち上がってドアに向かう。なぜか靴がカツカツと小気味良い音を立てるのが聞こえた。よく知った音とリズムだった。あれは私の、と言いそうになって、言葉を詰まらせた。私の何だというんだろう。ここからは顔も服もはっきり見えなかった。電車がこちらに向かって動きだした。

●　●

電車が発車したのと、「大丈夫ですか」という駅員の声が耳もとでしたのが、ちょうど同時だった。思わず手に持ったペットボトルのお茶を落としそうになってもう一度見ると、さっきまでのホームと電車は影も形もなく、東口のホームは、やっぱりもっと先の方にあった。いつの間にか私の立つホームに各駅停車が停まっていて、特急待ちをしていた。もちろんそこには私の分身が乗っていたりはしなかった。

●　●

昨日まで使われていた東口駅のホーム。私は最後の残像が蜃気楼のように現れたと信じている。

これが私にとっての東口駅最後の記憶だ。

（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地 まちづくり支援ネットワーク・第３３回連絡会報告

テーマ：まちづくりと地域空間像　日時・場所：8月1日（金）18:30～、ひょうごボランタリープラザ

まずコーディネータの三輪康一さん（神戸大学工学部助教授）より趣旨説明があり、ペリーの近隣住区やコルビュジエの輝く都市など多数の空間像を紹介したのち「最近のまちづくりはソフト重視の傾向にある。まちづくりには空間像が必要ではないか」との提起がされました。

報告では、浜田有司さん（都市基盤整備公団）より神戸の景観行政の流れを振り返ったうえで、神戸市景観形成基本計画のストラクチャープランにおける環境型の景観形成（北野山本地区や酒蔵地区など、近景が中心）を中心に取り組んできたことや震災後は景観形成市民協定が主になってきたこと、また課題としては神戸の最大の特徴である眺望型には取り組めてきていないことなどが報告されました。

上山卓さん（コー・プラン）からは、震災後よりまちづくり協議会を結成し、コンサルタントとして関わっている灘中央地区（神戸市）において、クリーン作戦や空き缶回収機の設置など、地域ぐるみで環境に関する取り組みを行っている“エコタウンのまちづくり”の現状の報告と、今後の展望として地域循環型のまちづくりが必要ではないかとの意見が出されました。

井垣昭人さん（神戸市市民参画推進局）からは、神戸市の施策におけるコンパクトシティー及びコンパクトタウンの概念について説明したのちに、１０のモデル地区でのコンパクトタウンづくりの実践例や、これらの比較検討（規模、施設の立地状況など）、実践例から導かれる教訓（地域事務局の重要性、地域団体間の連携、専門家派遣の有効性など）、さらには今後のコンパクトタウンづくりの展望について語っていただきました。

報告をふまえ、森崎輝行さん（森崎建築設計事務所）と大塚映二さん（神戸市垂水区役所）からコメントがあり、「空間像は従来型の単に目に見えるものに限らず、コミュニティーや生活、歴史文化などが関連したものである」などの意見が出されました。

今回のテーマは、短時間で議論が尽くせるはずもなく、次回に議論の楽しみが残ったように思えました。その中でもあえて言えば、地域のまちづくりにおいては何らかの共通するものが必要で、それは従来型の空間像にとどまらず、多様な形があり得るのではないかということが示されたように思えました。（中井　豊／中井都市研究室）

■ 情報コーナー

●第１３回まちづくりｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ会議
- 日時：8月27日(水)13:30～16:00
- 場所：兵庫県立神戸学習プラザ第５講義室（三宮駅前神戸交通センタービル４階）
- 内容：「まちづくり施策・制度研究Ｈ１５」－市街化調整区域のまちづくり、まちづくり総合支援事業、密集法の改正、景観施策総合推進について
- 申し込み期限：８月２２日（金）
- 問合せ：ひょうごまちづくりセンター（TEL.078-367-1263、FAX.367-1264）

●第６５回水谷ゼミナール
- 日時：8月29日(金)18:30～21:00
- 場所：こうべまちづくり会館６階（神戸市中央区元町通４丁目 2-14、TEL.078-361-4523）
- 内容：共同化事業のいろいろ／ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ・武田則明(神戸山手大学教授)（発表内容は未定）
- 会費：１，０００円（学生無料）
- 問合せ：ジーユー計画研究所（TEL.078-251-3593、FAX.251-3590）

●大大特第２回検討会

大都市大震災軽減化特別プロジェクト「地域経済復興支援方策の開発研究」
- 日時：９月17日(水)18:30～21:00
- 場所：こうべまちづくり会館３階（神戸市中央区元町通４丁目 2-14、TEL.078-361-4523）
- 内容：「都市計画事業における商業再生」－新長田地区／久保光弘（久保都市計画事務所）、天川雅晴（ｱｯﾌﾟﾙﾌﾟﾗﾝ）、他
- 問合せ：コー・プラン（TEL.078-842-2311、FAX.078-842-2203）

☆　書籍の紹介　☆

安藤元夫著「阪神淡路大震災 被災と住宅・生活復興」（学芸出版社）

・・・・「被災」「避難生活」「役だった都市ストック」「住宅・生活再建の意向、障害、動向」の状況を４地区の定点観測により徹底検証。2002 年日本建築学会賞（論文）受賞

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http：//web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http：//www.hyogo-iic.ne.jp/~INS93031/

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2003年9月20日発行

月刊 きんもくせい

03年9月号
(50+36+NO. 6)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■「ＮＰＯに代表性はない？と問われて」

中村　順子（ＮＰＯ法人ＣＳ神戸理事長）

被災地発ボイスがまた一つ減ったと「きんもくせい」の休刊を残念に思っていたところ、再発刊のお知らせがありひそかに喜んでいました。一読者として桟敷席から物見気分で拝読していたのですが、前回のリレートーカー中島克元氏からいきなりのご指名は昼寝をたたき起こされた感じです。でもせっかく与えられた機会ですから目をこすり頭をふりふりしながら、のど仏に引っかかっているＮＰＯの代表性についてここで考えてみます。

某神戸市某市民活動支援課某氏いわく、「ＮＰＯを地域の代表とは思っていない。好きな人たちが好きなことを勝手にやっているだけ。行政にモノいうのなら地域の認知をもらって来い」つまりＮＰＯは地域から何の選出行為も受けていない気ままな団体である、地域活動や事業を行うなら地域団体の賛同を得てくること、と言っておられます。ＮＰＯは手をあげれば誰でもできる無責任な団体といった認識をお持ちなのでしょう。

たしかに自治会など地域団体は一定の居住地を共有する住民が何らかのルールに基づいて代表権を得た人々で運営されています。社会の基礎的な集団としての代表性があります。

一方、ＮＰＯのもつ地域性は構成員の国籍・住所など問われることなく事務所の所在地が地域性を証明する程度です。かかげるテーマや関心を共有し結合する機能的な側面が地域性より強調されます。だからと言ってＮＰＯに地域代表性がないといえるのでしょうか。

そもそもＮＰＯの設立目的はボランティア活動など市民が自由に社会貢献活動を行い、公益の増進をはかることにあります。多くのＮＰＯは設立の主旨に従い、高齢者ケア、障害者ケア、青少年育成、環境保全、文化スポーツ活動など身近なところでたくさんの市民サービスを提供しています。サービス受益者はテーマや関心の代表としてそのＮＰＯのサービスを受け、支援しているのです。ＮＰＯ法人だけでも神戸市で約200団体、1団体の受益者、提供者、支援者含め関連者が平均500人としても10万人からの信託を受けていることになります。ＮＰＯは受益者や支援者や供給者が特定の居住地を共有していないだけで、実は多数の市民から代表権を得て活動しているのです。

アメリカの社会学者マッキーバー理論でも明らかにされたように、地域団体が居住地共有のコミュニティ社会とすれば、ＮＰＯはテーマ関心を共有するアソシエーション社会であり、ともに理論的根拠をもつレッキとした集団なのです。行政的視点からみれば自治会のような基礎的集団がもつ居住性と網羅性に強い信頼を寄せるのでしょうが、市民的にみると目的性と機能性に富んだ集団に強い関心を寄せる時代の流れになってきているのです。多様な代表性を認める社会こそ参画と協働を実現できる都市であると思うのですが、某氏いかがでしょうか。

＊　＊　＊

リレー論文、次は某神戸市某市民活動支援課某氏、あなたです。よろしく。

（小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→中島克元→中村順子→）

■まちづくりシステムの研究（２）

久保　光弘（久保都市計画事務所）

８月末、都市環境デザイン会議（ＪＵＤＩ）関西ブロックの都市環境デザインセミナーで話す機会を与えていただき、「住民主導まちづくりは、複雑系」という演題で講演しました。これは、このきんもくせい連載のアウトラインを述べたものです。

この時の内容は、ＪＵＤＩ関西のホームページで掲載していただけると思いますので、ご批判いただければ本稿の論議を深める上で幸いです。

２．「まちづくり協議会」と「まちづくり提案」の２つの制度

震災復興まちづくりの基盤となったのは、神戸市まちづくり条例（正式名：神戸市地区計画及びまちづくり協定に関する条例）であるが、特にこの中の「まちづくり協議会」と「まちづくり提案」の２つの制度は、まちづくりを進める上で骨格的役割を果たした。このことは、震災復興における多くの地区まちづくりでその有効性が実証され、今日、他都市においてもこの２つの制度が普及し始めている。

この２つの制度は、まちづくり制度としてロックインされつつあるといえる。

１）「まちづくり協議会」制度

本論では、「まちづくりの定義」を「市街地形成、コミュニティ形成に関する地区住民等による合意形成組織の活動、及びその活動により計画や市街地の姿へ発現するプロセス」としているが、この「市街地形成、コミュニティ形成に関する地区住民等による合意形成組織」が、「まちづくり協議会」である。

地区の住民、事業者等それぞれ個人が有する事情、利害、考え方等は、千差万別である。まちづくりは、それぞれ異なった個人が原点にある。まちづくりが進行してもそれぞれ事情の異なる個人が基層にあり、何かがある時には、これが利害の問題等として表に現れてくる。

区画整理のような利害を伴う事業においてそれぞれ異なる個人の意向を一つの価値観としての計画に押し込むことは、無理なことである。それでも一つのまちづくり計画として事業化が進むということは、個人が「学習」しながら「折り合い」を見つけていくから、すなわち個人に「適応」が生まれるからである。「折り合い」とは、個人が他者や全体を配慮してできる自立的な妥協である。このような利害を異にする個人どうしが、一つの計画を共有し、折り合っていく土俵が「まちづくり協議会」である。

市街地開発事業やルールづくりを行う協議会の決定は、個人の利害に影響するものであることから、時として協議会の決定の無効性や違法性を問う言動、協議会の否定、協議会と対立する組織化の動向等が現れてくる恐れを内包している。

このため、しっかりした社会的なルール、とりわけ法的な協議会の位置づけと地区の自治を行う上でのルールが必要である。前者については、神戸市まちづくり条例による「まちづくり協議会の認定」としての位置づけがある。後者は「まちづくり協議会規約」であり、協議会設立総会でおいてまず議決すべき重要案件である。

神戸市まちづくり条例に定められている「まちづくり協議会」は、「地区住民の大多数により設置され」、「その活動が地区の住民等の大多数の支援を得ているものと認められるもの」として協議会の多様性に対応できるものとなっている。しかし地区関係者間において利害が発生する協議会では、協議会会員の資格を「住民、事業者、土地建物の所有者等、地区に関わる全ての人々」としないと機能しない。これは地区内に居住しない地権者等が構成員から除外されている自治会とは異なる点である。

まちづくり協議会規約は、通常、名称及び事務局、区域、目的、会員の資格、事業・活動、組織、会議・集会、会計・監査等で構成されるが、とりわけ、「会員の資格」と「会議・集会」の事項は重要である。会員の資格については上で述べた。「会議・集会」に関しては、「協議会規約の決定・変更、役員の決定・変更、会計、まちづくり提案、地区計画や

まちづくり協定等のルールづくりなど、重要な事項を協議会員全員が参加できる総会で議決する」ということを明確に記載されることが必須である。

地区のまちづくり協議会は、協議会規約にもとづき、重要事項を協議会総会で議決する、地区の全ての人々を構成員とした地区唯一の合意形成組織であることが必要である。

２）「まちづくり提案」制度

神戸市まちづくり条例では、「協議会は、（中略）住民等の総意を反映して地区のまちづくり構想に係る提案をまちづくり提案として策定することができる」とし、「市長は、（中略）施策の策定及び実施にあたっては、まちづくり提案に配慮するように努めるものとする」としている。

後藤祐介さんが、きんもくせい 03 年７月号で青木南地区の事例紹介で述べられているように、通常は協議会設立後の実績にもとづき市長がまちづくり協議会を認定し、協議会は市長にまちづくり構想を「まちづくり提案」し、まちづくり構想に基づき協議会と市長がまちづくり協定を締結したり、状況によっては施設整備が行われることが、スタンダードであり、その後、さらに引き続いて「まちづくり提案」が行われることは少ない。

しかし、一般のまちづくりに比べてまちづくりの進展が早い上に、まちづくり課題や町の状況が刻々と変わる震災復興区画整理においては、「まちづくり提案」の様相が異なっている。

まちづくりの原動力は、まちづくり協議会活動である。まちづくりは、協議会活動のその時その時の結果が「まちづくり提案」に発現され、その積み重ねによって計画形成、ルールづくり、市街地整備が進展するという構図として示すことができる。

この場合の「まちづくり提案」とは、まちづくり条例に言う一つのまちづくり構想のみならず、まちづくりに関する重要な事項として協議会総会が議決したもので、且つ行政との共有が必要な事項となる。すなわち、「まちづくり提案」は、協議会が市長に提案した事項であり、幅広い内容を含む。

新長田駅北地区東部の場合、当初の基本まちづくり提案、地区計画提案、シューズギャラリー構想やアジアギャラリー構想のような地域活性化ビジョン提案、いえなみ基準、道路等環境デザイン提案等の計画提案、さらに共同建替や区画整理事業の進捗や状況の変化等に伴って発生する計画変更提案など、多数の計画提案がある。その他、まちづくり組織の変更や新設についての届、いえなみ基準に関する景観形成市民協定、景観形成市民団体の認定申請等、協議会が市長に提案したものまで「まちづくり提案」の概念に含めると、新長田駅北地区東部では、まちづくり提案数が 50 を超えている。

「まちづくり提案」は、地区の総意を示すものであるとともに、住民と行政が共有するまちづくり計画であり、「まちづくり提案」が、「協働まちづくり」における基幹的ツールである。

「まちづくり提案」は、個人の利害のうえに成り立っているだけに「まちづくり提案」を疎かにすると、まちづくり協議会の基盤を危うくしかねない。

そのため協議会は、やむを得ず「まちづくり提案の変更」を行う場合は、総会に変更の理由と変更案を提示し、承認を得たうえで「計画提案の変更」を「まちづくり提案」しており、いわば、住民主体の計画管理が行われている。

これは、まちづくり条例で言う「市長は施策の策定にあたっては、まちづくり提案に配慮するように努める」とは、ニュアンスが異なる。

協議会の諸会議には行政やコンサルタントが常時参加しているが、この場合の両者の協議会への情報提供は、創造的でありながらも垂直的思考（計画・戦略レベルと実行可能性の検討レベルを同時並行的に解決する思考）の観点から十分に行い、「まちづくり提案」とその実行に乖離が無いよう努めなければ、協議会からの信頼を失うことになる。

＊ 報告（Ｉ）～（４）は「きんもくせい」（創刊号～50 号）を、（５）は「論集きんもくせい」第４号を、（６）～（16）は「報告きんもくせい」第３～33 号を参照してください。第２部の（1）は「月刊きんもくせい」第３号です

■『コンパクトシティ』を考える3－世界最古のコンパクトシティ・ローマ市

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

前回に続きコンパクトシティのかたちを歴史から学ぶ。本来ギリシャに続き、ローマを説明し、その後に中世時代となるところ、紙面の都合で順不同になった点はお許し願いたい。

地中海全域とその背後の広大な地域を支配の版図に収めたローマ帝国の発展の鍵は、統治システムのコンパクト性にあったとするのが今回の命題である。

1．コンパクトな『市民共同体』としての民主政システム

ギリシャの民主政の影響を受けて始まったローマの民主政は貴族勢力が強い中での改革で、護民官制度の創出や、高級官職への平民の登用、公訴権の認定、平民会議決法の国家法としての認定など、都市国家ローマの国民である市民の権利を大幅に認めさせた結果である。これにより、ギリシャで発展させた『市民共同体』の概念をさらに発展させて、古代民主主義の到達点に至り、ローマは民主政の最高潮の時を迎えることができた。

民主政は主体者である市民が政治の主導権を握るために、市民の権利と義務の関係を調整し整理しなければならない。この点についてローマは主体者である市民の政治的関与の道を開き、様々な階層の政治的資質と意欲のある者の登用によって、その時代時代のニーズをくみ取り、政治に反映することができた。しかも政治権力の集中を避けるために任期の制限や権限の制約を明確にするだけではなく、老獪な元老院の牽制によるチェック機能を働かせることで、国家体制の均衡をとりつつ都市国家としての持続ある発展を維持することに成功した。すなわち、政治参加の道を閉ざすことなく開放しつつ、一方で大衆化による衆愚政に陥ることのない政治システムのコンパクト性を共和制の時代に長期にわたり維持することができたのである。

2．ローマ市民権の寛大な賦与によるコンパクトな統治システム

ギリシャのポリスは、各ポリスが閉鎖的な市民権により市民を限定する反面、それを補うための植民市建設によるネットワークにより、経済的な成長と発展を獲得した。一方、ローマは戦略的には対立する国や都市とは同盟を結ぶ柔和な手法で、支配領域を拡大するだけではなく、しかも同盟側には平民が苦闘の上確立した市民権を寛大に賦与する方法で、支配領域をローマ市という一つの統治システムの中に組み込む方法であった。このため、敢えてネットワーク型の構造にはせずに、一点集中型のきわめてコンパクトな形式による統治を完成させたのであった。同盟を結んだ地域の市民にローマ市民権を賦与したことで、有能な人間を中心であるローマ市に集め、要職をこなさせ、統治者としての資質を研鑽によって積ませ、執政官や護民官の最高官位の地位に就かせた。こうした開放的な政治システムを採用することで、支配と被支配の差別の感情を抑制し、各地での不穏な動きを自律的に抑えることで『ローマの平和』を効果的に維持することができたのである。

このために機能したのが、全ローマの支配地に張り巡らされたローマ道というネットワークされた高速道路の建設であった。不穏な動きは、高速道路を疾走する早馬で、数日内にローマ市に伝えられ、拠点となった軍隊の駐屯地から重装歩兵の部隊が駆けつけ、圧倒的武力で早い段階で沈静化し、重大な局面へは発展させなかったのである。

しかし、民主的政治システムのコンパクト性も、絶え間ない戦争に勝利し、領地の拡大と交易の拡大による繁栄を築く中で、均衡を失い、政治権力を巡る内乱が起こり、終局的には終身独裁官、皇

帝の権力の集中化による政治システムへの変化で解決したのであった。つまり、膨張し続けるためには、中心には強力な核となる長期独裁の皇帝という権力構造に造り替え、周辺部への求心力を維持することが必要となったからである。

帝政化したローマはその後も繁栄を続け、長期にわたる『ローマの平和』を謳歌した。それが実現できたのも、皇帝が進んでローマ道の建設やローマ水道の建設などの公共基盤の建設に、権力による集中で得られた資産を投入したからでもある。皇帝は、第1の市民（プリンケプス）であるという姿勢を形式的に残した底辺には、ローマ帝国になっても『市民共同体』であるという命題を追求したからでもある。

3．ローマ市は世界最古のコンパクトシティ

ローマが帝国になって最盛期を迎えた紀元1世紀頃に、首都であるローマ市には８０～１２０万人の人口がいたのではないかと推測されている。当時世界最大の人口規模の都市になった。

４～５km 四方しかない城壁の中に、百万人を越える人口の大半が居住していたとすれば、かなりの高い人口密度（４００～５００人/ha ）に計算上なる。一般市民は３～４階建てのアパートに住んだ。

高密度の生活を可能にしたのは、ローマ市内に整備された共同利用を前提とする公共施設の整備が行き届いたためである。公共施設の中でも、特に水道の普及が重要であった。ローマ水道の約６割が市民への供給用に使われ、各街区に設けられた共同水槽で、無料で水を配布した。共同水道までは、建物から遠くても７０～８０m歩けば到達できた。しかも、水質に対しても十分な対策が随所で実施され、市民は清潔な水を飲み、清潔な水で料理することができた。また。市内に何カ所もある公衆浴場にいけば非常に低料金で毎日のように入浴でき、身体も清潔に保つことができた。これらは衛生対策としても効果があり、疫病の防止に役に立った。悪疫流行も、ローマの歴史の長さから比べれば、驚くほど少ないといわれている。病気の治療より、予防を国家規模で成し遂げたのである。

市内の各地に設けられた公共の建物、市役所、選挙場、市場、体育場、競技場、劇場などの政治、経済、文化施設は全てが歩いて行ける範囲にあった。しかも、「パンとサーカス」と呼ばれた毎月配給される小麦による最低の生活保障と、元老院階層の富裕者からの劇場や競技場での催しの市民開放で、市民生活の豊かさを満たした。

これらのコンパクトな都市生活は、中心都市であるローマ市に限られたわけではなく、ボンペイの遺跡からも明らかのように、ローマ帝国内の一般の都市であっても可能であった。それは各地に現在も残る水道施設が物語っている。

ローマは全てにおいて、多様さを尊重するより、コンパクトさを追求した。ローマの市民権の賦与、支配地域に張り巡らせたローマ道、ローマの金貨や銀貨の流通、人間や商品の自由な移動、言葉はラテン語とギリシャ語を共通言語として話され、共通の成文法としてのローマ法が、公共財としてのインフラベースとなったのである。こうした統合化によって、あれほどの広大な世界を統一することができた。ローマ市はその中心の核として、あらゆるシステムの集合体を形成しなければ成らず、そのために都市空間をいかに効率的で高密度に利用するかという命題に対応した世界で初めてのコンパクトシティを実現したのである。

＜参考文献＞

本論は全般的に、塩野七生氏の大作『ローマ人の物語』（新潮社刊）を参考とした。ローマ道や水道の詳細は、第X巻「全ての道はローマに通ず」（2001年）を参照してください。

■震災復興で加速する企業と地域の新たな関係を考える

加藤　恵正（神戸商科大学）

■地域社会の繁栄をめざす世界企業
―Procter & Gamble Far East, Inc. 神戸市東灘区―

全世界に従業員 10 万人余を擁する巨大企業 P&G は、神戸市東灘区六甲アイランドに日本本社・テクニカルセンターを有している。本社だけでも 1700 人を超える従業員がここで勤務しており、このうち外国人は 350 名にのぼる。なぜ、P&G は六甲アイランドを拠点として選んだのか。交通のアクセシビリティの高さ、良好な住環境、神戸の「イメージ」といったことが指摘されている。P&G の企業方針声明書は「我々は、世界の消費者の生活を向上させる、すぐれた品質と価値をもつ製品とサービスを提供する。その結果、消費者は我々にトップクラスの売上と利益伸張、価値の創造をもたらし、ひいては社員、株主、そして我々がそこに住み働いている地域社会も繁栄することを可能にする」と言明している。実際、1996 年に P&G 日本本社は、「神戸まちづくり六甲アイランド基金」を積水ハウスと共同で設立した。当初、両社からの１億７千万円の信託財産でスタートしたが、その後両社の追加信託やその他の寄付で現在では７億５千万円の基金を有するまでになった。この基金からは、毎年まちづくり活動への貢献にたいし助成が行われ、たとえば「コミュニティ・ライブラリー」などへの支援が行われている。この他、同社のビルの一角を市民ギャラリーとして開放したり、カナディアン・アカデミーへの支援なども行っている。また、震災を契機に自治会、企業、学校など六甲アイランド内の活動主体で作られている「地域振興会」にも参加し、地域コミュニティの一員として積極的な活動を行っていることは注目される。

ビジネスが加速度的にフット・ルース化し、地域がますます slippery（つるりとすべる）になるのにたいし、企業が魅力を感じる sticky（粘り気のある）な地域づくりは喫緊の課題と言わなければならない。21 世紀の都市ビジネス環境は、情報化とグローバリゼーションの裏側にある社会環境のあり方に大きく依拠することになる。個性的で比較・競争優位を有する社会環境の形成は、世界的な競争に入りつつある現下の状況においてきわめて重要と言わなければならず、それは企業と地域の協働による成果ということになるのだろう。

■都市文化の醸成こそが企業の存立基盤
―㈱フェリシモ　神戸市中央区―

「まちの『気配（文化）』の醸成こそが、フェリシモの存立基盤です。」矢崎社長は震災後の企業としての歩みを振り返りながらこう指摘している。カタログ通販大手のフェリシモは、1965 年創業。現在、海外の事業所を含め従業員 1,000 名余を擁する。

震災直前の 1994 年末に本社を神戸朝日ビルに移転することを決定していた。その時の神戸のイメージは、「古いものと未来的なものが自然に溶け合っていて、東洋でも西洋でもない文化・雰囲気」であり、フェリシモが目指す「人生や生活を提案して販売する」という企業理念に合致するものと感じていたという。95 年の大震災で迷いもあったが、神戸に移転した。神戸の価値を作り出しているのは、生活文化の主役である女性であり若者である。しかし、震災後はその復興の過程で神戸固有の文化が薄らいでいるのではとの危機感もある。

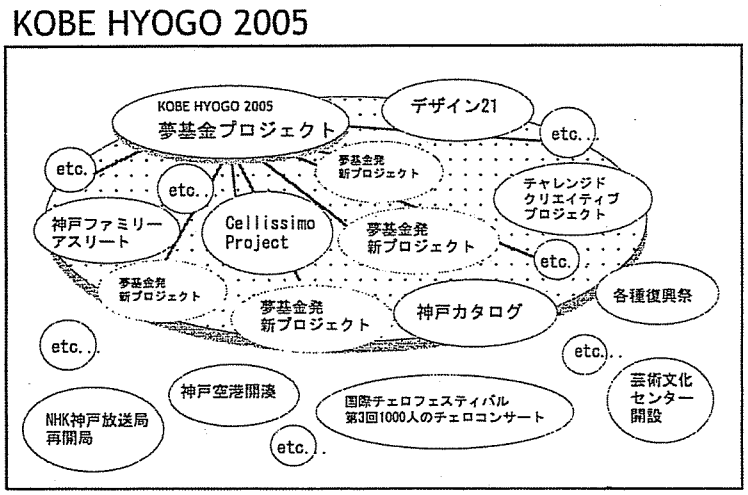
フェリシモの企業哲学は、「事業性」「社会性」「創造性」が融合した部分に企業としての存立基盤があるとの認識である。早くから地球規模の社会貢献活動の実績がある。たとえば、国内外に 150 万本の植樹実績のある「フェリシモ森基金（1990 年から）」、NGO 等との共同でルワンダ難民緊急食料支援などを行っている「フェリシモ地球村基金（1993 年から）」、さらに 2003 年からは「チャレンジド・クリエイティブ・プロジェクト」に取組んでいる。これは、社会福祉法人プロップステーション、兵庫県、神戸市との連

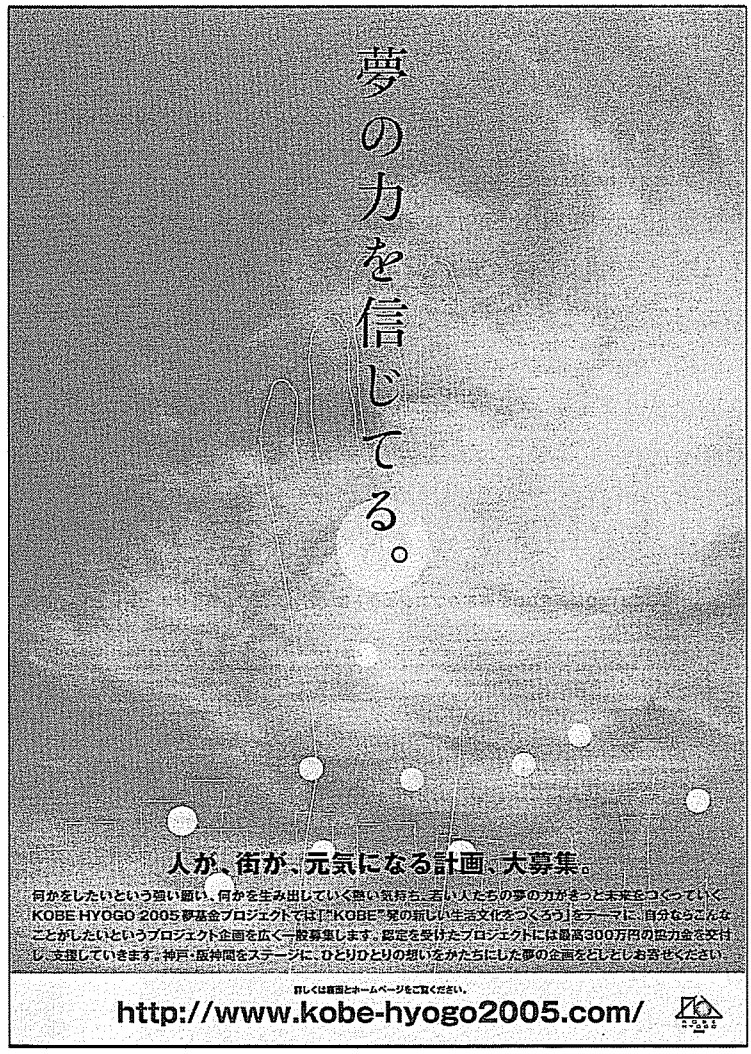
携のもと、小規模作業者や授産施設の製品や企画を、フェリシモの「プロの目」で厳選・支援しながら販路確保をしようとするものである。震災前から行ってきた同社の社会貢献活動は、こうした地域社会と大きな接点を現在持ちつつあるように見える。こうした活動は、震災復興過程でのフェリシモの姿勢と関わっているのだろうか。

震災後、フェリシモの顧客からの義援金（たとえば、８千円の商品購入者から１万円送金があり、２千円は復興に役立ててほしいといったケースなど）が４千万円になり、これに企業としての寄付金を加え、合計１億円を日本赤十字社から神戸市に寄附したことが最初である。この後、長期的な視点での復興支援という点から、通販利用者と連携した義援金「毎月 100 円義援金」、ニュースレター「もっと、ずっと、きっと」の発行などを続けた。

現在、この「毎月 100 円義援金」による４億円の寄附のうち、被災地やボランティアへの支援の残余額７千万円を充て、「KOBE　HYOGO　２００５」プロジェクトをスタートした。「公益性・公共性の高い生活者主導による神戸スタイルの生活文化創造を促す」ことを目的としたこの事業は、都市文化の醸成こそがフェリシモの存立基盤とする企業理念と次世代都市経済のあり方が巧みに呼応することで、行政・研究者など地域の多様な主体とのパートナーシップによって推進されている。

戦略的フィランソロピーは、現代企業の行動を読み解く重要な概念である。社会的目標と経済的目標に同時に取組み、企業の有する独自の資産や能力を提供することで、企業と社会の双方がメリットをうる。フェリシモの地域への姿勢は、こうした視点から理解すべきなのであろう。フェリシモの戦略的フィランソロピーが、被災からの復興途上にある神戸の都市イノベーションと連動することに期待したい。





KOBE　HYOGO　2005　夢基金プロジェクト　募集チラシ
（第１期受付期間：2003 年 2 月 1 日～5 月 31 日）

■菜の花プロジェクト顛末記（その３）

大塚　映二（神戸市）

失敗の数々と救いの神

国土交通大臣賞受賞の決め手ともなった菜の花プロジェクトであったが、プロジェクト推進者の中に誰一人として菜の花を育てたものがいなかったゆえの失敗も数多かった。むしろ、失敗の連続だったかもしれない。が、それをカバーしてくれた神々も現れ、結果として大成功となった。

今回は、焦った場面と救いの神について振り返ってみる。

そもそも、菜の花の種をどこで仕入れて、いつ蒔くのかさえ知らなかった。そこで、わが町の地域活動で知り合った神戸市公園緑化協会の係長に一から聞いたのだが、それが９月の末。蒔き時は遅くとも１０月中とのこと。現地はというと「花咲じいさん」に出てくる意地悪じいさんの畑状態。ともかく背丈ほどの草を刈り、ここ掘れワンワンとがれきを撤去し、耕すしかないが、時間がない。人海戦術であった。まちの方にとにかく助けてと呼びかけ、初動期をかろうじて乗りきった。「大塚さんは人使いが荒いのう。」というのがまちの評判になった時期である。

次に、苗床に種は蒔いたが、急激な冷え込みで１～２週間が過ぎても芽が出ない。これには正直、真っ青になった。火でもおこすかとマジに考えているところへ、がれきばばあこと天川佳美さん登場。「芽が出なくて困ってるんじゃない？布引ハーブ園で菜の花の苗を育てていて、一部分けてもいいって言ってるから、話を通してあげる。」飛びついた。早速お願いして3500 株を分けていただいた。でかすぎる！見事な苗であった。高畑園長は山の神様かと思った。

さて、ハーブ園の苗を必死で植え付け、蒔いた種も何とか芽が出てきたころ、今度は水やりをどうするかという難問が。そもそも水栓がない。これは近所の方に窮状を訴え、正直に水やりの世話を頼んだ。幸いなことに、いつくかの畑は、水やりをやっていただける方が見つかった。近くの保育園児たちまでが手伝ってくれた。土の善し悪しももちろんあるが、この時期の水やり管理が後々の成長に大きく影響したように思っている。それと、雨男たる大塚の自慢になるが、実にいいタイミングで雨が降ってくれたような気がする。降りしきる雨中の作業も結構やったのだからまさに雨男ではあったのだが、水やりについては、天の神が味方してくれたのではないだろうか。（何事も考えようである。）

ほかにもおおぜいの方々に助けられながら、菜の花プロジェクトは進んでいった。自然との闘いと言うほど大げさじゃないが、数万本という花を育てるので、油断したら時機を失してしまうという危うさを乗り切れたのは、みんなのおかげであった。

（次回は、書き手が＜菜の花ディレクター＞の小林健氏に替わります。）



人海戦術によるがれき撤去作戦(2002.11)



小さな種をていねいに蒔く親子(2002.10)

ある駅のホームの上で（2）

引っ越し

中川　紺

カナはずっと機嫌が悪い。先週末に神戸に引っ越してきてから、八つ当たりとだんまりの繰り返しである。機嫌をとろうとした両親が近くの動物園に連れて行っても、パンダやアシカを見てはしゃいでいたのもつかの間、園を出るとあっと言う間にいつもの調子に戻ってしまった。

●●

事のはじめは犬のダイスケを新しいマンションでは飼えなくて、西宮の祖母の家に預けてきたことである。

もちろん、もう小学三年生になっているカナは西宮と今の家がいつでも会いにいけるくらいに近いことは知っていた。でも前の学校の友達と別れる上にダイスケとまで離ればなれになるショックは結構大きかった。しかもそれは父親の仕事の都合で一方的に決められた。でもそれは仕方ないことだとカナには分かっていた。今は、一度怒ってしまってから引っ込みがつかなくなった、というのが正直なところだった。本当は動物園だってかなり楽しかった。夏休みが終わってからの新しい学校も早く行きたいし、近所の商店街の店先の「神戸御影アイス」も食べてみたかった。

●●

母親がカナを買物に誘った。電車で数分の三宮に行こう、というのである。渋々ついて行くカナは駅の前で足をとめた。初めて見るＪＲ灘駅の正面の壁にある大きな飾り窓に心を奪われていた。カナの通っていた小さな木造の小学校の玄関にも似たような大きな窓があった。



（なんだか似てるぅ）

と声に出さずにつぶやくカナに母親は百円玉を一つ渡した。三ノ宮までの六十円の切符を買うと一番駅員に近い改札を通って中に入った。ホームまで、一旦階段を上がってから下りなければならなかった。階段の手すりが木で出来ているところも前の校舎を思い出させた。カナは必要もないのに手すりをずっと撫でながら上がっていった。そうすると休み時間が終わって教室に戻っていくような錯覚をおぼえた。下りホームに着いたカナは前方に不思議なものを見つけていた。それはコンクリートのホームの上にヤシの葉が生えているような風貌だった。

「あ、ソテツっ」

駆け寄ったカナの前には、三メートルほどの小振りなソテツが生い茂っていた。

「ねえお母さん、学校にあったよね、これよりずっとおっきなソテツ。あそこでぐるぐるまわってエリちゃんたちと鬼ごっこしたんだよ。これソテツの子どもかなあ」

久しぶりにうれしそうに話すカナの顔を見て母親は思わず「じゃあカナと一緒に引っ越してきたのかもね」と言う。

「そんなわけないよ。歩けないんだもん」

と鼻を少し上に向けてえらそうに言い返したカナはソテツに向き直って続けた。

「時々会い来てあげるね。そうだ、ダイスケにも会いにいかなくちゃ。それからエリちゃんに『こっちにはパンダがいて駅にソテツがあるよ』って手紙書こうっと」

そう言いながらカナは飽きもせずにソテツのごつごつした茎と力強く伸びた葉を見上げていた。

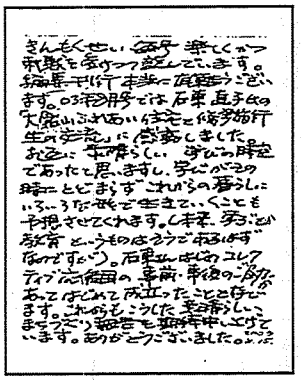
（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■読者からのおたより紹介

横浜市にお住まいの御舩哲さんからお便りをいただきました（８月１５日）。ご紹介します。

「きんもくせい、毎号楽しくかつ刺激を受けつつ読んでいます。編集、刊行、本当に有り難うございます。０３年８月号では、石東直子氏「大倉山ふれあい住宅と修学旅行生の交流」に感動しました。お互いに素晴らしい学びの時空であったと思いますし、学びがその時にとどまらず、これからの暮らしにいろいろな形で生きていくことも予想させてくれます（本来、学ぶとか教育というものはそうであるはずなのですが）。石東さんはじめコレクティブ応援団の事前・事後のご尽力があってはじめて成り立ったことと存じます。これからもこうした素晴らしいまちづくり報告を期待申し上げています。ありがとうございました。



■ 情報コーナー

●“ひょうごまちづくりセミナー2003”「まちづくり:地域住民とNPO」
・日時：９月25日(木)13:30～17:00
・場所：県立神戸生活創造センター パフォーマンススペース（JR 駅前 神戸クリスタルタワー４階）
・内容：
<第１部 基調講演:地域まちづくりとNPO>／立木茂雄(同志社大学教授)
<第２部 活動紹介とディスカッション>
コーディネータ：立木茂雄、パネリスト：野崎隆一（（特）神戸まちづくり研究所理事）、丸山好一（（特）北はりま田園空間博物館代表）、宮定章（阪神・淡路大震災まち支援グループ まち・コミュニケーション）
・参加費：無料
・問合せ：（財）兵庫県まちづくり技術センター〔ひょうごまちづくりセンター〕（FAX.078-367-1264）

●阪神間倶楽部・第４回
・日時：９月27日(土)13:30～
・場所：六甲山上／六甲オリエンタルホテル「風の教会」（六甲山上へは、六甲オリエンタルホテル行きの無料バスあり（定員28名）－JR六甲道12:00、阪急六甲12:05）
・内容：谷口良平さん（阪神ホテル）による、六甲山をこよなく愛したイギリス人・グルームについての解説＋オルゴールの調べ
・会費：３，０００円（デザートブッフェ付き）
・問合せ：まちづくり（株）コー・プラン／天川佳美（tel.078-842-2311、fax.078-842-2203）

●阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第３４回連絡会
・日時:10月10日(金)18:30～21:00
・場所：こうべまちづくり会館６階（神戸市中央区元町通４丁目 2-14、TEL.078-361-4523）
・内容：「まちづくりのマネージメント」、コーディネータ：小林郁雄（コー・プラン）
・問合せ：ジーユー計画研究所（TEL.078-251-3593、FAX.251-3590）

●やったぞー！阪神優勝!!
「阪神リーグ優勝・祝勝会・2003」
・日時：９月23日（火・祝）17:00～
・場所：茶店きんもくせい
・会費：２、０００円（持ち込み、寄付など大歓迎）
・問合せ・申し込み：まちづくり（株）コー・プラン（tel.078-842-2311、fax.078-842-2203）
※準備の都合上９／２２（月）までによろしくお願いします。



● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www.hyogo-iic.ne.jp/~INS93031/

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2003年10月20日発行

月刊 きんもくせい

03年10月号
(50+36+NO. 7)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■『21世紀の商売人･･･地域に何が貢献出来るねん！』

海崎　孝一（甲南本通商店街振興組合理事）

毎度!!甲南本通商店街の海崎です。

突然のリレー投稿代打指名、それも天下のＣＳ神戸中村理事長の後なんて『恐れ多い！』と大プレッシャーの中で一言！

地域商業者である我々甲南本通商店街は『地域に何が貢献出来るねん！』を合言葉に現在地域活動を行なってます。

去る９月１６日～１０月１３日の約１ヶ月間、１４０万円の予算を掛け『子育て支援事業＝甲南キッズスクエア』を行政、民生委員、婦人会、コープこうべ、ボランティア、保育のプロの方々と協働で実行委員会を立ち上げ行ないました。

最初『商店街で子育て？→うさんくさい』と言われてたのが日を追うごとに参加者が増え後半は入れないくらい大盛況になりました。

ソフト内容が良かったのはもちろんでしょうが、母親とコミュニケーションが取れてきて信用されてきたからだと痛感します。(やっぱり最後は人間関係､信頼関係ですよねえ！)

このように『商売人が動く＝うさんくさい』と言う図式を少しでも払拭していきたい。

我々がやっている活動はまさに『ＮＰＯ活動そのもの』と痛感し、また地域商業者が生き残れる道は『地域とのつながり』しかないと思います。

しかし根本は『人が好き、生まれ育ったこの甲南が好き、甲南が賑やかなまちに成って欲しい』と一住民としての切なる願いだけです。

その為にも今ある商店街の資産、ネットワークをフルに使い『地域貢献→まちづくり』を今後も行なっていきたいと思います。

商売人が行なう地域(ＮＰＯ)活動どう思われます？

神戸市市民活動支援課某氏、如何でしょう？

＊　＊　＊

リレー論文、次は某神戸市某市民活動支援課某氏、再度あなたです。よろしく。

(小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→中島克元→中村順子→海崎孝一→)

9月号の中村さんの指名に神戸市某氏は「議論の続きはいやだ。11月号に新しくいいのを書くから。」と東灘区甲南本通の海崎さんを指名代打に推薦されました。海崎さんにご無理をお願いしました。ありがとうございました。(小林郁雄)

「ＪＲ網干駅前まちづくり協議会」の紹介

－“ハード”の目的が特化した協議会－

後藤　祐介（ジーユー計画研究所）

はじめに

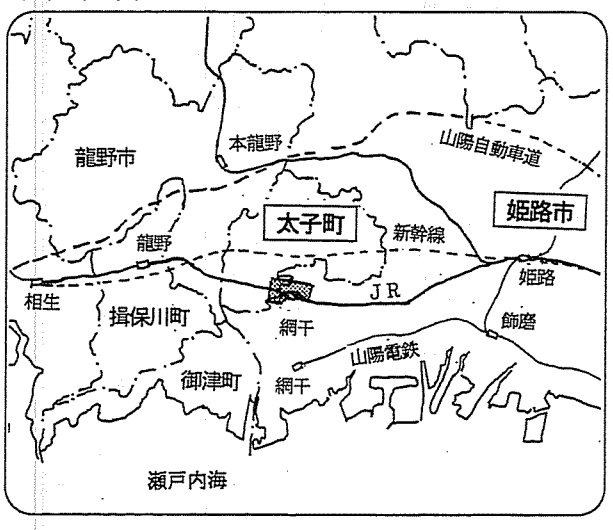
ＪＲ網干駅前まちづくり協議会は、現在私が支援している協議会のうちの非震災地域における協議会の一つであり、近年、“ソフト”な内容を主目的に取り組むことが多い中で、この協議会は、ＪＲ網干駅周辺の都市計画道路、駅前広場、区画道路の整備と言った“ハード”な内容を主目的としたまちづくり協議会である。今回は、このように古典的とも言える“ハード”を主目的とする現在進行型のまちづくり協議会を紹介する。

１）姫路市と太子町の２行政区に跨がる協議会

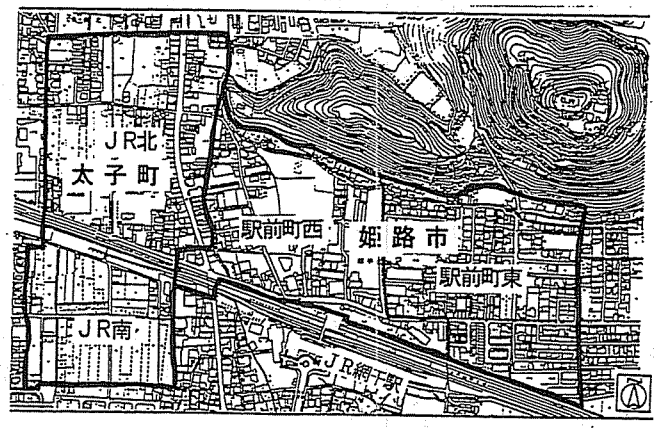
このまちづくり協議会の区域は、ＪＲ網干駅周辺の約 28.5ha であるが、姫路市と太子町の２行政区に誇っている。これは、まちづくり協議会の立ち上がる“きっかけ”が、ＪＲ網干駅前の都市計画道路、駅前広場、区画道路等の都市基盤の整備を主目的とした公共性の高い行政需要に端を発し、行政の呼びかけに応じ地区住民が“我がまちの街づくり”に立ち上がったと言う経緯によるものであり、平成４年 11 月に「ＪＲ網干駅まちづくり協議会」として、まちづくり協議会を設立し、現在も両行政の支援を得つつ運営されている。

このようにまちづくり協議会の立ち上がりの“きっかけ”は、行政先導型の“良くわからないが行政の推めだから協力しよう”と言うことで約 10 年前に立ち上げられたらしい。

○位置図



○ＪＲ網干駅前まちづくり協議会区域図



２）コンサルタントの交代要員として登用される

私がＪＲ網干駅前まちづくり協議会のコンサルタントとして登用されたのは、平成 12 年８月の第８回定期総会の時点からである。

私自身の知らないことであるが、それまでの８年間に何人かのコンサルタントが交代してきたらしく、私もその１人である。コンサルタント稼業をしている私にとって、コンサルタントの交代要員として派遣されることは“明日は我が身”と思えば背筋に寒気を感じるものがあったが、まちづくりコンサルタント稼業は、もともとしがない受注産業で、注文(指名)があってはじめて“仕事”になる訳であり、この場合は“止むを得ない”と引き受けることにした。即ち、私にとってＪＲ網干駅前は、初めての“地区”であったが、単に交代要員として兵庫県や隣接市の関係部所担当者からの紹介があったことによる。

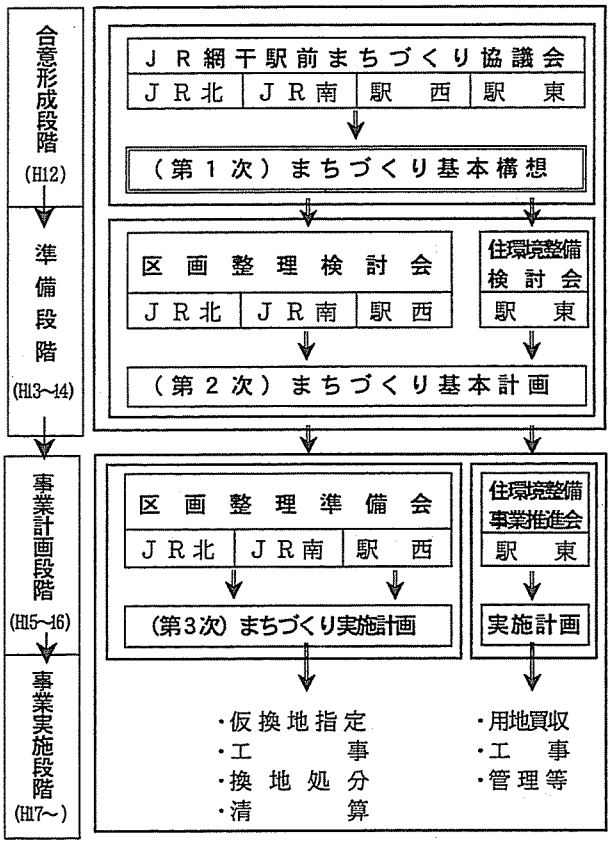
３）段階的合意形成手順を提案

既成市街地の“ハード”なまちづくりにおいて、都市計画道路や駅前広場、区画道路の整備を促進することは各個人にとって、大切な「財産」及び「生活」≒「人生」の改変を伴うことであり、賛成もあれば反対もあり事業の推進は一般に極めて難しい。これを、“住民主体のまちづくり協議会”で進めて行く事は容易ではない。このような“ハード”を主目的とするまちづくり協議会が立ち往生し、コンサルタントが何回か交代することも止むを得ない。苦節８年を経過したまちづくり協議会の交代要員として私が登用され、最初に考えたことは、協議会の「停滞」を避け、段階的に着実に進めていくことが肝要

と思い、下表のようなまちづくりの進め方の手順を提案した。

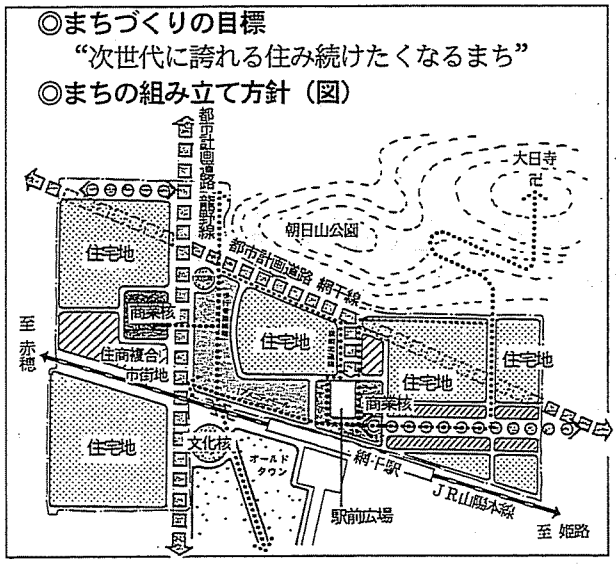
即ち、まず合意形成段階で、まちづくりの“共通のビジョン”を全住民と行政で共有する（第１次）まちづくり基本構想を作成し、次に、事業準備段階として、(第２次) まちづくり基本計画を作成して行くこととした。

○ＪＲ網干駅前まちづくりの進め方



4）(第１次) まちづくり基本構想の提案

第１次まちづくり基本構想は、約１年間をかけ、アンケート調査や説明会、役員会を重ね、以下のような内容で地区住民の“共通のビジョン”として合意形成の集約を図り、行政に提案した。



5）まちづくり協議会の組織体制づくり

(第２次)まちづくり基本計画の策定にあたっては、区画整理事業のような具体的な事業手法や事業区域及び主な公共施設の配置計画等について合意形成を図るため、次のように組織体制づくりを図った。

ＪＲ網干駅前まちづくり協議会の組織強化

正副会長会（５人）	⇔	相談役（13人）

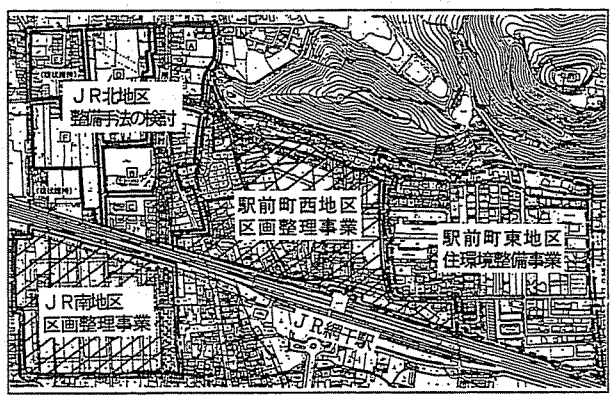
幹事会（47人）

区画整理検討会（約360人）			
太子町		姫路市	姫路市
ＪＲ南地区 区画整理検討会	ＪＲ北地区 区画整理検討会	駅前町西地区 区画整理検討会	駅前町東地区 住環境整備検討会
・部会長：1人 ・副部会長：1人 ・委　員：15人 ・構成員：約40人	・部会長：1人 ・副部会長：1人 ・委　員：44人 ・構成員：約180人	・部会長：1人 ・副部会長：1人 ・委　員：24人 ・構成員：約140人	・部会長：1人 ・副部会長：1人 ・委　員：14人 ・構成員：約450人

6）(第２次)まちづくり基本計画の合意形成の集約

平成 13 年９月の組織体制づくり後、約２年間地区別協議(個別協議を含む)を重ね、下図のような(第２次)まちづくり基本計画(方針)について地区別に合意形成を図り、去る平成 15 年９月の第 11 回総会において集約し、両行政に提案することとなった。

○（第２次）まちづくり基本計画（方針）提案図



7）おわりに：ＪＲ網干駅前まちづくり協議会の今後

“ハード”事業を主目的とする当まちづくり協議会にとって、今後、区画整理事業推進の合意形成が出来た地区は区画整理準備会へ、出来なかった地区は住環境整備検討会へと、それぞれ地区別に組織体制と協議内容を進展して行く予定である。

即ち、目的とする“ハード”事業の実施に向けて、まちづくり協議会は一旦役割を終え(解散し)、例えば区画整理準備会、推進協議会へと組織の改変を進めていくことになろう。

■「まちづくり」という幻想

第29回 都市公団まちづくり研究会 2003年7月23日／講師・宮西悠司

小倉　一平（都市公団）



宮西悠司氏

「まちづくり」とは、現在多くの場所で使われ、耳にする言葉であり、公共公益施設を建てることから住民主導の種々の活動まで、その使われ方は多岐にわたる。当然ではあるが、活動しているフィールドも言葉の定義も個々人によって異なってくる。しかし、ゼロからまちを作り出すことを指すのではなく、既に生活者が多く居るまちに対する何らかの活動を指す点は共通しているように思われる。

宮西悠司氏の講演は、30年間関わっている密集市街地・真野地区の「まちづくり」に関わる一連の活動を例に挙げたものであった。密集市街地は生活者が最も密に関わるまちづくりのフィールドである。宮西氏は（1）10年経てば、3回は変わる行政の担当者によるまちづくりの関わり方には限界があること、（2）住民の考えは敷地内を越えにくく地域への要求水準は低いこと、の2点を指摘し、自身の「まちづくり」の領域を説いた。宮西氏の「まちづくり」の領域とは「私的権利と限度ある行政サービスの両方が引っ張り合うなかで生じる隙間である」と。「長い時間をかけ住民へお節介が焼けなければ、まちは変わらないのである。石川賞受賞もここ20年くらい全国的にまちづくりが拡がっていったなかで、条例が整備され、真野地区の住民の活動が認められ、たまたまそこに自分が関わっていた。タイミングが良かったのだ」という言葉にも表れているとおり、隙間へのお節介が複数の活動を生み出し、同一の時間軸上で重なり合うことが、「まちづくり」の推進力となるのであろう。

公団は平成16年7月に新法人へ移行するが、団地の管理や建替など地域住民にお節介を焼く機会はまだ数多く残されている。数haにも及ぶ団地へのお節介は、団地周辺の地域へのお節介でもある。問題はお節介の焼き方である。既存のまちに対して生じている課題、あるいは、まだ表面化されていない潜在的な課題をきっかけとして、「まちづくり」を仕掛ける。仕掛けた後、育てる、つまりお節介を焼き続けるには相当な時間を要するし、お節介である以上は、仕事として割りきれない部分が生じてくることであろう。仕事としてだけで、「まちづくり」ができると思うことは恐らく幻想に過ぎないのである。

宮西氏の出した問いかけに何らかの答えを出していくことに研究会の意義を見出せるのではないかと、ふと講演後思った。どうやら私にもまちづくり狂／狂祖の放った毒（?）が回り始めたようである。

■「ストック×リノベーション」による住宅供給と都市再生

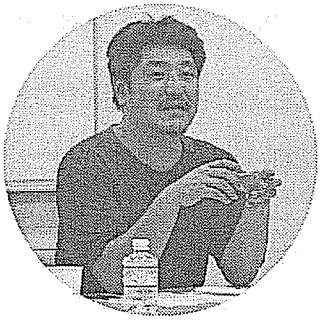
第30回 都市公団まちづくり研究会 2003年8月27日／講師・中谷ノボル

田中　貢（都市公団）

今回の講師中谷ノボル氏（アートアンドクラフトの代表）が次のように論じられています。

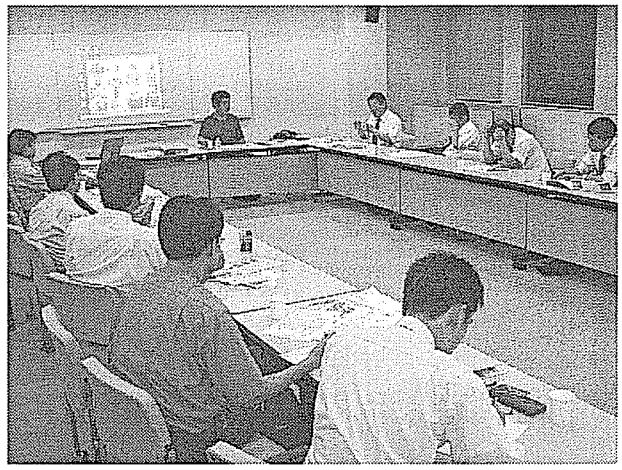
デザイナーズマンションという言葉が99年頃からスタートした。消費者はこんなような家を購入したいと思ってアチコチ見に行ってるわけではない、自分で自分の気に入ったように作りたいとの気があるからである。新築の半額程度でできるデザイナーズマンションも、数がまとまったら事

業性があがり、経営成立するからチャレンジしたいというオーナー（出資者）もでてきだしている。


中谷ノボル氏

最近、「若い世代を中心に衣類・家具・住宅などで新品へのこだわりがなくなった」、「リサイクルなど環境問題からも国が新築から建物再生へ政策を転換し始めた」との情報を聞く。スクラップ・アンド・ビルドを繰り返してきた日本の建物が、これからは安易に壊してしまうのではなく、メンテナンスをして大切に使っていく時代を迎えつつある。これは昨今の経済状況からものではなく、『モノがない戦後』の発展期から約 50 年を経て、ようやく『成熟社会』が到来したという証と考えられる。

これからは経済成長の伸びが期待できず、50～60 代の人が過去に作ったものを 30 代の建築家が改良することで食っていくしかないと思われる。また建物の建替は物理的な老朽化による建替ではなく、むしろソフト（機能）の陳腐化による理由が多い。


当日の講義風景　'030827

私は思う。九州を舞台に活躍している青木茂氏が、『リファイン建築』と称して進めているコンバージョン建物も、その対象物が古いがゆえに、趣きがあり、またその地域における建物の歴史がある。その歴史を感じつつ、それらを少し改良し、部品をつけたりはずしたり、化粧をやり変えたりすることで、全く新しい、新たな機能を発揮する建物として生まれ変わっている。

我々が目標とする「地球にやさしい」、「家計にやさしい」、「人にやさしい」の一環が、このストックリノベーションかも知れない

アートアンドクラフトからのメッセージです

均質化されていない住まいをもとめる人たちへ

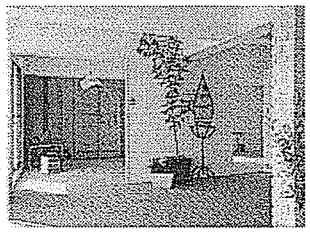
こんなにたくさんのモノがあふれ、選択肢が多様化している時代なのに、「住空間」に関してこだわりを持つ人にとっては
なかなか満足いく選択肢が見当たりません。サイズの合わない靴をはく人はいないのに、ライフスタイルや趣味に合わない部屋しかえらべないのは
とても残念なことです。最大公約数向けにつくられた大量生産の住宅よりも、均質化されていない自分にあった住まいが欲しい。
そう願う人ならば、ただ待っているだけでは決して手に入らないことを感じているはずです。与えられる住まいから、
自分で考え選びとってゆく住まいへ。様々なものがグローバルスタンダード化されてゆくこの時代。
アートアンドクラフトでは、自分の住空間くらいアンチ・スタンダードでいいと考える人たちに、過剰な機能や装飾よりも
自分の価値観を満たす心地よさを求める人たちに、他にはない住まいを創り出すことをテーマとしています。

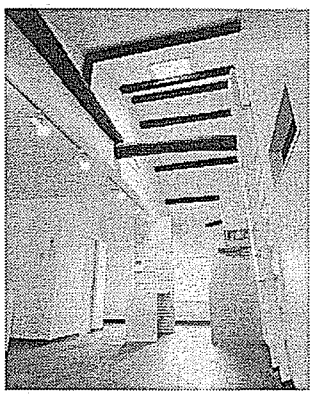
ストックリノベーションという選択肢

戦後の日本は、まだまだ使える建物を簡単に壊しては建替える「スクラップアンドビルド」を繰り返してきました。中でも住宅は
消耗品としての位置づけがなされて平均20余年という短いサイクルで建替えられていますが、欧米では「中古住宅」という言葉がなく、
住宅とは改装（リノベーション）を繰り返して住むことが常識です。特に都心部のストック（既存の建築物）がじゅうぶんに存在する今、
それらをリノベーションすることによって新築よりもはるかにローコストで、しかも自分らしい空間を得ることができます。
また、好立地のマンションやレトロなビルといった魅力あるストックを利用して新築では決して味わえない空間を得ることも可能です。
こうして建築物を消耗品ととらえるのをやめることは、新築時にも次代に引き継ぐ建物をつくろうという好循環を呼ぶと考えます。
アートアンドクラフトでは、住まい手と都心のストック問題双方にメリットのある、この「ストックリノベーション」という手法をおすすめしています。

都心で暮らすということ

「都心は働くところ。郊外は住むところ。」そう考えて、この何十年間かのあいだに多くの人々が都心から郊外へ住まいを移してきました。
しかし、就労形態と家族形態が大きく変化しつつある現在、これまでとは違い積極的に「都心に住みたい」という人が増えてきました。
通勤時間がなくなる、時間を気にせず食事を楽しむ、ふと思い立ってレイトショーに出かける…
そういう都心居住の醍醐味に気づいている方も多いのではないでしょうか。
アートアンドクラフトでは、都心でもっと自由にもっとありきたりでない住宅をもとめる人たちの住まいづくりをお手伝いしています。





「アートアンドクラフト」紹介パンフレットより

■地域商業の再生－「復興都市計画事業と商業再生」について

上山　卓（コー・プラン）

9月 23 日、こうべまちづくり会館において、“地域商業の再生―「復興都市計画事業と商業再生」”をテーマにした第２回大大特（地域経済復興）研究検討会が行われた。

なお、当検討会は今回から、こうべまちづくりセンター・研究ネットワークとの共催で開催されている。

１）事例報告１：新長田駅北地区（東部）
久保　光弘　氏（久保都市計画事務所）



久保氏からは、震災復興土地区画整理事業が進められている新長田駅北地区（東部）における報告が行われ、多くの工場が地区外に転出するなかで、産業復興におけるケミカルシューズ産業やアジア籍混住コミュニティに関する課題とさまざまな取り組みが紹介された。

そして、①区画整理は土地や資金の流動化を促進し、地域産業再構築のきっかけを提供している、②新しいビジョンの「産業観光」はプラスイメージへの転換であり、地域活性化の拠り所になっている、③「空地」は地域活性化の資源であり、安易に建売住宅に転換されるべきでない、④多元的な主体のネットワークが重要である、という指摘があった。

２）事例報告２：新長田駅南地区
天川　雅晴　氏（アップルプラン）



天川氏からは、震災復興市街地再開発事業が進められている新長田駅南地区における報告が行われ、再開発事業により、従来の下町型とは異なった商業空間の再構築が進むなかで、商売を継続・新規参入しようとする商業者に対する家賃補助等のさまざまな手厚い助成制度や、中心市街地活性化基本計画に基づくアーケード事業等の取り組みが紹介された。

そして、これらの取り組みが、商業再生に向けて徐々に成果をあげている一方、問題点として、制度の説明不足や資金力の問題などから出店を断念せざるを得ない商業者がでてきているという指摘があった。

３）講演：中心市街地活性化と新長田ＴＭＯ
田中　道雄　氏（大阪学院大学）

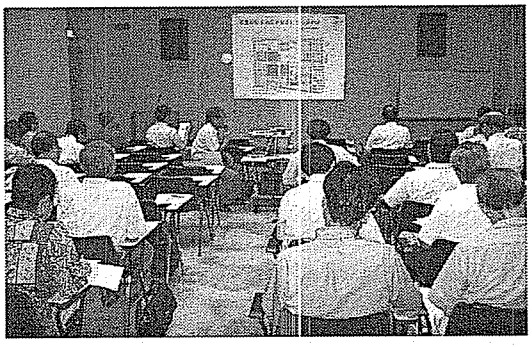


田中氏からは、新長田駅周辺が中心市街地に指定された経緯をはじめ、日本の補助制度の構造的問題や、まちづくりにおける地域組織と人材の課題、商業再生のためのスキルの向上とノウハウの伝達を通じた長期的な取り組みの重要性、新長田地区の置かれた位置づけの中でめざすべき方向などについての講演が行われた。

そして、中心市街地活性化のキーワードとして、メニュー型から「一括型」へ、「説得」と「命令」、「内発」と「移入」、「機能」と「情緒」、一面性から「多様性」へ、「まちづくり（事業）」と「商業（経営）」といった指摘があった。

今後、時間経過による環境変化の中で、地域のマネジメントをつかさどるＴＭＯを中心として、さまざまな人材の活用と南北両地区の連携による継続的なネットワーク事業の展開が重要と考えられる。

また、検討会で出された指摘は、新長田地区に限らず、広く各地域の商業再生に通じるものでもある。



■六甲山の開祖アーサー・H・グルーム氏の足跡について

池田　浩（六甲オリエンタルホテル Sales Director）

◈㈱ホテル阪神専務取締役　谷口良平（神戸市東灘区在住）さんがグルーム氏ゆかりの地を探訪したり調べた足跡を発表。末娘・岸りうさん著作の「グルーム小伝」（昭和48年8月記、21ページ）を中心に、当時の英字新聞や神戸の地図等のご説明を交えて講演。

●概要(項目のみ)

①グルーム氏が初めて神戸に上陸した明治初年当時の、神戸の街の様相と居留地新聞に記載された船客名簿

②日本茶輸出商、オリエンタルホテル経営者としての職歴

③宮崎直(なお)さんとの結婚の経緯と、家庭人としての素顔

④広範な社会活動(居留民社会での世話役としての業績や日本各地で起こった自然災害の際の義捐活動等)

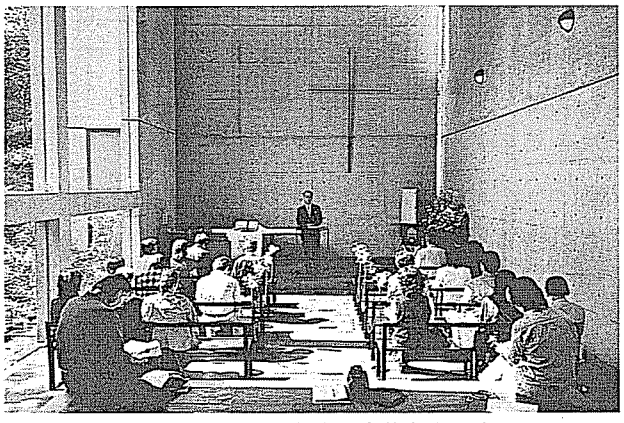
⑤商館と居宅の変遷や六甲山を開いた経緯と緑化活動

⑥大正7年に亡くなった際の様相

●まとめにかえて

今の神戸の街のブランド価値は、「海(港)」と「山」と「ハイカラ文化」の三点セットだと申し上げて差し支えないでしょう。では、もし明治の居留地時代にグルーム氏が神戸に来てなかったら、今ごろ神戸はどうなっていたか？先の三点の中、「海」と「ハイカラ文化」の二つは、たとえグルーム氏が居なくとも実現していたでしょうが、「山」つまり六甲山系の山々は、彼が居なければ、今なお荒れた山肌のところが多くて到底ブランド価値とは申し難い姿にとどまったでしょう。当時荒れ放題だった六甲山の緑化の必要性に、最初に気づいて行動に移したのがグルーム氏です。彼が神戸に居なかったら、その後の六甲山の緑化事業の進展が大幅に遅れていたに違いありません。

グルームさん、緑の六甲山をありがとう。



六甲オリエンタルホテル風の教会（安藤忠雄設計）

◈オルゴールミュージアム　ホール・オブ・ホールズ六甲 館長　高見沢清隆さんによる19～20世紀初めのオルゴールを含む五点の演奏と解説。

ひとは古いものに魅かれたり、遺跡や骨董品、記録などを契機に過去を振りかえる。では音は？音は刹那ゆえ保存できないので、他の媒体に記録し再生する技術が19世紀末に発明されたが、中でもひとの感性や創造力の具現化である音楽はどうか？古い楽器が残っていても演奏するひとの感性は現代のもの。ところが、オルゴールなどの自動演奏楽器は、当時の感性をそのまま再現してくれる。ヨーロッパでは鐘の発展形としてカリヨンが考え出され、その後自動演奏のカリヨン、さらに複雑な音楽表現がオルゴールによって可能となった。音の強弱や複雑な和音、繊細な装飾音、雑音の防止や長時間演奏など、オルゴールを覗くと当時の音楽的技術者の情熱をうかがうことができる。そしてその時代のひとびとの音楽体験を追体験することができる。ホール・オブ・ホールズ六甲は、現代と過去を繋ぐことのできるオルゴールや自動演奏楽器を数多く展示演奏しています。それらの演奏を通じて過去の文化や技術を探ることができる。

＊＊＊

グルーム氏のまいた種が六甲山に育ちて樹々となり、昨年は六甲緑化百年を迎えました。牧野富太郎博士監修の六甲高山植物園はこの春 70 周年、当ホテルも来年同じく 70 周年、Hall of Halls は 10 周年を迎えます。

あの震災以降半減した神戸の観光客数は、ようやく復活したものの、六甲エリアは３割減です。かといって大量集客を受け入れられる施設規模と輸送インフラがあるわけでもありません。やはり、グルーム氏が友人たちと楽しんだ山の生活がハイカラ文化の象徴のひとつであったように、文化芸術のギャラリーを目指すべきではないかと考えています。

六甲山を育てた先人たちの知恵と努力に負けないように、この場所ならではのメッセージを現代アートの表現力によって伝えていきたいです。（池田浩）

阪神間倶楽部　第４回研究会（第６回準備会）の記録

○日　時：2003 年 9 月 27 日（土）13：00～
○場　所：六甲オリエンタルホテル風の教会、ガーデンテラス
○参加者：33 名

■作麼生！スタンダード！2

小野　幸一郎（元まち・コミ代表、雲水／修行僧）

は、と気がつけば前回の原稿を書いてからはや半年が経ってしまいました。その間に御蔵とまち・コミは「防災功労者内閣総理大臣賞」とかいう、すごいんだか何だかよくわからん賞をいただくは、世間では北海道で地震はあるは、衆議院は解散するはで色々のようですが、ま、この原稿の内容には全く影響ございませんですね、はい…。

と言うわけで、あらためてこの連載（ってまだ一回しか書いてないけど）の主旨をおさらいいたしますと、「まちづくりにおけるスタンダードを考える」であります。つまり、「復興まちづくりの『何か』がスタンダードである」ということで、『その要素』がどこまで「一般論になりえるか」ということでありますね。かみ砕いて言えば、『それ』は「フツーの人が当たり前に分かる内容」である、と。

きんもくせい50＋36＋3号（長い…）で久保光弘さんは（ここでの）まちづくりの定義を「市街地形成、コミュニティ形成に関する地区住民の活動、及びその活動により計画や市街地の姿へと発現するプロセス」とされました。定義の内容云々ついては私はそれを語る自信はありませんが、それが何を意味しているのかについては私流に思いを馳せることはできます。ので、そうさせていただきますと、私の頭の中には「格闘」という言葉が浮かぶのです。そして、それこそがスタンダードたるひとつの重要な要素であるように思うのです。言葉を補足すれば「理知的にまちの中で『格闘する』こと」と言えるでしょうか。

復興まちづくりの取り組み全体にはある共通したトーンがあるかと思います。それは感情的・情念的なものにのみに依るのではなく、今何が必要でこれから何が必要かを理性的・現実的に見据えながら事態に対処していくということです。こう書けば「何だ当たり前じゃないか」ということですが、あの状況の中でそのように取り組むことというのはやはりなかなかのことではなかったですか？

まちの中には弱者も強者もいる。借家人も地主もいる。外国人も在日の人もいる。その中でコンサルという「客観性をもった指標軸」が介入することによって、まちにとっての最善の状況を模索する。それを震災によって大半の人が住居を失った状態の中で始めるということは、自ずと感情論や計画論ではおさまりきれる訳がないことは明らかだと思うのですが、その骨太な実情をいかに表現すれば第三者にわかってもらえるんでしょうかね？

それはともかく、問題は「格闘」といっても何の為に格闘するのか、したのかであります。「復興まちづくり」でしたら当然「復興のため」ということになるんでしょうが、ご存知の通り、そいつが色々ややこしい。

何をもって復興とするか？　などというダイモンダイを本稿で論ずるなどはとても恐れ多くてできませんが、復興まちづくりを通して言えるのは、そのビジョンを描くには様々なチャンネルを通しての議論・検討がいるということではないでしょうか。

いまさら、「経済」とは無縁で都市計画を考えるなどナンセンスでありましょうし、福祉・医療・教育などもしかりでしょう。なにより本誌の母体である「阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク」がその証しであるといえます。私ごときがこんな原稿をかかさせていただいてるわけですから。

あの震災から端を発したそのような動きは、21世紀を超えて、今やまさに全国的なスタンダードなものになっていると言えるのかもしれませんが、しかしまだまだ不完全です。

と、書いてそうかと思ったのは、きんもくせい復刊の意義は「スタンダードであることを宣誓する」と言うより「その内容をより完成に近づける」なのかもしれませんね。どうでしょう、小林さん？

ある駅のホームの上で（3）

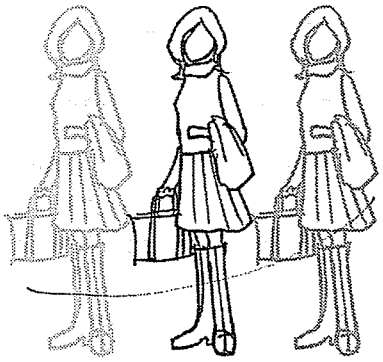
大学生

中川 紺

ホームの上の平均年齢はおそらく二十歳。
（私、いつの間にか、この子たちの倍以上の年齢になってしもたんやわ）
着ているベージュのスーツの襟をなぞると、貴子はふぅとため息をついた。今日が彼女の誕生日だった。四十一回目の。
豊中から神戸の東にある岡本に来たのは、彼女が所属する行政書士事務所の顧客と会うためだった。帰りの電車を待つ阪急岡本駅のホームは大学生であふれかえっていた。集団もいれば一人で本を読んでいる人もいる。
（この辺、大学がたくさんあるからねえ）
といっても貴子は神戸とあまり縁がなく、大学があるということも、今回の仕事の関係で地図を調べて知っている程度のものだった。

●●

十月も終わりに近づいている。貴子の向いのホームにフリースの上着を羽織った男の子が立っている。女の子は、判で押したようにひざまであるロングブーツを履いていた。
しばらく目で学生の服装を追っていた貴子の視界に、明るいレンガ色が飛込んできた。隣にいる、いかにも今時の女子大生のスカート。こんなスカート持っていたかも、と思った貴子の足下にするりと白いものが落ちてきた。あ、という声がしたのと、貴子が手を伸ばすのが同時だった。拾った紙のしおりを渡すと女子大生が軽く頭を下げて言った。
「すみません……あの…スカートに何か？」
「いえ、ごめんなさい、じろじろ見て。昔持っていたのに何か似てる気がしたのよ」



「……そういうことも……あるかも……あの、私の冗談にちょっとだけ付き合っていただけますか？」
「え？」

●●

「こう見えて、私ほんとは実体がないんです。何ていうか、影だけっていうか」
女子大生は柔らかな笑みを浮かべて言う。
なにそれ、と思いながら貴子は電車が来るまでの時間つぶしに付き合うことにした。
「この辺大学三つもあるし、学生が多いじゃないですか。住んでる人も学生の街って言ってますし。それだけの学生が集まると時々エネルギーがあふれて『大学生の影』みたいなものができるんです。それが私。今日はあなたの思い出もこのスカート混ざってしまったみたいですけどね」
「見えるけど存在しないっていうん？」
「そう。名前もなし。そのうち空気に溶けて、いなくなっちゃいます。そういうのがあちこちにいるけど、誰も気づかないみたい」
そう言われると本当に女子大生が、いろんな学生の平均値の影の様にも思えた。
「……ねえ、どうせなら……この次は保久良山の梅に生まれるっていうのはどう？」
貴子も思いつきを返してみる。駅の北にそびえる保久良山の梅林の話は今日の顧客に聞いたものだった。
「じゃあ梅の季節になったら来て下さい」
女子大生がそう言ったときに電車が滑り込み、貴子はそれじゃあね、と乗り込んだ。
変な子、と思いながら振り返ると、女子大生の姿は消えていた。人ごみに紛れたのか、本当に溶けてしまったのか、もう貴子には判断できなかった。

（完）

（イラスト やまもとかずよ）

■ 阪神白地 まちづくり支援ネットワーク・第３４回連絡会報告

～持続するまちづくり－「まちづくり（支援）マネージメント」の事例について～

去る 10 月 10 日、こうべまちづくり会館にて阪神白地まちづくり支援ネットワーク第３４回連絡会が行われました。今回は若手の方からの発表を、ということでまちコミュニケーションの加藤洋一さんとさくらデザイン工房の山本和代さんから発表があり、最後は環境緑地設計研究所からベテランの辻信一さんに締めていただきました。

①長田区御蔵地区／ﾌﾟﾗｻﾞ 5 とまちコミ（加藤洋一氏）

御蔵地区は長屋と路地の町でしたが、震災で 8 割が焼失、現在も宅地の 30％が空き地だということです。震災前から住み続けている住民と”新住民”との交流が地域イベントで大切にされています。古民家移築やプラザ５の建設など、自分たちの手でできることは自分たちの手で、というところが印象的でした。これからの課題として、「造るまちづくり」から「まちの運営」へと変容していく上でまちコミがどう関わっていくのか、だれがどのようにまちづくりに関わるべきなのか、という新たな段階への移行段階について考えていく必要を指摘されました。

②灘区水道筋地区／地域活動支援コーディネーターとまちづくりハウス（山本和代氏）

灘区での 2 つの活動、「灘文化軸　秋の大芸術祭」と灘中央地区の新・まちづくりハウスでの取り組みについて紹介されました。灘文化軸についてはまだ開催されていないので成果についての報告はありませんでしたが、HAT 神戸から王子公園までを結ぶという視点も新鮮でしたが、予算を抑えた中で地域の資源を発掘し、大々的に広報しなくても立ち寄る人をターゲットにしようというのが本来あるべき姿かもしれないと感じました。新・まちづくりハウスでは、水道筋商店街や子育てサークルと協力し活動されています。まちづくりマーケットというイベントで、これからまちづくりに参加してくれそうな人材を見つけるというのがおもしろいと思いました。

③垂水区／生活文化圏の活動支援（辻 信一氏）

生活文化圏の考えに基づき、舞子地区の参加型地図をつくろうというのがすべてのはじまりでした。まち歩きを通じ、地図に載せる地区の見所を探すうち、子供たちにもわかるような手段が欲しいということになり、子供たちの描いた絵札のかるたが出来上がりました。その後、多聞地区でも地図づくりが行われたようですが、地域特性に応じた地図づくりということについて感想を述べられましたが、神戸市の各地区で配布されるハザードマップも本来、このように各地区多種多様な表現があってもよいのではないかと感じました。

※

フロア討論では、住民をまちづくりにどうやって熱心にさせるか、コンサルタントや学生など地域外からまちづくりに関わる人々のスタンスは現状のままではなく、変貌していくべきだ、という内容が話題にのぼりました。（神戸大学大学院生／濱口善胤、藤原祥子、栗延謙）

■ 情報コーナー

●第 12 回都市環境ﾃﾞｻﾞｲﾝﾌｫｰﾗﾑ・関西
「都市環境ﾃﾞｻﾞｲﾝのﾌｧｯｼｮﾝとﾓｰﾄﾞ」
・日時：10 月 25 日（土）9:30～17:00
・場所：ｱｸｾｽ（地下鉄御堂筋線淀屋橋駅 11 番出口すぐ,ｱｸｾｽﾋﾞﾙ３階）
・内容：基調講演 鷲田清一（大阪大学教授、臨床哲学）、セッション（素材、植栽、照明、盛り場）
・問合せ：都市環境ﾃﾞｻﾞｲﾝ会議ﾌｫｰﾗﾑ実行委員会（FAX. 06-6258-7156）

●第６６回水谷ゼミナール
・日時：10 月 31 日（金）18:30～21:00
・場所：こうべまちづくり会館３階（神戸市中央区元町通４丁目 2-14）
・内容：テーマ／「今、区画整理は..」報告／野中保（野中テクニカ研究所）、藤田豪一（都市・計画・設計研究所）、他
・問合せ：ジーユー計画研究所（TEL. 078-251-3593, FAX. 251-3590）

●淡路景観学校 第５回ｱﾙﾌｧ祭 2003
・日時：11 月１日（土）～２日（日）10:00～16:00
・場所：淡路景観園芸学校ｷｬﾝﾊﾟｽ（津名郡北淡町野島常磐、岩屋ポートより無料ｼｬﾄﾙﾊﾞｽ運行）
・内容：テーマ「五楽三昧」、コケ玉市、盆栽展示、草木染め、寄せ植えｺﾝﾃｽﾄ、無料ハーブティ、他
・問合せ：淡路景観園芸学校（tel. 0799-82-3131）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http：//web. Kyoto-inet. or. jp/org/gakugei/kobe/index. htm
◆ http://www1. plala. or. jp/hos_a/kinmokusei_international. html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca. mbn. or. jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2003年11月25日発行

月刊 きんもくせい

03年11月号
(50+36+NO. 8)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■事実を前提とした顧客価値による経営をめざして

某　職員(某市市民活動支援課)

９月号で、CS神戸の中村さんから、私に対し、このリレートークのご指名があったんですが、多忙につき、甲南本通商店街の海崎さんにピンチヒッターしていただきました。海崎さんありがとうございました。

９月号で、中村さんがNPOの地域・市民代表性の話、10月号で、海崎さんが市民参画による商店街経営の話というのを受け、地域社会における表題のテーマについて、ふれてみたいと思います。

11月11日、(特)キャリアアップサポート主催による、企業とNPOの協働を探る「宝探しシンポジウム」が開催され、私も参画しました。そのシンポジウムで見えたことは、「企業の社会貢献に関する、地域社会からの要請は高まっており、NPOと協働することによってうまく応えていくことができないか。」しかし、「現状では、NPOの企業に対するアピールが弱いため、企業はどのNPOと、どう組んでいいのか分からない。」そういう中で、ベンチャー・中小企業の経営者たちが、自らの資源である専門性等を活かして、自分たちでNPOを作ったほうが早いと考えている、ということが読み取れました。「ベンチャー系NPOなど真のNPOに非ず。」という声が聞こえてきそうですが、そのシンポジウムでの共通した意見は、「『経営技術』ということに関しては、企業もNPOもほとんど変わらないのではないか」というものでした。

現在、某市では、経営品質協議会の経営アセスメントの研修を実施しており、職員が「現代の卓越した経営とは何か」ということについて学んでいます。もともと企業用のものですが、行政にも適用できるはずということで、３段階５日間のコースです。行政とNPOは、どちらも非営利組織ということを考えれば、NPOにも適用できるはずです。アセス手順は、ざっとこんな内容です。

１．組織プロフィール記述

①顧客・市場に関する認識　②競争に関する認識　③変革に関する認識　④組織の情報

２．経営品質アセスメント

①リーダーシップ　②社会的責任　③顧客・市場の理解と対応　④戦略の策定・展開
⑤個人と組織の能力向上　⑥価値創造プロセス　⑦情報マネジメント　⑧活動結果

３．アセス時の問いかけ例

事実を前提として経営していますか？　顧客は誰ですか？　組織で勝手に考えた価値ではなく、顧客価値を届けていますか？　価値創造プロセスはどうなっていますか？　組織変革がシステム化され自動的にできていますか？　等々です。

顧客・市場などについての認識が、事実を前提とせず、ずれている組織は潰れるし、経営品質向上に取り組まない組織には成功は無い。ということがいえると思います。このような「事

実を前提とした顧客価値による経営」というのは、今や、企業・行政・NPO すべてに共通のものと考えられています。9 月号の NPO の市民・地域代表性については、個々の持論の話なので異議を唱えるつもりもありませんが、顧客認識と市民社会論をごっちゃにすると、NPO の経営に悪影響を与えないかなという危惧を感じました。また、10 月号での甲南本通商店街における、顧客認識や顧客価値志向については、地域経営の方向性としては、私は同意します。

現在、震災課題の一定の落着きとともに、NPO の存在意義が再度問われる時期を迎え、そのなかで、NPO は、その経営品質をどう向上させるのかが最重要課題になってくると思います。

＊　＊　＊

さて、バトンを次に誰に渡すべきか考えておりましたが、一方的な指名は、私の感覚では非礼なことと考えますので、今回指名しません。事務局において、公募のうえ公開審査していただくようお願い申し上げます。

（小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→中島克元→中村順子→海崎孝一→某市某職員→）

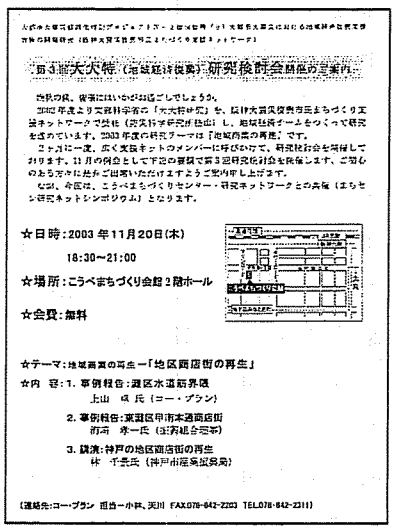
上記、某氏の御提案のように巻頭リレー論文執筆者を公募いたします。「参画協働」に関する自由なご意見を 1000 字程度で 12 月 12 日までに事務局までお寄せ下さい。公開審査はしませんが、なるべく開かれた形で選定掲載させていただきます（事務局）

■地域と NPO と企業　　小林　郁雄（コー・プラン）

企業と NPO の協働を探るシンポジウムについては、神戸復興塾メーリングリストなどにいくつか批判的な論評が寄せられています。神戸市某風月斎氏の指摘する NPO の「経営品質」への危惧には、同感します。

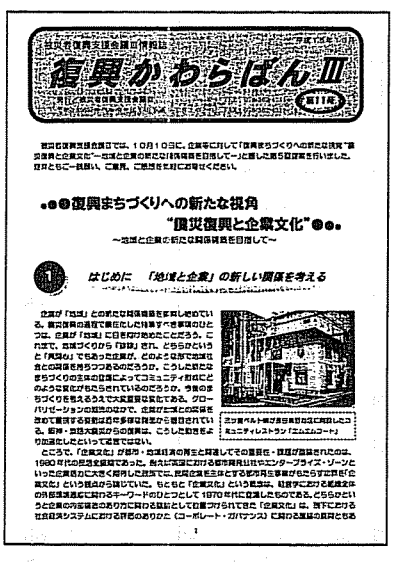
NPO の市民代表性を「市民社会論」－ミッション至上主義とごっちゃにすることは、問題の所在を不明確にすることになると、私も思います。さらに加えるなら、企業（営利組織＝PO）の存在意味を、単に「市場－顧客」価値をめざす営利活動に置くことは、20 世紀的企業社会の残影としか思えません。21 世紀市民社会における企業の姿、さらには「地域」と「企業」のあり方を考えることは、地域と「NPO」という現今のもっとも悩ましい関係以上に、重要な課題がひそんでいると考えます。

「地域と企業」について、私達市民まちづくり支援ネットでは 2002 年度より大大特プロジェクトで「地域経済復興」の支援方策研究にとりくんでいます（きんもくせい 03 年 4 月号参照）。兵庫県の被災者復興支援会議Ⅲの現在の最重要なテーマのひとつが「地域と企業の新しい関係」です。阪神大震災からの「震災復興と企業文化」をいくつもの優れたケースを発掘し、地域復興のなかでのこうした企業の役割が、これからの「市民活動社会」における新たな企業文化となることが期待されているからです（復興かわらばんⅢ第 11 号参照）。


第3回大大特（地域経済復興）研究検討会開催のご案内

☆日時：2003 年 11 月 20 日(木)
18:30～21:00
☆場所：こうべまちづくり会館 2 階ホール
☆会費：無料

☆テーマ：地域商業の再生－「地区商店街の再生」
☆内　容：1. 事例報告：灘区水道筋界隈
上山　卓 氏（コー・プラン）
2. 事例報告：東灘区甲南本通商店街
前田　孝一氏（甲南組合理事）
3. 講演：神戸の地区商店街の再生
林　千晃氏（神戸市産業振興局）


復興かわらばんⅢ 第11号

●●●復興まちづくりへの新たな視角
“震災復興と企業文化”●●●
～地域と企業の新たな関係構築を目指して～

1　はじめに　『地域と企業』の新しい関係を考える

■菜の花プロジェクト顛末記（その４）

●「ひと＋まち＋花＋みどり」

旧住宅局で西出・東出・東川崎地区のまちづくりを担当していた僕にとって、大塚氏の発案で始まった「菜の花プロジェクト」は、本来業務以外のイベントという意識でした。僕は植物に接する趣味も興味もさほど無かったし、いったい何から始めればいいのか…

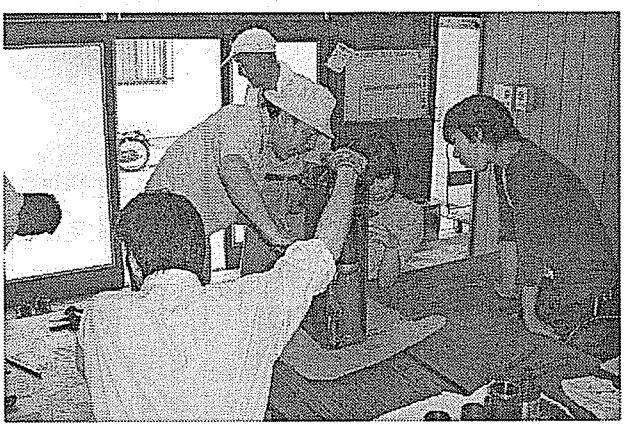
西出・東出・東川崎地区は古き良き人情味あふれる下町です。地域のコミュニケーションは外部の人間が心配しなくても、もともと存在しているのです。それを何かの目的に合わせ活発化させる仕掛けを提供するのが行政や専門家の役割だと感じました。毎週の現地作業にまちの人々の参加が増える中で、当初の不安も次第に薄れていきました。

我々は自然体で元気あるまちの姿を継続するための支援部隊です。外部の人間だから見える部分を分かりやすく説明することが大切なのです。その仲介を「花とみどり」がやってくれました。思い返せば、これはマニュアル化できない本来業務でした。当地区では現在も、菜の花プロジェクトを契機に住民主体で無理なく続けられる取組みが進行中です。

ディレクター１号　小林　健（神戸市）



▲菜の花撤収作業後の打上げＢＢＱ@まちなか緑地



▲実際に収穫した菜種の油絞り体験

●「くらしにとけこむ黄色い花を・春の色を」

昨年秋に始動し、３月の湊町線開通イベントでは目を奪われるような一面の黄色いじゅうたんのお披露目が行われた「菜の花プロジェクト」。ほぼ同時進行となったまちのみなさんとのセルフビルド公園「まちなか緑地」企画とあいまって、実は私は「ディレクター２号」の華々しい称号は頂いたものの、「菜の花」実働隊としてはあまり役に立たなかったのではないかと…省みています。

さて現在は、まち協体制見直しやさまざまなまちづくり活動の今後のあり方を実際的な側面から模索している中で、この「菜の花」にまつわる仕掛けやお楽しみの機会をどのような形で継続するのかを今後も地域一丸となって考え続けるには、「私たちではちと工夫が必要だねえ」とみんなで考え中です。

それがささやかで弱いものであれ、熱く強いものであれ、地域の力量に沿い無理のないかたちでこの美しい試みを継続してゆくこと――解決や進展を待つ地域の様々な課題や期待と、菜の花の可憐な姿を愛でる楽しみとを、糸を紡ぎあわせるようにごく自然なかたちでこれからも続けられる土壌をつくろう――それが今年のまちの目標です。さて、来春はみんなでどんな花を咲かせられるでしょうか。

ディレクター２号　野口志乃（北野工作室）

「災害復興公営住宅団地のコミュニティ調査」の調査員が『現場で感じたことを語り合う』ワークショップ

石東　直子（石東・都市環境研究室）

はじめに

阪神・淡路大震災の県下の復興公営住宅をほぼ網羅した約27000戸を対象に、「災害復興公営住宅団地コミュニティ調査」が2002年9月～03年3月にかけて実施された。国の緊急雇用対策事業によって採用された40人の調査員が各戸を訪問し、居住者の声に耳を傾けた。その調査員のうち20名が参加して『現場で感じたことを語り合う』ワークショップが7月2日と5日に、「人と防災未来センター」の専任研究員によって企画・実施され、私は傍聴させてもらった。

ここでは、調査員が感じたことから復興公営住宅の現状と課題等を探ってみるために、ワークショップで共通して出され、それについて多くの賛同があった意見をまとめた。

なお、当調査は、県から委託を受けて「人と防災未来センター」が実施し、膨大な分析結果が報告書にまとめられている。

○　復興公営住宅の居住者像

居住者像を調査報告書のデーターからみると、年齢構成は40歳未満が3割強、40歳～65歳が3割、65歳以上が4割弱である（02年11月の一般県営住宅の高齢化率は16%）。居住者調査の回答者の世帯人員は一人世帯が4割弱で最も多く、二人世帯を合わせると7割になる。震災前の住まいは「木造住宅が7割」、建物形態は「集合住宅が4割弱」、所有関係は「借家が7割強」である。震災が都市部の下町に甚大な被害をもたらしたことからみると、「下町の木造賃貸アパートや長屋に住んでいた一人暮らし、二人暮らしの高齢者」が、居住者に多いといえる。これらの人たちが住み慣れた地域を離れて、高齢になって初めて鉄筋コンクリートの集合住宅に移り住んだために、今までの下町暮らしとは全く異なる建物構造、住宅設備、隣人や地域との交流接点やしかけ等に戸惑っているようだ。

○　調査員が感じた「良好なコミュニティ運営が行われている団地」とは

（良好と感じた団地を、上位順に数団地列挙して、その理由をあげてもらった）

①　まとめ役がしっかりしている団地。そこは居住者も穏やかである。

（自治会長等の人格に負うところが大きい・きめ細かな準備をして住人に対応している・ＬＳＡ（生活援助員）と自治会長等の連携ができている・集会所が自主管理されており、外部からの文化活動にも積極的に利用されている）。

②　震災前の人の繋がりが継続している団地。

（再開発住宅は従前居住者が多く、近隣付き合いがよい・震災で全壊して再建された団地は、居住者の結びつきが強く、再建に際して行政とも交渉を重ねたので、入居後も行政とのパイプがある）。

③　コレクティブ住宅はまとまりが感じられてとてもよい。特に若い世帯のいるコレクティブ住宅がよい。

④　住宅棟の下層階や近くに高齢者福祉施設があり、ＬＳＡもそこから派遣されている団地は居住者に安心感がある。

○　「コミュニティ運営に？がつく団地」「問題があると感じたこと」とは

①　自治会がない団地

②　民間借上げ公営住宅は自治会もなく、ただ住んでいるという雰囲気。とくに街中の10戸ほどの小規模住宅は、外部環境も汚く、行政から見捨てられたような雰囲気がある。

③　公団と公営住宅の同居団地はコミュニティの形成を阻害している（公営居住者は公団居住者の圧力を感じて惨め。公団居住者は家賃格差に対して不満が大きい）。

④　住宅の立地条件が悪い団地（急坂がある・辺鄙な場所・日常利便施設がない・見回り員の派遣がない）。

⑤　自治会費の収支が不透明で、役員の使い込みや自治会の物品を役員が私用している。

⑥　自治活動のための公的助成金の受領が、金銭トラブルになり、コミュニティを悪くしている。

⑦　シルバーハウジングの高齢者ばかりの住宅は居住者が外に出てこない。居住者にエネルギーがない。

⑧　共同空間が汚く、ゴミが散乱しており、共用廊下の端の住宅前に私物が放置されているような団地は、居住者が排他的で居住者のコミュニケーションもない。

集会所も荒れている。
⑨　各戸の扉にインターホーンがない。

○　「課題と感じたこと」とは

①　入居システムのまずさが居住者の元気アップをなくしている。

震災前の居住地から離れた地域に入居した人たちは地域に馴染めず、知り合いもなく寂しい、元の地域に帰りたいと言う人が多い。地元に住宅が建設されると知らされていたら、入居を待っていたのにという声が少なくなかった。元の地域に帰りたいが、転居制度がないと言われている。

②　鉄筋コンクリートの鉄の扉が孤独を募らせている（鉄の扉の向こうで、どんな生活をされているのかと思いながら調査をした）。

③　集会所が使われていない。建物だけを建設してもだめだ。居住者にエネルギーがないと、自主的に活用できないので、外部サポートが必要。

④　ペットの問題は大きい（ペットが生きがいとなっている人もある反面、飼い方のマナーが悪く近隣トラブルが多い）。

⑤　男性の一人暮らしが特に問題（仲間に入っていけない。寂しいという声が多い）。

⑥　高層住宅や大団地は高齢者には馴染めない。せめて４階建てぐらいまでが望ましい。

⑦　住宅設備が近代化すぎて使いこなせない。戸惑いが大きい。

⑧　団地により行政サービスに不公平がある。モデル団地のＨＡＴ神戸に比べて、民間住宅と同居の民間借上げ住宅、街中の 10 戸未満の小規模１棟借上げ住宅、公団と公営の同居住宅等は、行政サービスが届いていない。これらの団地は自治会も結成できない。

○　「あればいいなと感じたこと、必要と感じた支援策」とは

①　近隣にある複数の団地が連絡をとりあえるようになればいいと思う。そのきっかけづくりのサポートが必要。（例えば、イベントを共同でしたり、何か問題があれば相談しあえるような連絡会の結成）。

②　寂しいという声を到るところで聞いたので、そこに行けばいつでも誰かと会えるという雰囲気の「ふれあい喫茶」のような場の運営が必要。居住者自らが運営ができない場合は、外部サポートによる運営が必要。

③　買い物サポートやその他の生活ニーズの支援ができるような体制が必要。

④　月に 2、3 回の見守りが欲しいという声があり、見守り制度の拡充、充実が必要。反面、「いきいき県住推進員」の態度が威圧的で悪いという声も多かった。

○　その他の感想

①　いつまで「復興」という冠がつくのか。マイナス面が大きいように感じる。居住者の甘えも続くし、反面、嫌がっている居住者も少なくない。また、近隣の一般公営住宅居住者との精神的ギャップを感じるという声もある。

②　８年経っても、生活復興ができていないと感じた。このままではより深刻な状態になっていくと感じた。

○　私のコメント

（ワークショップの最後に、専門家としての立場から石東がまとめのコメントを求められた）。

今回のワークショップで出された数々の指摘は、居住者の叫びであり、真摯に受け止めて、課題解決のための具体策を打ち出していかなくてはならないと痛感した。調査員が居住者の目線に立って感じられたことは、研究者や行政職員が調査するとつかめなかったこと、語ってもらえなかったことも少なくないと感じた。

復興公営住宅の自律的で持続したコミュニティ運営・形成を図るためには、コミュニティの活性化を支援するような社会的システムが不可欠である。コミュニティに関わる課題を包括的に取り上げ、暮らしとそれに関わる環境全体を対象にした総合的な支援が必要である。単に個別の生活支援に留まらず、自治会運営の支援、団地や住宅の環境管理や改善の支援、まちづくりやコミュニティ・イベントの支援、更には防犯やセキュリティ活動の支援等を一体的なものとして展開することが望まれる。

地域の多様なニーズに速やかに対応できるような包括的コミュニティ支援は、住民と行政あるいはさまざまな組織やグループの連携が必要で、ＮＰＯのような組織体が適していると思う。このような包括的なコミュニティ支援の先進事例としては、イギリスのＨＡ（住宅協会 ）やアメリカの CDC(コミュニティ開発法人)等がある。

私は、ワークショップを傍聴しながら思い出していた。「きんもくせい　03 年 4 月創刊号」の巻頭に小林郁雄さんが記している師・水谷頴介さんから学んだ『現場に真実はあり、細部に神は宿る』という視点の大切さを。

■『コンパクトシティ』を考える4－中世城壁都市の消滅そして近代へ

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

1．コンパクトシティのモデル－中世城壁都市

ドイツの南部バイエルン州のビュルツブルグからアルプスの北麓のフュッセンに至る観光道路であるロマンチック街道は、我々旅行者に中世都市の遺産文化を楽しませてくれる。ローテンブルグ、ディンケルスルビュール、ネルトリンゲンなどの都市は、今なお中世の城壁都市の営みを現実の姿の中に残す貴重な歴史的遺産である。

中世城壁都市は、2000 年に翻訳した「コンパクトシティー持続可能な都市形態を求めて」（M・ジェンクス編）の中でも、コンパクトシティのモデルとして取り上げられている。シンボルである市壁である城壁によって、外部からの攻撃を防衛できるだけではなく、外部との関係が隔離され、限定された都市空間が人工的に作り出される。公共施設は市民たちの手、あるいは負担で整備され、常に修復された。これは、力を付けた商業者を中心とした市民が、封建領主や司教らと争って自治権を獲得し、都市を自らの力で維持し、発展させようとした力が働いていたからである。つまり、そこに「公共」の概念である「コミューン」＝「市民自らの共通するもの」という新しい概念が作り出されたところに特徴がある。

都市の生活空間は、かなり密度の高い居住空間が、ごみごみとした路地の迷路でつながれている。まちの中心の広場や教会、市役所に通ずる大通りは舗装され、常に美しく保たれ、通りに面する建物の窓は花によって飾られている。広場では、市場が開かれ、城壁の周囲に広がる農地から農民たちによる新鮮な食材の持ち込みや、市内の手工業者の作った製品、あるいは、毛皮商、砂糖や香辛料を商う商人、小間物屋、小道具屋、貨幣の両替商人が店を出し常に賑やかである。まさに、全てがコンパクトにまとまっていた。

2．中世城壁都市の消滅

コンパクトシティの典型であり、繁栄の象徴であった中世の都市は、しかしながら、中世の末期から衰退し、徐々に姿を消し始めた。

第1の要因は、13 世紀からの地球の寒冷化による農業生産の長期的な落ち込みで収縮経済となったこと、あるいは黒死病（ペスト）の流行、または頻繁に起こる戦争による大幅な人口減少で都市の活気が喪失したためである。中世都市のシンボルであった市壁を維持補修する経済的負担力が減退し、やがて荒れるままに放置されていった。

第2には、国王の集権化が進み、都市は自治権を制限され、あるいは奪われ、中世都市特有の自由自治・自主防衛の精神を喪失していったためである。都市を支配する封建領主が、地方に割拠し、自己都合で戦争に明け暮れ、社会を無秩序に陥れていた。都市の商人は自由と平和と自治を望んだ。国王と都市商人たちの利害は一致し、国王は都市に特許状を与えて、封建領主による支配から解放し、直接国王の保護と支配の下においた。都市も喜んで受け、国王に租税その他の金銭的な援助を行い、時には軍事上の助けもした。初めて多くの貨幣を手にした国王は、国内に官僚をおき傭兵軍隊を使用して集権化を強めることとなり、結果的に都市の自治権を奪うこととなったのである。

これら経済的あるいは政治的な要因が、中世都市の衰退の大きな要因であるが、もう一つ物理的な要因があった。それは皮肉にも 14 世紀から 16 世紀にイタリアで端を発し、都市を中心とする商業活動や文化的な活動を推進したルネサンスの影響から生まれたものであった。

ルネサンスの3大発明の一つである火薬の製造が 14 世紀になると、火矢（ロケット）の推進用や砲弾の発射用として普及することとなった。筒先から火薬と石弾を詰めて火薬を爆発させ、もの

すごい音とともに、石弾を飛び出させる大砲が作られた。当時のヨーロッパ諸国の各地で勃発する戦争に活用され、旧来の戦法を一新してしまうことにもなった。当初のものは、射程が 300mで、直径 15cm 程度の石弾を飛ばす程度で、砲の寿命が短く、10 発打てば砲身が破裂し、取り扱いは非常に危険であった。しかし、当時の投石兵器に比べると、数倍の衝撃力を持ったことは確かであった。15 世紀になると、冶金術の進歩で真鍮の鋳造砲が製作されるようになり、石弾に代わり鍛鉄弾や鋳鉄弾となり、射程距離も 1000mに達し、耐久性も 10 倍まで改良された。

この大砲の利用で、それまで戦法では城門を閉じ籠城してしまえば難攻不落であった中世の城壁都市の防衛能力を完全にうち砕くこととなった。大砲から発射された石弾や鉄弾が、濠や城壁を簡単に飛び越えて飛び込んできて、凄まじい音と破壊力で中世城壁都市の防衛隊を襲った。長らく築いてきた中世時代の主役の座であった都市の安全で平和な空間は粉砕されるか、城門を開けて軍門に降らざるをえなくなったのである。

3．都市の時代から国家中心の時代へ

この火薬を用いた圧倒的威力は、都市だけではなく、城壁や騎馬に依存してきた封建領主の安全保障能力も無意味なものにした。16 世紀には、戦争のあり方も、砲兵隊が確立し、それまでの密集隊形の歩兵や騎兵に替わる戦術を展開することとなった。機動的な常備軍を装備するためには、大きな経済力が必要である。そのために、広い範囲での政治統合が起こり、国王の領土支配権を強化する方向に歩み始めた。時代は権力が分散していた封建時代、ある意味で都市の時代から、近代の扉が開かれようとする国家中心の中央集権化時代へと進むことになった。

特に、イギリスとフランスのように、国家が都市に対し圧倒的に優位となり、近代に移行する際に、早くから国家統一を達成し、絶対主義への道を進んだ国家が、近代史の主役に躍り出ることとなった。それに対し、ドイツとイタリアは国家としての権力の長い間分裂状態が続き、都市の自由と自治が持続し、19 世紀になってようやく絶対主義・国家統一という遅れを経験しなければならなかった。

4．中世都市の変貌

このような過程を経て、中世都市はかつての自治と華やかさを失い、荒廃化していった。あるいは、中世都市の面影を失いつつも、絶対主義王権の中心都市としての地位を獲得したものもある。政治・経済・文化の中心として発展し、より人口が集中し、都市として成長拡大し変貌した。ハプスブルグ家の中心都市となったウィーンは、市内に『リンク』と呼ばれる都市内環状道路があるが、これは都市拡大のため、かつての城壁を解体して跡地に建設されたものである。パリも 19 世紀半ばまで城壁に囲まれていた。城壁が取り除かれた跡は、『並木大通り（ブールバール）』になっている。ウィーンとパリ同様の変貌を遂げた都市は、現在のヨーロッパの都市の大半である。

一方で、中世の面影を持つ城壁都市がドイツ地方のロマンティック街道などを中心に残存している。それは、ドイツが 19 世紀に国家統一するまで長い間分裂状態が続いたことと関係している。ローテンブルグに代表される都市は規模が小さく、都市の公共施設を維持するためのコストが一般的な中世都市に比べて少なかったことや、山間部などに位置し中心から距離があったため、近代文明の影響をそれほど受けずに、農業経済を中心とする営みが続いたことも要因であろう。

古代ギリシャ・ローマ時代は都市国家、そして中世時代は都市の時代であり、その中心は城壁と市民であった。市壁建設と維持に込められた市民主体の活動が、ヨーロッパの人にとって『コンパクトシティ』のモデルとして考えさせる原点ではないだろうか。

■団塊の世代に未来はあるか？

第31回 都市公団まちづくり研究会 2003年9月24日／講師・深尾健造（元八尾市職員）

太田　亘（都市公団）



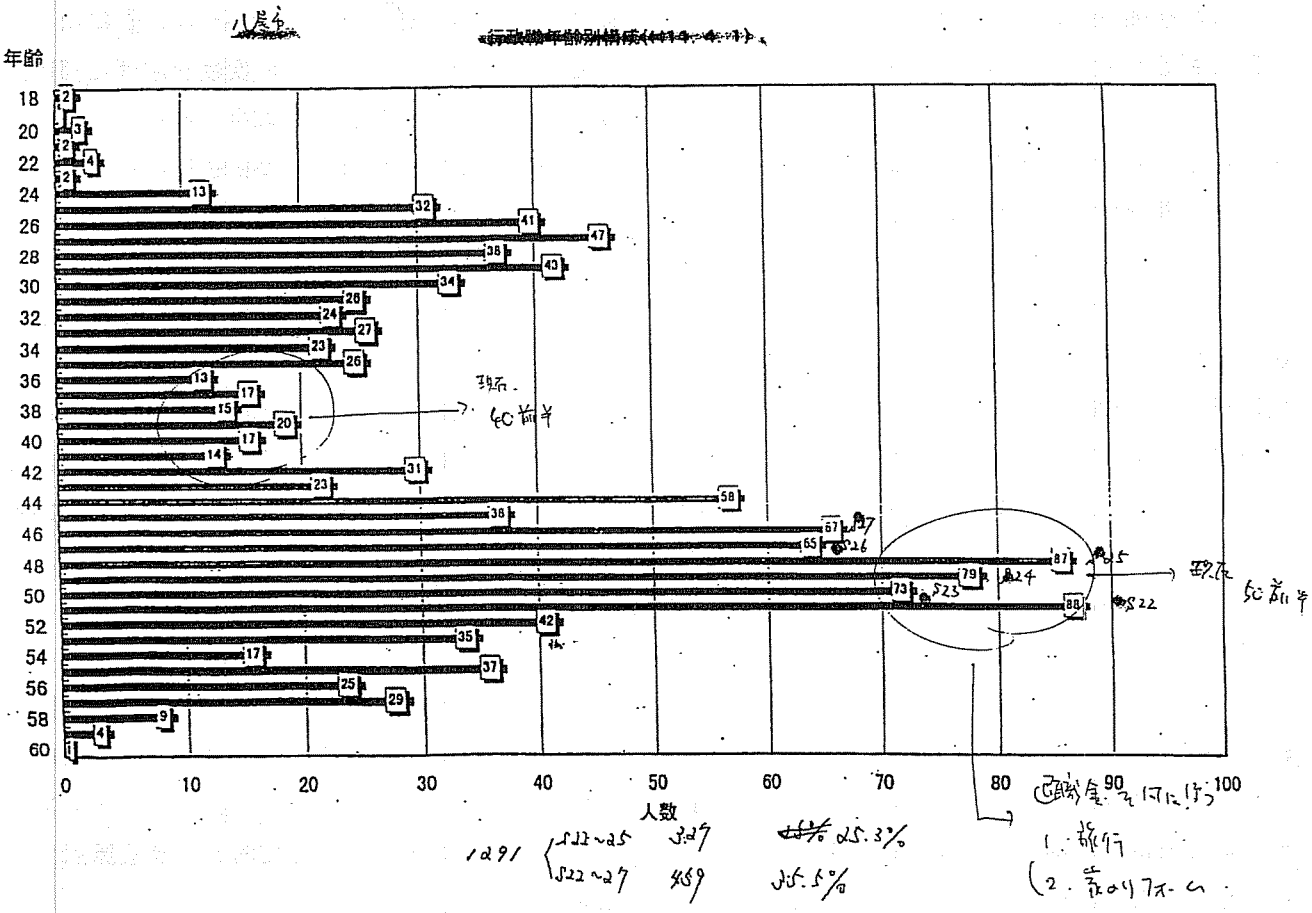
深尾健造氏

9月のゲスト深尾さんは、八尾市で総合計画も作成されていたという元行政マン。住宅行政の先頭に立って、まちづくりラウンドテーブル等「住民参加」のまちづくりを実践されてきた。しかし市職を定年までかなり残して退職する道を選び、現在は大学院に通いながら団塊の世代の多様な生き方を模索されているのだという。なぜそのような人生の選択をされたのか？その想いを語ってもらった。

まず下のグラフを見てほしい。4年前の八尾市行政職員の年齢別構成である。異様にとびでている50歳前後の年齢が「団塊の世代」である。逆ピラミッド型の年齢構成は日本全体の傾向ではあるが、リストラのなかった公的セクターでは特にその傾向が顕著に顕れている。

団塊の世代とは、第2次世界大戦後の1947年から1949年までに生まれた世代をさす。800万人から1000万人の団塊をなして、これまでの高度経済成長時代を通じた日本社会の変化を誘導してきた。曰く「時代のリーダー」「大量消費の世代」・・・。

しかしここに来て邪魔者扱いされているマスコミ報道が目立つ。例えば2001年2月5日ＡＥＲＡでは「団塊はずしが始まった」として、団塊の世代をすっ飛ばして、トップの座が60代から40代へと若返りをしようとする姿を伝えている。



また、2002年1月4日の朝日新聞社説では、次のように書かれている。

『・・・団塊の世代が将来を決める。』

堺屋太一氏がこの近未来小説「団塊の世代」を発表したのは76年のことだ。それから四半世紀、オムニバス形式で描かれた人生ドラマが今、現実化しつつある。

戦後間もないベビーブーム時代に生まれた団塊の世代は総勢1千万人にもなる。年金危機が叫ばれる中、彼や彼女たちが「逃げ切る」側になるか、それとも「支えつつ支えられる」側になるかで、この国の将来は大きく違ってくる。

生涯純受益額という指標がある。年金、医療、教育など一生の間に得る公的な給付から、税金、年金や医療の保険料など公的負担を差し引いたものだ。現在の制度を前提に政府がはじいた試算では、60歳以上の世代は5700万円の受益超過になる。一方、20歳代は1300万円、19歳以下となると4200万円の負担超過、団塊の世代が属する50歳代はわずかながらプラスになる計算だ。

放っておいたら、若い人たちは負担の重さにつぶれてしまうか、あほらしくなってこのシステムから離れてしまうだろう。将来への不安から子どもを産まなくなる。見切りをつけたヒトやカネが海外に逃げていく。そんな日本に未来はない。・・・』

この社説は今後10～15年後の老人人口比率が高まったときの「安心」の仕組み作りを主張するものだ。そして、こう結んでいる。

『理論上の処方は簡単だ。分母の支える人を増やす一方、支えられる分子を軽くする努力をするのである。分子にいる人が分母に回れば理想的だ。

ただし、社会保障政策の枠内だけでは、その実現は難しい。「安心」の仕組み作りに住宅政策や産業政策などを総動員し、政策同士を有機的に結びつけるグランドデザインを描かなければならない。

たとえば、中古住宅の価値をきちんと評価する制度や流通市場の整備である。・・・』

現在50歳代半ばに達した団塊の世代は、数年後には定年の時期を迎える。再任用というシステムもあるが、大半は現役時代に比べてやりがいのある職業にはつけない。それでもまだ職にありつけるのはましなほうだ。その一方、どこが不況やねんと思わせる元気な地域活動や窓口に来る市民がいる。深尾さんはそうした現実を見てきて、時代の大きな構造変化の只中にいるという実感、コミュニティの再生が日本社会の再生に不可欠という想いを強くされたそうだ。例えば、互いに助け合って年収200万くらいの小さい仕事をいかにたくさんうみだし、お金が地域で廻る仕組みをつくるかが大事なのだという。

「若者文化、友達夫婦、ニューファミリー、カルチャーブーム、スニーカーミドル、マチュアー（成熟）」（2002年1月5日、読売新聞が特集した「団塊の世代」の中で紹介されたキーワードより。）

団塊の世代はこうした新しい文化を生み出し、社会に多くのショックを与えてきた。

今後、団塊の世代のライフスタイルに応じた居住環境の改善が、消費不況の克服と同時に地域循環型経済の確立に不可欠となるだろう。例えば、まちなかの連棟戸建の共同建替、コーポラティブ・・・。個人のライフスタイルに応じた個別の対応が必要となる。そのためには複雑に絡み合った問題を解きほぐし解決へと導く、個人と専門家、個人と組織の連携が必要だ。実験的な取り組みと基礎自治体との連携など、多様な公的セクターやNPOが連携してコミュニティの再生に取組むこと、地域で息長く関われるシステムを構築していくことが望まれる。その一翼に、公団も関わっていきたい。

■Ｄｒ．フランキーの街角たんけん　第３回

「百三十年の重み」　兵庫県庁舎界隈

中尾　嘉孝（港まち神戸を愛する会）

私事ながら、昼休みに食後の散歩で歩いている場所が続くので気が引けるが、今日も山手の方をうろうろする。

鯉川筋から西に折れて、花隈へと続く丘陵の斜面を緩やかにカーブする下山手通を上がると、栄光教会前の大楠、県庁舎、そして県公館のフレンチバロックのたおやかなファサードが迎える。昨春、県公館は明治 35（1902）年の竣工から百周年を迎えた。また、県庁が、仲町の現神戸地裁の敷地から、ここ下山手通４丁目に移ってきたのは明治 6（1873）年であり、実に百三十年の長きにわたって、県行政の中枢がこの一帯に置かれていることになる。

明治 30 年代の英国総領事ジョン・カーリー・ホールの回想によれば、県庁が移転する以前、この敷地は、居留地でオランダ商会を営むコルタルス氏の邸宅だったという。戦国時代には、荒木村重がこの西側一帯に花隈城を構えるなど、神戸の町を見下ろすことが出来る地の利が、ここを県庁舎の場所として選ばせたのかもしれない。

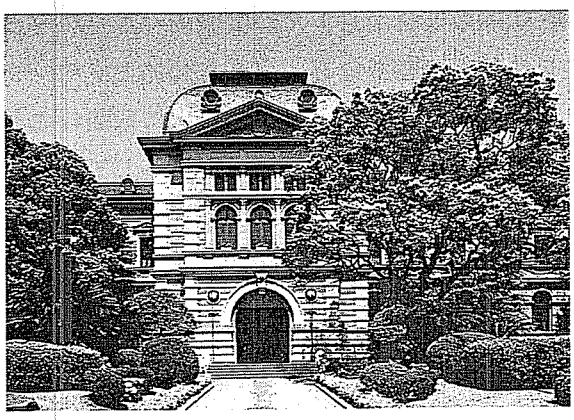
4 代目県庁舎にあたる現県公館を設計した山口半六は、建築家として有名だが、大阪市の市区拡張に際して新街路設計計画を行うなど、「日本で最初の専門的な都市計画家」（村松貞次郎）でもあった。そうした山口の経歴と、県公館のファサードに沿って歩くとき、他の同時期の都市建築より「まちに寄り添う感覚」が強く感じられることと、あながち無関係ではないように思われる。

県公館の北、現県民オアシスの辺りには、明治 15（1882）年、初代の県議会議事堂が建設された。明治初期の神戸には、いわゆる「擬洋風建築」は少なかったようだが、この県議会議事堂は、八角形の平面、正面２階バルコニーの菊水を思わせるファンライト、宝塔を思わせる屋根上のランタンなど、強烈な個性を放っていた。

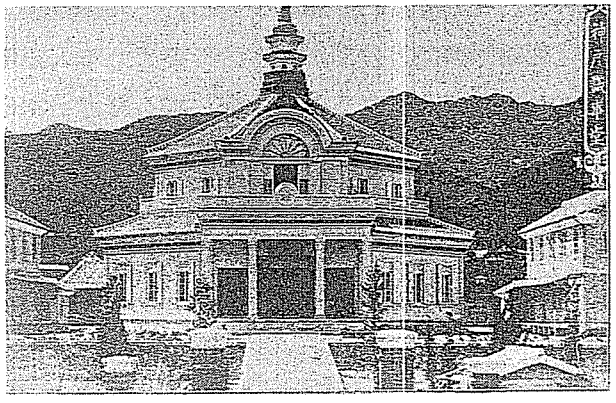
さて、いまや官庁街の性格が強い県庁周辺だが、コルタルス氏のほかに、明治初期に活躍した長州出身の実業家・光村弥兵衛なども、この界隈に屋敷を構えていた（光村の嫡子・利藻（としも）は、道楽から写真撮影に没頭、日露戦争にカメラマンとして従軍し、やがて本邦写真印刷の先駆者となる。光村印刷㈱創業者）。県警本部南西角のお不動さんや、この界隈に多い桜の老木は、あるいはその頃の名残か。

また、明治から大正期に神戸で活躍した２人の建築家、河合浩蔵、設楽貞雄が、北長狭通５丁目、下山手通６丁目にそれぞれ事務所を構えるなど、日本の近代建築史と浅からぬ縁がある界隈でもある。

終戦まもなくに建った貿易会社のオフィスビル、旧めの石垣など、マンションやオフィスビルの合間に残る記憶の断片をたどって歩くと、また違った、このまちの表情が見えてくるかもしれない。



県公館（旧兵庫県庁舎、明治 35 年竣工）



初代県議会議事堂
（設計者・施工者不詳、明治 15 年竣工、宮西悠司氏提供）

ある駅のホームの上で（4）

てんとう虫

中川　紺

各駅停車に乗り換えると扉のすぐそばの席に腰を掛けた。電車は数分ごとに駅に停まる。窓の外はすっかり暗く、灯がともった家並みが連なっている。しばらくするとトンネルに入り白い電灯が左から右へと流れていく景色がはじまった。腕時計を見ると八時十分を少しまわったところだった。

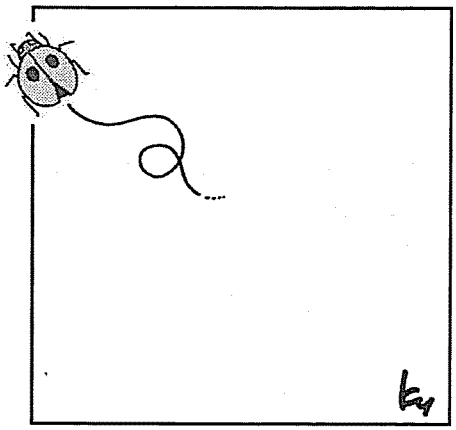
（こんな時間に帰れるのは久しぶりやな）

俺は肩凝りをほぐすように首を左右にひねった。疲れが抜けないせいで体全体が重かった。四十が近づいてきてほんとうに無理がきかなくなってきた。徹夜仕事もそろそろ控えていくか、と足下に目をやると、黒いゴミのようなものが動いているのが見えた。

見るとゴミは小さなボタンくらいの大きさで赤い斑点が二つ、きれいに並んでついていた。ふたつぼしてんとうだ。どこからか紛れ込んできたらしい。その模様を見て、よみがえる遠い記憶があった。

●●

昔、てんとう虫に凝っていたことがある。まだ小学校の一年生くらいだっただろうか。つくりもののようなあの模様と丸さに惹かれて図鑑を調べてはノートにいろいろなてんとう虫の模様を描き写していた。斑点がないものから二十もの点を持つものまであり、実際に見つけることができるとそのノートに印をつけていった。圧倒的に多いのがななほしてんとうとふたつほしてんとうだった。ななほしてんとうは確かにかっこいい、と思っていたが、俺は密かにふたつぼしてんとうが一番



のお気に入りだった。いつだったか、学校で昆虫を描くという授業があった。カブトムシや蝶々が人気だったが、クラスの何人かがななほしてんとうを描いていて、それを横目に、俺はふたつほしてんとうばかりを描いていた。いくつもいくつも。

●●

「かすがのみちー、かすがのみちです」

車内放送が入って電車は俺がおりるべき駅に着いた。あざやかな斑点を背負ったそいつはじっと扉のそばにいて動かない。扉が開いた拍子に巻き込まれるんじゃないか。そう思って手に取ろうとしたとき、半円の羽をぱっと広げると開いた扉からするりとホームへおりた。ベンチを置くスペースもないような狭いホームを挟んで、電車が停まっていた。ちょうど上りと下りの電車が同じ時間に着くタイミングだったらしい。向かいの電車の扉が閉まる瞬間、小さな黒いものが飛び出した。もう一匹のふたつぼしてんとうだった。風が強い地下のホームで、二匹のてんとう虫は連れ立って飛び立ち、階段のそばの換気口の中へと消えていった。本当に一瞬の出来事だった。二つの電車をおりた乗客は次々に階段をのぼってゆく。あのてんとう虫たちに気が付いた人は誰もいないようだ。

俺は通行人の邪魔にならないように除けながら、まだホームに立っていた。

●●

「信じられへんなあ」

独り言のようにつぶやいて、ゆっくり階段に向かった。それからふと、同級生の妻とよくこのホームで待ち合わせていたことを思い出した。この話を彼女は信じるだろうか。そう思いながら俺は帰路に着いた。（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■第６６回・水谷ゼミナール報告

今回のテーマは「今区画整理は‥‥」で、10 月 31 日（金）、こうべまちづくり会館で行われました。

まず、後藤祐介さん（ジーユー計画研究所）より主題説明があり、続いて次の３つの報告がありました。

①我が国の土地区画整理を振り返って
／野中　保（野中テクニカ研究所）
②西宮市甲東瓦木地区区画整理の取り組み
／松尾　進（西宮市区画整理課長）
③神戸市西区玉津地区民間区画整理の取り組み
／藤田豪一（都市･計画･設計研究所神戸事務所）

野中さんからは、土地区画整理事業に関する沿革や法に関する基礎的な“講義”をしていただいた上で、“区画整理１００回”（会場からは“再開発は５０回”という意見）、“区画整理は人の整理なり”などの区画整理事業における住民参加に関するこつや、最近の区画整理を取り巻く話題について、長年の経験に基づいて、ちょっぴり辛口のコメントも加えながら語っていただきました。

松尾さんからは、西宮市における区画整理事業の概略説明の後に、現在進行中の甲東瓦木地区の区画整理事業について、主に保留地処分に関する報告がありました。近年の土地価格下落の進行は保留地処分にとって相当深刻な問題であり、様々に工夫を行いながら事業を進めてきていることが報告されました。

藤田さんからは、神戸市西区玉津町出会地区で進めている１ｈａ弱の民間区画整理事業について、長期の土地価格下落や非補助事業という悪条件下で、民間参入による一括の保留地処分という方法で、様々な課題をクリアしながら事業を進めてきている状況をリアルに報告していただきました。　（中井　豊／中井都市研究室）

■ 情報コーナー

●ひょうご協働フォーラム
・日時：11 月 25 日（水）13:30～16:30
・場所：兵庫県民会館 11 階パルテホール（JR･阪神元町駅、地下鉄県庁前駅）
・内容：
〈第１部：講演〉「協働が生み出す新たな可能性」～いま､なぜ協働なのか～
／早瀬昇（大阪ボランティア協会理事・事務局長）
〈第２部：鼎談〉「ＮＰＯ・行政　これから」～協働の可能性を探る～
／野崎隆一（神戸まちづくり研究所）、清原桂子（兵庫県理事）、早瀬昇
・問合せ：ひょうごボランタリープラザ事業部（馬場・菅原）
（TEL. 078-360-8845, FAX. 360-8848）

●第３回・ひょうごまちづくり団体交流会
・日時：11 月 26 日（水）10:30～16:30
・場所：神戸市教育会館大ホール（JR･阪神元町駅、地下鉄県庁前駅）
・内容：
〈第１部：基調報告〉
「まちづくり活動継続のための課題」／灘中央地区まちづくり協議会（神戸市灘区）、中村町むらづくり協議会（中町）
〈第２部：活動紹介〉
「まちづくり活動事例紹介」／４～５団体の報告予定
〈第３部：意見交換〉
ミニアンケートをもとにテーマを設定し､フリーディスカッションを行う。
・問合せ：ひょうごまちづくりセンター
（TEL. 078-367-1263, FAX. 367-1264）

●阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第３５回連絡会
・日時：12 月 19 日(金)18:30～21:00
・場所：ひょうごボランタリープラザ（クリスタルタワー（JR 神戸駅南側）10 階セミナー室）
・テーマ、内容：詳細は未定
・問合せ：ジーユー計画研究所
（TEL. 078-251-3593, FAX. 251-3590）

●第６７回水谷ゼミナール
・日時：12 月 26 日(金)18:30～
・場所：こうべまちづくり会館６階会議室（中央区元町通４丁目、078-361-4523）
・テーマ：「私の（建築）作品（内容は詳細未定）
・問合せ：ジーユー計画研究所
（TEL. 078-251-3593, FAX. 251-3590）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http：//web. Kyoto-inet. or. jp/org/gakugei/kobe/index. htm
◆ http://www1. plala. or. jp/hos_a/kinmokusei_international. html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca. mbn. or. jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2003年12月24日発行

月刊 きんもくせい

03年12月号
(50+36+NO. 9)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■選挙と参加のまちづくり

前田　裕資（学芸出版社）

私が住む京都では、来春の市長選に阪神・淡路まちづくり支援機構で尽力された広原盛明さんが立候補を表明され、話題になっている。先日も「広原盛明さんを励ます建築・すまい・まちづくり関係者の集い」の案内が届いたが、呼び掛け人には小林郁雄さんをはじめ「きんもくせい」の関係者も名を連ねていた。また都市計画を代表する論客の方も名を連ねている。しかし、京都で活躍している関係者は、呼び掛け人のうち１割にも満たないし、数少ない彼らはまちづくりとは関わりがないか、反京都市の旗幟を鮮明にしておられる方がほとんどだ。

「チンチン電車廃止反対で頑張られたのは知っているが、その後は京都で何をしたの？」とか、「誰が担いでいるの？」といった疑問もあり、まちづくりの優れた専門家で人格者だからと簡単に応援するわけにはゆかないのも当然だ。しかし残念なことに「肩書きを出して応援したら処分する」といった某大学があったり、「ここで名前を出すと市の仕事ができなくなる」といった自主規制も働いていると聞く。

まちづくりへの住民参加が行なわれるのは、たった一人の代表にすべての問題を託せないからだと思う。現に広原さんの立候補声明の先頭にあるのは「イラク派兵反対」だ。こんな争点に応じて投票しても、だからと言って諸々のまちづくりの問題や、地区の問題を白紙委任をしたわけではない。だからこそ、個々の場面での幅広い議論を通した参画や協働が必要なのだ。

なのに参画と協働の場面で、対立候補を応援した専門家や学者が参加しづらくなるとしたら、市長派が誘導する談合にしかすぎなくなる。応援した候補が落選しても、個々の問題を議論する時には、この問題に限っては大いに協働し応援したいという場面があっても不思議はないし、逆であっても良い。なのに「干される」といった言葉がすぐに浮かんでしまい、いかにもありそうだと思ってしまうのは何なんだろう。

もちろん応援するだけが選挙への関わりではない。まちづくりに関してはどの候補の公約にも似たような奇麗事が並ぶのだろうが、質問状を出して「本気度」を問うのもNPOや専門家集団の役割ではないか。なんと言っても市長選はまちづくりの最高責任者を選ぶ機会なのだ。協働や参画が進み、行政と向き合う機会が増えたが故に、選挙で黙して語らずでは、本末転倒ではないかと思う。

＊　＊　＊

次は先日講演会で興味深いお話をされた佐藤三郎さん（西須磨まちづくり懇談会・月見山連合自治会）をリクエストします。

（小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→中島克元→中村順子→海崎孝一→某市某職員→前田裕資→）

■まちづくりシステムの研究　（３）

久保　光弘（久保都市計画事務所）

私が、この新連載の「序説」として位置づけて、講演させていただいた都市環境デザイン会議（JUDI）関西ブロック８月セミナー「まちづくりは、複雑系」の講演記録がＪＵＤＩのホームページに掲載されました。併せてご覧いただければ幸いです。

複雑系について興味を持つようになったのは、３年程前に「複雑系」（M・ﾜｰﾙﾄﾞﾛｯﾌﾟ、新潮社）、「複雑系の知」（田坂広志、講談社）の名著に出会った時からです。前者は平成８年、後者は９年に発行されており、その気でみれば複雑系の出版物は多く、複雑系は既に定着した感があります。

13 年３月論文「新長田駅北地区（東部）震災復興土地区画整理事業における住民主導のまちづくりシステムについての研究」は、実は震災復興についての記述についてはもう打ち止めにしようと書き始めたものですが、８年間を通して協議会活動のプロセスをまとめていくにつれて、その中に自然の法則性のようなものを感じ、それが複雑系の概念でモデル化して説明できることに気づきました。しかし13 年３月論文では実証性を重視し、「複雑系」については、注意して補注か、まとめでふれる程度で止めました。

きんもくせいでの 16 回にわたる新長田駅北地区（東部）まちづくり報告連載で、まちづくり経過をいくら詳細に記述しても、まちづくりの本質を述べるに至らないジレンマを感じていましたが、その理由がわかりました。その理由とは、「これまでの都市計画にまちづくり（協議会活動）のプロセスでの現象を述べる言語をもっていなかった。」ということです。「複雑系」の概念の引用は、まちづくりを語るに有効な手段となるのではないか、複雑系からもう一度震災復興の協議会活動プロセスを見直すことによって見落としていたまちづくりのプロセスでの現象を発掘できるのではないか、これが、きんもくせいに再び連載を開始した動機です。

この稿を書きながら、インターネットでまちづくりと複雑系との関連を論じたものがないか、ざっと検索してみましたが、一件を除いて見あたらないようでした。その一件とは意外にも身近な神戸市職員、森田拓也さんの書かれた「複雑系とまちづくり」（こうべまちづくりセンター・ホームページ）です。

森田さんは、「ボランティアの目をみはるような活動をきっかけに、ボランティア・ＮＰＯ論や市民社会論という方向に行く人が続出したが、筆者（森田さん）は、複雑系に行きついた。」とし、平成９年に開催された美緑花まちづくり「インフィオラータ三宮」を既に複雑系の視点から展開したと述べられています。

複雑系の概念についての解説は、多数の出版物があり、私がしても受け売りの域は出ないのでさけたいところですが、私の理解では、ここで言う「複雑」とは、「多数の独立した個が＜相互作用＞し合っていること」による有機的関係を言い、この「相互作用」の豊かさが「生きているシステム」のポイントといえそうです。「複雑系」とは、この「生きているシステム」についての解釈することを試みている科学です。

複雑系の重要な概念として「創発」があります。例えば、魚は、えら、ひれ、内臓、背骨などで構成されていますが、その上の階層にある魚自体は、単なる寄せ集めでない性質を持つ生物へとジャンプしており、これを「創発した」といっています。これがまた、要素還元的手法の限界を示す説明ともなっています。「町」も個人、建物、道路、公園などの単なる集合体でないそれ以上の性質―コミュニティ、町並み景観、地域産業、地域福祉、又そのような区分では表せないもの、町の個性等―へとジャンプしたものです。その間に介在するのが、まちづくりのプロセスであり、これがそれぞれの町をジャンプさせる力を担っているのです。

まちづくりプロセスの主軸は、「まちづくり協議会活動のプロセス」です。震災復興まちづくりは、神戸市まちづくり条例を基盤に、「協議会活動のプ

ロセス」の結果が、「まちづくり提案」に発現され、事業制度等も活用されて進められたと握えられます。これは「協議会活動を停止すれば、まちづくりは終わる」ということを示しています。

今回は、前置きが長すぎました。やっと前回の続きです。

３．まちづくり協議会の「生」と「死」

１）まちづくり協議会の特質

前回「まちづくり協議会」とは、「市街地形成、コミュニティ形成に関する地区の合意形成組織」としたが、もう一つ重要な特質は「市街地形成、コミュニティ形成を継続して進化させる組織」、すなわち町の「創発」をおこす組織であることである。

これは住民のみで構成され、役員が毎年の交替制であり、日常的な事柄を繰り返す、一般的な「自治会」と異なるものである。震災復興において、まちづくり協議会から自治会への移行という言葉も聞かれるが、これは、協議会の「死」を意味する。自治会はいうまでもなく重要であるが、地区におけるまちづくり協議会と自治会は役割を区分し、並立させることが望ましい。

きんもくせい 03 年 10 月号で小野幸一郎さんが「理知的にまちの中で＜格闘する＞こと」と言われた場は、協議会であり、まさに「創発」の舞台である。そして小野さんは、「何のために格闘するのか」と問われた。多大なストレスを負いながらもなぜ協議会リーダーたちはがんばるのか。それは、その地区にとっておそらく歴史的といってもよい「創発」の場にいることで、極めて人間的な何かが発現しているのではないのでしょうか。

神戸市では震災復興後に、まちづくり協議会が 100 を超えたと伝えられているが、現在、実質的に活動を続けている協議会はその半数に満たないのではないかと言われている。このことは、震災直後の混乱が未曾有の協議会を生み出したこと、一方では協議会活動は容易に消滅することを我々に示している。

２）「カオスの縁」と「まちづくり協議会」

複雑系理論の草分けの一人であるクリス・ラングトンは、「秩序」―固定的で余りに静的な状況、「カオス」―暴走や混乱等余りにも動的な状況、この「秩序」と「カオス」の間に静的すぎず、動的すぎない状況で、情報が「適度に保持される安定性」と「適度に伝達される流動性」の絶妙なバランスをもつ領域があることを発見し、「カオスの縁」と名づけた。

そしてこのような状況が表３－１に示すように５つの異なる分野でも同じように存在することを示している。

この「カオスの縁」という領域こそが複雑なシステムをもつ色々なものが進化する、言い換えれば、創発を起こす領域である。氷と水の間の相転移、また水と蒸気の相転移の層でわかるように、この「カオスの縁」と言われる層は、非常に不安定で薄い。

ラングトンによる「カオスの縁に関するアナロジー」に「まちづくり」を重ねると、まちづくり協議会の特質がみえてくる。日常生活に突然、大震災に見舞われ、震災直後の混乱、カオスの状況が起こった。その後のまちづくり協議会活動は、町の復興、創発の場となるとともに大きく地域社会の変化をもたらした。しかし協議会活動の停止は、再び固定的な日常、なめらかな変化の日常へと戻っていくことを語っている。

表３－１　「カオスの縁」に関するアナロジー

		←	カオスの縁	→
ラングトンによる	ｾﾙ・ｵｰﾄﾏﾄﾝ	ｸﾗｽⅠとⅡ	ｸﾗｽⅣ	ｸﾗｽⅢ
	力学系	秩序	複雑性	カオス
	物質	固体	相転移	流体
	ｺﾝﾋﾟｭﾃｰｼｮﾝ	停止	決定不可能	暴走
	生命	あまりにも静	生命・知性	あまりにも動
まちづくり		一般的な日常	まちづくり協議会活動	地区の混乱

（注）この表に関しては、「複雑系」(M.ﾜｰﾙﾄﾞﾛｯﾌﾟ)pp. 262-330 に詳しく述べられている。まちづくりの項は久保による。

（この項は次回に続く。）

震災復興で加速する企業と地域の新たな関係を考える

「まちの死蔵資源」を発掘・編集する社会起業家

ー近畿タクシー㈱森崎社長ー

加藤　恵正（神戸商科大学）

近畿タクシー(株)社長森崎さんは企業家として、また、まちづくりプロデューサとして神戸長田にこだわっている。きっかけは、1999 年に長田区内の商店街が企画した復興大バザールへの関与である。このときに長田 TMO の存在を知り、まちの再生がタクシー事業の成否に直結することに気付き、TMO への出資さらにその活動への参加に至った。震災後、まちづくりの主体はボランティアという構図から、経済的に自立性の高いアプローチが必要との思いも強かったこともある。

2000 年、長田 TMO が経済産業省の支援で行った「高齢者に優しい商店街づくり事業」での「買いもん楽ちんバス（無料）」（期間限定実験）の運行は、高齢化し商店街に買い物に来ることも困難になってきた住民に、病院なども含む生活に密着した移動手段を提供しようとするもので、長田住民ニーズを感じることができた。まちの移動を支えるビジネスの必要性を感じるという意味で手応えはあった。

長田を単なる「被災のまち」からこれをしたたかに活用する「観光のまち・食のまち」への転換も提案し実行にうつした。アスタきらめき会観光部長として、修学旅行の誘致に奔走。当初、商店主の一部から抵抗があったものの説得して実施してみると、商店主は実体験を真剣に聞く生徒達に驚き、当初 80 店ほどの参加が今では 300 店ほどが参加している。経済効果もかなりあるという。また、現在では全国ブランドになってしまった「ぼっかけカレー（うどん他）」は、食事に関わる時間が取れない中小企業のまちなかたを象徴するもののひとつだったが、これを発掘し MCC 食品と商品化したのも森崎氏である。商品化した製品を、今度は長田の食品会社「伍魚福」に協力を依頼し、販売ルートの確保も行った。地域に死蔵された経験や生活のノウハウをもう一度再評価して市場化することで、まちの活気醸成が加速される効果は大きかったという。それまでは誰も耳を傾けなかった震災体験をまちの資源として発掘したり、中小企業のまちで「発明」された食品を地域の協力をつなぎながら製品化する。森崎氏の「活躍」は、地域のなかに死蔵された資源を、これまで関係をもたなかった多様な人達につなぎこれを編集をしていくことで、新たなビジネスを起こしまちを活性化させることに貢献しているといえるだろう。

タクシー会社の経営という点でも、森崎氏の力量はいかんなく発揮されている。次世代型タクシー会社として、タクシー運営と介護・警備を連動させる構想示している。拠点から半径 2 ㎞ が重点的なタクシー営業地域であることを活用。運転手は長田 TMO 圏域については、細い路地まで熟知している。また、毎日ここを走ることでまちの変化や状況にも通暁している。こうしたまちの情報の蓄積を活用するためには、本来ならばかなりのコストを支払わなければならないはずである。タクシー乗務員はいながらにしてこの情報を有している。介護支援のなかでの買い物や病院への移動需要は、高齢者が多い長田にあっては大変大きい。これまで、まさしく「死蔵」され顕在化しなかった需要といえるかもしれない。さらに、地域を熟知する 50 余台のタクシーは、地域の安全の番人としての役割を果たすことも可能となる。ここにも、ビジネスチャンスはある。タクシー経営は、こうした地域情報の蓄積・地域の人々との信頼といった資源を核に、巧みに「範囲の経済」を醸成しながらまちづくりと企業経営を融合していくことになる。単なる移動手段であったタクシーは、広義の地域メンテナンスビジネスを指向する次世代タクシーへ変身を遂げるかもしれない。

社会起業家の定義は必ずしも明確ではないが、「医療、福祉、教育、環境、文化などの社会サービスを事業として行う人たち（町田洋次『社会起業家』）」ということではあろう。ただ、この定義では森崎社長のように企業家としての嗅覚を生かしながらまちのなかで死蔵された需要を掘り起し、硬直化した「関係」を再編成しながら起業を企むダイナミックな地域イノベーションのプロデューサを位置付ける必要があろう。

なお、近畿タクシー㈱は、1952 年設立。現在、従業員 80 名で、バス・タクシー事業、指定訪問介護事業、警備事業など地域サービス企業として従来のタクシー会社のイメージとは異なるユニークな経営を行っている。

■地域商業の再生－「地区商店街の再生」について

山本　俊貞（地域問題研究所）

11月20日、こうべまちづくり会館において、“地域商業の再生―「地区商店街の再生」”をテーマにした第3回大大特（地域経済復興）研究検討会が、こうべまちづくりセンター・研究ネットワークとの共催（まちセン研究ネットシンポジウム）で開催された。

1）事例報告1：灘区水道筋界隈

上山　卓　氏（コー・プラン）

～まちづくり活動と一体となった地域商業活動～

水道筋界隈では震災を契機として、商業者のみによる事業が住民と一体となったまちづくり活動にと拡大・発展し、「活力ある商業」をテーマに、ハード・ソフト両面のさまざまな取り組みが展開されている。

そして、商業者個々では、今後に危機感をもっている人、昔の大儲けを忘れられない人、機会があれば商売をやめようと思っている人など、思惑が各々異なり、さらに六甲道周辺で大規模店舗が林立してきた震災後の状況の中で、今一度、「職人の街」のにぎわいを取り戻すために、数少ない市場の良さを活かし、これを再整備するために、従来の大規模再開発型ではない展開方策が模索されている現状が報告された。

2）事例報告2：東灘区甲南本通商店街

海崎　孝一　氏（同商店街振興組合理事）

～地区商店街での商売は「なじみ」づくりから～



地区商店街の組合理事としてリーダーシップを発揮されている海崎さんからは、表題の他に、現場に足を据えた商店街生き残りのための“海崎語録”がいくつも発信された。商店街が『地域コミュニティの核』になる。／人脈ネットワークを構築せよ。色んな人が集まり、『玉』が増える。／商売人が元気になれば、自ずと街は活性化し、『街づくり』につながる。／一人では駄目、仕事は皆で。／金がないなら頭を使え。頭がないなら体を使え。やれば結果が出る。／自分自身のためと思うと継続できる。／商売の匂いを出すな。相手の立場を考えよ。／行政と上手く付き合え。／マスコミを上手く利用し、共存共栄を。等々……。

3）講演：神戸の地区商店街の再生

林　千景　氏（神戸市産業振興局）

～活性化の第1歩は「地域をより深く知れ」～

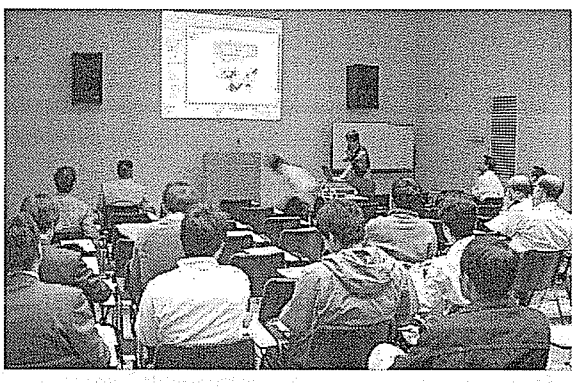


林氏は商店街・小売市場の減少・衰退化傾向の要因を次のように整理している。

（構造的要因）消費者ニーズの変化への対応の遅れ。／経営者の高齢化、後継者不足による経営意欲の減退。／空き店舗の存在が市場の機能性を失わせ一層の衰退を招くという悪循環。（震災の後遺症）建物再建の困難性。／マンション建設。／長期にわたる街の復興事業等に対し、「商業復興」が待てない「時間」の問題。／近時の不況による消費低迷。

そして震災前に比べメニューが多様化している商業振興事業制度の説明とともに、メニューが生きるかどうかは使い手次第という指摘がなされ、店頭に物を並べるだけではすまない時代においては、地域性に対応することの重要性が述べられた。

その後、会場からも様々な発言がなされた。ここでも多くの方から、個店およびその集積体としての商店街の地域密着性とそれに応じた独自性が重要であるという意見をいただいた。



■歴史的建築物の保全・活用について～旧乾邸を通して～

河野　泰則（兵庫県ヘリテージマネージャー）

旧乾邸は、昭和11年に乾汽船社長・乾新兵衛氏の自宅として建てられた鉄筋コンクリート造及び木造２階建ての洋館で、約3,900㎡の敷地に延べ約770㎡の建物が建っています。和洋折衷をうまく簡素にまとめた外観もさることながら、細部のディテールにこだわりながら重厚感を出している内部空間のデザインには目を見張らせるものがあります。設計したのは、神戸旧居留地にある商船三井ビルや先般国の登録文化財に指定された大阪船場にある綿業会館などの設計で知られる、関西を代表する建築家・渡辺節（1984～1967）です。

この建物も阪神・淡路大震災で被害を受け、和館部分は全壊したため撤去されましたが、幸いなことに、洋館部分は倒壊を免れ、最小限の補修を行い維持管理されています。しかしながら、この土地は、平成５年に先代が亡くなった際に、国に相続税として物納されており、その当時は神戸市が買い取って活用する計画でしたが、震災等による財政難で計画は頓挫し、現在は、国の所有物を神戸市が委託を受けて管理している状態です。買い取りの話については、当面保留になっていますが、このままでは近いうちに競売にかけられる運命にあり、存続がかなり危ぶまれています。

さて、これまで建物の保存の話というと、行政に要望するスタイルがよく取られてきたように思えますが、現在の行政の財政状況では、とても対応できるようには思えません。もちろん地域の文化を大切にするという観点から行政の役割には大きいものがありますが、今こそ、私たち一人一人がまちや建物に対する想いや愛着を大切にしながら、「自分にできることは何か？」と問いかけながら行動することが重要ではないでしょうか。財力のある人はお金を出す。才能のある人は智恵を出す。これといったものを持たない人は掃除ボランティアなどとして汗を出す・・・など。（かく言う私は、年末ジャンボ宝くじ売り場へ・・・）そして、その輪が広がり繋がっていくことによりいろんな人の想いの結集として建物が残り、地域に根ざした文化財（宝物）として保全・活用される。などというような事は単なる夢なのでしょうか。

また、旧乾邸のある住吉・御影付近は、御影石の石積塀と樹木や水路などがうまく調和した「地」としての景観が残されている地域です。「図」としての建築物（まだいくつものすばらしい建築物が残っている）の保全・活用を図ることと併せて、震災でなくなってきた神戸・阪神間の「地」としての景観を守り・育てていくことも重要なことでしょう。

最近行われている旧乾邸の見学会には一般の方々が多く来られ、建物の素晴らしさに対する感動とともに、存続の危機に驚き惜しむ声が聞こえてきます。

その声を力に、近いうちによい知らせが報告できますように・・・。

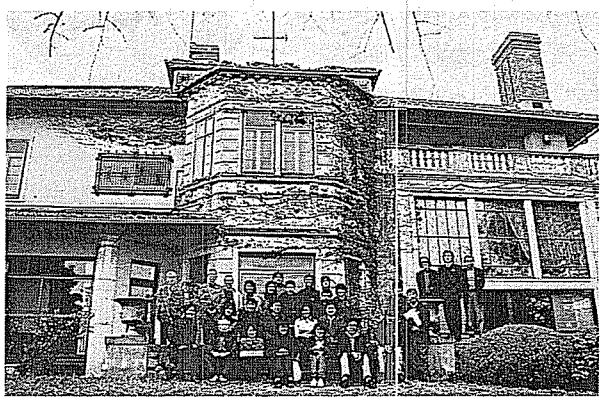
阪神間倶楽部　第５回研究会（第７回準備会）の記録

○日　時：2003年11月23日（日）13：30～
○場　所：旧乾邸
○参加者：約30名

13時半に神戸市の河野泰則さんのお話を聞き、その後邸内と庭を説明を聞きながら見せていただきました。15時半には神戸港を見下ろせるゲストルームにて小林郁雄さんの阪神間の住宅地についてのお話を聞きました。



小林郁雄さんの阪神間の住宅地についてのお話
（資料：都市住宅 7411　特集●田園都市ー阪神間）



旧乾邸の前で記念撮影

夜の小さなあかり（1）

別れの夜

中川　紺

社員数十名の会社で、俺とワタルは同期だった。転職組の俺の方が五歳上だったが、話が合うせいか、年齢差などまったく感じなかった。お互いに独身だったこともあって、仕事の帰りによく飲みにいった。俺はワタルの薦めるワインの銘柄を少しおぼえ、あいつは芋焼酎がロックで飲めるようになった。

そのワタルが出張先で自動車事故に巻き込まれて帰らぬ人となった。

●●

少し足下がおぼつかない。月もかすんで見える。赤ワインのせいだろうか、口の中が苦い。もう終電もない。お通夜が終わってから何時間飲んでいたのだろう。そう思いながらあてどなく歩く。寒さは感じなかった。

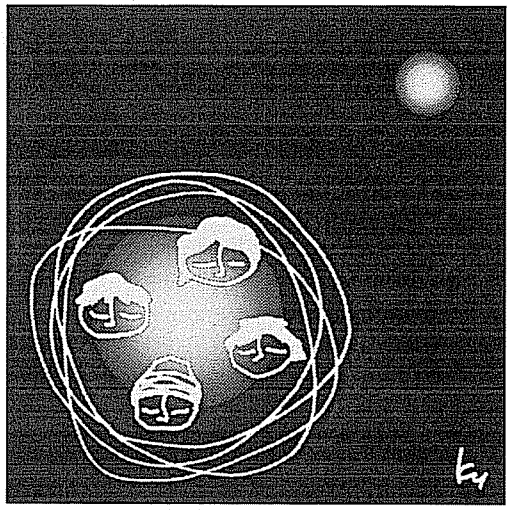
いつの間にか街路樹とビルが続くオフィス街を歩いていた。時々通るタクシーに空車は見当たらなかった。曲り角でふと路地の方を見ると、少し先に小さなあかりがともっているのが目に入った。ぼんやりと分かるのは工事中のビルの一階らしいということ。

（こんな時間に何だ？）

まさか火事というわけではあるまい、と思いながらも気になってそこへ近づいた。少し酔いも覚めてきていた。

●●

男が四人に女が一人。年齢は高校生くらいだろうか。ビルの一階は半分くらいがオープンスペースになっていて、そこで大型の懐中電灯をいくつか置いて茶色い髪の男の子たちが一心にステップを踏んでいた。髪を短くした女の子は踊りに加わらずに傍に座っている。音楽はかけていないのにぴったりとした呼吸でしなやかに動いている。俗にいう「ストリートダンス」の部類であることは俺にも分かった。練習の場を求めて毎晩いろいろなところにダンスグループが現れるというのは知っているが、さすがにここは工事中のビルだ。ほとんど完成しているから危険性は少ないにしろ、これはどう見ても不法侵入なんじゃないか。しかし注意するのも多少の勇気がいる。俺は警察に通報するのが妥当かと思ってコートのポケットの携帯を探った。



●●

「タツキ、見える？」

女の子がぼそりと言った言葉が、冷えた空気を伝わってはっきりと聞こえた。よく見ると彼女は手に小さな写真を抱いている。顔までは判別できないが、それが「タツキ」なのだろう。

彼らは俺と同じだ。直感した。仲間を失った夜を、俺たちは共有している。

これは、彼らなりの「タツキ」への追悼なのだ。さっきから時々振り付けを不自然に感じるのは、おそらく五人で踊るべきものを四人でやっているからなのだろう。この場所を選んだことも意味があるのかもしれない。

勝手な想像をしながら、俺は手にとった携帯を見つめて、それから彼らの無言のステップに視線を移し、そのまま電話をポケットにしまった。彼らの別れを邪魔する権利は俺にはないだろう。

（お前もそう思うだろ？）

声に出さずに、ワタルに問いかけた俺は、彼らに気づかれないようにそっとその場を離れた。

（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第３５回連絡会報告

今回は若手ネットの担当で、**「若手のチカラ～まちづくりのチェンジアップ～」**をテーマとして、12月19日(金)こうべまちづくり会館にて行われました。報告は以下の通り。

①「六甲アイランドクリーンアップ大作戦」／松原永季（スタヂオカタリスト）

②「灘・まる洗いプロジェクト」／中川啓子（灘区地域活動支援コーディネーター）

③「住吉浜手まちづくりわいわいフェスタ」／山本和代（さくらデザイン工房）

④「地域と人のつながりづくり～『灘の楽芸会』の試み～」／田中正人（都市調査計画事務所）

まず吉川健一郎さん（コー・プラン）より、今回は“ど真ん中、直球”ではないまちづくりの取り組みの報告を行い、まちづくりの領域の広がりや新たなきっかけとしての可能性について議論したいという主旨説明がありました。

松原さんからは、人工島の六甲アイランドで横行している落書きを、島民の参加できれいにする取り組みについての報告がありました。**中川さん**からは、阪急六甲駅前の歩道橋を多様な市民参加と協働（地域住民組織、子供、地元学生、支援企業、周辺店舗など）できれいにする取り組みについて報告されました。　**山本さん**からは、震災をきっかけにできたまちづくり協議会で、手作りの祭りやイベントを積み重ねて“市民力”を培ってきている様子について語られました。　**田中さん**からは、震災復興再開発地区に隣接するまちづくり協議会を母体に近年取り組まれている「楽芸会」（音楽やダンスなどの市民参加の手作りイベント）について語られました。また、**オオカワアキラさん**（神戸芸工大）からは報告の感想と、自身が行っているStudents Partnership Networkについて語られました。

討論では、「祭りなどは刹那的で地域になぜこんなにお節介するのか、まちにカタチとして残らない」という後藤さんの意見に対して、まちづくりの火付け役としてのコンサルタントの役割、予防的な意味としての地域の取り組みの有効性、などの意見が若手を中心に出されました。

（中井都市研究室　中井　豊）

■ 情報コーナー

●１．１７ひょうごメモリアルウォーク２００４

・日時：1月17日（土）7:00～15:00

・場所：山手幹線（山手ふれあいロード）及び神戸東部新都心

・内容：

〈山手ふれあいロードウォーク〉西宮市役所、県立文化体育館（神戸市長田区）を起点とし、神戸東部新都心を終点とする２ルート、５コースを歩く。

他に、〈防災訓練〉〈追悼の集い〉〈交流広場〉が行われる。

・問合せ：1.17 ひょうごメモリアルウォーク実行委員会（TEL.078-360-8282、FAX.360-8292）

●大大特第４回検討会

大都市大震災軽減化特別プロジェクト

「地域経済復興支援方策の開発研究」

・日時：1月20日(火)18:30～21:00

・場所：こうべまちづくり会館（神戸市中央区元町通４丁目）

・テーマ：地域経済再生（内容の詳細は未定）

・問合せ：まちづくり(株)コープラン（TEL.078-842-2311、FAX.842-2203）

●Memorial Conference in Kobe IX

～阪神・淡路大震災の教訓を世界に発信する会～

・日時：1月24日（土）9:30～17:00

・場所：人と防災未来センター１階特設会場（神戸市灘区脇浜町1-5-2、TEL.078-262-5060）

・内容：〈ﾃｰﾏｾｯｼｮﾝ「私たちの復興まちづくり」〉あいさつ／河田惠昭（京都大学防災研究所巨大災害研究ｾﾝﾀｰ教授）、証言発表

〈ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ「私たちの復興まちづくり」〉ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ／小林郁雄（阪神大震災復興市民まちづくり支援ﾈｯﾄﾜｰｸ）、ﾊﾟﾈﾗｰ／清水光久（真野地区まちづくり推進会）、佐藤厚子（六甲道駅北地区まちづくり連合協議会）、倉本佳世子（富島を考える会）、宮定章（まち・コミュニケーション）、坂和章平（弁護士）、中川啓子（灘区地域活動支援ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）

〈ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ「鼎談・震災９年のまとめと証言」〉笹山幸俊（前神戸市長）、土岐憲三（立命館大学教授）、小林郁雄

・問合せ：京都大学防災研究所巨大災害研究センター内 メモリアルコンファレンス事務局（TEL.0774-38-4273、FAX.31-8294）

●　きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm

◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局

〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内

TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp

銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129

編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2004年1月25日発行

月刊

きんもくせい

04年1月号
(50+36+NO. 10)

発行：阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■地縁と知縁の協力を　地域と行政を変える柱に

佐藤　三郎（月見山連合自治会事務局長、西須磨まちづくり懇談会事務局長）

阪神高速3号神戸線下り若宮インターを過ぎ、大きく右へ曲がると約1キロの上り坂が続く。この高架下を流れる天井川から、約3キロ西の一の谷の古戦場あたりまでの地域(面積約3平方キロ、人口約2万）が西須磨まちづくり懇談会の活動エリアである。この西須磨地域の東部約四分の一が、月見山連合自治会の活動エリア（人口約五千）である。

天井川公園〈面積一万平方米〉の中にある月見山自治会館からは、北の里山へも南の海辺へも徒歩10分の距離にある。まちの中にある平安貴族や源平合戦をめぐる史跡、武庫離宮や財閥別荘の跡地は公園となり、自然や歴史の豊かさを実感させてくれる地域である。

それと同時に、耕地整理や区画整理も行われず、第二次大戦中の空襲からも焼け残った部分が多く、阪神大震災では全半壊率６１％に達する激震地域であった。

定年2年前の91年に自治会活動に係わり始めて13年が経過した。震災直後、地域内19町から自ら手を上げた82名で西須磨まちづくり懇談会を結成、「住民参加」から一歩すすめ「住民主体のまちづくり」を目ざして、道路・環境・福祉の3つの専門部会を設けて活動を続けた。道路部会は3本の都市計画道路事業化（当初予算220億円）に対し、環境部会は天井川公園の復興計画（予算2億円）に対し、福祉部会は地域住民相互間での家事援助を中心とする助け合いに対し、取り組みを続けている。

93年4月、それまで十数年にわたり会長職にあったU氏が病気で退任、副会長であったＩ氏が会長となった。「衆智の結集」「陋習の打破」の呼びかけが励ましとなり、新しいメンバー、特に女性の参加が増える中で、自治会の新しい動きが拡ってきた。

95年1月の阪神大震災は、自治会活動の枠組を大きく変えていった。道路問題での行政と住民のきびしい対立も、公園復興や福祉分野での協働体制が進む中で、少しずつ変化し始めた。三本の都市計画道路のうち、一本は完成、新設の一本は手つかず、残る一本は4～6車線を2車線に変更しての詳細設計がほぼまとまり、整備作業が始まっている。

震災後、旧い歴史を持つ自治会・町内会と、特に震災後多く生まれてきたＮＰＯとの協力体制が、月見山自治会エリアで始まった。その拠点として、震災復興基金からの助成を自治会が受けとめ、いなば公園内に建設した「いなば安心コミュニティプラザ」では、各種市民団体が参加するふれあい協議会による自主運営が始まり4年が経過しようとしている。

地縁系とテーマ系の市民団体の協力体制を地域活性化の柱にしたいとの取り組みは、様々な問題を含みながらも、一歩ずつ確実に前進している。新旧の性格や立場の異なる団体の協力がめずらしいと、03年では守山・犬山・宝塚・名古屋・豊中等、０４年早々には奈良・豊田等の各市でのまちづくりフォーラムで、私達の事例報告が求められているのは嬉しい出来事である。

最も身近な行政がスローガンだけでなく、本当に変わって欲しい。これが今の私達の願いである。

＊　＊　＊

次号は、被災地ＮＧＯ協働センターの細川裕子さん、お願いします。

（小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→中島克元→中村順子→海崎孝一→某市某職員→前田裕資→佐藤三郎→）

「三木城下町まちづくり協議会」の紹介

－まちづくり支援事業が立ち上げの支えとなったまちづくり協議会－

後藤　祐介（ジーユー計画研究所）

はじめに

三木城下町まちづくり協議会は、兵庫県三木市の中心市街地を対象に、城下町としての特性を生かした住み良く活力あるまちづくりを目指し、平成 14 年 11 月に立ち上がった。面積は約 175ha、約 3,300 世帯、人口約 9,000 人で構成されており、比較的大きな区域を対象としたまちづくり協議会である。

本稿では、旧市街地域の活性化を目指す、このまちづくり協議会の立ち上げの経緯を中心に現在の活動状況等を紹介することとする。

１）まちづくり協議会立ち上げの経緯

当協議会立ち上げの発端は、当地区の長年の懸案である滑原(ナメラ)商店街活性化のための平成 13 年の本町・上の丸まちづくりを考える会の取組みからである。

この取り組みのまちづくりアドバイザーとして私が担当することになり、ひょうごまちづくりセンターの支援を得て本町・上の丸まちづくりを考える会として勉強会をスタートさせた。

ナメラ商店会のメンバーと、まちの活性化を中心に勉強会を重ねた結果、当地区は湯ノ山街道をはじめとする歴史街道や三木城跡公園、美の川等のまちづくり資源が豊富にあり、まず、三木城下町としての魅力づくりから取組むことが有効との方向づけから、平成 14 年に入り範囲を広げてまちづくり協議会を立ち上げるべく準備にかかった。

この時点で、三木城下町活性化協議会立ち上げのため、準備会として組織づくりを進めていったが、この過程で区域について三木城下町の「上」地域の約 10 町（自治会）に対し、「下」地域の約 10 町を加えて取組むべきだとの意見が集約され、最終的に約 20 町の自治会が母体となって三木城下町まちづくり協議会を平成 14 年 12 月に設立した。

○まちづくり協議会立ち上げの経過

年・月・日	事　項
H13. 2	・三木市がひょうごまちづくりセンターにまちづくり支援をエントリー
H13. 5～	・本町・上の丸のまちづくりを考える会として支援事業を申請
H13. 6. 23	・本町・上の丸地区アドバイザー派遣
H13. 8～12	・考える会として５回の勉強会／月１回
H14. 1. 25	・三木城下町活性化協議会の立ち上げのための準備会をスタート
H14. 2～11	・準備会として６回の協議
H14. 11. 18	・三木城下町まちづくり協議会設立総会
H14. 12. 11	・第１回役員会（これにより月１回役員会を開催）

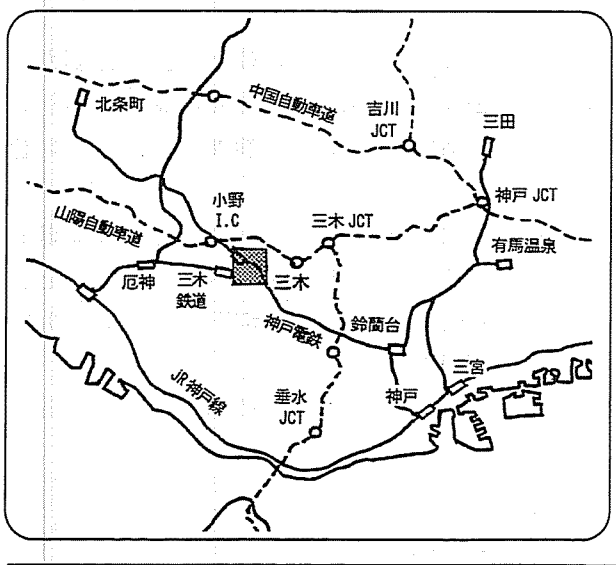
２）兵庫県と三木市独自の街づくり支援制度の併用

当初の本町・上の丸まちづくりを考える会においては、平成 13 年度事業として、ひょうごまちづくりセンターからアドバイザー派遣の助成を受けた。

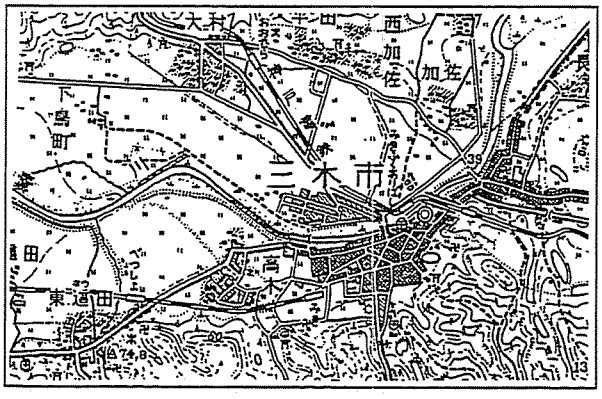
平成 14 年度の三木城下町まちづくり協議会の設立にあたっては、前半の立ち上げ段階は、ひょうごまちづくりセンターよりアドバイザー派遣を、後半はコンサルタント派遣を受け、まちづくり活動助成は三木市独自の街づくり活動助成の適用を受けた。

平成 15 年度はまちづくり協議会助成は、ひょうごまちづくりセンターと三木市街づくり助成制度の併

○位置図



○昭和初期の三木中心市街地図



用で受け、コンサルタント派遣は三木市独自の街づくり助成を受けている。

このように当地区のまちづくり活動の支援は、ひょうごまちづくりセンターの助成と三木市独自の街づくり助成制度が併用して活用されている。

※三木市街づくり助成要綱

施行：平成13年6月1日　所管：三木市都市整備課
主な支援内容：１．初動期のアドバイザー派遣　２．初動期のコンサルタント派遣　３．街づくり活動組織の立ち上げ支援　４．街づくり活動支援　５．活動期のアドバイザー派遣

３）三木城下町まちづくり協議会が目指すこと

当まちづくり協議会が目指すことは、衰退傾向が著しい旧市街地の商店街を中心とした活性化である。

当地区は美の川や三木山に代表される「自然」と湯ノ山街道や明石みち等の歴史街道に代表される「歴史」及び三木の金物としての地場産業に代表される「伝統」があり、これらの資源を生かした活性化が期待されている。また、生活道路の整備や老朽家屋の改善、少子高齢化への対応としての都市環境整備やふれあいのまちづくりの取組みも期待されている。これらを包含してまちづくりの基本目標を「**自然と歴史・伝統を生かしたコミュニティ豊かな活力のある街**」としている。

４）まちづくり協議会の進め方

当まちづくり協議会の特徴の一つとして、当地区が歴史ある中心市街地であることにより、三木市の行政課題が多く積み上げられていることがあげられる。即ち、住民主体の街づくりに取組むことにより行政と住民の協働のまちづくりが円滑に進められる可能性を秘めている。これを受け、まず当地区の「まちづくり基本構想」の策定にあたっては、三木市の上位計画を充分反映した「まちづくり構想」の策定に努めることとしている。また、一方で身近なところから「まちづくりを実行していく」ことも留意し、歴史街道の説明看板を設置する等の「１町１事業」のプロジェクトに取組んでいる。

５）まちづくり協議会の活動状況

当協議会は、平成 14 年 11 月に発足以来、丸一年余りが経過したところであるが、活動状況全般としては、官民協働のまちづくりを進める中で、考える作業としての「まちづくり構想」の共有と「身近なことから実行」の方針に基づき、順調に盛り上がって来ている。

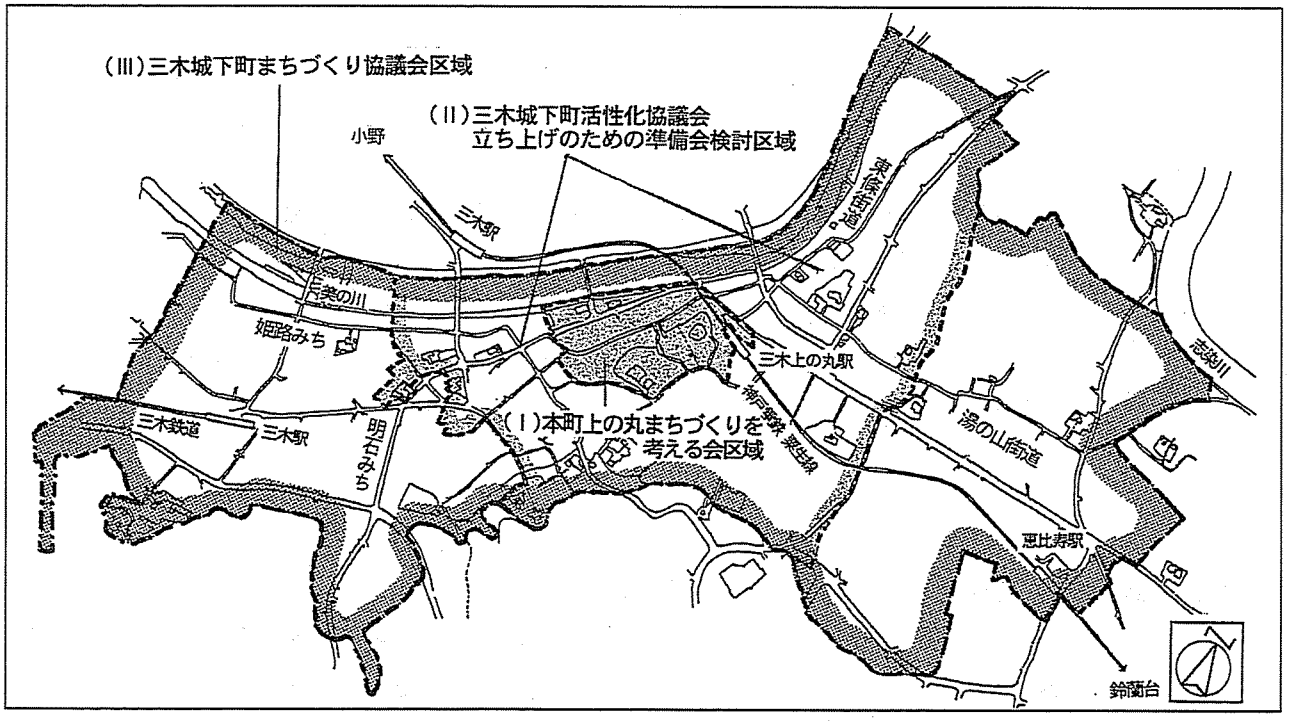
この他、まちづくりニュース（かわら版）としての「**釜山城**」の発行（４回ー約3,500全戸配布）、まちづくりセミナーの開催（２回）、まち並みウォッチングの開催、先進地バス見学会の実施（２回）、まちづくりアンケート調査の実施等を行ってきた。

６）今後の課題

当協議会は、立ち上げに１年半をかけ、旧市街地の歴史のある 20 町を母体として組織体制が敷かれており、一応順調に進んでいる。しかし、今後は各町自治会において、区長等に異動がある場合、一定の連続性が必要なまちづくり協議会にあって、運営上の問題が出てこないかと懸念されている。

同じく、当地区のような活性化を目指すまちづくり協議会にあっては、「継続的な取組み」が不可欠であり、そのため、行政の支援制度≒「三木市街づくり助成要綱」の実状に応じた対応が期待される。

○まちづくり協議会組織等の検討区域図



■『コンパクトシティ』を考える5－大西洋を渡ったコンパクトシティのＤＮＡ

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

１．中世の都市時代の終焉と国家優先の時代

『都市の時代』であったヨーロッパ中世時代は、ローマ・カトリック教会の精神支配の網の目がめぐらされ、世俗の神聖ローマ帝国の集権力が弱く、ヨーロッパが緩やかな統合体として続いた時代であった。その特徴は、国境もはっきりせず、国家の主権がどこにあるかが明確でなかった。このため、この時代の人々はどこの国の国民かという自覚はなく、問題としたのは自分の属する小さな共同体としての村や都市であった。

都市の時代の終焉は、中世の後期に、封建領主の中から、力をつけ集権化した地域国家の台頭から始める。そして、1517 年カトリック教会の免罪符の販売に疑問を抱いたルターにより始まった宗教改革により決定的となった。

ルターの改革は、プロテスタントの３原理により訴えた。第１は、心の平和は教会に対する善行という行為ではなく、「信仰のみ」によって神から与えられるとした。第２は、法皇や教会が持つと言われる権威に根拠はなく、「聖書のみ」を最高の権威とするものである。第３には、人間は完全に自由であり、他の人々を愛し、これの奉仕することにだけ縛られるとする信者の生き方の「万人司祭性」を示唆した。スイスでは、教会（宗教）と国家（政治）を分離し、教会権の自立による厳格な規律を求めるカルバン派が生まれた。こうした宗教改革の波は、瞬く間に新興市民層や中産的生産者に担われて各国に広まっていった。力をつけてきた封建領主の王権は揺さぶられ、新教か旧教かを巡る争いが勃発して、西ヨーロッパ全体が３０年戦争(1618-1648)に巻き込まれていった。戦争は、カトリック側の敗北に終わり、神聖ローマ帝国は弱体化し、スイスやオランダは独立し、各国と諸侯国は独自の宗教の選択が認められることとなった。

ここに完全に中世時代は終焉し、諸国王のもとにそれぞれの領土を確定し、主要言語と、独自の宗教、民族を持つ主権国家である「国民国家」システムが胎動を始めた。相当数の中規模国家がバランスよく競い合う独特の新たな国際システムの誕生である。これらの国家の中から、新しい軍事技術を取り入れた常備軍と、国王の意志を伝える集権化した行政組織と官僚組織を装備した絶対君主国家が確立し、やがて市民革命を経て、近代国家へ成熟していったのであった。ここに、ヨーロッパの都市の時代は終わったが、そのＤＮＡは大西洋を渡り新大陸で新たな芽を育んでいた。

２．海を渡ったコンパクトシティのＤＮＡ

絶対君主国となった英国では宗教改革によって、ローマから独立した英国国教会を実現した。プロテスタントに区分されるが、国王が首長となり、カトリック以上に体制的な宗派であった。その中で、国家による締め付けに反発し、聖書だけを信じて「ピュア」な教義を確立すべきとするカルバン派の新興宗派がピューリタンであった。反体制宗派として激しく弾圧された。弾圧されたピューリタンは２つの道を選んだ。

第一は、信者を増やし、王権を制限し国民の権利を主張する他の政治勢力と手を結び、1642 年から始まるピューリタン革命を起こした。

第二は、本国からの分離派で、自由を求めて北米大陸へ亡命した。英国はフロリダ半島以北の北米大陸に国王の特許を与え 1607 年のヴァージニアを皮切りに植民地の建設を進めていた。1620 年メイフラワー号に乗った 102 人の入植者は、ニューイングランドのプリマスに上陸した。上陸に先立ち「メイフラワー誓約」を結んだ。それは互いに自由な人間として、同意に基づいた法の支配を受け、自治的政治団体を構成する契約であった。最初の冬に病気と飢餓で半数が死亡し、残ったものが苦難に耐え植民地の基礎を築き、彼らは「巡

礼始祖（ピルグリム・ファーザーズ）」と呼ばれた。その後、1630 年に国王の特許状を得て設立されたマサチューセッツ湾会社によって、ピューリタン革命までの 10 年間に約 2 万人の「大移住」が続き、ボストンを中心に植民地を建設し発展した。移住したピューリタンは会衆派と呼ばれ、団結力が強く、排他的で、かつ政治性を持っていた。

開拓は「タウン」と呼ばれた村落共同体によって進められた。移住者がタウンの住民となり、中心には教会が建てられ、住民の生活は宗教面から規律が求められた。タウンの自治が重んじられ、アングロ・サクソン流の必要な秩序の維持は、地方共同体が保障し、外からの余計な干渉を排除する「ローカリズム」がそのまま移植された。運営は自由民全員が出席するタウンミーティングにより決定された。実質的には、タウンの住民資格を、共通する信仰や倫理観を持つ人に限定した排他性が強い小共同体であった。集会においての決定は、慣行に従い既得権を尊重する全員一致が原則であった。そのため、植民地政府の介入による権利や自由を侵害するタウンの調和を乱しかねない政策は、決定を回避するか、無効として拒否を表明するのが原則であった。

18 世紀になるとタウンは成熟し、社会の流動化と、人口の増加などによって、利害の対立が顕著になり、既得権は挑戦を受け、伝統的慣行での平和的な解決は難しくなった。そのために、共同体の中に生じた各分派を独立した共同体として認め、それぞれの中でコンセンサスを達成する方策がとられた。コンセンサスの中身は厳格でなく、幅のある緩やかなものとし、各自が責任を持ってあたるものであった。それでも解決できない場合には、個々人が訴訟において解決するに任せ、判例はコモン・ローとして解決の基準となった。

これは、タウンの求心力を喪失させたが、カルバン派の「神に選ばれたものは神の意に適い規律正しく、隣人に尽くす」とする『神の予定説』に従う成員の調和と一体感でカバーされた。そこから逆に、個人の勤勉と節約の倫理に基づき、上昇を目指し、競争に励むことが広く容認されることとなった。M．ウェーバーが見た「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の原点である。また、共同体の中に一つの共通目的で集まる排他的集団としてコミュニティ(Common+Unity)が認められ、地域はそれらを多元的に包含する緩やかな集合体へと変貌していった。「自分たちのことは自分たちで解決する」ニューイングランドでの植民地の展開が、その後のアメリカ精神の形成に大きな影響を残した。

北米に展開した英国植民地は、基本的には国王の統治大権の下にあったが、地理的距離と官僚制の未発達のために、統合する機関もなく、13 の植民地はばらばらに政治的・経済的発展成長した。18 世紀半ばに本国はそれまでの『有益な怠慢』を転換し、統制や課税を強化したため、「代表なくして課税なし」等を訴え抵抗運動を続けたが、1775 年に戦争に突入した。開戦当初は、各植民地は共通の民族・言語・歴史的伝統を持たず、一つの国家としての独立の意識が弱かったが、戦争を共同で戦う中、連帯することが必要と認識し、76 年に「独立宣言」した。それは単なる独立ではなく、連邦共和制の国家を創造し、自由、平等、立憲主義、人民主権を国家理念とした。83 年に戦争が終了し独立が承認された。13 の植民地がそれぞれ独立共和国（州）であり、連邦制により国家としてまとまりを持ち、連邦政府の権力は極力抑えコンパクトな政府とすることとした。

アメリカ合衆国は、ここに誕生した。共和制という政治体制は、ギリシャ・ローマ時代以来である。中央の集権力が弱く、自治権を持つ各州の緩やかな統合体は中世ヨーロッパを彷彿させるものであった。

ギリシャやローマの都市国家を経て、中世城壁都市で成長したコンパクトシティの DNA は、大西洋を渡り北米大陸に組み込まれた。その後アメリカの地で、新たな進化を遂げていくのである。

■菜の花プロジェクト顛末記（その５・最終回）

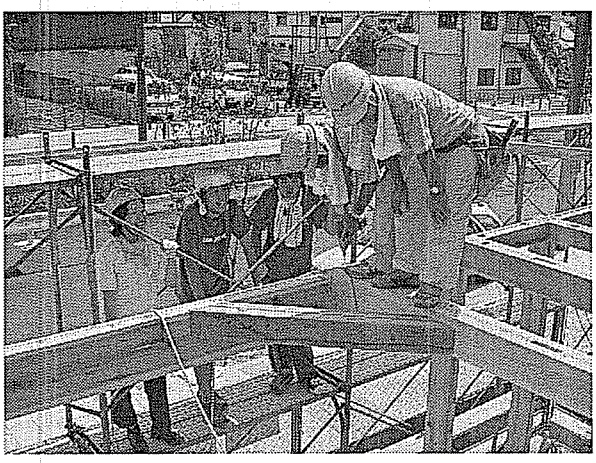
大塚　映二（神戸市）

まちおこしの花が咲いた

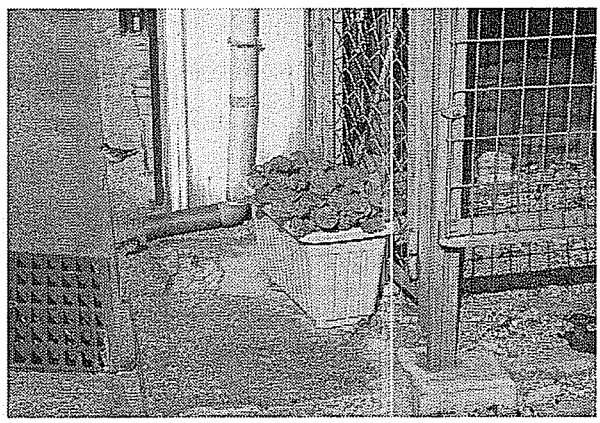
菜の花プロジェクトは、震災後に神戸市の「西出・東出・東川崎地区」で展開されてきた一連の「歴史を活かしたまちづくり」の一区切りをなすものであった。

当地区は狭隘道路と老朽木造家屋が密集した地区であり、震災以前から住環境の改善事業に取り組んできたが、震災後しばらくしてからは、地域の人々のよりどころとしてわがまちの歴史を活かしたまちづくりも進めてきた。具体的には次のようなものがある。

・まちづくり協議会活動の一環で「入江の歴史委員会」を結成（2000年９月）
・「潮の香りと歴史をたどるまちなみウォーク」を開催（2000年10月）
・「入江ぶらり探訪マップ」（地区の史跡紹介）を発行（2000年10月）
・セルフビルドで「まちなか倶楽部」を建設（2001年10月完成）
・「アートイベント／まちのリズム場所のリズム」開催（2002年３月）
・「高田屋嘉兵衛本店の地記念碑／ポケットパーク」整備（2002年４月完成）
・「町工場マップ」発行（2003年３月）



▲セルフビルドで建てた「まちなか倶楽部」（工事中）



▲さりげなく育てられる菜の花の苗

＜継続は力＞なるか？

このような積み重ねの上に、高田屋嘉兵衛ゆかりの菜の花でまちじゅうを飾ろうとしたのが、菜の花プロジェクトであった。同時に、長年進められてきた都市計画道路湊町線の開通を記念するものでもあり、併せて、まちなかになお残る空地活用の試みでもあった。

＜花育ては、まち育て、夢そだて＞を合い言葉に、住民、専門家、行政マン、その他ボランティアのみんながいっしょに育て、花開くことができた。汗を流してくださったみなさん、本当にありがとうございました。

さて、大きく花開いたあとはどうなっていくのであろうか？

現状はというと、昨年のようなパワーあふれる取り組みは行われてはいない。もとの草ぼうぼうの空き地に戻ったところも少なくない。・・・だが、確実に次の芽は育っている。目立たないが、地区のあちこちに菜の花の苗を見ることができるのだ。住民のみなさんが菜の花の「里親」となって、ていねいに育てていることを見てとれる。継続は力なりと言うが、継続させることがどれほど大変か。あの町に行けば菜の花がさりげなくも誇らしく咲いている・・・地域の花として確実に根付いていくことを願っている。

（顛末記は今回をもって終わります。）

夜の小さなあかり（2）

バスに乗って

中川　紺

真夜中の五時すぎに、私は待っていた。

バス停には他に人はいない。手袋をした手をこすりあわせていると、かすかなエンジンの音がした。真っ暗な道の先から二つのヘッドライトがゆっくりと近づいてきて、私の前にぴったりと停まった。

バスの車内にはすでに十数名の客がいた。中ほどの座席で、緑のマフラーをした弟がこちらに手を振っているのを、私はすぐに見つけた。

「今年は見えるかな」

隣に腰を下ろして私は言った。

●●

近所の山にのぼって初日の出を見る、というのは五年ほど続いている家族行事だ。三年前までは両親と四人だったが、父母が急病と事故で相次いで他界してからは、たった二人きりの家族になった弟と、この一年に一度のイベントを続けることを決めた。

「仕事忙しい？」

「うーん、まだ一年目だしなあ」

「あんたがお父さんと同じ銀行員の道に進むとはねえ」

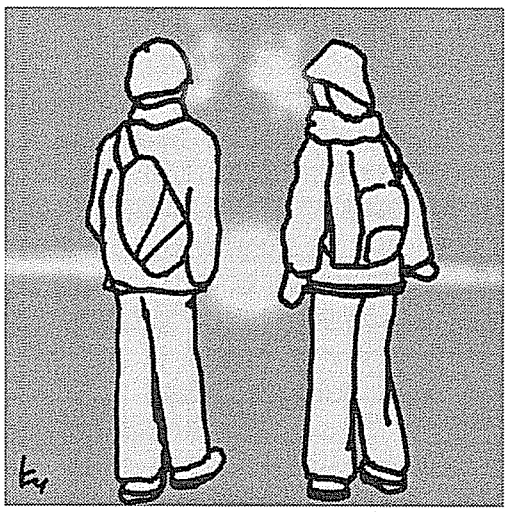
毎日同じ時間に出社していた父を思い出す。

「いいだろう、別に」

「ご飯、ちゃんと食べてんの？」

「昼メシ以外はほとんど寮の食堂だよ」

三つしか違わない弟と、親子のような会話をしながら「お昼もパンだけで済ますのはやめなさいよ」と付け加えた。



「ねえ、何でお父さん、元旦にこういうことをしようって思ったのかな」

「さあな。ちょっとは家族っぽいことをしとこうって思い立ったか……それとも」

「それとも、何？」

「やろうっていうのをずっと言い出せなかったのかもしれない」

（そうかもしれないね）と私はかすかにうなずいた。

停留所ごとに数人が乗り込んでくるが、降りる人はいない。元旦臨時便のバスはもうすぐ満員になろうとしていた。乗客の目的地は同じところ。もちろん私たちもそこへ向かっている。

ほどなく終点であるケーブル駅前に着いた。駅前には行列が少しできていた。ここからはケーブルとロープウェイで山をのぼる。

●●

三十分後、私たちは展望台に立っていた。すでに初日の出を待つ人たちであふれている。まだ日の出までは半時間近くある。空気が澄んでいるのか、夜景がくっきりと見えた。

「今年は見えそうだな」

弟が言った。

「去年は途中で雨になったもんね」

そういえば両親と来た時も、三回とも雲が多くて、おせじにも「初日の出」と呼べる状態ではなかった。

「来年は三人で来るんだろうな」

白い息を吐きながら弟が言う。

春には私の結婚が決まっていた。弟は新しい兄弟ができることを楽しみにしている。彼と弟はやたら気が合うのである。

空が薄く赤く、染まってきていた。（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 情報コーナー

●震災１０年市民検証・９年シンポジウム ― 専門家の社会的役割を検証する

・日時：1月26日（月）13:30～
・場所：ラッセホール５階サンフラワー（最寄り駅：ＪＲ元町駅または地下鉄県庁前駅より北へ徒歩）
・パネリスト：岩崎信彦（神戸大学文学部長）、中辻直行（神戸福生会理事長）、永井幸寿（弁護士）、室崎益輝（神戸大学都市安全研究センター教授）
・問合せ：震災１０年市民検証・９年シンポジウム実行委員会事務局（TEL.0798-36-6679,FAX.36-5114）

●「灘百選の会」設立記念フォーラム

・日時：2月7日（土）13:30～15:00
・場所：灘区民ホール５階　マリーホール
・内容：①「灘百選の会」の発足について、②記念講演「『町おこし』から『町いかし』へ」河内厚郎
・問合せ：灘区まちづくり推進課（TEL.078-861-0033、FAX.861-0417）

●国際防災・人道支援フォーラム2004－大震災を語り継ぐ－（国連防災世界会議2005プレイベント）

・日時：2月8日（日）13:30～17:50
・場所：神戸国際会議場 国際会議室（ﾎﾟｰﾄﾗｲﾅｰ市民広場駅下車）
・内容：
〈問題提起〉 河田惠昭（国際防災・人道支援協議会会長、人と防災未来ｾﾝﾀｰ長）／テーマ「災害を『語り継ぐ』ことの意義」
〈事例紹介〉 ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ／室崎益輝、事例検証／「阪神・淡路大震災」村井雅清、「雲仙・普賢岳噴火災害」鐘ヶ江管一、「ﾊﾟﾝｸﾞﾗﾃﾞｯｼｭ（ｻｲｸﾛﾝ水害）」ｻﾝﾃﾞｭｰﾙ・ﾗｰﾏﾝ、他
〈パネル討論〉「大震災を語り継ぐ」ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀ／住田功一（NHK ｱﾅｳﾝｻｰ）、ﾊﾟﾈﾘｽﾄ／ｲｱﾝ・ﾃﾞｲﾋﾞｽ（英国ｸﾗﾝﾌｨｰﾙﾄﾞ大学教授）、河田惠昭、上総周平（内閣府参事官）、黒田裕子（しみん基金 KOBE 理事長）、室崎益輝
・問合せ：国際防災・人道支援フォーラム 2004 事務局（TEL.06-6348-8830,FAX.6348-0175）

●第８回震災対策技術展・学術展・シンポジウム

・日時：１月29日(木)、30日(金) 10:00～17:00
・場所：神戸国際展示場（ﾎﾟｰﾄﾗｲﾅｰ市民広場駅下車西へ徒歩10分）
・シンポジウムの内容（抜粋）

「第４回比較防災学ワークショップ－みんなで防災の知恵を共有しよう」

29日10:00～16:00、30日10:00～12:00 基調講演「WTCテロ災害の教訓」ﾃﾞﾋﾞｯﾄﾏﾝ、報告「日米共同研究による都市地震災害の軽減」他、ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ「これからの日米国際共同研究のあり方」ﾓﾃﾞﾚｰﾀｰ／河田惠昭、他

「地域に文化財を守る活動を」

29日 13:00～16:00、基調講演「文化財保護にとって地域住民の活動の重要性」室崎益輝、他

「復旧・復興から減災・防備へ」

29日 13:00～16:00、講演「台湾集集地震後の住宅再建過程からの教訓と課題」呉毘茂（台湾政府復興委員会）、「阪神淡路大震災の住宅再建過程からの教訓と課題」垂水英司（こうべまちづくりｾﾝﾀｰ）、ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ「次の大地震に対する減災と事前防備－神戸大学都市安全ｾﾝﾀｰによる問題提起と討論－」

※上記の他に 29,30 日両日に計１２のシンポジウムが開催されます。
・主催：震災対策技術展・学術展・シンポジウム実行委員会（TEL.078-303-0029、FAX.302-1870）

◇◇ 書籍の紹介 ◇◇

「火の鳥の女性たち―市民がつむぐ新しい公への挑戦―」（中村順子・森綾子・清原桂子 共著、ひょうご双書、６００円）

復興に顕著な活動をされてきた女性３人の思いをつづった本が出版されました。お問い合わせは、兵庫ジャーナル社（TEL.078-333-7560）まで。

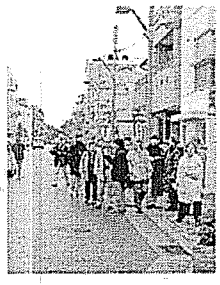
◆「ｉウォークもどき」

1999 年１月 17 日から始まった「こうべｉウォーク」を覚えておられる方も多いことと思います。

今年、2004 年１月 17 日（土）朝９時に大国公園を出発し、御菅までの約 10km を約 40 名で歩きました。

雪まじりの寒さではありましたが、当時とすっかり様変わりした「まち」を清々しい思いで見学し、御菅では新しい公園と集会所開きに参加する企画は山口一史さんの案でした。あのころと同じ皆のカンパはＣＯＤＥを通じてイランに届けられることになりました。

（まちづくり（株）コー・プラン／天川佳美）



鷹取商店街にて

●　きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http：//web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局

〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2004年2月25日発行

月刊 きんもくせい

04年2月号
(50+36+NO. 11)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■もう一つの世界は可能だ！？

細川　裕子（被災地NGO協働センター）

「世界社会フォーラム」（WSF）をご存知だろうか。通称「ダボス会議」と呼ばれる「世界経済フォーラム」は、世界の指導的な経済人、政治家の自由な交流、意見交換の場として毎年1月下旬にもたれ、実質的にグローバリゼーションの推進役を果たしてきた。これに対して、民衆の視点に立った市民団体等の自由な意見交換とネットワーキングの場として、「もう一つの世界は可能だ」をスローガンにして呼びかけられたのがWSFである。2001年1月にブラジルのポルトアレグレで開催された第1回目には、世界中から2万人が集まった。以後毎年、ダボス会議とほぼ同時期に開かれ、4回目の今年はインド・ムンバイに12万人（内インドから9万人）が集い、日本からの参加者も700名にのぼった。

6日間の開催期間中には、様々なカンファレンス、パネルディスカッション、セミナー、ワークショップが開かれ、まさに世界中の社会運動団体の「デパート」ともいう多彩なプログラムが満載だが、1回目から根底に流れるテーマは「富と民主主義」である。そもそも、WSFを第三世界で開くことを仕掛けたフランスのATTACは、資本投機行動を抑制するための為替取引税の導入や、タックス・ヘイブンの廃絶などを提唱している団体である。

また、開催地の特色で、ポルトアレグレでは農民運動や労働組合、ムンバイでは抑圧されてきた弱者層ーダリット、先住民族、難民、児童労働などのテーマが盛り込まれた。こういう反グローバリゼーション派が抗議デモという行動の場ではなく、議論する場に一堂に会することにWSFの意義がある。

このように、ダボス会議に対抗する反グローバル化の多様な運動が相互に連携し合うためのオープンなフォーラムとして出発したWSFだが、「9.11」をきっかけに米国を中心とする軍事的な支配との戦いというもう一つの課題を抱え込んだ。そのうねりは、ヨーロッパ社会フォーラムから提案され第3回WSF会場で採択した、昨年2月15日の世界反戦デーで、1000万人の反戦行動となって結実した。しかし3月20日、米英軍のイラク攻撃が開始され、イラクは未だ米軍の占領下にある。

今年1月の第4回WSF会場になったムンバイ近辺は、マハトマ・ガンジーの非暴力運動の拠点だったこともあり、米国製品のボイコット運動が呼びかけられたそうだ。アメリカのANSWERから呼びかけられている3月20日の世界反戦デーと共に、「もう一つの世界は可能だ」と信じて歩んで行きたい（ちなみに、神戸でもこの3.20世界反戦デーに呼応して、「1万人のピースウォーク」を開催しますので、是非ご参加下さい。
詳しくはhttp://www.kcc.zaq.ne.jp/lovepeace/)。

＊　＊　＊

次号は、兵庫県震災復興研究センターの出口俊一さんにお願いします。

（小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→中島克元→中村順子→海崎孝一→某市某職員→前田裕資→佐藤三郎→細川裕子→）

■震災10年目を迎えて居住者サポートの視点の変革の変革も必要

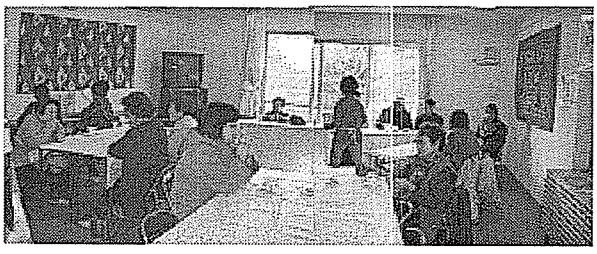
石東　直子（石東・都市環境研究室）

昨年の7月から六甲アイランドにある神戸市営復興住宅で、黒田裕子さんたちと火曜日の午後に「コミュニティ茶店」を開いている。高齢化率 44%、65 歳以上のひとり暮らし世帯率 30%という 200 戸の高層住宅である。昼間、各階の廊下を廻っても人に会うことはめったにない。コミュニティプラザを借りて開いている「コミュニティ茶店」には3時頃には 15 人前後が集まり、賑やかな話し声や笑い声が飛び交う。ほとんどが常連で 70 代後半から 80 代の方で、火曜日の午後を楽しみにしていると言う。クッキーつきの飲み物が 100 円で、子どもは 50 円である。しゃれたテーブルクロスとカップ、壁には明るい大きなタペストリー、笑顔のサポーター、町中のティルームに出かけてきたような雰囲気であるという。放課後には子どもたちもやって来て、柔らかいエネルギーを添えてくれる。私たちは運営資金の確保に頭を悩ます。食材費と集会所利用代は飲み物代で賄えるが、サポーターの交通費、活動費、備品調達や事務経費等は仲間からのカンパに頼っている。

神戸市灘区にある県営岩屋北町住宅（ふれあい住宅 22 戸と一般住宅 44 戸で、シルバー住宅が合わせて 50 戸）では土曜日の午後、神戸大学総合ボランティアセンター・灘地域活動センターの学生たちが「お茶屋いわや」を開いている。ケーキつきの飲み物が 50 円で、テーブルの上のお茶菓子は自由につまめる。2 時半頃には来場者は 30 人ぐらいにもなり、賑やかな話し声が響き、数名の学生たちも間に入っておしゃべりをする。緑茶のサービスをしたり、お菓子をすすめたり、ちょっとした学生の講話があったり、時には楽しいイベントや全員で合唱したり、みんなは時を忘れて楽しんでいる。学生のこまやかな気配りと気さくさが高齢者の気分を開放させる。

この陽だまりのような喫茶に来る人はほとんどが常連で、70 代後半から 80 代半ばぐらいの人が多い。閉じこもっていることの多い高齢者たちにとっては待ちどうしい楽しみの場である。復興住宅の高齢化がすすみ、安否確認等のためには公的支援制度のＬＳＡや高齢者見守り推進員がいる。定期的に訪問されて見守られているという受身的な安心感に比べて、自らが人の輪の中に出向いて楽しい時を過ごすという能動的な行為は、元気を持続する源である。隣人たちとふれ合い親睦を育む陽だまりのような場が身近に必要である。

震災から人々は9歳も年をとった。高齢者のこの歳月の重みは大きい。震災直後からしばらくは居住者の自立をうながすきっかけづくりとしてのサポートが必要であったが、70 代後半から 80 代の後期高齢者が多くなった住宅では、自立を促すにも限界があるように思う。自治会に活動費助成をして自らがコミュニティを形成していくのことは重要なことであるが、それは自治会運営ができるエネルギーのある居住者がいるということが前提であろう。後期高齢者が多くなった住宅では例え自治会運営がなされていても、少数の元気な人たちだけで多くの高齢者を支えるにはエネルギーが足りず、外部からのサポーターを必要とする。その外部サポーターたちの交通費や活動費に公的補助が必要である。震災 10 年目を向かえての居住者サポートの新たな視点である。居住者の中にも外部にも、自分の時間を少し割いて、高齢者等の元気アップのために活動したいと思っている人はいる。その人たちに手弁当で交通費も自前でというのでは限界がある。交通費とささやかでも時間給が保証されれば有償ボランティアとして人材は得やすいし継続もする。これらの方策は従来の住宅管理（ハードな建物管理）に加えてソフトな住宅管理と呼ぶことができよう。



コミュニティ茶店

■作麼生！スタンダード！3

小野　幸一郎（元まち・コミ代表、雲水／修行僧）

復興まちづくりが提示するスタンダードのその最たるものは、何と言っても人類最大の課題、「自治」でありましょう。自治とは実際問題として何なのか？震災後のあらゆる局面でその内容が問われていたといってもよいと思います。まぁそれも当たり前というのは、震災とは結局人間社会の真っ只中で起きた出来事だからでありますね。

さて、昨年から今年にかけての世界的な重大関心事の一つと言えば、例のイラク問題であります。「復興支援」の為にいよいよ自衛隊も派兵（派遣？）された訳ですが、この件で私がず一っと疑問に思ってるのは、「結局日本にいる（私たち）が何を問題として知るべきで、それに対して対処すべきなのか？」ということでした。

もちろん勉強すればイラクの抱える問題というのは知ることはできるでしょうが、実は私はあんまり勉強する気がおきません。何故なら私とイラクという国はあまりにも接点がなく、関係がないと思っちゃうからです。まあしかし、今はなにせ国際社会の時代ですので、そんな事を言ったらおこられますし、石油の事云々を鑑みれば全く無関係とは言えない（はず）。では、何を問題として知るべきなのか、そしてその地にいない者が何が出来るのか？

突然一体何を言ってるのかというと、私はイラク問題というのは究極、イラクの人々にせよ、それに関わる外部の人間にせよ、「自治の力」というものが問われていると思うのです。少なくともその視点を根底にもたないと最終的には、もしくはそもそもがどうあるべきなのか（だったのか）を見失ってしまうことになると思うのです。

自治の力というのは端的に言えば当事者能力です。当事者として物事を考える力がなければ、他人のことなど考えられるはずがありません。

自治の力というのは、とんでもなくめんどくさい状況とあきらめずに付き合って行く力であると言えます。能書きや理想論ではとてもじゃないけど乗り越えられません。

自治の力というのは他者と物事を共有していく力です。正か邪かなどという二元論で考えていてはとてもじゃないけどできません。

復興まちづくりの現場にはそれらの「実際」が充満してませんでしたか？

はっきり言って、震災の経験をこれからに生かすという事を考えるとき、その内容を「自然災害」やら「まちづくり」やらの各論でだけで考えるというのは、結局その内容を矮小化していることになるんじゃないかと私は思いますね。震災の経験から導き出されるスタンダードな意義とは何かを本気で考えるのであれば、人間社会のど真ん中を貫くだけの質をもった内容を導き出さなけりゃと思うんですがいかがでしょう？

例えば「自治」ということをスタンダードとして抽出した時、そこから見える社会像は、この国の有り様を根底から変えてしまうだけの意味を持ってると思うのですが、まあそんな事言っても例によっての誇大発言としか受け取られないんだろな、きっと。

阪神・淡路大震災は、自覚するしないに関わらず、ほとんどの日本人がおざなりにしている自治というテーマが、どれだけそこに住む人間の社会生活に影響するかをイヤというほどしらしめた。それをしっかりと踏まえさえすれば、どのような専門知識やネットワークが必要で、それは例えば「イラク問題」にだって十分通用するとかいうようなことも、自明の理だと思うのですが、いかがでしょう小林さん？　（全くそのとおり！さすが僧。小林郁雄）

■地域商業の再生－「震災からの地域商業の再生、中心市街地の活性化」について

天川　雅晴（アップルプラン）

第4回大大特（地域経済復興）研究検討会
＊日　時：2004年1月20日（火）　18:30～21:00
＊場　所：こうべまちづくり会館2階ホール
＊テーマ：地域商業再生フォーラム
＊内　容：震災からの地域商業の再生、中心市街地の活性化に関する新春討論会
＊出席者：森崎清登／近畿タクシー、薮本和法／兵庫県、三谷陽造／神戸市、小林郁雄／コー・プラン、司会：久保光弘／久保都市計画事務所

司会の久保さんより「神戸・長田はこれまで三つのターニングポイントがあった。震災後は、ケミカルを中心にしたピラミッド型構造から多角的構造になり、現在は個人の自発性・自主性が出てきており、地域産業の再生の目があるのではないか」という問題提議があり、三谷さん「自分が売る単価を上げるためにはどうすればよいか。商売は技術の高度化を図ることが大事であり、それが地域雇用を支えている。ゴムのりから進化した企業が長田にある。震災で長田そのものが変わった。地域の活性化には若者・よそ者・ばか者の三者が必要。地域・商業・産業の活性化が必要である。」

小林さん「台湾の震災復興は、地域の地場産業をベースにした雇用を高めていけば生活の復興に貢献する、という考えで行っている。昔からの地場産業の再生、高度化、地震断層の観光化、紹興酒工場の再生、などである。神戸では長田TMOなどが震災後に地域の経済復興として新しい経済の目を作っていくことをやっている。水道筋商店街は商業というより地域サービス産業と考えた方が良いのではないか。」

森崎さん「本業の魅力は、商店主の値打ち、地域の値打ち、そしてとんがったものを持っていることだ。とんがったものどうしがいっしょになれば活性化する。商業は地域をベースに成り立っている。年6回のイベントのうち4回はなんとかなるが、後2回のイベントをすることによって地域の値打ちが分かってくる。」

薮本さん「人材が必要。他の人を巻き込んでやっていくのがよい」と、出席者の方々の話が続いた。

会場参加者の稲荷市場のお菓子屋さんから「イベント・まちづくりについての資料を集めた場が欲しい。本屋は話題になっている本しかない。勉強ができる場が欲しい。」という意見に対して「人が育つのが大事であって、実際にやっている人に直接会って話を聞くのがよい。」と小林さんから応答があった。稲荷市場のせんべい屋さんの「菜の花ロードのイベントで菜の花せんべいを作ったように、これから新しい商売に取り組んでいく。」という話を受けて、三谷さんは「自分の自慢する商品を出していくのが大事。」久保さんから「年をとればベンチャービジネスが出来なくなってくる。」また会場の野田北部まちづくり協議会の河合さんからは「商業者は自分のテリトリーを決めてしまっている。」神戸市垂水区役所の大塚さんは「商売の基本は売れるものを作ることである。誰を対象にするのか、地域を主にするほうがよいのではないか。」などの意見交換があった。

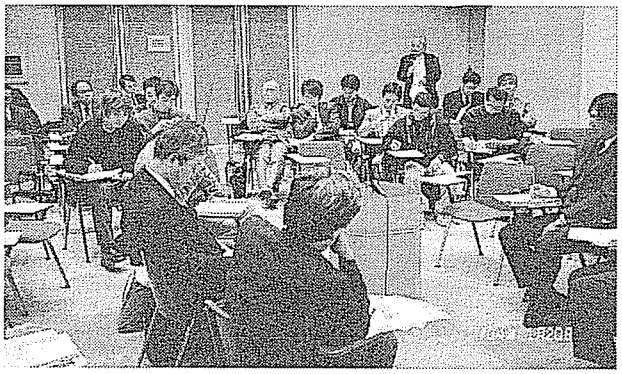
また稲荷市場が1月24日にイベントを行うという話には、三谷さんから「商業者は何故イベントをするのか。儲けるためではないのか。来て欲しい、買って欲しいからではないのか。」そして大塚さんからは「地域の持っている歴史を活かしていく。まちの持っている雰囲気を活かしていく。菜の花を使ったせんべいを作ったことはすばらしい。展開していけば良いのでは。」という意見が出た。

その他に会場の石東さんからは「昔元気だった人たちがお弁当、お惣菜屋などの暮らしのサービスするような店をつくることをサポートする必要があるのではないか。暮らしている人が元気になれば地域も元気になっていくというような逆廻りの発想があってもいいのではないか。」という意見も出された。

こうべまちづくりセンターの垂水さんから「こうべまちづくり会館ができてから10年が経った。これからは情報発信の基地になっていきたい。まちづくりを

やっている人のサポートセンターになっていかなければならない。」というコメントがあった。

最後に大大特の顧問である小森先生が「我々は医者でいえば病理学者。失敗した事例を分析することも必要である。今日は成功事例で元気になる話であった。新長田と六甲道は副都心という看板が下ろせないでいる。将来はストックの入れ替えではなく、中身の入れ替えで対応しなければならない。10 年後、20 年後はどうなるのか、新長田で育ったまちのストック（人）がものをいう。まちは変わっていくのだ。西のストックを活かした東の活性化をコンサルタント・専門家ではなく非営利の団体が行っていくのがよいのではないか。」とまとめられた。



■「神戸発」イラストレーター おさないまこと、テレビで全国にデビュー！

雑誌の表紙デザインなどで大活躍中のイラストレーター・おさないまことさんは、神戸のご出身。ご縁があって、「港まち神戸を愛する会」の会員、そればかりでなく、会報「港まち通信」の表紙・カットを創刊号以来、ボランティアで引き受けていただいています。

最近、灘中央筋のポイントカードや、エコタウンのイメージキャラクターの「パンダ」クンをご存知の向きもあろうかと思いますが、彼（！？）の生みの親もおさないさんなのです。ほのぼのとした、独自の表情のおさないキャラクターたちと、皆さんは何気なく店頭などで慣れ親しんでいるのではないでしょうか。

そのおさないさんの作品が、このほどブラウン管を通じて全国のお茶の間に登場しました。

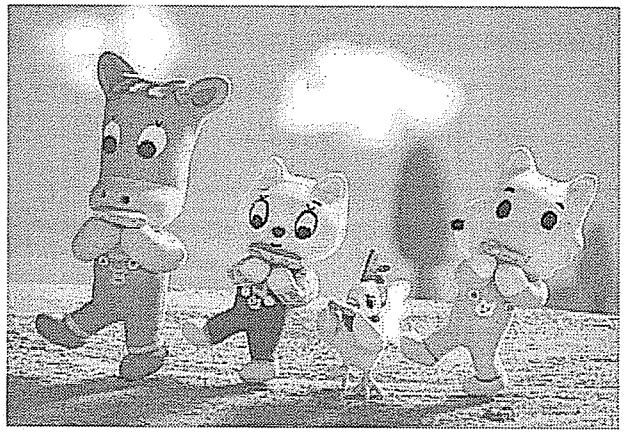
NHK 教育テレビの、毎週土曜日午後 7 時からの 30 分連続ドラマ番組「ミニモニ。でブレーメンの音楽隊」。このエンディングタイトルバックの、粘土人形による「ブレーメンの音楽隊」のアニメーションをおさないさんが担当しています。

立体に動きが加わって、新たな「おさない」ワールドが展開しています。いま人気の「プチモニ。」のチェックもかねて、ご覧になってはいかがでしょうか。

なお、「ミニモニ。でブレーメンの音楽隊」は、3 月までの全 12 回放映の予定です。

おさない　まことのホームページ
http://www.macochan.com/

（中尾嘉孝記）



「ミニモニ。でブレーメンの音楽隊」エンディングの一場面（©おさない　まこと）

■Ｄｒ.フランキーの街角たんけん　第４回　「灘文化軸」を歩く（その１）

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

去年秋、県立原田の森ギャラリー（旧近代美術館）と、HATの県立美術館とを結び「灘文化軸」と銘打って、ここを中心としたアートフェスティバルが展開されたことは記憶に新しい。果たして東の「文化軸」は、どんな表情を持っているのか。

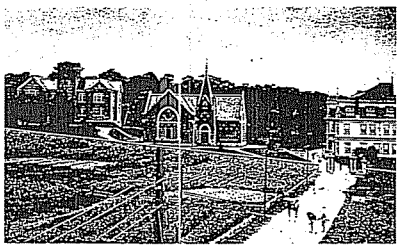
動物園が諏訪山から移転してくる遥か前、明治 22（1889）年、ウォルター・ラッセル・ランバスによって、この地に創設された関西学院では、稲垣足穂や竹中郁らが青春期を過ごし、日本最初の合唱団（現関西学院大学グリークラブ）も結成された。また、関西学院の周辺では、大正期に、若き芸術家達が新興芸術活動を立ち上げたといわれるなど、原田の地には、「文化軸」に相応しい地霊（ゲニウス・ロキ）が宿っている。

往時の関西学院キャンパスの面影を唯一伝える王子市民ギャラリーは、元々、明治 37（1904）年にアメリカの銀行家・ブランチ氏の寄付で建設されたブランチ・メモリアル・チャペルであった。空襲で煉瓦造の躯体を残して焼け落ちたが、神戸博（昭和 25 年）の際、復旧されパビリオンとして再活用された。その後、アメリカ文化センター、市立王子図書館として親しまれてきた。平成５（1993）年に戦災で失われた鐘塔など竣工当時の外観を復元、再生された。

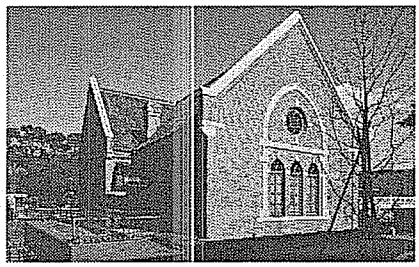
この前庭には、関西学院発祥の地の碑も建てられている。が、その近くの植え込みの茂みにも注目を頂きたい。そこには、神戸市（葺合）と、原田村の境界をしめす石標があるはずである。そう、灘も昔は「神戸ではなかった」のである。

赤レンガのギャラリーから道を隔てて南側に広がる、原田の森ギャラリー。その建築は、村野藤吾と兵庫県建築部営繕課の共同設計作品である。独特の構造によるピロティーを持つ正面側のファサードや、内部の大階段の空間構成などには、村野らしいラインが感じられるし、たとえばバックヤード部分にある階段室の構成は、当時の営繕課長で、基本設計を行った村野との調整にあたった光安義光の好みが現れているように思う。どのあたりに２人の個性が発露されているのか、たしかめて歩くうちに、いつしか私はギャラリーの通用口をでて、南のＪＲ灘駅の方角へ向かって歩き始めていた。

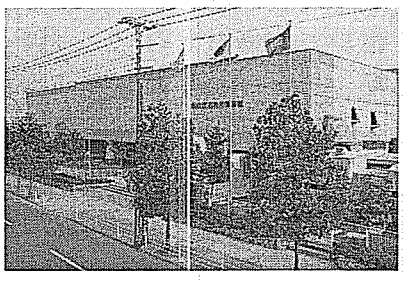
（この項つづく）



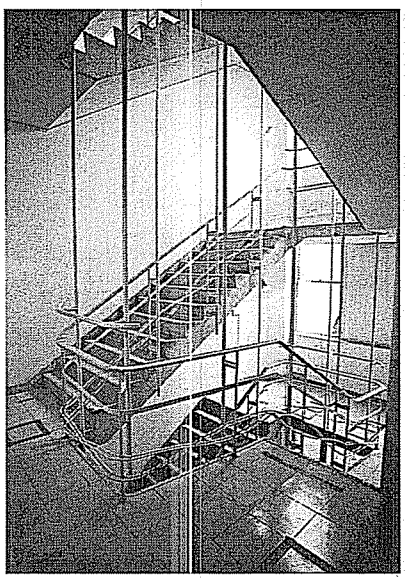
明治終わり頃の関西学院
（写真集「神戸 100 年」より）



王子市民ギャラリー



竣工当時の旧県立近代美術館



旧県立近代美術館　階段室

夜の小さなあかり（3）

母の卒業

中川　紺

あれは私が大学一回生の冬、二人で映画を観た帰りだった。八時を過ぎてもうすっかり暗くなっていたのに、何かの理由で回り道をしていた母と私。気が付くと見覚えのある道を歩いていて、しばらくすると一年ぶりに見る高校の校舎があらわれた。

「みんながんばってるわねえ」

そう母が言う視線の先には教室からもれている電灯の光が並ぶ。定時制の授業中だ。

「ここに通いたいと思ってるんだけど」

さらりと母は言った。

「……どうして？」

何と返事していいのか分からず、とりあえずはそう言ってみた。

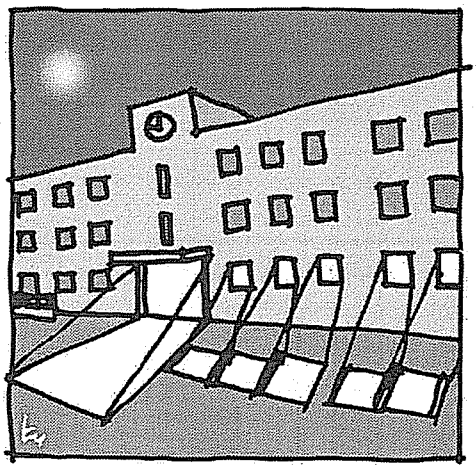
「マユコにはあんまり詳しく言ってなかったと思うけど、お母さんが高校二年の時におじいちゃんの会社が倒産したり、いろいろあってね、学校は結局やめてしまったのよ」

祖父が友人と立ち上げた会社がつぶれてかなりの借金を抱えて苦労した、という話は、そういえば聞いたことがあった。

「やめて働いたのは最終的には自分の意志だったから別にいいのよ。でもいつかは卒業したいって思ってた。ううん、機会ができたら必ずしようって考えてたの」

話すうちに母は、母親でなく、イシザキアサミの顔になっていた。自分がやりたいことをただまっすぐに言っていた。私は言った。

「いいんじゃない、やってみれば。夜間ってたしか四年制でしょ？　二年に編入したら私と一緒に卒業だよ。それもいいよね」



●●

それから三年間、母は結構がんばった。パートと学校の両立をはかろうとする母を、私もできる限り手伝った。

あとから分かったことだが、学校の前であの話をした時には、もう単身赴任中の父も了承済みで、しかも願書を出していたらしい。母は一ヶ月後の面接と作文の試験をクリアして、見事二年生の位置におさまった。クラスには母よりも年上の社会人入学生が数人いた。

意外と授業は楽しいらしかった。試験の時には私が家庭教師をした。文化祭（そういう行事もいろいろあった）ではうれしそうに屋台で家の味付けのおでんを売っていた。

●●

そして来月、母は卒業する。

私の卒業論文も無事終わったので、二人一緒に卒業である。当初の予定通りだね、と私たちは笑いあった。

予定外の出来事は、来年度から市内三校の定時制高校の統合によって、この学校の夜間部は春には無くなるということだった。もちろん昼間部はそのままだから学校そのものが消えてなくなるわけではない。けれど、夜間部との接点を持ってしまったせいか、何となく気になって、最近ときどき私は母を迎えに夜の高校へ行く。

すぐ前の喫茶店で待っていると授業を終えた母がクラスメイトと一緒に門に近づいてくる。店を出た私は母と二人、いつかの日のように校舎を見ていた。

あの電灯のあかりを見るのも、もうすぐ最後になるわね、と母がつぶやいた。

校舎は三年前と変わらず、授業を終えた生徒たちを次々と送りだしていった。（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

阪神白地 まちづくり支援ネットワーク・第３６回連絡会報告

今回のテーマは「密集地区整備における建築」で、２月６日(金)、こうべまちづくり会館にて行われました。

まず小林郁雄さん（コー・プラン）よりテーマ解説があった後に、次の３つの報告がありました。

①「門真市末広南地区、石原東・幸福北地区（区画整理事業）」／柳井理廣（株式会社テン設計）

②「神戸市湊川町地区（震災復興事業）」／柳川賢次（柳川賢次建築設計事務所）

③「大阪市法善寺横町」／小川恵三（竹中工務店）

柳井さんからは、昭和４０年前後より急速に密集市街地が形成された大阪市近郊の門真市において、区画整理事業と密集事業を適用して、１０数年にわたる密集地区改善の取り組みが報告されました。事業の詳しい経過を述べられたのち、整備された共同化建物群によって、統一感のある町並み（イメージコンセプトは“大正ロマン”）を造り上げてきている事例が紹介されました。柳川さんからは、震災復興区画整理事業（ミニ区画整理）が行われた神戸市兵庫区の湊川地区において、複雑な敷地形状の共同化建物（ピースコートⅠ・Ⅱ）について、路地空間など元のまちのイメージを醸し出すデザインに工夫をこらしてきたことなどが報告されました。小川さんからは、道頓堀の旧中座の火災で類焼した「法善寺横町」の復興事業において、連担建築物設計制度の適用によって現状の道路空間に近いかたちでの再建を可能にした取り組みについて報告されました。（中井都市研究室　中井　豊）


末広南地区

◇阪神白地まちづくり支援ネットワーク・今年度の予定

月　日	テーマ
４月９日（金）	まちのコンバージョン
６月１１日（金）	民間コレクティブハウジング
８月９日（金）	テーマパーク型まちづくり
１０月８日（金）	都市空間像
１２月１０日（金）	(仮) 復興まちづくり検証

情報コーナー

●第６８回水谷ゼミナール

・日時：２月27日（金）18:30～21:00

・場所：こうべまちづくり会館６階会議室（神戸市中央区元町通４丁目、TEL. 078-361-4523）

・内容：「新人の研究発表」

①「都市計画マスタープランについて」／松本依子（姫路工業大学、GU 計画研究所）、②「震災復興事業地区における街区公園の住民参加型施設計画の特徴とその利用満足度の検証」／荻本真由（環境緑地設計研究所）、③「旧都市計画法下における“受益者負担制度”問題に関する一考察～神戸市における主体間の対立に着目して～」／森本米紀（神戸大学大学院自然科学研究科博士課程）、④「インナーエリアにおける個別改善型住環境整備手法に関する研究～神戸市における建築基準法４３条ただし書き許可の事例分析を通じて～」／金明権（UR大阪）

・問合せ：ジーユー計画研究所（TEL. 078-251-3593, FAX. 251-3590）

●京都大阪神戸のＮＰＯによるまちづくり

・日時：２月27日（金）13:00～16:30

・場所：大阪市住まい情報センター３階ホール（大阪市北区天神橋６丁目4-20）

・内容：〈基調講演〉「ＮＰＯによるまちづくりへの期待と課題」小森星児（神戸山手大学前学長、ひょうごボランタリープラザ所長）
〈活動報告〉石本幸良（NPO 法人都心界隈まちづくりネット事務局長）、秋田光彦（上町台地からまちを考える会代表理事）、古田篤司（NPO 法人　新開地まちづくりＮＰＯ事務局長）
〈パネルディスカッション〉「ＮＰＯによる地域のまちづくり」コーディネーター／小林郁雄（NPO 法人神戸まちづくり研究所理事）、パネリスト／小森星児、石本幸良、秋田光彦、古田篤司

・問合せ：住まい・まちづくり活動推進協議会事務局（TEL. 03-3591-2361, FAX. 3591-2456）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http：//web. Kyoto-inet. or. jp/org/gakugei/kobe/index. htm

◆ http://www1. plala. or. jp/hos_a/kinmokusei_international. html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca. mbn. or. jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2004年3月30日発行

月刊 きんもくせい

04年3月号
(50+36+NO. 12)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■「自助・共助・公助」について

出口　俊一（兵庫県震災復興研究センター）

住宅再建問題の議論の中で、「自助・共助・公助」の組み合わせが望ましいとよく言われる。誰が言うているのだろうか。私がこれまで見聞きしてきたところ、国と自治体、それにマスコミが多いように思う。国（政府）と兵庫県は、それぞれ次のように述べている。

●内閣府：住宅再建は、保険、共済等による自助・共助が基本であることを明確にした（居住安定支援制度の創設について、03.12.22）

●兵庫県：「自助」「公助」いずれにおいても、限界がある。このため、これら「自助」「公助」の仕組みに加えて、住宅所有者が、災害時に住宅を再建するための費用に充てる資金を（つまり義援金を前倒しにし）、平常時から寄せ合う「共助」の仕組みが必要である（兵庫県被災者住宅再建支援制度調査会・中間報告、04.1.14）

どこか腑に落ちないのである。「自助」の例としては「地震保険」、「共助」の具体化として「共済制度」となっているが、国や自治体がしなければならないのは「公助」を具体化することではないのか。憲法や地方自治法をひもとくまでもなく、行政の最も基本的で重要な責務は、どんな事態、どんな場面であっても、住民の生命、財産を守り、生活の基盤を維持していくことである。「公助」をどうするかということに尽きる。

9年前の大震災後は、この当たり前のことがなされず、「国の成り立ちとして、個人補償はできない仕組みになっている」「自分の財産は自分で守りなさい」と首相や官僚が判断し、被災自治体もそれに従った。この国では「公助」はできないという錯覚とある種のムードが蔓延していて、多くの関係者がマインドコントロールされていた。

だが、大震災の重要な教訓は、住宅再建は「公助」が基本でなければならないということである。政府は「住宅再建は、保険、共済等による自助・共助が基本である」との見解を早期に克服して、この春スタートさせる「居住安定支援制度」に建築・補修費を含むようにしなければならない。また、兵庫県も論証抜きの「公助限界論」と「義援金前倒し集金論」から脱却しなければならない。

繰り返しになるが、大震災の教訓は、行政が「自助」を押し付けたり、「共助」をあてにすることではなく、「公助」こそ基本ということである。2000年10月に発生した鳥取県西部地震後、鳥取県は被災11日目に300万円の「公助」施策を発表し、被災者を救済した。「自助・共助・公助」の組み合わせを国や自治体が云々するのは見当はずれである。国や自治体は、「公助」を具体化するのに知恵と力をつかうことである。

＊　＊　＊

次号は、市民版参画条例研究会の高田富三さんにお願いします。

（小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→中島克元→中村順子→海崎孝一→某市某職員→前田裕資→佐藤三郎→細川裕子→出口俊一→）

■まちづくりシステムの研究　（4）

久保　光弘（久保都市計画事務所）

3）「まちづくり協議会」という現象

前回(03年12月号)でまちづくり協議会は、「カオスの縁」にある現象であることを述べた。これを模式的に図示すると以下のようになる。

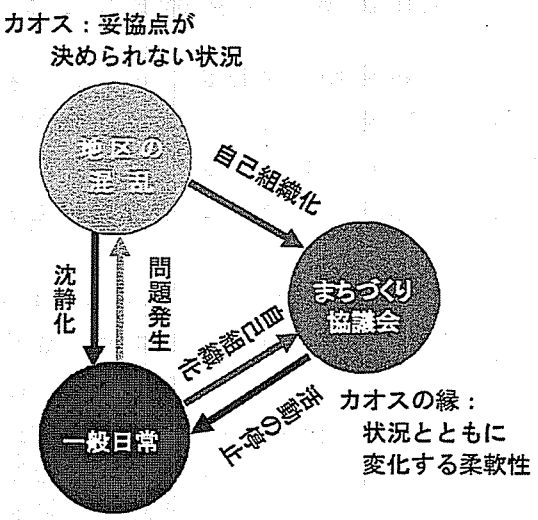


図4−1　まちづくり協議会という現象

この図を震災復興でみると以下のようになる。

①平穏だが変化の少ない日常生活をおくる中、突然大震災に見舞われ、直後、カオス的混乱が起こった。これは、あらゆる人々に生活の復旧、再建のエネルギーの放出を強いて、地域再建を巡るエネルギーは、極みに至ったが、それが一定の方向性を持たない状況であった。

②多くの地域では、個人レベルでの諦めや解決により、やがて混乱は沈静化していった。そこでは、地域のエネルギーは、これまでの地域を改善し、新しい地域再生へと向けられることなく消滅していった。

③少ない地区ではあるが、カオスのエネルギーが、「自己組織化」し、常にゆらぎや流動性を保持している「カオスの縁」、すなわち、まちづくり協議会の結成に向かい、適切な情報の伝達、個人間の利害を調整、地区ニーズの反映ということだけでなく、予期しない種々の地区再生の展開を生んだ。「自己組織化」とは、混沌とした状況の中から自発的に秩序を形成することであり、カウフマンは「無償の秩序」という。「カオスの縁」に向かわせるのは、学習や進化という適応のメカニズムに関連があるとみられている。区画整理事業の網を被せられた地区では、カオスの度合いも大きく、その上カオスから逃げ出すことができない状況の中から自己組織化し、カオスの縁、すなわちまちづくり協議会の結成に至った。そこには、個人間で話し合われ学ぶことから生ずる「自己触媒」作用とともに、まちづくり条例を背景とする自己組織化を促す環境があった。

新長田駅北地区東部の事例では、震災後半年から1年の間に断続的に12協議会が結成されたが、この時期は、行政が主導して協議会設立を地区に働きかけることができる状況になく、協議会組織は、自然発生的に発生したといってよい。

④しかし、まちづくり協議会が結成されても時間の経過とともに、協議会活動を停止し、静的な日常に戻っていった協議会も多い。まちづくり協議会が継続することは、まちが進化し続けることであるが、その継続は容易でない。

カオスの縁は、非平衡状況であり、このような秩序は「散逸構造」とみなされる。「散逸構造」は、物質とエネルギーが継続的に散逸することによって維持されるとされている。協議会の継続は、行動力あるリーダーの存在が不可欠であるが、それとともに絶え間ないエネルギーの補給が必要である。そこに外部からのまちづくり支援の意義があるが、それだけでなく、自己触媒的にエネルギーが生まれ、自立的なまちづくりへと展開する可能性を持っている。

次に、平常時のまちづくりについて、筆者が関わりを持った事例から考えてみたい。

＜ケース１：相生市相生地区＞

相生地区では、平成８年ごろ高潮対策、浸水対策や国道改良などから港の埋立整備事業が浮上した。

これは、防災問題と景観問題の両面から対立する問題で、地域の意見が賛成と反対に二分したカオスの状況が生まれた。1 年後この問題に地区として対処するために、地区内に賛成または反対の意見をもっていた双方が役員になって、まちづくり推進協議会ができ、この事業の賛否を問うアンケート調査を実施し、6 対 4 という僅差で事業が決定した。以後、地区の再生という課題に取り組み、12 年には「まちづくり構想」を市に提案するとともに、協議会規約と総会を有する「まちづくり協議会」となり、その後まちづくり構想に基づく、整備計画の作成や「まちづくり住民協定」の作成へと展開されている。また、地区のウォークラリーイベントから始まり、地区の歴史を記載した冊子「まちづくりマップ」の発行、地区の懐古いろはがるたを中心とした昔の写真展示イベントなどを展開されている。

＜ケース２：神戸市大石南地区＞

大石南地区では、地区内でのラブホテル建設が浮上し、反対運動の過程から、平成９年にまちづくり委員会ができ、10 年に正式な「まちづくり協議会」が発足した。13 年に市に「まちづくり構想」を提案するとともに、市と「まちづくり協定」を締結している。併せて、寄付を募っての旧西国浜街道碑や大石南町由来書板の設置、花づくり、大石南町史の発行などが行われている。

この２地区は、地区をめぐる混乱の過程で自己組織化し、まちづくり協議会結成へと移行したケースである。この地区では、共通して、コミュニティの歴史があり、時間の経過とともに自主的な活動へと進化しており、又まちづくり活動の主導的役割に担う人材が継続して存在するとみられる。

＜ケース３：ある区画整理決定地区＞

十数年前に区画整理の計画決定が行われた地区のうち、反対が多く事業ができないまま残されてきた区域において、このままではいけないということで地区の有志が世話人会をつくり勉強をし、協議会の設立に向けての住民説明会などが行われた。しかし当時の経緯を含めて激しい反対があり、好意で活動する個人に誹謗中傷まで出る状況で、世話人会は活動をやめてしまった。震災復興のまちづくりにおいては、このような激しい混乱は、プロセスとして往々にして見られた状況であるが、通常では耐えられないことであろう。しかし、我慢して継続すべきであったと思う。激しい混乱は、利害を伴う場合の避け難いプロセスであり、その先に地区における自己組織化の動きが生まれてくる可能性がある。既に混乱状況の中から、区画整理をする区域と区画整理をやめ修復的整備に区分するなど、解決方向が浮上しつつあったのだが。

これらの３つのケースは、地区の問題発生という住民にとって明確な動機が存在する場合である。

今後、公共事業の再評価などに伴って、行政サイドからの視点から、まちづくりを誘導する必要も出てくるだろうが、住民にとって動機が不明確で共振化しない状況では、協議会の立ち上げは難しい。

以上はいずれも図 4-1 で示す、「一般日常」→「地区の混乱」→「まちづくり協議会」という流れであるが、「一般日常」→「まちづくり協議会」という流れもある。特に、歴史的景観まちづくりや地域活性化まちづくりにおいて、生まれやすいタイプでないかと思う。

カウフマンは、「自己組織的臨界現象」は、カオスの縁と密接な関係にあるという。自己組織的臨界現象の典型例が、砂山にゆっくりとした一定速度で砂を加えていくとやがて雪崩が起き始めるというものであり、雪崩の多くは小さいものであるが、稀には地滑りを起こすこともある。

このことは、個人や一部の人たちによるまちづくりに向けてのたゆまない活動の継続が、ある時大きく人々と共振化して、カオスの縁（まちづくり協議会）へと導いてくれる可能性を教えている。

ふれあい住宅（復興公営コレクティブ住宅）の検証（その１）

石東　直子（石東・都市環境研究室）

はじめに

被災地で全国に先がけて事業化された震災復興住宅の公営コレクティブ住宅（ふれあい住宅）は、10地区341戸ある（兵庫県営7地区、神戸市営2地区、尼崎市営1地区）。これらの住宅は97年夏から99年春にかけて入居したので、居住暦はもう6年半から5年になる。

「コレクティブ住宅」という言葉は、震災直後はごく一部の住宅専門家を除いては耳新しく、震災復興に何か新しい住まいの供給を模索していた関係者たちには、言葉だけが先行して受け入れられた。阪神・淡路大震災復興基金事業によって「被災者向けコレクティブ・ハウジング建設等事業補助」が創設されて、民間住宅にも適用された（民間住宅の補助交付件数は18地区）。しかし、これらの住宅（公営、民営とも）は本来のコレクティブ住宅とは異なったものである。

本来のコレクティブ住宅は多世代居住で、日常の家事や育児等の生活の一部を住人が協同して分担し、家事の合理化や大家族のような楽しさを享受する住まい方で、協同生活の運営や住宅管理等に住人が自律した民主的な参画がある。そのためには入居前に住人が協同居住のイメージを納得して共有するための学びや話し合いの機会を十分に持つことが不可欠である。単に協同スペースを持っているという建物形態だけでコレクティブ住宅と呼んでいては、日本の住宅史に恥ずべき事象をのこすことになろう。「被災地にコレクティブ住宅を！」の言いだしっぺで、その事業推進を応援してきた私としては、この点を大いに悔やんでいる。また、わが国にコレクティブ住宅を紹介し、その研究の第一人者のひとり、日本女子大教授・小谷部育子氏は次のように述べている。「日本では震災復興住宅をはじめさまざまなものがコレクティブハウスと呼ばれるようになるなどコレクティブハウスというもの自体の概念があいまいなまま言葉だけが一人歩きし始めているという状況もあり、コレクティブハウスの現場をよく知りその上で今後の日本のコレクティブハウスのあり方も考えていきたいと思い始めた」（「豊かな時が流れる　ストックホルムのコレクティブハウジング」のまえがきより引用。NPO コレクティブハウジング社2003年5月発行）

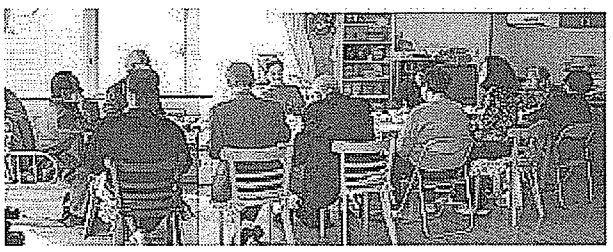
震災復興公営コレクティブ住宅は被災高齢者が新しい生活の中で孤独に陥ることなく、速やかに隣人たちと親しくなるための仕掛け（協同スペース等）を持った住まいとして供給されたので、一部の住宅を除いて大部分が高齢者だけの居住であり、「ふれあい住宅」とネーミングされた。これらは本来のコレクティブ住宅ではなく、シニア共生型住宅＝ふれあい住宅と呼ぶのが正確であろう。そのふれあい生活のイメージは「いつでも誰かと会えるし、いつでもひとりになれる」「ひとりで食事をするよりも、たまには大家族のように集まって食べよう」というものであり、日常生活の中で自然な形で隣人たちがふれあって暮らせるような住まい方である。それぞれの住宅は少しコンパクトだが台所、便所、浴室が備わった独立した住宅で、各住宅の面積を少しづつ出し合ってつくられた協同室（厨房コーナー、食堂・団欒室、和室等）があり、自分たちの住宅の続きとしての共同居間のような位置付けである。

「ふれあい住宅」はそのネーミングに相応しく、入居直後から住人たちのふれあいの生活が展開されてきたが、入居後数年が経ち住人の加齢と入れ替わりによって生活も少しづつ様変わりし、課題が顕在化してきている。そこでふれあい住宅の検証を「ふれあい住宅連絡会」と共に行い、「きんもくせい」の紙上を借りて報告していきたい。

コレクティブ応援団と居住者との連携
＝継続した居住サポート

コレクティブハウジング事業推進応援団は復興住宅にコレクティブ住宅の推進を応援するために、震災の年の秋に発足した専門家ボランティア組織である。都市プランナー、建築家、学生、医師をはじめコレクティブに関心を持つ多分野の人たち

が参加し、事業進捗の段階にそって必要とされるサポート活動を行ってきた。その主な内容は、「初期の活動」は情報交流・学習・ＰＲ活動、事業化のための資料提供と計画策定への参画等である。「復興住宅での事業化決定から入居までの活動」は情報活動、説明冊子・パンフレットづくり、仮設住宅を巡っての出前説明会、入居予定者に対する入居前協同居住の学習ワークショップの開催等であり、「入居後の活動」は、協同室の備品購入支援、協同居住の住まい方の説明会、自治会づくりや協同居住のルールづくりの相談、協同居住のきっかけづくりとして食事会やお茶会の開催等を各住宅ごとに支援してきた。入居後しばらくすると各ふれあい住宅で個別の問題や居住者間のトラブルが生じたり、逆に協同居住の素晴らしい工夫や知恵が見え始めたので、それらの情況を交換して新しい住まい方を考えていこうということで、98 年 7 月に「ふれあい住宅居住者交流会」を結成し、2 ヶ月ごとに各住宅の協同室を会場にお借りして意見交換とお茶会を続けた。入居後間もない住宅やこれから入居する住宅の有志が 50 人前後集まり、活発な意見交換を行い、その様子を「ふれあいネットレター」として発行し全戸に配布した。そして 2001 年１月にはふれあい住宅の居住者たちが自律して「ふれあい住宅連絡会」を発足させ、コレクティブ応援団は先導的なサポートから後方支援にまわり、連絡会と連携して現在もサポートを続けている。連絡会もほぼ 2 ヶ月ごとに会合を持ち、情報交換や年月の経過に伴って生じる課題に対しての解決策を話し合ったり、毎年秋には 10 地区のふれあい住宅の有志が一同に会して一日バスツアーを楽しんでいる。応援団は「ふれあい住宅連絡会ネットレター」を発行し全戸配布している。



ふれあい住宅連絡会　2004. 02. 29.

なお、2001 年夏には、各住宅の入居者や協同居住の情況を詳しく調査して「ふれあい住宅カルテ」を作成したが、今年は再診断してカルテの更新をしようとしている。

近年のふれあい生活の変様

ふれあい住宅は入居当初、住人が協同室を核とするふれあい生活に戸惑いいくつかの住宅では住民同士のトラブルが生じたが、自治会役員の奮闘、コレクティブ応援団やＬＳＡ（生活援助員）の支援を得て、入居後しばらくして少しづつ落ち着き協同の住運営が定着してきた。なお、住人同士のトラブルはあっても、入居前後からの応援団等の支援もあって、食事会、お茶会、モーニングサービスなどがスタートし定期的に行われるようになり、更にお誕生会、忘年会、お餅つき、新年会、雛祭りやクリスマス会等の季節行事を住人たちが中心になって行っていた。しかし、ここ 1、2 年前から少し様子が変わってきた。これらの行事の回数が減り、今はほとんど何もしていない住宅、月に１回の共益費の会計報告や協同スペースの合同掃除の後にお茶会をやっているという程度の住宅が多い。みんなで何かをしようにも、住人の加齢によってそのエネルギーがなくなってきた。なお、外部サポーターやＬＳＡの支援を受けて隣接の復興住宅と一緒に定期的なお茶会等をしている住宅はある。

また、住宅によっては亡くなった人も少なくなく、高齢者施設に移った人もあり住人の入れ代わりは大きく、転居率が 35%～40%にもなる住宅がある。新しい住人の中にはふれあい住宅について十分な説明を受けることなく入居し、新旧入居者間に戸惑が生じるケースもある。

一方、住人の平均年齢が比較的若く（といっても 70 歳を上回るが）、自治会長がまだ 70 歳前という住宅では、定期的な行事やバス旅行などもしており、住人たちがボランティア登録をして活動費助成を申請して相互扶助のふれあい生活をしている。

今後、このような様子や課題を検証していきたいと思っている。

■『コンパクトシティ』を考える6－アメリカ型コンパクトシティ

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

1．トクビルの見たアメリカ

今回はアメリカ大陸にわたったコンパクトシティのＤＮＡが、その後アメリカ社会形成の過程でいかに進化したかを、当時にヨーロッパから視察旅行で 19 世紀のアメリカの現地を見たアレクシ・ド・トクビルの観察を通して考えてみたい。

トクビルは 1805 年にフランスの貴族の子として生まれた。当時のフランスではフランス革命が起こり、民主主義と平等への動きに翻弄されていた時代でもあった。1831 年に、25 歳の若き判事補は、アメリカに政府の視察派遣員という肩書きで渡り、18 ヶ月アメリカ東南部を視察旅行した。

トクビルがまず最初にニューヨークで出会ったアメリカ人の印象を、つぎのようにまとめている。「この国では考えられる限りの平等が、社会の最上層まで支配しているように見える。権力者に近づくのは非常に簡単である。この国の人たちは、みんな中流階級に属しているように見える。ヨーロッパの上流階級に見られるような優雅な立ち居振る舞いや洗練されたマナーなど、どこを探しても見あたらない。出自が問題にならず、金持ちだからといって特別な権利はない。見知らぬ人が同じ場所へ自由に出入りし、他人に思ったことを話すのを少しも不自然に思わない。お互いごく自然で、率直で、開けっぴろげな態度をとる。人はみな道徳的で、宗教心に厚く、純粋である。全ては家庭生活が中心になっている。」

これは、トクビルが最大の関心を持った社会の平等化が、アメリカ社会では諸階層まですでに達成していることを驚きとともに記している。

2．自治のアメリカ

ボストンのあるニューイングランドこそ、アメリカ民主主義の揺りかごである。この地に上陸した人々は、直ちに直接参加型民主主義の原則を確立し、何か問題が起こる度に、タウンミーティングを開き、全ての人々が集まって討議していた。

約１ヶ月滞在したボストンで、トクビルはつぎのようにアメリカの地方自治を観察している。

「ニューイングランドのタウンシップは、通常 2 千人から 3 千人の住民を擁している。したがって住民が共通の利害を持てなくなるほど大きいわけではなく、反面十分な行政を可能とするだけの大きさがある。政府が口出ししない結果、個人が自分自身でなんでもやる習慣がつく。他から助けを求めず、自分で考え、自分で対処する。計画を発表し、自分で実行に移し、他の人々の援助を求め、困難を乗り越えるために一生懸命働く。実際には、政府に任せておいた方が効率的な結果が出るかもしれない。しかし大きな目で見れば、こうした個人の自助努力から得られる総合的恩恵は、政府が介入する場合をはるかに凌ぐ。こうした慣習が人々の公的私的な習俗に与える効果を考えれば、多少の非効率を補ってあまりあるだろう。」

「陪審制度が果たす政治的役割は、非常に大きい。人々に、自分の問題を自分自身で解決することを教え、社会問題解決を自分自身の仕事とみなすようにさせる。司法権の行使を外部の人間にゆだねきり、司法府が人々から遠いものとなることを防ぎ、特に政治問題を解決するのに有益な大きな力を、司法に与えている。」

「多数は時に間違えることがあるけれども、全体的にはいつも正しい。それに多数に従う以上の正当性は見出しえない。個人、社会、町、国家のそれぞれが、自分自身の事柄について最良の判事である。そして他者の利益を損なわない限り、干渉することはできない。完全に民主的な政府は、危険である。アメリカにおいてさえ、民主主義の弊害に対する歯止めが置かれている。二院制議会、知事の拒否権、判事の権限がそれである。社会は個人を甘やかしすぎてはいけない。個人が社会を頼りすぎて、社会そのものが機能しなくなる恐れ

がある。」

トクビルの見たアメリカにおける政治的信条は、自治が原則であり、正しいのは常に多数だということである。しかし、たまに多数者が少数の利益を圧迫する場合に備えて、知事は拒否権を有し、また何より、判事は憲法に反する法律の執行を拒否する権利を持っている。これは大衆の一時的な感情や間違いに対する歯止めとして機能することを保証するものであり、ここに自治を基本とするアメリカの民主主義の姿を見いだしている。

3．アメリカのコミュニティ

トクビルの注意を最も強くひいたのはアメリカ人が変幻自在に結成するコミュニティであった。

「あらゆる年齢、あらゆる地位、あらゆる性格のアメリカ人が、絶え間なく集まってはアソシエーションを形成している。彼らは商業上の連合、政治、文学、宗教上の団体を作る。決してお上へ陳情して成功を目指すのではなく、個人の才覚に訴えて調和ある行動を組織し、成功へと進む。」

「民主政体のもとでは、全ての人は独立しており力がない。彼らは自分一人では何もできない。互いに協力する方法を見つけない限り、無力である。幾人かのアメリカ人が、ある共通の考えを抱き世界にそれを広めようと思うと、互いに連絡を取り合い団結する。それ以後彼らは孤立した個人ではなく、遠いところからでも認知せざるをえない行動は注目すべき力なのである。彼らが語ると、人々は耳を傾ける。」

トクビルはアメリカ人が気楽に集まり団体をつくることに感心し、一方で組織の拘束力が弱いことにも感心する。自分が属する社会と比較する。「貴族社会では、人は新たに団結してことを起こす必要がない。彼らは既に堅く結びついているからである。金持ちや有力者は、永続的かつ上から彼らの意志を押しつける組織の長なのである。」

トクビルはアメリカのコミュニティが気持ちを揃えた時の強さを評価して言う。「そこには個人が独立を保つ余地がある。全ての構成員は同じ目標を目指しているが、全く同じ道を取る義務はない。自分の意志や論理を犠牲にする必要はなく、むしろそれぞれの意志や論理が、共通の目標実現のために用いられるのである。」

4．アメリカ型コンパクトシティ

今日のアメリカ社会も、地方分権による自治が基本であり、住民主権が原則である。権力をできるだけ集中させず、分散させようとする。分権の基本は州であるが、州の被造物として市を州法の中で認め、自己の憲章を立案させて、憲章にもとづき行政の自治権能を付与している。

都市づくりにも原則は貫かれている。住民主権、コミュニティ尊重、権力の分散である。

19 世紀の都市化現象で、深刻な都市問題が発生し、近代都市計画を確立する必要が生じた。そのため基盤施設整備などの物的環境改善が必要となるが、独占資本やボス政治家の出現に対して、都市の中産階級が立ち上がり、市政改革運動が展開された。都市計画の非政治化として、自治体機構から相対的に独立する「都市計画委員会」が制度化された。都市計画の代表である条例による地域制（ゾーニング）は、中産階級やコミュニティが財産保全のために求めた私権の制限を最高裁が合憲と承認した。多数が正しいとして議会の権限を認める一方で、議決した法律の改廃を求めるリファレンダム（表決権）と、法律を議会が決めなければ住民自ら定めるイニシアティブ（直接発議権）など直接民主制を州憲法の中に保証している。

アメリカの都市計画制度はきわめて都市の独自色が強く、同じものはないといわれる。しかも住民主権、地域主権が反映され、合理的でコンパクトである。アメリカ型コンパクトシティは形態ではなく、そのシステムにある。そのＤＮＡは、アメリカ社会に定着し確実に進化している。

＜参考文献＞
阿川尚之(1997)「トクビルとアメリカへ」、新潮社
中山久憲(1998)「アメリカの郊外住宅事情」『あーばんとーく』vol.13～vol.22 、こうべまちづくりセンター

「てるてる家族」と小林一三の郊外の夢を訪ねる

土井　勉（まちづくりステーション／神戸国際大学）

今回は阪急宝塚線の池田市を訪問する企画です。阪神間のまちの形成に大きな役割を果たした小林一三の旧宅（現在は逸翁美術館、丁度「呉春」の企画展が開催されていました）、NHKの朝ドラで人気の「てるてる家族」の舞台である栄町商店街、そして一三の生涯の事業のスタートとなった池田室町郊外住宅地（1910年。我が国最初の分譲型郊外住宅地開発）の見学と、当時からの建物である室町倶楽部（社団法人室町会が管理）で室町会理事長の別所正史氏から室町住宅地の変遷やまちの保全に関する現状と課題についてお話をうかがいました。

阪神間の郊外住宅地の変遷と現状については、他都市の方も関心が高いテーマで京都市職員の研究会（私も創設メンバーです）の方々、京都でまちづくり活動をされている方々もご参加いただきました。今回参加いただきました京都市の冨山さん、アーバンビレッジ・京都の平竹さんのコメントを掲載させて頂きます。当日お世話下さいました、逸翁美術館の亀井さん、室町会の別所さんには厚くお礼を申し上げたいと思います。

＊　＊　＊

我々京都市職員の自主研究グループMUPのメンバーは、縁有って阪神間倶楽部第６回例会に参加できました。楽しく刺激的な経験と有意義な成果が得られましたことに感謝します。

MUPでは最新研究として「京都都心部に良い循環を～都心部にふさわしいマンションを～」（地方自治職員研修2004年2月に記事掲載）と題し、京都都心部における未来志向のライフスタイルの提唱と新たな付加価値を備えた売れ筋マンションを提案したところです。現在は、「都心と郊外」をテーマに、良好な郊外住宅地の形成を研究し、その魅力を分析して、まちづくりの知見を得ようとしております。日本最初の分譲住宅・池田室町に惹かれ、「てるてる家族」人気との相乗効果で、いつになく大挙して乱入致しました。

池田室町が分譲開始されたのが明治43年。池田室町の町並みと、後に社団法人化されたまちづくりのノウハウは、宅地開発と分譲住宅の規範となったと聞きます。逸翁の夢は国民の夢となりました。京都市区改正設計街路が計画され京都市北部で土地区画整理事業が始まるのが大正１４年。街路整備も区画整理もその後長く、現在まで引き継がれています。京都市で形成された住宅地でこの年代からのものは、下鴨、北白川、小山、紫竹、桃山等で良好な高級住宅地のイメージ。なるほど池田室町に似通っています。逸翁の夢の継承者である別所翁のご尊顔を拝し、まちづくりの目標が幸福感にあることを再認識できました。　　冨山 育子(MUP)

MUP（現代都市政策研究会）
http://www.geocities.jp/u2_takahashi/index.htm

＊　＊　＊

今回、阪神間倶楽部第6回に参加させていただき、室町会の別所さんから有益なお話を伺うことができました。本当にありがとうございました。

私たちのグループ名、アーバンビレッジというのは、イギリスで10年余り前から始まった、まちづくりの動きのことを言います。その考え方としては、車依存から脱却した環境にやさしい都市づくり、職住の一体化により緊密なコミュニティ形成、地域内ビジネスによる地域活性化などを中心としています（詳しくは、住宅総合研究財団『すまいろん（2003年夏号）』をご参照ください）。

私たちは、この発想は京都の特色そのものではないかと考えて、京都の新たなまちづくりに生かそうと研究活動に取り組んでいます。その際には、個々に分割された土地所有をどう扱うかが大きな課題であり、関心の中心でもありますが、一つの答えは京都・祇園の土地所有形態、地域住民が運営する公益法人による一元所有にあると考えています。

同じように低層の町並みが続く池田室町は、室町会による幼稚園の取り組みなどきわめて先進的にまちづくりを進めてこられました。室町会がこのような土地所有に踏み込んだ取り組みをされることにより、いっそうの町並み保全と地域活性化のモデルとなりうるのではないかと、期待が膨らみました。**平竹 耕三(アーバンビレッジ・京都)**

阪神間倶楽部　第６回研究会（第８回準備会）の記録

○日　時：2004年2月22日（日）13：30～16：30
○場　所：池田界隈
○参加者：約30名

13時半に逸翁美術館を見学し、「てるてる家族」の舞台となっている栄町商店街を通り、池田室町住宅地（わが国最初の分譲住宅地）にある室町会館で、(社)室町会の別所理事長からお話をうかがいました。

夜の小さなあかり（4）

マッチ箱と男

中川　紺

今日もまた何もせずに一日が終わった。妻が亡くなって一年、ずっとこの調子だ。会社に行かないと昼の時間を持て余してしまうが、六十を過ぎた男に再就職なんかそう簡単に見つかるものでもない。

そんなことを考えながら公園を通りかかった時だった。

日も暮れて暗かったし、どうしてそんなものが目に入ったのかは分からない。ベンチの下に手をのばして拾うと、それはベージュ色の小さなマッチ箱だった。癖のある書体で「喫茶ロンド」とあった。不思議な心持ちがした。どうしてだろうか、見ているうちにやめていたタバコを吸いたくなってしまった。

ちょうどそばを通った青年に、私は思わず声をかけた。

「すまないが……タバコを一本わけてもらえないかな」

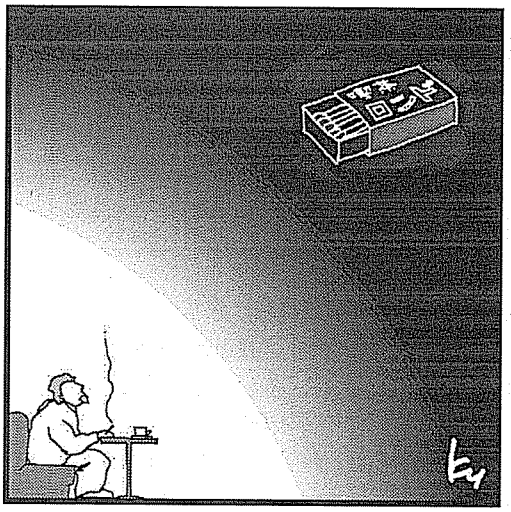
見ず知らずの他人にもらいタバコだ。普段なら、こんなことは決してしない。あの時はどうかしていたのかもしれない。

慎重にマッチを擦った。その火さえも懐かしい気がした。ゆっくりと火を近付けた。

●●

私はソファーに腰掛けてタバコを吸っていた。手になじむ木のテーブル、その上にグラスとあのマッチと灰皿がのっている。控えめな照明の下でメニューを見るとコーヒー八十円とある。私は「喫茶ロンド」にいた。

しばらくして私の名前を呼ぶ声がした。



近づいてきたのは若いころの妻、カヨコ。あとから思い起こして考えるとちょうど四十年ほど昔、まだカヨコと会ったばかりの頃の出来事だ。もちろんあの時は何も不思議には思わなかった。私は二十五歳の私になっていて、カヨコと待ち合わせをしていたのだ。

黒い髪をきれいにまとめたカヨコとコーヒーを飲みながらひとしきり映画の話をする。これから映画館に行くのである。

そろそろ行こうか、と私たちは席を立った。

●●

そして私はまたあの公園のベンチにいた。体にはまだソファーとテーブルの感覚が残っていた。少し肌寒いが、大して時間が経ったわけではないらしい。指には半分ほどになったタバコが挟まっている。

そういえば若い頃はずいぶん映画を観たものだ。ひとつ明日は気晴らしに映画館にでも行くか。これからの事はゆっくり考えよう。

私はタバコの火を消して立ち上がると、夜の公園を後にした。

●●

……通りかかった青年の独白……

いきなり声をかけてくるから何かと思ったら、タバコをくれだとさ。でもあのおやじ、何かすげえ幸せそうにタバコ吸ってたな。今どきマッチなんか使って、珍しいよな。

あの箱、ちょっといい感じだったなあ。古臭いようで新しいようで。喫茶ロンド。横を通るときに見たんだけど、たしかそう書いてあった。俺、カフェの開業修行中だからね、カフェグッズは何でもチェックするようにしてるんだ。俺の店の名前、「ロンド」にしようかな。何かいい店になる気がするんだけど、どうかなあ。

（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 第６８回・水谷ゼミナール報告

今回のテーマは「新人の研究発表」で、２月２７日(金)、こうべまちづくり会館にて行われました。

まず中川啓子さんよりテーマ解説があった後に、次の３つの報告がありました。

①「兵庫県下の都市計画マスタープランの現状と課題」／松本依子（姫路工業大学－ＧＵ計画研究所）

②「震災復興事業地区における街区公園の住民参加型施設計画の特徴とその利用満足度の検証」／荻本真由（環境緑地設計研究所）

③「旧都市計画法下における“受益者負担制度”問題に関する一考察～神戸市における主体間の対立に着目して～」／森本米紀（神戸大学大学院自然科学研究科）

④「インナーエリアにおける個別改善型住環境整備手法に関する研究～神戸市における建築基準法第４３条ただし書き許可の事例分析を通して～」／金明権（都市･計画･設計研究所

松本さんからは、兵庫県下の市町で策定されている都市計画マスタープランに関して、市町に対するアンケート調査と、プランの内容の分析により、都市計画マスタープランが持つ役割が機能していくための課題について報告されました。荻本さんからは、震災後に住民参加のワークショップ手法を取り入れて整備された公園について、整備後の利用しやすさ等を住民の視点から調査研究したもので、ワークショップ手法を取り入れないでつくられた公園との施設内容の比較、ある公園でのビデオによる定点観測、住民アンケートにより、整備内容とその後の利用に乖離状況があることなどが報告されました。森本さんからは、まずこれまでの都市計画史研究の“主体”＝公権力‥‥“客体”＝都市住民という構図ではなく、すべてを主体に見るという立場を述べた後、旧都市計画法における受益者負担制度について、「受益者負担規定」に着目した資料を丹念に調べて、この制度が空文化していく過程についての研究成果を述べられました。金さんからは、神戸市におけるインナーエリアの密集市街地改善について,建基法の２m接道ができない敷地における 43 条ただし書き適用を市街地特性によって多様に行うことが重要であるということを、これまでの適用事例の調査や様々な指標による市街地の類型化作業を通して述べられました。（中井都市研究室　中井　豊）

■ 情報コーナー

●阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第３７回連絡会
- 日時：4月9日（金）18:30～21:00
- 場所：ひょうごボランタリープラザ（神戸クリスタルタワー10F、JR神戸駅前すぐ,TEL.078-360-8845）
- 内容：「まちのコンバージョン」（担当は若手ネット、詳細は未定）
- 問合せ：ジーユー計画研究所（TEL.078-251-3593,FAX.251-3590）

●ﾏﾝｼｮﾝ復興戦略研究会･公開ｾﾐﾅｰ
- 日時：3月25日（木）18:00～20:00
- 場所：こうべまちづくり会館２階ホール（神戸市中央区元町通４丁目、TEL.078-361-4523）
- 内容：「阪神・淡路まちづくり支援機構における専門家連携への取り組み」／戎正晴（弁護士）
- 問合せ：ﾏﾝｼｮﾝ復興研究会（こうべまちセン･研究ﾈｯﾄﾜｰｸ）（FAX.078-861-0038（神戸大学大西研究室））

●灘まる洗いプロジェクト
- 日時：3月28日（日）10:00～11:30
- 集合場所：都賀川公園南側トイレ（山手幹線南側）
- 内容：都賀川公園のトイレ（南北）を中心に周辺施設（ベンチ、舗装、手すりなど）を参加者で掃除する（ゴム手袋持参、長靴着用）。また、子供たちが桜の絵を描きトイレの中に展示する。
- 主催：灘･まる洗いプロジェクト実行委員会
- 問合せ、申し込み：灘区役所まちづくり推進課「まる洗い」係（FAX.078-861-0417）

●まちづくりの名人･達人･仙人大いに語る－「まちづくり法制」を問う･第2弾
- 日時：4月13日（火）18:30～20:30
- 場所：こうべまちづくり会館２階ホール
- 内容：語る人／武田則明、石東直子、難波建、小林郁雄、森崎輝之、瀬戸本淳、北後明彦、垂水英司、進行／小浦久子、鈴木三郎
- 問合せ：こうべまちづくりｾﾝﾀｰ（FAX.078-361-4546）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
- http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
- http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2004年4月30日発行

月刊 きんもくせい

04年4月号
(50+36+NO. 13)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■神戸市の「協働と参画」、3つの疑問

高田　富三（市民版参画条例研究会）

２００１年１２月、わたしたちは、「市民版参画条例研究会」を発足しました。同年１０月選出された矢田立郎市長の公約である「市民参画条例」の策定に賛同し、民間サイドから神戸市を「市民が主人公のまち」にしたいと考えたからです。本誌のテーマである「協働と参画」につき、「誰が何をどのように語ってきたか」経過を追って整理、コメントいたします。

01年11月20日　矢田立郎市長就任の記者会見に於いて市民参画について所信表明

「まず第１に、一人ひとりの『市民が主役のまち』の実現をめざします。市民一人ひとりをまちの主役とし、地域の力を市政の基盤といたします。市政への市民参画を進め、これを制度的に保障する、市民参画条例の制定に取り組んでまいります」

02年3月9日　神戸市市民参画推進局長桜井誠一氏の発言(第１回東灘・灘区合同ワークショップ)

(「市民が主役といわれても、形だけ利用されるのはいやだ」という声に)「そのようなことはしない。予算の関係あるも、第２回、第３回を行う。第３回を今年の夏秋頃行いたい」

02年5月11日　市民版参画条例研究会、第１回シンポジウム開催、「市民がつくる参画条例（案）骨子」発表

元逗子市長の龍谷大学法学部教授・富野暉一郎氏を招きシンポジウム。「市民がつくる参画条例（案）骨子」発表。

02年6月30日　神戸市市民参画推進局次長玉田敏郎氏の発言(第２回東灘・灘区合同ワークショップ)

冒頭、「今回を持って、このようなワークショップは終わる」と発言。(「前回の桜井氏の発言と異なる。市民参画というならば、もっと市民を交え運営すべきでないか」という市民の意見に対し、)「市が主催しているので、市が決める。市民がやりたければ、市民でやればいい」と答える。

なお、第２回ワークショップの前に、「参画と協働」が「協働と参画」に変わるが、変更の説明、神戸市の広報でも未だなされず。

02年11月10日　市民版参画条例研究会、「第２回市民参画条例シンポジウム」開催

参画の先進自治体から愛知県高浜市長・森貞述氏、北海道ニセコ町長・逢坂誠二氏と、富野暉一郎氏を招き、シンポジウムを開催。「参画は市民の権利であり、協働は行政の責務」「参画は、情報共有が前提とするならば、住民投票はその担保」長野県知事田中康夫氏から賛同メッセージが寄せられる。

03年4月23日　矢田市長「住民投票についての見解」を記者会見にて表明

「わたしは、自分たちの住んでいるまちを良くするのかどうかということに関して、本当にそういうこと(住民投票)を言う人が、自分たちの気持ちとして持っているのかということを思います。本当に自分たちの気持ちとして、このまちをこういうふうにしたいと思って、実際に取り組んでいる人はたくさんいらっしゃいますが、そういう人はあまりそういうこと(住民投票)は言わないです。」**(疑問１)**

03年10月4日　市民版参画条例研究会、第３回シンポジウム「さあ、つくろう住民投票」開催、「市民版参画条例(案)」発表

広島市長・秋葉忠利氏、尼崎市長・白井文氏、高石市長・阪口伸六氏を迎え、「市民参画への思い」を語ってもらう。田中康夫氏賛同のメッセージ。同時に、「市民参画」は「情報公開・共有」を始まりとし、「住民投票」はそれを支えるものとする、全５０条の「市民版参画条例(案)」を発表。

04年3月29日　神戸市会「神戸市民の意見提出手続に関する条例」、「神戸市民による地域活動の推進に関する条例」、「神戸市行政評価条例」を、可決　(施行期日　平成16年10月1日)**(疑問２)**

04年3月30日　神戸空港建設をめぐる神戸地裁判決(新聞の見出しから抜粋)

「神戸空港『必要性に疑問』、公費支出返還訴訟、住民の請求棄却」、「『机上の計算』批判も。神戸空港需要予測、集客に努力必要」、「市財政への影響言及、市の方針に重い課題」(読売)、「『市債償還できぬ恐れ』住民の返還請求は棄却」(毎日)、「『市長裁量の範囲内』、差し止め請求神戸地裁が棄却、必要性には疑問」「行政側には重い課題」「神戸市に課題突きつけた」(神戸)、「『財政悪化の可能性』原告請求は棄却」(朝日)(疑問3)

3つの疑問

(疑問1)神戸空港建設の是非を問う住民投票を求めた30万余の神戸市民は、「自分たちの住んでいるまちを良くするのかどうか」を考えていないということでしょうか。

(疑問2)3条例の目玉である「神戸市民による地域活動の推進に関する条例」は「市民の権利」がなく、「役割」という「義務」のみが謳われた全国でも稀有な「市民参画条例」です。またあとの2条例は、既存の内部手続きを条例化したものに過ぎないのではないでしょうか。

また、上述のとおり形だけでも市民参加した「地域活動条例」と異なり、市役所内部でつくられ、その過程も公開されないものでした。これが「市民参画」という名に値するのでしょうか。

(疑問3)神戸空港裁判での裁判官の疑問に対し、神戸市の説明責任(情報提供責任でもある)をどう全うするのでしょうか。矢田市長の言う『市民が主役』の真価が問われます。なお、市民のHPでは空港裁判の判決全文を見ることができますが、神戸市のHPをみる限り、空港建設進捗状況以外に目新しいものや、裁判所の疑問に耐えうるものは未だ見つけることはできません。

＊　＊　＊

次回は、御蔵5・6丁目まちづくり協議会の田中保三さんにお願いします

(小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→中島克元→中村順子→海崎孝一→某市某職員→前田裕資→佐藤三郎→細川裕子→出口俊一→高田富三→　)

■ごあいさつ

室崎　益輝（独立行政法人　消防研究所）

新緑の頃となりました。新緑の初々しさは、神戸も東京も変わりません。人間もそうあって欲しいと思いつつ、慣れない東京での生活を開始しました。ともかく、新社会人の気分です。27年前、神戸に赴任した時のことが、思い出されます。あの時も、不安と希望の入り混じった気持ちで、ほんの少し前の暮らしを懐かしんでいました。今も、少しの悔悟の気持ちで、神戸の暮らしと友達が、とても懐かしく思い出されます。

別れに際して、「寂しくなるね」という、心のこもった言葉をいただきました。その言葉で、皆さんとの深い心のつながりが再確認でき、とても嬉しく思いました。にもかかわらず、十分にお礼の言葉を述べることもなく、闇雲に背中を向けてしまったことを、心よりお詫びいたします。確かに物理的な距離は遠くなりますが、心理的な距離は今までと変わらないとの思いもあって、ことさらに「別れの場」を持ちたくなかったのです。

ということで、これからも今まで以上に親しくお付き合いください。お手紙やメール、電話などいただければと思います。また是非、研究所はもとより、自宅にも遊びにきてください。三鷹も番町もとてもよいところです。番町の自宅には、議論をするのに十分なお酒とスペースを用意しました。

転居にあたっての引越し先を、恒例に従ってお知らせします。

住所　〒102－0081　千代田区四番町8番地四番町住宅104号室（中央線「市が谷」の駅の近くです。）

電話　03-3239-3201（FAX兼用）

##########

〒181-8633　東京都三鷹市中原3丁目14-1　電話0422-44-8331　FAX0422-76-1545

独立行政法人　消防研究所　　室崎益輝　murosaki@fri.go.jp

##########

■ケーキの街を歩く（ケーキ屋さんが街を動かしている、その最前線）

三宅　正弘（地域計画家／徳島大学助手・武庫川女子大非常勤講師・関西学院非常勤講師）

●ケーキとお好み焼き

街コミュニケーションの道具

「まちづくり」を「テーマ」から考えてみたい。というのが、いつしか、私の仕事のスタンスになっていた。気がつくと「石」「ケーキ」「お好み焼き」といったピンポイントでまちづくりに取り組んでいる。それは街の現場にいて、街を語りあう際に「近所のケーキ屋さん」や「お好み焼き屋のおばちゃん」の話で盛り上がり、最後には、わが街自慢のケーキ屋さんがある街だとか、鉄板一つでおばちゃんが焼くお好み焼きがある街といった、まちづくりの話に展開する。「お好み焼き」や「ケーキ」というものが、実はまちづくりのなかでは大切なキーワードではないかと思ってくる。

まちづくりの仕事で「言葉」は大切な道具である。大学の恩師丸茂弘幸先生は、「都市デザイン」というなじみない考え方が地に足ついたものになるためには、自分の母親に言って聞かせてもわかるような平易な言葉で語る必要性をおっしゃっていた。先生は、なじむ、なごむといった＜な＞という語幹を含む一群の「やまとことば」に着目されていた。私はそこまで都市デザインの根源的な問題にはいたっていないが、まちづくりの仕事のなかで「キーワード」や「テーマ」によって、楽しい方向性がみいだせるのではないかと感覚的に取り組んでいる。

最近は、小学校での授業が増す一方で、ご高齢の方々の講座も多くなったが、そのいずれの機会にも、この「ケーキ」と「お好み焼き」のおかげで、皆さんと、これからのまちづくりについて有意義に語りあうことができている。話はそれるが、近年、各地の多くの女子大に建築の授業に呼ばれる。ケーキは「建築」の授業でも使える。ケーキを崩さずにエレガントに食べるためには建築構造が解っていないといけないと説明する。ケーキのおかげで学生に建築からまちづくりへの関心をもってもらえる。というより、ケーキによって、学生自身が普段から潜在的に考えているわが街への関心を表立てることができているのだろう。

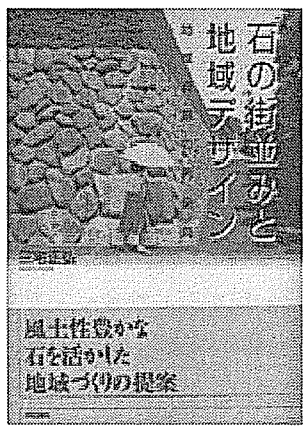
ケーキ屋さんお好み焼き屋さんは街の公共施設

なぜ、ケーキやお好み焼きがまちづくりに関係してくるのだろう。それはケーキ・お好みという「ものレベル」と、ケーキ屋さんというような「店レベル」で考えなくてはならない。ここでは紙面が限られるので要約するが、例えば、ケーキは近年ローカルな方向へ向き、北区や西区のニュータウンで見られるように、新しい街の街自慢となり、住んでいる人のアイデンティティに繋がっている。そしてブランドもローカルになり、わが街意識を醸成し、同時に他所の地域の人も訪れるような地域交流をひきだしている。

いままでいく機会の少なかったニュータウンへ訪れる機会を提供している。一方、お好み焼き屋さんは、神戸に多彩に残る地ソースとあいまってローカルブランドを味わう場として、そして井戸端会議など地域交流の場として機能し、下町のアイデンティティとなってきていることなどである。これについては著書にも詳しく書いたので機会があれば味わってください。いずれにしても、両者の店は、いうまでもなくデパートや繁華街の店でなく、人が住む街のものである。「住宅街の店」の人気の高まりは、住む人からも親しまれているという信用と無関係ではない。そしてそれらの店は、街のアイデンティティやコミュニティといった公共施設的な役割も果たす。戦後の神戸の街に、灘、兵庫、長田の下町にお好み焼き屋さんが果たした役割を、今、神戸の新しい街、西区や北区のケーキ屋さんも果たしているように、私は思う。



神戸とお好み焼き
2002年　神戸新聞総合出版センター



石の街並みと地域デザイン
2001年　学芸出版社

●石と石垣

子どものまちづくり

この辺りの小学生に、みんなの街の石はどれでしょう？　と聞くと、ほぼ全員が正解する。小学校の授業と同じことを、大学でやってみると正解率はすこぶる下がる。なぜだろう。子どもにとって石はもっとも身近なものだ。それが大人になるにしたがって忘れていく。それは地域から関心がどんどんと離れていっていくのと同じだろう。

私の小学校（芦屋市立朝日ヶ丘小学校）の卒業文集を読んでいると、石が砕けてできた花崗岩質の校庭で遊ぶと、切り傷が絶えず、膝をつくとブツブツのクレーターができる、といったことがでてくる。私も、野球少年だったからそのお陰で肘と膝は傷だらけであって、また雨で練習が休みにならない水はけのよすぎるグランドは好きでなかった。今でも女性の友人は、この街の地面はヒールに傷がいくという。でも、東京の黒っぽい地面よりは、転んでも白地の服でも汚れない。村上春樹は、水の干上がった芦屋川を上り、水がどこから地下にもぐっているかを探した子供時代をデビュー作に書いている。谷崎潤一郎は、関西での最初の作品に、この花崗岩質の明るい白い地面を、東京の地面と対比して描写している。石やそれが砕けた砂の地面は、地域にとって、われわれ人間が暮らすずっと前からそこにあるものである。

そして街にはその石を積んだ石垣が街並みを飾る。六甲山の山麓に広がる斜面の街には、敷地を平らにするために石垣は不可欠であった。古来から山に畑を築くためには、畑を耕すときに地中から出てくる石を積んできたのと同じように、この街はつくられてきた。だから谷崎潤一郎の作品のなかに、色が書かれるような街になった。その風景は、いつまでも守っていきたい。世界中でここにしかないものだから。

私は、自分の街は、ピンクの街と紹介してきた。多くの人はあなたの街はネオン街ですかという。この街の石は、ピンク色の粒と、谷崎のいう白い粒と、他に黒い粒が交じり合ってできている。だから谷崎は、白を強調するが、ピンクといっても嘘ではない。不思議なのは、この石が砕けて、砂になるとピンク色の粒が消えてしまう。先日、小学校の授業で、このピンクの粒が桜の色に変わるという嘘をついてしまった（もちろん訂正しました）。

石は子どもたちと、まちづくりを語る機会を与えてくれる。

私が子どもの頃、最初に考えたまちづくりもこの石垣でした。近所の石垣で、いつも割箸にタコ糸を結び、その先にチクワをつけて、石垣の穴を探りサワガニをとっていました。そして自分の家の前でも釣れるように試みた思い出があります。

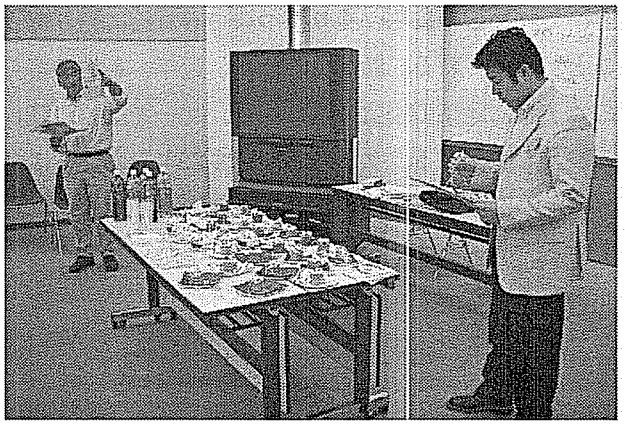
今は、このカニが住めて、また地域の風土的景観を形成しているこの石垣を大切にしたい。そして石を使っていきたい。今も畑を耕すがごとく、街を耕すたびに石がでてくる。しかし、ほとんどが捨てられてしまう。その場所に中国から持ってきた石が置かれたりする。夢は、耕しでてくる石をリサイクルし「石垣バンク」を開くことである。こうやって自分が生まれ育った街で、地域を見つめ直し、また、学生時代からまちづくりという新たな視点で街に関わるきっかけをくださった小林郁雄先生や天川佳美さんを始め阪神間・神戸の多くのプランナーの方々に心から感謝いたしております。

阪神間倶楽部　第７回研究会（第９回準備会）の記録

○日　時：2004 年 4 月 3 日（土）14：30～16：30
○場　所：芦屋市美術博物館
○参加者：31 名

4 月は桜見、ということで昨年同様芦屋での開催となりました。

13：30 ごろから各自で芦屋川周辺の桜見をしていただき、三々五々美術博物館に集合。三宅さんのケーキ談義をお聞きしながら、アンリシャルパンティエの新作ケーキを味わいました。その後開催中の「幻のロシア絵本 1920-30 年代」（日本初のロシア絵本展）を鑑賞しました。



■Ｄｒ.フランキーの街角たんけん　第５回　「灘文化軸」を歩く（その２）

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

原田の森ギャラリーの通用門を出て東の方へ歩み出す。

南へ下る坂道へ曲がる辻に、茶房プリンス。その店先の止まり木ならぬ止まり鉄棒で、まちのアイドル「ルリコンゴウインコのコロちゃん」が、きょうも街角を見守っている。（写真 1）

やがて、阪急高架橋のアーチ橋が目の前に広がりを見せる。大震災の折に、擬石風の装飾がはつり取られたが、優美な曲線美は健在である。阪急の高架の、そのドッレッシーな意匠には、深い理由があるが、機会を改めて詳しくお話することとしたい。

昼下がりで閑散としているパンダストリートを歩く。やがて、広場の向うにＪＲ灘駅北口が見えてくる。（写真 2）

大正 12 年の開業。現在の北口駅舎は昭和 9 年に完成した。軒周りをアールに処理したり、平滑なファサードの扱いや大きくとられたアーチ窓は表現派を思わせる。しかしながら、アーチ窓の建具には、ややクラシカルな意匠も見受けられる。

構内にも、古い書体の駅名銘板や、古レールを利用した跨線橋やホーム上屋、ホームの蘇鉄など、これほど文化軸の中心に相応しいたたずまいを持つ駅を、私は他に知らない。（写真 3）

駅南側の広場から、南側に下る。かつて大陸へ向かうポートトレインが新港突堤めがけて駆け抜けた臨港線だが、岩屋踏切から向うは、すでに架線もレールも外されて、貨物線の風情は日々、色褪せつつある。

阪神岩屋駅は、HAT の玄関口らしく、ゆとりを持った広場を持つ駅舎に生まれ変わった。「灘」にとことんこだわるメールマガジン naddist の発行者・慈憲一氏によれば、この駅の南側には、裕福な漁村であった岩屋の地力を背景に、神戸大空襲で壊滅するまで、近隣でも名の知れた花柳界があったのだという。そんな岩屋の地



写真１　原田のまちのアイドル（コロちゃん）



写真２　文化軸のへそ（ＪＲ灘駅舎）

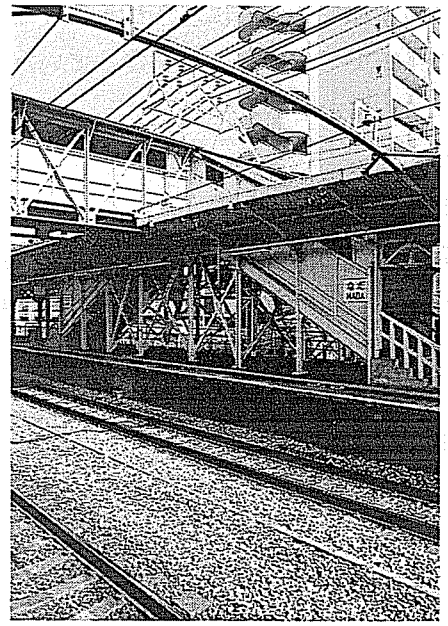


写真３　レールと木の融合（駅構内跨線橋）

霊に突き動かされたかのような御仁をモデルした、中村美律子のヒット曲にちなんだ高層の「ＢＢビル」が建ち上がるなど、このあたりも様相は一変しているが、小料理屋の屋号などに、往時の花町の残り香が感じられる。（写真 4）

大きな歩道橋をわたると、かつての神鋼・川鉄 2 大製鉄工場跡、いまは臨海部の副都心 HAT である。東西に、シンボリックに建つタワー型高層マンションは、いまやこのあたりのランドマークである。（写真 5）

22 年前、小学校のころは高層ビルといえば貿易センタービル、再開発の三宮センタービルや、六甲道のメイン六甲、新長田のジョイプラザくらいしか巨大なビルはなかったように思うが、今や摩耶山から旧市街地を見渡せば、震災復興の高層ビル群のお陰で、山の陰の新長田はともかく、兵庫、神戸、三宮、灘、六甲道、住吉と各ＪＲ駅がどこにあるのか判るようになった。これはある意味、東京並みに（良くも悪くも）さまざまな意味で物凄い事態である。

村野藤吾は、「建物は地面から生えてくるように建てるものだ」という、大雑多に言えばそんな趣旨のことばを残しているが、安藤忠雄の県立美術館は、村野の言葉を継承しようとするかのように、ベースメントに御影石を取り入れた。もし、住吉界隈の大邸宅の外構にみられるような、地場の御影の巨石でベースメントを作っていたならもっと良くなったかもしれない。

美術館や水辺広場には、朝夕、散歩などで人通りが生まれている。（写真 6）やがてはハーバーランドまで歩いて移動が可能となる渚の道が、現在急ピッチで整備中である。戦前まで、敏馬（みぬめ）の浜辺には、神戸レガッタ・アンド・アスレチッククラブのクラブハウスや別荘があり、夏には海水浴場としてにぎわっていた。形を変えて、賑わいのある浜辺の空間が、このハーバーウォークの完成によってどのように創出されていくのか、いまから楽しみである。

（この項完）



写真 4　岩屋


写真 5　ＨＡＴ－ＥＡＳＴ

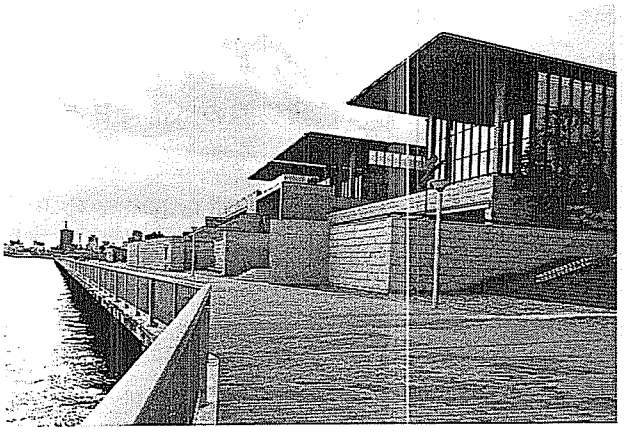


写真 6　渚の美の殿堂（県立美術館）

看板綺談・1

奇術師の兄弟

中川 紺

妻の目的は「荷物持たせること」だ。昼メシを食べた後、買物を始めてすぐに気がついた。冗談じゃない。彼女は四時間でも五時間でも買物し続けられる体質なのだ。「俺、スケジュール帳買いたいから、ちょっと行ってくる」私はそそくさと妻から離れた。

土曜日の午後、あちこちに買物に来ている家族があふれているが、私のような中年男の一人歩きはあまり見られない。散歩気分で居留地をぶらぶらと見て回る私は、信号を渡った先の建物に妙なものを見つけた。

建物は石造りの古いものだ。壁には真ちゅう製の古い看板がはめ込まれていて、すぐ横に地下におりる階段へ続く入口が口を開けている。看板にはこうあった。

『客求ム／奇術師／階段ノ下ヘ』

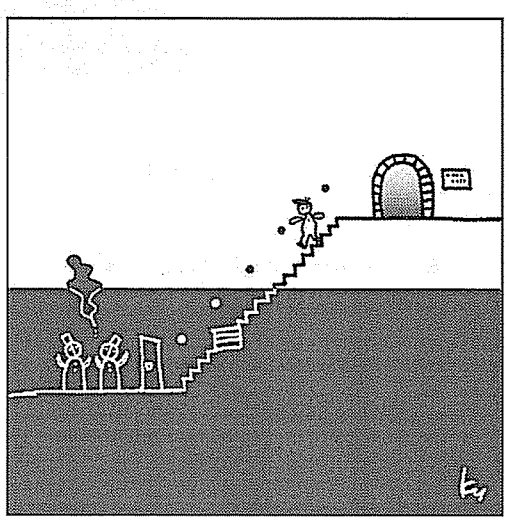
●●

怪しいと思いながらも、私は階段に足をかけた。外の音がまったく聞こえないところまでおりて行くと、そこには教会の礼拝堂のような部屋があった。くたびれた色の長椅子が並び、前には舞台が備えられている。

「ようこそ、ショーへ」

舞台の上から声がしたかと思うと、二人の男が現れた。アジア系の顔立ちの男たちは奇術師の兄弟だと名乗った。スタンドカラーの中国服のようなものを着ている。一人は紫、一人は深緑。言葉は流暢だが国籍も年齢も、どちらが兄でどちらが弟かも特定できない。

私は長椅子に腰掛ける。薄暗くてよく見えなかったが、客は他にも数名いた。



「それでは」と紫の男が言葉を発した。二人の奇術師は交互に手品を披露しはじめた。小さな玉やコインを空中から出現させたり、オウムを一瞬で横笛に変えて一曲奏でたり、派手ではないが指先の動きは美しく、質の高い技だった。もちろんしかけはまったく分からない。私は時間を忘れて見入っていた。

ショーが終わると、私たちは拍手をして見物料を支払おうとした。しかし深緑の奇術師がそれを制して「見ていただいたのは私たちの方なのです。お礼にぜひこれを」と言うと、手品で使った金色の玉を一つずつ手渡した。私は『客求ム』の言葉を思い出した。

私が玉の乗った手のひらを軽く握ると、奇術師は「その手を開いてごらんなさい」と言った。言う通りにすると、驚いたことに玉は小さなキャラメルに姿を変えていた。

彼は私にそっとささやいた。

「私たちは弟子を求めて国と時間を旅しているのです。あなた見込みがある。子どもの頃に戻って奇術師修行をしてみませんか」

（ばかな話だ）……だが、私はあの技に惹かれていた。つまらない会社を辞めて新しく人生をやりなおせるとしたら……。

しかし私は地下室を後にした。一時間半程経っていたが、まだ日は高い。妻の携帯に電話すると彼女は買物真っ最中で「荷物、重いから早く来て」と言うと切ってしまった。

●●

次の日、私はもう一度あの地下室へ出かけた。しかし看板はおろか、地下室への階段すら無くなっていた。今、別の誰かが、奇術師としての時間を生きているのだろうか。

呆然と立ち尽す私がポケットから出したキャラメルは紙屑に変わっていた。（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地 まちづくり支援ネットワーク・第３７回連絡会報告

今回のテーマは「建築のコンバージョン、まちのコンバージョン」で、４月９日(金)、ひょうごボランタリープラザにて行われました。報告は以下の３題。

①「まちのコンバージョン：乙仲通界隈の事例から」／松原永季（スタジオからリスト）
②「大阪都心のコンバージョン：多様な集合住宅へ」／上田智晴（上田智晴アーキテクツ）
③「大阪下町のコンバージョン：長屋住宅からデイサービスへ」／山本一馬（街角企画株式会社）

まずさん松原永季さん（スタヂオ・カタリスト）より、今回のテーマ解説も兼ねて、「建築のコンバージョン」に関する最近の話題や課題を述べられた後に、「まちのコンバージョン」という松原さんの“造語”に関して、神戸の乙仲通り（栄町通と海岸通の間の通り）を題材に、まちが変遷していく原因と過程、現在の状況について語っていただきました。上田さんからは、ご自身が手がけられた大阪都心における賃貸アパートなどのリニューアルの事例について、数多くのスライドを使って紹介されました。様々な工夫や、デザイン力が建物のリニューアルやコンバージョンに重要であることが実感させられました。


上田さん（左）と山本さん

山本さんからは、大阪都心に今も残る戦前長屋が多く残る地区において、一軒の長屋をデイサービスセンターにコンバージョンした事例が紹介されました。地域の商業者自身が事業化し、長屋という高齢者になじみやすい空間を利用していることなど、これからの地域づくりに示唆に富む内容でした。（中井都市研究室　中井　豊）


松原さん

■ 情報コーナー

●第６９回水谷ゼミナール
・日時：4月30日（金）18:30～21:00
・場所：こうべまちづくり会館６階会議室（神戸市中央区元町通４丁目、TEL.078-361-4523）
・内容：「コミュニティーセンター」のコンバージョン３題
①生野町「旧吉川邸」改修事業／中井豊（中井都市研究室）、中尾康彦（建築工房ヴェネックス）、②移築「御蔵集会所」／宮西悠司（神戸・地域問題研究所）、藤川幸宏（まち・コミュニケーション／Fuji 工作舎）、③西宮中央商店街「コミュニティセンター」リフォーム／後藤祐介（GU計画研究所）
・問合せ：ジーユー計画研究所（TEL.078-251-3593,FAX.251-3590）

●「これからの危機に備える」被災者復興支援会議III連続フォーラム

月	キーワード	コーディネーター
5月	率先共生	室崎益輝(消防研究所)
6月	持続共生	加藤恵正(兵庫県立経済経営研究所)
7月	現場主義	増田大成(ひょうごコミュニティネットワーク)
9月	震災文化	山口一史(ひょうご・まち・くらし研究所)
10月	地域力・市民力	渥美公秀(大阪大学人間科学部)
10月	エンパワーメント	速水順一郎(兵庫県こども会連合会)
11月	合意形成	立木茂雄(同志社大学文学部)
12月	自律連帯	小林郁雄(コー・プラン)
1月	参画協働	松本誠(市民まちづくり研究所)

・問合せ：被災者復興市民会議III事務局（TEL.078-362-4218）

●2003 年度／平成 15 年度大大特研究発表会（神戸）
・日時：６月19日(土)13:00～
・場所：人と防災未来センター（防災未来館）５階ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝﾙｰﾑ（TEL.078-262-5060）
・内容：「被災業合住宅復旧」、「地域経済復興支援」、「震災復興政策評価」の各チームの報告及び討論
・問合せ：コー・プラン（TEL.078-842-2311、FAX.842-2203）

更新の月ですので、よろしくおねがいします（編集長）。

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2004年5月30日発行

月刊

きんもくせい

04年5月号
(50+36+NO. 14)

発行：阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■震災雑感

田中　保三（御蔵5・6丁目まちづくり協議会　会長）

阪神淡路大震災で焦土と化した御菅のまちに立ちすくみ戦後の廃墟となった博多のまちや疎開先から戻っての神戸、三宮界隈が浮かんだ。でも鉄やトタン、倒壊家屋の木材類が殆ど残ったままだったのが戦災との違いだろう。戦災は思いを巡らす力もなかったが震災では何と脆弱なまちに住んでいたのかと我ながら驚いた。河内の八尾市太子堂に住んでいた時ジェーン台風に襲われた。暴風雨の中、家から少し離れた所にあった細長い兵舎が一気に長手方向に物凄い音と地響きを立てて倒壊した。自宅の瓦が紙のように舞い上がり遠くへ飛んでいく。近所の噂では大和川の堤防が決壊し大洪水が押し寄せると言う。左岸の藤井寺には父の工場があり、右岸なら我が家である。強風と豪雨の中、随分長い時間なす術なく恐怖のどん底に押し込まれた。

大震災は極めて短時間であったが二階が今にも落ちて『押し潰される！』と思ったが揺れが激しく四つん這いがやっとであった。この死の恐怖は未だ自分の身から消せない。

ジェーン台風から震災まで経済至上主義を一気に追い求めてきた。二十世紀二度の世界大戦は科学技術を飛躍的に進歩発展させた。新しい商品が溢れ便利で快適な生活は人々の生活を楽にさせた。だが一方それは電気、水道、ガス等多くのエネルギーが大量に使われ、我々が住んでいる地球の環境が害され1972年成長の限界を警告された。でもそれはわが身と別のことと無関心を決め込んだ。そして20年余大地震はやってきた。震災は便利で快適な生活が人々を幸せにしていないことに気づかせた。嬉しいとか、楽しいとか、感動するとか生きていてよかったと思うことは物質的に豊かな生活とは別次元のことであった。人と人との関係も交通通信手段の進歩により遠くの人とも簡単に会えるし、話も出来るようになった。だがその分身近な人とは一工夫が必要で疎遠になっている。

ほんの5、60年前人間は自然の一部と考えられていたのに科学技術の進歩によって人間は自分の利益のために自然を利用するようになった。激震被害の渦中にあって『これは神も仏もあったもんじゃない』と神仏を恨んだ。だが間をおいて人災に思いを馳せ『いやこれは神仏の試練だ』と自分の中で変化した。今まちの中で個人間、グループ間に問題がある。問題はなくなる訳ではないが、緊張をどう抑えていくか。自然と人間の関係に思いを致し、時間をかけて知恵や道具を探し当てたい。

＊　＊　＊

次回は、阪神大震災を記録しつづける会の高森一徳さんにお願いします

（小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→中島克元→中村順子→海崎孝一→某市某職員→前田裕資→佐藤三郎→細川裕子→出口俊一→高田富三→田中保三→　）

ふれあい住宅（復興公営コレクティブ住宅）の検証（その２）

「ふれあい住宅連絡会」の功用について

石東　直子（石東・都市環境研究室）

ふれあい住宅連絡会の結成目的

10 地区のふれあい住宅は 97 年夏から 99 年春にかけて入居が始まり、「ふれあい住宅連絡会」はそれぞれのふれあい住宅の生活が少しづつ落ちついてきた 2001 年 1 月に発足した。コレクティブハウジング事業推進応援団の入居前からの先導的なサポートから自立して 10 地区の住宅がネットワークを組み、連絡会の目的として「ふれあい住宅連絡会の会則」に次のように記している。

1. 本会は 1995 年の阪神・淡路大震災の復興事業として建設された、全国初の公営コレクティブハウジング（以下「ふれあい住宅」と称す）の居住者たちが相互に交流し、親睦を深め、共通の課題の対応策を考えたり、時には共にイベントを開催するなどして、安心して楽しく暮らせる協同居住を育んでいくことを目的とする。

2. 本会は、歳月の経過によって生じてくるであろうさまざまな協同居住の問題、とりわけふれあい住宅の居住者だけでは解決が難しいような問題に対して、関係機関や支援者などに対応策やアドバイスを求めるときに、居住者を代表した組織となることを目的とする。

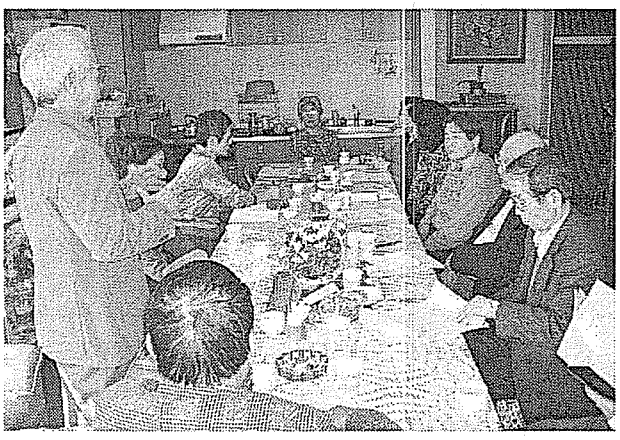
発足当時は、10 地区の住宅が足並みをそろえて参画していたが、その後「脇浜ふれあい住宅」は脱会した。脇浜ふれあい住宅は入居時期も遅く、他の住宅に比べて比較的若い高齢者が多く、自治会として独自の親睦活動も活発だったので、連絡会の必要性を感じないという自治会長の意向で脱会した。しかし、未加入の住宅にもコレクティブ応援団が発行する「ふれあい住宅連絡会ネットレター」は全戸配布を続けており、恒例の秋のバスツアーには案内を配布しているので、居住者の中には以前のように気軽に参加できなくて寂しいという声もあるようだ。また、連絡会の発足当初から、自治会として全世帯加入の同意が得られず、居住者の有志たちだけが参加している住宅もあり、自治会として加入しているのは５地区である。会費は加入世帯あたり 1 ヶ月 50 円を集めて、2 ヶ月ごとに開く連絡会世話人会の会場使用費、事務文具・通信費、秋のイベント補助費等に支出している。

ふれあい住宅連絡会の活動

連絡会世話人会はは各ふれあい住宅の居住者有志とコレクティブ応援団が集まって開催し、それぞれの住宅の情況を交換しあって、協同居住を運営する上での課題などを話し合っている。わが国に前例のない住まい方、しかもほとんどが高齢者居住であるということから、いつも話題は深刻である。

2001 年 10 月には「公営コレクティブハウジング・ふれあい住宅の協同居住にかかわる課題の改善についての要望書」を県に提出した。その内容は、①協同スペースの電気基本料金の改定に向けての対策について　②協同スペースの水道基本料金の改定に向けての対策について　③ふれあい住宅の住まい方についての説明会や学習会の必要性について　④協同居住ができない人が移り住めるような方策についてであった。

①と②はともに建物設計のまずさに起因するもので、実生活として必要以上の大容量の設備になっているために高い基本料金を払わされているので、設備の改善要求である。これに対して、県は個別に調



ふれあい住宅連絡会世話人会　'040229 片山ふれあい住宅

査をして一部改善策がとられた住宅もあるが、まだ継続した課題となっている。③については、県営ふれあい住宅では新規入居者に対する入居前説明会でふれあい住宅の居住者代表が協同居住という新しい住まい方について説明をする機会をもち、入居希望者は事前に希望住宅を訪問して説明を受けることもできるようになった。

10 地区のふれあい住宅のうち 6 地区は高齢者向け住宅で、4 地区は多世代居住であるが若い世帯の居住はごく僅かである。従って、近年の連絡会では、居住者の加齢に伴って協同居住の運営ができなくなった時、痴呆症や寝たきり状態の人が次々と出てきた時、どのような対応ができるのかということに話題が集中する。そのために、まず各住宅の実状を正確に捉えた「ふれあい住宅カルテ」をつくることにして、2001 年夏に第一次のカルテを作成した。居住者の動態や年齢構成、協同の住運営情況（行事や共同活動、共益費の収支等）、居住者の住まいへの感想や自治会の課題等を把握した。これはコレクティブ応援団の指導のもとに神戸大の学生が卒業論文として調査した。それから 3 年経ち、特に最近は居住者の動態やふれあい行事の縮小が目立ってきたので、コレクティブ応援団は連絡会と共同で第二次カルテ作成のための調査を今年５月に行っている。最近の情況変化等を再診断して、特に居住者の加齢に伴う将来の対応策を探ろうとしている。

恒例になっている秋の大イベント、バスを借り切って郊外へ出かける一日バスツアーがある。これは県の「走る県民教室制度」を申請して、10 地区のふれあい住宅居住者全員に呼びかけて希望者が参加する。居住者の楽しみや元気アップのためにどこかへ出かけたくても、単独の住宅だけではなかなか実現しにくいが、連絡会なら実現できる。バスツアーの参加者たちは他のふれあい住宅の人たちとも知り合いになり交流が広がっている。

連絡会としては活動継続のための資金確保として、これまでにもいろいろな活動助成を申請してきたが、このたび大勝利を獲得した。毎日新聞と同社会事業団の「阪神大震災ボランティア・サポート制度」に応募し選ばれた。各ふれあい住宅の居住者有志たちがボランティア登録をして、連絡会の運営や住宅ごとの居住者見守り活動等も行っている。単独の住宅だけでは居住者特性や自治会組織の事情によって継続が難しいコミュニティ育成のための活動も、連絡会のボランティアグループがサポートしあうと継続する。

連絡会の功用

複数の住宅が連絡会を持って情報交換や暮らしの問題を話し合っているケースは、ふれあい住宅連絡会以外にもある。例えば、神戸市東灘区にある 10 地区ほどの復興公営住宅は CS 神戸さんのサポートのもとに、自治会がネットワークして連絡会を持っている。区の職員等も参加して定期的に会合をもち、震災後の暮らしや住まい、自治会運営の課題等を話し合っている。他にもこのような事例がありそうだ。しかし反対に、近隣エリアの復興住宅の自治会が集まって自治会連合会を結成したが、連合会運営でつまづき空中分解してしまった事例も少なくないと聞く。

居住者自らが協力して暮らしの課題を把握し、共同生活の向上を計るために知恵を出し合って、必要な場合は外部サポートを求めるという住意識の向上はとても大切なことである。

一方、住民自らが暮らしに対する意欲を育むために、情況の変化に対応したアドバイスを継続していくような専門サポーターや常設の相談窓口も欠かせない。それには、専門サポーターが継続してサポート活動を続けられる条件整備も必要であると痛感している。



秋の一日バスツアー　'031023 兵庫県立フラワーセンター

■『コンパクトシティ』を考える7－ジェントルマンの国イギリスと産業革命

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

1．カントリとジェントルマン

英語の「カントリ(country)」は、「国」とも「田舎」とも訳す。18 世紀末の産業革命が起こるまでは、イギリスでは田園的・農村的なものが中心であり、それが「カントリ」であった。

当時のカントリの支配階層は広大な農地の大地主である『ジェントルマン（貴族とジェントリ）』であった。この言葉がイギリスの社会的現実と対応して用いられるようになったのは 16 世紀頃であった。14 世紀からの英仏戦争、王位継承の「バラ戦争」などを契機として、社会の変動と国政の改革に乗じて、ジェントリ（＝貴族の下の地主階層）が勃興して一躍支配層に躍り出た頃である。以来、イギリス社会は大きく２つに区分され、「支配する少数者」（＝ジェントルマン）と、そうでないものとに分けられた。ジェントルマンは、中央においては国王の官僚として、絶対的統治を補完し、支配の側に加わった。貴族院や庶民院の議員として、また国教会や軍隊の枢要な地位について、一貫して社会の最上位の身分を占めた。

新興ジェントリは、「貴族」と違い、血統による出自の高貴さを保持しないため、古典的教養のほか作法や礼節をわきまえることで血統の不足を補おうとした。このため子弟をパブリック・スクールやオックスフォード、ケンブリッジ大学（オックス・ブリッジ）での教育を受けさせ、為政者にふさわしい教養と諸徳性を具備することに努めた。そこに中庸を得た無私の判断を示す政治的人間という理想的人間類型としての「ジェントルマンの理念」が定着したのであった。

イギリスで地方自治が他の大陸諸国に比べて発達したのは、地方（カウンティ）に作法と礼節を守り無私なジェントリが定住していたからである。一般的に絶対主義王政は、常備軍と全国にめぐらされた地方行政に官僚を用いたが、イギリスではこの方法を採られなかった。カウンティの自衛組織たる民兵隊の編成や、広範な地方行政の職務を治安判事に任命した在地のジェントリが重要な役割を果たしたからであった。しかも驚くことに、煩雑な職務をこなした上で、無給であった。

2．賃金労働者と産業資本家の誕生

中世よりヨーロッパで普及した農法は、牧畜と穀物栽培を有機的に結合した『三圃式農法』であった。これは村落全体の土地を共同利用し、全体を三つの圃場に分けて耕作する。一枚は主食の小麦を冬に蒔く冬畑とし、２つ目は夏畑として春に小麦やエンドウ豆、カラスムギを蒔き、３つ目は休耕地にする。冬畑は収穫後休ませ、次年度に夏畑とする。夏畑は、刈り入れ時に麦の穂だけ刈って、下の部分を家畜に食べさせ、家畜の糞を施肥にする。翌年の冬に施肥で地力を増したところに冬小麦を蒔くのを繰り返す農法である。三圃制農法は、土地利用の高度化、年間の労働量配分の平均化、生産力の向上などの長所を有する農法で、村落単位で土地を共同利用したため、村落共同体の結びつきは大変強かった。

17 世紀後半に、輪作作物に栽培牧草とカブなど根菜類の飼料作物が導入され、冬季にも家畜を飼うことができる『穀草式農法』が始まった。家畜の生産量と糞尿量が増加し、地味も肥えて収穫が向上したため、三圃制をやめて全ての耕地で作付けができるようになった。農業生産が安定的に増大すると、富裕な農民は個人主義的な独自の農業経営を進め、自由に市場向けの穀物生産し、経営規模を拡大した。このため、18 世紀になると、自らの土地を生け垣などによる『囲い込み』が急速に進展した。囲い込みは共有地での共同放牧を不可能とし、村落共同体の解体を促進させた。生活の基礎を失った小農家は、農作業や糸つむぎ、機織りなどの賃金で雇われる労働者となった。農村で仕事にも就けない貧窮化した農民は、都市に流れ込んで賃金労働者になるしかなかった。

村落共同体の解体は、新たに工業を営みたいが、都市におけるギルドの制約を嫌う人々に、農村の安価な労働力を利用する毛織物工業の展開を推進させた。農村工業という新しい産業が展開し、農業を中心とする田園地域の様相に変化が現れた。これが産業革命に先立つ工業化の原点である。

国外に目を向けるとイギリスは 17 世紀には、オランダやフランスとの重商主義戦争に勝利し、カリブ海や北米大陸を中心に植民地開拓が進み、ヨーロッパ外の世界との貿易が急激に拡大した。取引される商品の構成も、それまで輸出の大半を占めた毛織物以外に、雑多な工業製品は新大陸やアフリカの市場に、新世界産の砂糖やタバコ、インド産綿布、アフリカからの奴隷などの再輸出による三角貿易が拡大した。貿易の拡大によって、リヴァプールやロンドン、グラスゴーなどの港湾・商業都市が発達した。アイルランドやカリブ海に土地を持つ不在地主、大貿易商、インド成金などが、伝統的な地主であるジェントルマンとは異なる『産業資本家（＝ブルジョア）』という新たな社会階層をやがて形成することとなった。

3．産業革命と工業化社会の展開

18 世紀末に始まったイギリスの産業革命についてここでは詳述しないが、農村工業、賃労働者の発生や産業資本家の誕生のほか、重要な要因があった。それは、ピューリタン革命により封建的土地所有の国王の権利が否定され、近代的な土地所有権が確立していたこと。また、名誉革命で「権利の章典」が発布され、自由で平等な市民社会が保障され、自由な個人間の契約社会が確立し、国家が経済に介入することができなくなったことである。ここに各人は生産手段を私的に所有し、私的労働の産物である商品を相互に等価で交換する『私有財産制』と『市場経済』が確立した。イギリスは国内外に大きな市場を持ち、他のヨーロッパの国々に先駆けて『資本主義』が成立した。

産業革命は初期の機械化生産の主導部門である綿工業から起こった。東インドからの安い綿布に対抗し、生産性を高めるため、技術革新が生まれた。紡績機の開発が進み、1769 年のアークライトの水力紡績機で、水力で紡織機を動かし、水力の利用できる河川沿いに機械制工場が生まれた。

1765 年にジェームズ・ワットが、改良型の蒸気機関を開発した。85 年に初めて綿工場に蒸気機関が動力として使用され、立地を選ばず工場を建設できることになった。ここに工場の密集する大工業都市が成立する条件が整ったのであった。そしてイギリスは綿工業の飛躍的な発展をベースに一気に産業革命への道を突っ走ったのである。

『工業化』とは「技術革新により国民一人あたりの生産量または所得を持続的に成長させる過程」である。19 世紀に入り、工業化した都市に産業と人口が集中し『工業都市』が誕生し、1851 年には都市人口が初めて農村人口を超えた。鉄道網が整備され、産業の大動脈になった。社会は、政治の支配者である地主階級と、ブルジョア階級、労働者階級の３つに区分され、国民所得は、地代、利潤、賃金として配分された。1850-70 年代にはイギリスは繁栄の時代を迎え、『世界の工場』として君臨した。成長を続ける中、３階級間の格差の是正が進み、84 年までの３度の選挙法改正で、労働者の戸主選挙権が認められ、人口比による選挙区に改正され、政治面の都市と農村の差が無くなり、ブルジョア階級がジェントリを凌駕した。

1880 年代以降になると、アメリカ合衆国やドイツも工業化し世界市場に進出し、イギリスの独占的支配が崩れた。さらにアメリカからの安価な農産物が輸入され、イギリス農業は衰退に向かい、ここに地主階級の支配は根底から崩れていった。

『工業化社会』では資本家と労働者が主役となり、ブルジョア階級と中間階級は「新たなるジェントルマン階級」を目指した。子弟をパブリック・スクールやオックス・ブリッジで教育を受けさせ、田舎や都市郊外の田園都市に土地や邸宅を構えた。工業化社会での「新たなジェントルマンの理念」は、血統ではなく、富と徳性と教養を持ち、実業との両立できる人へと変容していった。

イギリスは今日もジェントルマンの国である。

■たるみレポート（その１）

大塚　映二（神戸市）

いきなりさむ～いオヤジギャグですが、弛みを告発する話じゃありません。神戸の西に位置する垂水区に暮らす人々のまちづくりにかける熱い思いを伝えたいと思います。隔月くらいで、数回にわたって、執筆者も替わりながら、お気楽シリーズでお届けするつもりです。

さて、第１回。

私が垂水区役所（まちづくり支援課）に来て１年あまりになります。こうして書かせていただこうと思った動機ですが、垂水の人々は自主的にこつこつと地道にいろんなまちづくりに取り組んでいます。それなのに、意外と区外には知られてないんです。特に三宮の方には。これはもったいない、まちの人々の努力に報いるには、機会あるごとにアピールしたい。せめてそれくらいはしないと「支援課」の名が恥ずかしい、と思った次第です。それで小林郁雄氏をはじめ支援ネットワークの方々に、紙面を少しくださいとお願いしました。

ところが、どっこい。

そうこうしているうちに、垂水区民の活躍ぶりが、神戸市・協働と参画のプラットホームの目に止まりました。４月発行の『プラットホーム通信』第１０号に、垂水区民のまちづくりが二題紹介されました。ひとつは、「Ｉ　ＬＯＶＥ　缶とり～きれいな垂水のまちづくり～」。ＮＰＯ法人ふぉーらいふの音頭で、空き缶拾いのクリーンウォーク。子どもたちの活動に触発されて地域ぐるみの環境美化活動に広がりつつあります。もう一つは、「神和台防犯の会」。昼間の空き巣事件の連続発生を契機に、わがまちを守る活動にみんなで立ち上がり、防犯パトロールなどを通じて住民の結束を強めています。

二つを合わせてく“わがまちヒーロー”のいるまち！！＞・・・ということで、これをごらんになった方は、垂水に息づくまちづくりの一端を知ってもらったことと思います。まだの方は、このすばらしきヒーローたちの活躍ぶりを『プラットホーム通信』で見てください。

URLは、http://www.kobe2001.or.jp/kyoudou_download.htm



垂水の創作ダンス“いかなごＧＯ！ＧＯ！”

ところで、垂水といえばどんなイメージが思い浮かびますか？

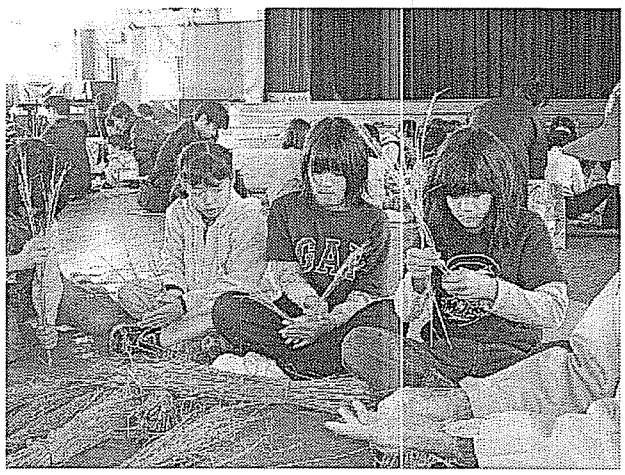
○須磨・塩屋から舞子にかけての海岸線、明石海峡大橋、マリンピア神戸・・・やはり海。

○旧ジェームス邸、旧日下部邸（舞子ホテル）、移情閣（孫中山記念館）・・近代洋風建築。

○丘陵地にひろがる住宅地、明舞団地、新多聞団地・・・高度成長を支えた住宅団地。

ハード面でいえばそんなところでしょうか。

次回からはこのまちに暮らす人々の奮闘ぶりを紹介していきます。



世代間交流：子どもたちにしめ縄を教える

■木造住宅の耐震性能診断測定装置　被災地神戸に貸与

宮西　悠司(真野地区まちづくり推進会相談役)

木造住宅の耐震性能を簡単に診断ができる測定装置が開発されました。開発したのは早稲田大学理工学部の毎熊輝記教授の研究室(地質工学)です。

この動的耐震診断システムは、「地盤は常に微細な振動(常時微動)をしている、地盤の上に建つ建物も地盤の揺れに反応して微少な振動している」ことに注目し、地盤と建物の常時微動を観測することにより、建物の固有周期、最大振幅倍率、減衰定数を割り出し、建物の構造特性を解析・評価するものです。

これまで木造住宅の耐震診断は基礎構造や壁の配置と割合などの外見から評価をしてきた。それはあくまでこうであろうという予測で、建物の実態の強さ弱さを正確に把握したとはいいがたい。これを静的な診断システムと呼べば、動的耐震診断システムは木造住宅の非破壊検査を可能にした。人間の健康診断に例えるなら心臓疾患を心電図で解析するのに似ている。

この測定装置は小型の地震計2個と増幅器(アンプ)、ノート型パソコンとプリンターで構成されています。地震計は地盤面と二階の床に置きます。これらの装置の設置は30分程度で完了します。測定は10分程度でグラフと数値がプリントアウトされます。

この手軽さは、建物の補強をやりながらの測定を可能とし、補強により建物の耐震性能がどの程度向上したかを数値で確認することができます。例えば、厚手のベニヤ板を打ち付けることで壁の補強ができるわけで、数値を確認しながら合板の枚数を決めていけば良い。耐震補強工事の経費節減にもつながるでしょう。

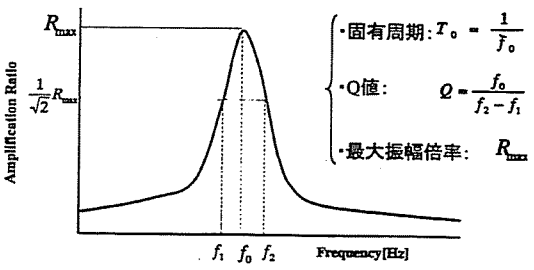
兵庫県は住宅の耐震診断、耐震補強工事費の一部として補助金出す制度を始めました。しかし、これまで耐震補強工事後の耐震性向上の効果を確かめる術がありませんでした。耐震診断判定士の資格付与、優良工務店の認定、耐震補強の工法認定など、ユーザーの信頼を高める努力はあっても、耐震補強工事の実際の効果が確認できなくてはユーザーの不安の解消にはなりません。

行政も、個人資産形成に資するとして、これまでタブーとされてきたところの垣根を越えて、個人の耐震補強に公費を補助金として投入するからには、効果確認は納税者に対する責務でもあります。

あの神戸の地震から九年経過しましたが、大都市部での住宅の耐震改修は殆ど進んでいません。このままでは阪神の悲劇の再現が避けられません。問題は深刻です。地震防災対策として緊急かつ最重要な住宅の耐震改修を普及させていく一助として動的耐震診断システムを役立てたいものです。

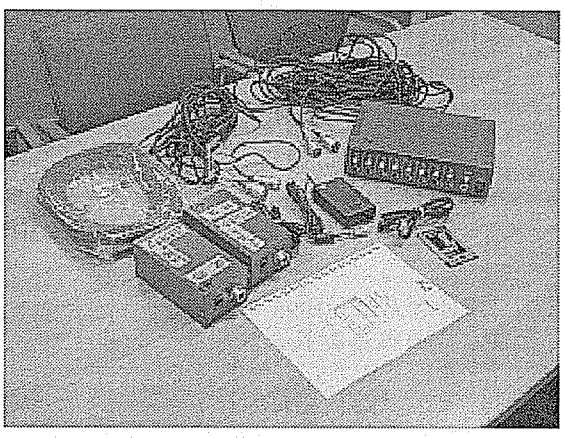
行政には動的耐震診断システムの有効性・信頼性を積極的に評価・確認していただき、木造住宅の耐震診断評価への導入、耐震補強工事の効果確認に活用してもらいたい。具体的には、耐震補強補助金交付申請書類に補強工事の効果確認データとして「住宅の動的耐震性能の定量的評価方法」による補強工事前後の測定値を添付することを義務付けることを、提案したい。

固有周期・Q値・最大振幅倍率の求め方



振幅倍率と周波数の関係

耐震性評価指数C
(毎熊教授の特許)　$C = \left(\frac{T_0}{0.1}\right)^2 \times \sqrt{Q \times R_{max}}$



■最近の「きんもくせい」読後評

内仲　英輔

まず、巻頭。次回筆者の指名制度は面白い試みで、途中で素直に応じない人がいてはらはらさせられたりもしましたが、再び軌道に乗ったらしいのはご同慶の至りです。欲をいうなら、指名を受けた筆者が前者のテーマに言及しながら、次なる問題提起につなげるという展開になればもっと素晴らしいと思うのですが、現実的にはむずかしいことかも知れませんね。

4 月号（NO.13）巻頭の「神戸市の協働と参画３つの疑問」は、たまたま地元で自治基本条例をつくる会の活動をしている小生にとって興味深い内容でした。神戸空港の建設計画が打ち上げられたとき、遠く離れた東京の記者クラブでは、だれも本気にしなかった。廃止のはずの伊丹空港は残せというし、その上もう一つなんていい気なもんだというムードで、いくら何でも神戸市民の良識が許すまいと思っていた。それが、歳月を経るうちに現実に迫りつつある政治の不思議。

さらに、市民参加に関係のあるらしい一連の条例が過程も公開されないまま可決されてしまった怪。条例の内容を見ていないので、うかつな論評はできないけれど、義務のみあって権利が書かれていないらしい。我々のつくった「自治基本条例市民案」では、逆に権利のみで義務が書かれていないという批判に対して、市民の権利を保障するのが自治基本条例なのです、と説明しています。

ついでに 3 月号（NO.12）の巻頭、かねて「自助」は危険な言葉と思っていた小生にはよく分かる問題提起でした。出口さんの所属である兵庫県震災復興研究センターというのが、県の機関であるのかは分かりませんが、勇気ある発言というべきでしょう。

さて、『きんもくせい』は、基本的には数多くの珠玉のような連載と単発の地域情報から成り立っていると思っています。

その連載の一つ一つのレベルが高く、地域の問題を核としているにも拘わらず普遍性に富み、地域外に住む小生のような者にも有益、かつ興味深く仕上がっているところが、なんとも素晴らしい。関西というか、京阪神というべきか、人材の蓄積が奥深いのに感心するばかりです。ただ、紙面上の制約からと思いますが、楽しみにしている「続き」が、必ずしも次号で読めないのは残念なことです。

3 月号（NO.12）、石東さんのコレクティブハウジングという用語が曖昧に使われているという問題提起。小生が、この言葉を知ったのは、もう 10 年以上のむかし、もちろん震災前、神戸大の平山洋介さんに頂いたご著書によると覚えますが、その後、震災復興住宅だけでなく関東地方の高齢者向け集合住宅などにも、やや無原則に使われている気がして、疑問に思っていたところでした。当然のご指摘だと思います。しかし、考えてみれば、先進的な欧米の試みを取り入れるとき、原語（カタカナ）ごと取り込んでしまう傾向にも問題があるような気がします。外国語を学ぶ十分な機会に恵まれなかった高齢の人たちをカタカナ攻め（責め？）にすることにはどうも賛成できない。

シニア向けのコレクティブハウスのマネージメントにあたっては、テナントのニーズにマッチしたサービス、バリアフリーのレイアウトとデイケアセンターへのアクセシビリティーが必要…なんて！

いいたいのは、コレクティブハウジングなる外来語に飛びつかず、「ふれあい住宅」という折角のすてきな言葉に満足していたとしても、なんの問題もなかったろうということです。もちろん石東さんのご指摘に異論を唱えるつもりは毛頭なく、「その２」以降が楽しみです。

内仲さんは、1995 年 2 月 14 日に支援ネットワークを訪ねて下さいました。当時は、朝日新聞東京本社の編集委員と記憶しておりますが、その後論説委員を経て、ご退職され、今も変わらず「きんもくせい」の愛読者でいて下さいます。

時々、「論」をお寄せ下さるようにお願いをいたしました。このように、ご意見を掲載させていただきますので、皆様もどうぞお寄せ下さい。　（天川佳美）

看板綺談・2

インドア・レイン

中川　紺

まだ梅雨には一ヶ月もあるというのに、天井の隅っこに黒カビが姿を現した。

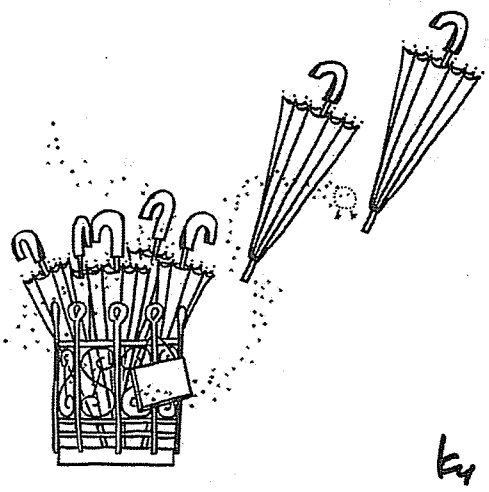
事の発端は先週の土曜日。

夫と元町で買物をしていた時ににわか雨にあった。荷物を両手いっぱいに持っていた私たちはコンビニに向かったが、レジの男の子は「傘は売り切れました」と申し訳なさそうに告げた。隣の軒先で雨宿りをしていても、雨足は強まる一方で止む気配が無い。その時ふと、青銅の傘立てにささった数本のビニル傘が目に入った。文庫本を広げたくらいの大きさの木札が下がっていて『どうぞご自由にお持ち下さい』とあった。私たちはその傘を一本、ありがたく拝借して帰ってきたのだが、それがすべてのはじまりになった。

●●

〈それ〉に気づいたのは次の日の昼だった。閉じた傘の中で何かごそごそと動く気配がするので、のぞいてみると、箸置くらいの小さなものが黒ゴマみたいな瞳でこちらを見てちゅうと鳴いた。ねずみ、ではない。よく見ると足（らしきもの）は二本しかない。体全体がうっすらと湿った白い毛に被われている様子は動物の赤ん坊を思わせた。危害はないだろうと思って手に乗せてみると意外と重さがあり、掌にじわっと湿り気が広がった。

水をたっぷり含んだ小さないきものは、それ以来居着いてしまい、おかげで家の中の湿度がぐんとあがってしまった。まるでうちだけが梅雨になったみたいである。小さなものは夫がいる時には姿を現さなかったが、食



卓の隅や、お風呂場の洗面器の中など、傘の中にいないときは家中を動きまわっていた。しかしカビを発見してからは、のんびりとは構えていられなくなった。これではじきに家中に広がる。でも外に出してもいつの間にか戻ってきてしまうのだ。どうしたらいいのか、全く見当がつかないまま、数日が過ぎた。

●●

ある日、商店街の裏通りに小さなペットショップを見つけた。表に鳥かごを山のように積んでいて、入口に『どんないきものでもあります／引き取ります』と貼り紙があったので、ものは試しと、私はそこにあの小さなものを持ち込んでみた。私の倍以上の年齢であろう店長のおじいさんは、一目見るなり「ああ、雨の精か。まだ子どもだな。こりゃ珍しい」と言い、私は「そんな気がしてたんですけど、やっぱりそういうものだったんですね」とずっと思っていたことを口にした。あの湿度の高さは尋常ではない。

引き取って空に戻してくれるというので、私は「雨の子」を渡すことにした。ところが、すっかり馴染んだせいか、私の髪に絡まってなかなか離れようとしない。結局、店長さんのアドバイスで私は自分の髪をひと束、餞別に持たせてやった。それでも雨の子はちゅうちゅうと何度か鳴き、名残惜しそうにしていたが、私の髪束に数回頬ずりするような仕種をすると、しゅわっと蒸発するように消えてしまった。

●●

玄関を開けると、小さな雨の精がいなくなった家は驚くほどからっと乾いていた。

もう鳴き声の聞こえない傘を見て、私は少しだけさみしいな、と思った。（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 第６９回・水谷ゼミナール報告

今回のテーマは「コミュニティセンターのコンバージョン3題」で、4月 30 日(金)、こうべまちづくり会館にて行われました。

①「生野町　旧吉川邸・改修事業」／中井豊（中井都市研究室（筆者））、中尾康彦（建築工房ベネックス）

筆者からは、景観形成地区に指定されている生野町口銀谷地区において、町に寄贈された伝統的建築物を、住民参加のワークショップでその利用や管理の方法を検討した経緯や、その背景等について報告しました。また、中尾さんからは、実施設計及び監理を担当された立場から、伝統的建物の公共建築物という特殊な状況における工事を進める上での様々な問題、課題について語っていただきました。

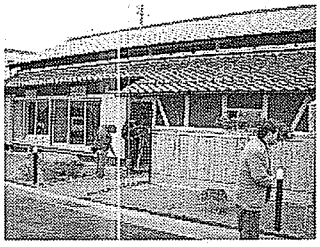
②「移築・御蔵集会所」／宮西悠司（神戸・地域問題研究所）、藤川幸宏（まち･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ／Fuji 工作舎）

宮西さんからは、震災復興区画整理事業が進められている神戸市長田区の御蔵地区で、住民の発案で集会所を古民家の移築により整備した取り組みについて、整備費という制約条件の中で、住民の知恵と学生をはじめとする多くの支援者の働きによって成し遂げられてきたことが語られました。また、取り組み当初から完成まで設計者として関わってこられた藤川さんからは、スライド等により取り組みの経緯について詳細に説明していただきました。

③「西宮中央商店街　コミュニティセンター・リフォーム」／後藤祐介（ＧＵ計画研究所）

後藤さんからは、阪神西宮駅の南側にある西宮中央商店街において、老朽化した商店街振興組合事務所をコミュニティセンター（＋イベント広場）として再生する取り組みについて、整備前と整備後をわかりやすく提示して説明されました。

これらの報告に対するコメントとして、吉川俊一さん（吉川建築設計室）から語っていただきました。（中井都市研究室　中井　豊）



御蔵集会所外観

■ 情報コーナー

●阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第３８回連絡会

・日時：6月11日（金）18:30～21:00
・場所：神戸勤労会館 406 号室（JR 三宮駅より南東へ徒歩約３分、中央区役所隣り）（いつもと場所が異なります！）
・内容：「共生型住まい／民間コレクティブ住宅と公営ふれあい住宅」
解題：「注目をあびてきた共生型住まいの動向について」／石東直子（石東・都市環境研究室）
報告：①「公営コレクティブ住宅・ふれあい住宅の生活」／岩崎洋三（県営大倉山ふれあい住宅代表）、②「コレクティブハウジングで暮らそう」／宮前眞理子（NPO コレクティブハウジング社事務局長）
・問合せ：ジーユー計画研究所（TEL. 078-251-3593, FAX. 251-3590）

●第７０回・水谷ゼミナール

・日時：6月25日（金）18:30～21:00
・場所：こうべまちづくり会館６階・テーマ：（仮称）「住まいの最新情報」（詳細の内容は未定）

●被災者復興支援会議Ⅲ連続フォーラム－体験を力に、教訓を未来に－第３回「持続共生／地域経済とコミュニティの新たな関係の形成を目指して」

・日時：6月26日(土)14:00～16:00
・場所：長田シューズプラザ（ＪＲ新長田駅北）
・内容：ｹﾞｽﾄ：東朋治（長田 TMO）、保井剛太郎（三ツ星ベルト）、森崎清登（近畿タクシー）、司会：加藤恵正（兵庫県立大学）ほか
・問合せ：被災者復興支援会議Ⅲ事務局(TEL. 078-362-4218)

●兵庫県立美術館「世界の美術館－未来への架け橋－」（6/11～7/11）で、6月 12 日（土）17:00 より、美術館南側大階段において建築家の安藤忠雄さんのゲスト・トークがあります。

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http：//web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2004年6月20日発行

月刊 きんもくせい

04年6月号
(50+36+NO. 15)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■震災の記録を残そう

高森　一徳（阪神大震災を記録しつづける会　代表）

私たちは地震直後の平成７年２月から震災体験手記を募集し、５月に第１巻を出版し、以来毎年１巻ずつ発行しています。これまでに1,078編の手記が寄せられ、そのうちの396篇を掲載して９巻を編集しました。来年の１月にはいよいよ最終巻を出す予定です。

地震直後、だれもが「自分に何かできることはないか?」と模索したのですが、私たちは地味な活動ながら、被災者の手記を集めようと被災地各所にポスター(日本語、英語、中国語、朝鮮語)を貼りました。外国人の方々の手記を集めようとしたのは、「発言弱者」の声を残したかったのと、日本人とは違う視点の被災記録がほしかったからです。

おかげで、第１巻には240通もの手記が寄せられました(うち43編が外国人)。

本音の記録

手記の選考基準は、「文章のよしあしや被害の大きさではなく、記録としての価値」としました。手記には、「自分の意思やプライバシーを自己責任で開示する」という性格があります。「記録としての価値」は、言い換えれば、「借り物ではない、本音を語っているか？」「いかに自己のプライバシーを開示しているか?」といってもよいかもしれません。

他人のプライバシーを語った手記は裏づけが取れないので掲載を見送りましたが、ご自身のプライバシーについて書かれたものは、かなり大胆に掲載しました。

「未来の被災者」へのメッセージ

私たちの活動を支えているのは、「歴史に立ち会った者には、それを記録する義務がある」という意識を持った投稿者、賛助会員、編集スタッフとその活動を伝えるマスメディアの方々です。

しかし、記録の即効性は期待していません。記録を見て人間が賢くなるのでしたら、世界から戦争はとっくになくなっているでしょう。現存の人たちの役に立たなくてもよい。教訓を無理に引きずり出す必要もない。

だが記録は残さなければ残りません。そして残らなければ後世の歴史ではなかったことになります。「未来の被災者」に記録を残せば、「自分たちと同じ経験をし、同じ思いをした先人がいた」と分かり、励ましや癒しになるかもしれません。

会のホームページでは、手記募集要項と既刊９巻の全文を公開しております。

http://www.npo.co.jp/hanshin/

最終巻(原稿は９月末締切)には、今まで以上に多様な方々の手記、記録、感想を収めたいと考えております。奮ってご応募ください。

＊　＊　＊

次回は、『論々神戸』の発行責任者の渡邊 仁さんにお願いします

(小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→中島克元→中村順子→海崎孝一→某市某職員→前田裕資→佐藤三郎→細川裕子→出口俊一→高田富三→田中保三→高森一徳→　)

まちづくりシステムの研究　（5）

久保　光弘（久保都市計画事務所）

4．部分組織

1）自然発生的な小規模協議会

神戸市の震災復興区画整理事業区域で区域面積 10ha を超えるまちづくり協議会の設立状況を表－１に示す。

表5－１　神戸市震災復興区画整理区域での
まちづくり協議会設立状況（10ha 以上の区域）

	面　積（A）	協議会数（B）	協議会の規模(A/B)
新長田駅北	42.6ha	21	2.0ha
六甲道駅北	16.1ha	8	2.0ha
鷹取東第二	19.7ha	10	2.0ha
森　南	16.7ha	4	4.2ha

(注)新長田駅北は新長田駅北エリアを示し、協議会数は当初（H8.6）のもの。

新長田駅北、鷹取東第二、六甲道駅北等の区画整理事業区域では、いずれも震災後徐々に 2ha 程度の小規模協議会が数多く設立されている。これは、震災直後の混乱の中、生活の復旧のための近隣の助け合いから始まり、区画整理事業の網がかけられたことへの対応等、個々の住民にとって明確な動機に基づく、個から始まる自己組織化の結果であった。

森南については、当初一つであったまちづくり協議会が序々に４つに分離独立した。

従来の考え方からすれば、区画整理区域全体に１つの協議会を作るべきということになるが、震災直後という混乱の中、そのような計画的コントロールが働かなかったことが逆に、自然なまちづくり組織のあり方を我々に示した。

2）小規模協議会の連鎖と共振化、そしてネットワーク化

新長田北駅地区東部の場合で、小規模協議会設立後の動向をみると、以下のように連鎖、共振化、ネットワーク化のプロセスを見ることができる。

① 最初にできたまちづくり協議会が組織づくりのモデルを作った。これには区画整理に反対するにも賛成するにも協議会を作らなければ行政は聞いてくれないとする動機が基本にある。この協議会が周辺の街区に影響し、それに連鎖するように、12 協議会が半年をかけて序々に結成されたが、それぞれは独立したものであった。

② 住工商が混在する当地区は、それぞれの街区おいて事情が異なることもあり、協議会ごとの意見も相当に異なるものであった。それぞれの協議会内の意見の調整とともに独自の利益の追求といえるものである。

③ しかし、徐々に隣接協議会の検討内容が、住民やコンサルタントを通して影響しあい、適切と考えられる意見を取り入れられ入れ替わっていく。また地区幹線道路、コミュニティ道路など各協議会に跨る施設に対して共通した考え方が、徐々に形成されていった。

街区公園の確保など小規模な一つの協議会では対応が困難な問題に対応するため、隣接協議会と共同で検討することも起こってくる。それぞれの協議会から提案された「まちづくり提案」（H7.12～8.4 の「基本まちづくり提案」）は、同一コンサルタントの文章化の影響もあるが、各協議会からの提案における類似性は、むしろ上記のプロセスによる結果である。

④ その後、地区計画、共同建替、商工それぞれの産業ビジョンづくり等をとおして、関連協議会どうしの連携が行われ、やがては、いえなみ基準の策定や自主運用を通して新長田駅北地区東部全体の組織、「新長田駅北地区東部まちづくり協議会連合会」に至る。

⑤ さらに今日のトピックスを加えれば、協議会連合会の環境部会での水笠通近隣公園交番設置問題の議論から端を発し、16 年 5 月、北を中央幹線、南を JR 線、東を新湊川、西を須磨区界とする地域のまちづくり協議会、青少年育成協議会、婦人会，老人会、保護司会、民生委員、保育所、小中学校及び PTA、各種団体等の約 30 の地域団体からなる「新長田北安心安全コミュニティ推進協議会」が結成された。また協議会連合会の商工部会は、地区内の NPO から提案された地域通貨について検討されているが、これは既に実施されている JR の南側の地域通貨とは異なった仕組みのものであり、その両者において議論が起こる可能性がある。このことが、北と南の連携の契機となるのではないかと注目している。

ファーマーは、「進化は、柔軟性を保障するボトムアップ方式の組織を持ったシステムでよく起きる」という。

そしてカウフマンは、「複雑性の成長は、より高い組織化のレベルへと階段を上るようにして、自己を組み上げていく平衡からほど遠いシステムと、実際なんらかの関係があるはずだ。しかし肝心なのは、より高いレベルのものがいったん創発すると、そのより高いレ

ベルのものどうしで相互作用することもできることだ」と述べている。

3）部分組織

話を初期のまちづくり組織の設立の段階に戻そう。

まちづくり協議会が拓く将来の姿は、「予定調和」でなく、「開放系の未来」であり、誰にもわからない。そのような中で、それぞれの地区の持つ複雑で矛盾する問題に対応した最善の結果を得るためにはどうすればよいか。

カウフマンは、彼の NK モデル理論により、複雑な問題を含む社会組織において、多数の解から最善の解を得るための組織について言及し、「部分組織」という概念を出している。

彼の比喩的な表現によれば、部分組織を持たず個を直接支配する大きな全体組織を「スターリン主義者」の領域としている。スターリン主義者の領域は、問題が単純な場合効率よく良い解答が得られる。しかし、スターリン主義は、「固定的な秩序」の世界であり、複雑な問題を多く含む場合その最善な結果を求めるための試行錯誤を行う柔軟性に欠け、多くの可能性を放棄してしまったり、全体の中のある部分にとっては悪い結果をもたらしたりする等の恐れがあるという。

反対に適切に組織化がなされていない状況を「イタリアの左派」の領域とし、「カオス的」領域としている。

そしてカウフマンは、問題が複雑で矛盾する制約条件を持つ問題に対して、適切な部分組織に分割することが、「カオスの縁」として状況とともに変化する柔軟性を持ちながら共振化し、部分そして全体に最善の結果をもたらすこととなるだろうとしている。

4）小規模連鎖によるまちづくり

都市化社会から都市型社会への転換が進む中、今後多くの都市において都市計画道路など根幹的道路の見直しが課題となってくると予想される。

この問題は都市計画道路沿道関係者の利害や意見で決まるものでなく，その計画道路の影響を受ける地域住民等の意見が反映されなければならないから、まちづくり協議会よるまちづくりは不可欠となる。この場合協議会は、地区の将来像を定め、その結果から地区住民の総意として都市計画道路の変更を行政に提案するプロセスが必要となる。しかし、地区住民が地区のまちづくりをするには、まちづくりをすることについての強い動機がなければ始まらない。

このような問題に対して、行政は地元に入って新しくまちづくりを誘導する場面が出てくると考えられるが、この課題の性格上、大方は大きな区域が対象となる。このとき十分に考慮しなければならないことは、行政がまちづくりを誘導したい動機と実際に住民がまちづくりを起こすことになる動機にズレがあるということ、また大きすぎる区域でのまちづくりは、不毛になりやすいということである。重要なポイントは、「部分組織」の概念への認識である。それは大きな区域全体の中から，まちづくりの意思を持つ小さな地区を見つけ出し支援し、良いモデルを作るということからスタートし、その後如何に他の部分組織をまちづくりへと連鎖させるかというプロセスである。

千葉桂司さん（元・都市基盤整備公団）は、小規模単位の連鎖により、面的な整備に至った事例から「連鎖のまちづくり」を論じられている。（http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/judi/semina/s0305/index.htm）

中沢孝夫さん（姫路工業大学教授）は、全国の地域活性化の事例からの知見として、「まちづくりは、やる気のある一つのお店からの連鎖が必要で、広い区域での取り組みにあまり実がない」というような趣旨のことを伺ったことがある。いずれも共感する見解である。

神戸市灘区におけるまちづくりも観察のインターバルを長くしてみれば、まちづくりの連鎖といえる。平成 60 年から 2 年間ほど、木造賃貸住宅地総合整備事業の計画調査に関連して、原田、岩屋、灘中央、灘南部（味泥地区）の広い区域で、4 つの自治会連合会役員が集まりまちづくりの勉強会を行ったことがある。この時は、まちづくりの具体的な展開が無いまま終わったのであるが、平成元年、灘区役所にまちづくり推進課が生まれたのを契機に、先の勉強会でまちづくりに関心を持っておられた灘南部自治会の会長が味泥地区のまちづくりを立ち上げた。味泥とは、灘南部区域の旧村名である。その後、新在家南地区、灘中央地区、大石南地区と次々にまちづくり協議会ができ、現在、まちづくり区域は大きな範囲で連坦している。

元来、古い地域での各コミュニティは隣接したコミュニティどうしで競争心が強く、このことがかえって近くにまちづくりのモデルが一つできると、まちづくりについての具体的な情報が、隣接又は周辺コミュニティに伝わり、まちづくりの連鎖が起こることになる。それにしてもこのような展開には、相当長い年月を要するものであることをこの事例は示している。

参考資料
・ スチュアート・カウフマン「自己組織化と進化の論理」日本経済新聞社 1999
・ M・ミッチェル・ワールドロップ「複雑系」1996

■震災復興で加速する企業と地域の新たな関係を考える

加藤　恵正（神戸商科大学）

■まちなみ形成と企業市民
ー魚崎郷まちなみ委員会　神戸市東灘区ー

阪神・淡路大震災による酒蔵地域への影響は甚大であった。古い木造の酒蔵だけでなく、資料館や記念館のほとんどが倒壊した。現在、こうした記念館はすべて復興し、神戸市内の魚崎郷、御影郷、西郷全体で９ヶ所の資料館・記念館がオープンしている。

近世後期から急速な成長を見せた酒造業であるが、その後幾多の変化に直面してきた。とりわけ、第二次世界大戦において酒蔵の７割を失ったことは、その後の酒蔵地域のあり方に大きな影響を与えた。さらに、四季醸造と呼ばれる酒作りの技術革新は、これまでの伝統産業から近代産業へと衣替えする契機となり、酒蔵地域の景観も黒壁の酒蔵からコンクリート造りの工場へと変化していった。

さらに、1995 年の阪神・淡路大震災による昔ながらの景観はほとんど壊滅的な打撃を被ったといって過言ではない。生産が比較的早く回復したこともあり、震災前からの懸案であった「酒蔵が醸し出す景観」を重視したまちづくりがスタートしたのである。

神戸市内に所在する三郷のそれぞれでまちづくり委員会や協議会が設置され活動が行われつつある。たとえば、魚崎郷は「居住・生産・商業機能が調和し酒造りを代表とする地区の伝統を引き継いだ個性あるまち」を目標として、1998 年に魚崎郷まちなみ委員会が設置された。同地域において興味深いのは、こうした委員会に魚崎郷に所在する９つの酒造メーカーすべてがメンバーとして参加している点である。従来、こうした活動には事業所が積極的に関与するということは稀である。言うまでも無く、景観上の課題が酒造メーカーの遊休地での新規事業にともなって発生するという事情は大きいが、景観のコントロールが場合によっては地主である企業にとって必ずしもメリットばかりではないであろう。こうした事情にもかかわらず、酒造メーカーが地元自治会さらに神戸市が連携をとりつつ、町並みを保存し新たなまちなみ形成を誘導しようとする試みは興味深い。

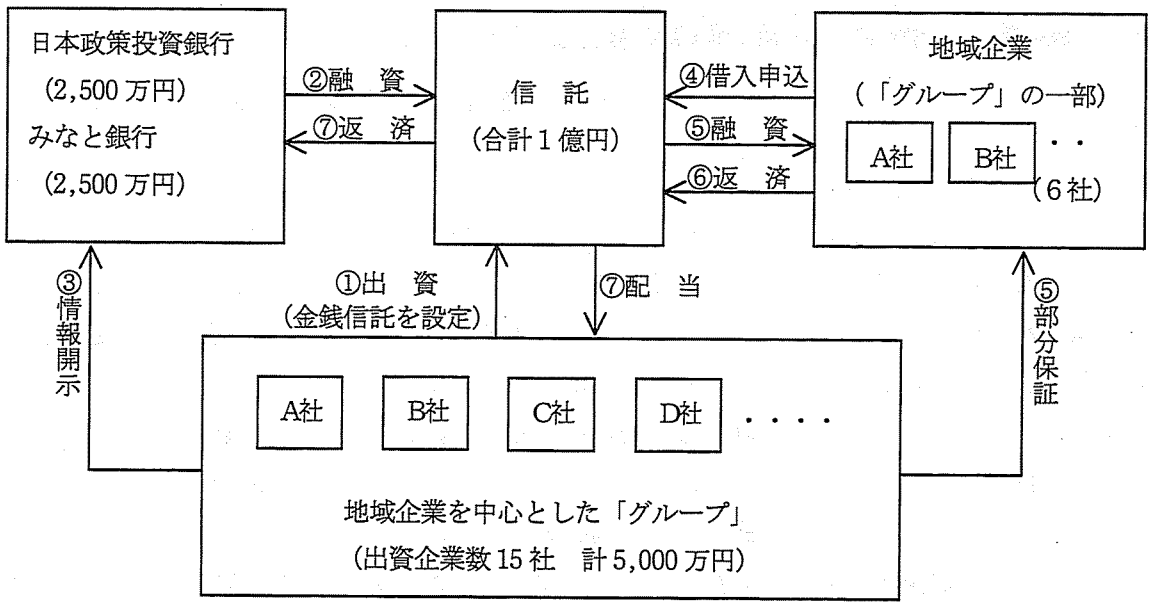
もともと、灘の酒造家は地域との結びつきが強く彼らの文化活動はよく知られている。報徳学園や甲陽や灘中・高校の設立、さらには白鶴美術館や辰馬考古資料館などもその例としてあげることができる。灘の酒造メーカー各社が、地域文化の担い手であるとの伝統が、震災復興のなかで地域の景観保全への取組みを促しているのかもしれない。

■「信頼」による新たな中小企業融資の仕組みを作る
ー日本トラストファンド㈱　神戸市中央区ー

2001 年 11 月、日本で初めて中小企業が連携し「信頼」をベースにした新しい資金調達の仕組みである「神戸コミュニティ・クレジット」が誕生した。この仕組みの母体が「日本トラストファンド」で、同社を含む 15 社の企業グループが拠出する信託財産にたいして、みなと銀行・日本政策投資銀行がほぼ同額の融資を行い、参加企業が資金調達によって新規事業にチャレンジするというものである。もともと、日本トラストファンドの設立は、企業同士の結束によって難局を打開しようという目的はあったが、こうした地域金融の仕組みを発案したものではない。日本トラストファンドの設立を知った日本政策投資銀行からかかる仕組みの実施について提案を受けたことからスタートしたものである。

以下、まず神戸コミュニティ・クレジットの仕組みについて示しておく。

神戸コミュニティ・クレジットの仕組み



実際に借り入れを希望する企業の審査においては、銀行は参加せず出資 15 社で行っている。借り入れ企業は、事業の進捗状況等について絶えず報告があり、15 社は監視すると同時に事業の課題や悩みについて提案・アドバイスを行っている。部分保証を行っていることもあり、チェックは厳重かつ真剣である。銀行は担保主義で貸し出した後は冷淡だが、この仕組みではその後を全力投球で面倒をみることになるということだろう。

ただ、この仕組みをそのまま一般化することは困難という。15 社の「信頼」がベースになっており、これを醸成することが先決ということであった。神戸コミュニティ・クレジットの場合、ここに 1 年半を費やしている。日本トラスト・ファンドは、「神戸駅前大学」と称して中小企業経営のあり方を勉強してきた。こうした基本的な経営のあり方、地域企業のあり方に関する考え方を共有しようとする姿勢とともに、自ら出資すること、自ら運営に参加すること の 3 条件が不可欠であるとのことであった。出資している企業群はいずれも中小零細規模であるが、それぞれ独自の経営哲学と技術を持っており、こうした「クラブ」による信頼がこれまでにない融資モデルをつくりあげた。

近年、わが国における地域金融は大きな困難に直面している。金融機関サイドからみると「借り手」の情報が少なく融資額も少額であるため、高度な与信ノウハウが必要となる。従来からの担保主義から抜けきれていない。一方、地域の中小零細事業所サイドは情報開示が不足・欠落し、金融機関とのコミュニケーションも必ずしもスムーズではない。こうした需給双方の問題から、地域に資金が回らないのが実情である。こうした事態は、その要因に差異があるが、わが国に限ったことではない。たとえば、米国ではマイノリティへの差別を背景とするこうした状況にたいして、地域再投資法 (Community Reinvestment Act) を整備し、監督当局による格付けを行い店舗新設や合併時における評価項目として使用される。この他、低所得者への住宅供給を行う CDC(Community Development Corporation) に資金やノウハウを提供する LISC(Local Initiative Support Corporation)、負担者自治を実施する BID(Business Improvement District)などがあげられるし、わが国においても「市民株式」「グリーンファンド」「コミュニティ・ボンド」といった試みもある。

地域金融の問題は今後ともきわめて重要な課題である。神戸コミュニティ・クレジットの設立は、地域における企業間の信頼や共有する地域企業のあり方といった「ソシアル・キャピタル」をベースにしている。今後地域産業活性化においてかかる視点も配慮していく必要があろう。

■Ｄｒ．フランキーの街角たんけん　第６回

JR・阪急　神戸高架鉄道物語（その１）

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

山と海に挟まれた東西に細長く広がる神戸の旧市街地を縦断する、ＪＲ阪急の高架鉄道。昭和初期に築かれた鉄筋コンクリートの「長城」は、このまちの背骨に喩えられよう。

また高架の内部は、岩屋から新湊川あたりまで、区間ごとに表情を変えながら「高架下」と呼ばれる独特の商業空間を形作っている。

しかし、いまや私たちの原風景となっている「高架」も、その誕生までは紆余曲折があった。そのあゆみを辿ってみよう。

明治７（1874）年に、大阪神戸間に鉄道が開通した。約１時間で阪神の地が結ばれるという絶大な恩恵の一方で、山と海に挟まれた市街地が、鉄道敷によって南北に分断されるという問題が、日を経ずして顕在化した。

やがて、東京より少し遅れて、神戸でも明治中ごろから、人口急増などを背景として、市区改正の議論が始まるが、鉄道の改良は、その中心的事項であった。

大正７年、神戸市議会は、政府に対して省線の改良を申し入れする。その内容は、山際または海岸線へのルート変更、地下式、そして高架式、いずれかの方法により、道路と鉄道の平面交差を解消しようというものである。

鉄道院側は、複々線電化による輸送の高速化、大量化を図るべく、高架式による改良を計画した。

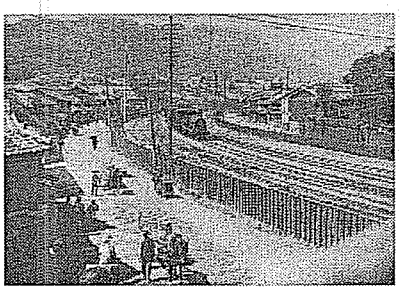
南北交通の障害が残ることを恐れた市側は、地下式での改良に変更するよう、再考を求めたが、工費の増嵩を嫌った鉄道省（大正９年に組織変更）はこれを受け入れず、一旦は地下式での改良を求める建議を決議した市議会委員会でも、最終的には、僅差で地下式による改良を求める建議案が決議された（大正15(1926)年）。ここに至って、道路との交差部分の拡幅など、条件闘争で、市も高架式による改良を受け入れざるを得なかった。

高架鉄道の工事は、昭和6(1921)年に、まず上り側が完成、昭和 12（1937）年に下り側も竣工し、市内各所での混雑問題は、鉄道開通から 60 年を経て漸く解決を見たのである。

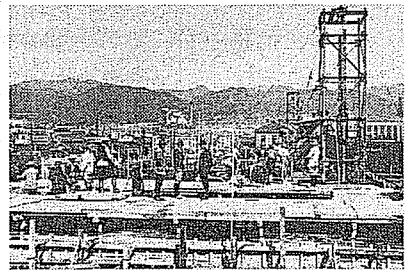
このとき、鉄道省は、高架下の半分（北側）を区画して倉庫として賃貸し、南側は市の要望を受けてオープンスペースとした。この空間を利用して、終戦後に設けられた「自由市」が、現在の高架下商店街の根源である。

一方、関西私鉄の雄も、三宮への直接乗り入れを狙っていた。だがそのあゆみは、またしても平坦ではなかった。

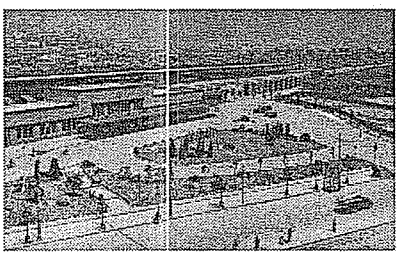
（つづく）



明治中ごろの相生橋付近の鉄道線の様子



高架工事中の省線（花隈付近）（出典「神戸１００年」）



完成直後の省線三ノ宮駅南改札口（出典「工事画報 昭和12年」大林組）

看板綺談・3

文字

中川 紺

「おい、何やってる」

店長の声が隣のレジから聞こえて俺は我にかえった。目の前にいた客が「ビニル傘、ありませんか？」と聞いてきた。急に雨が降ってきて傘は数分前に見事に売り切れてしまっていた。慌てて「申し訳ありません」とその事を告げて、俺はまたレジを続けた。

最近、集中力を欠く原因が自分ではよく分かっていた。俺が所属する劇団の公演の配役オーディションが近づいているからであり、俺が受けるつもりの『身に覚えのない理由で命を狙われる男』の役がどうしてもうまく演じられないからだ。

オーディション一週間前、台本の一部が配られた。その台詞は一言一句頭に入っているというのに、何度言葉を発してみてもしっくりいかない。台詞が空回りしている。

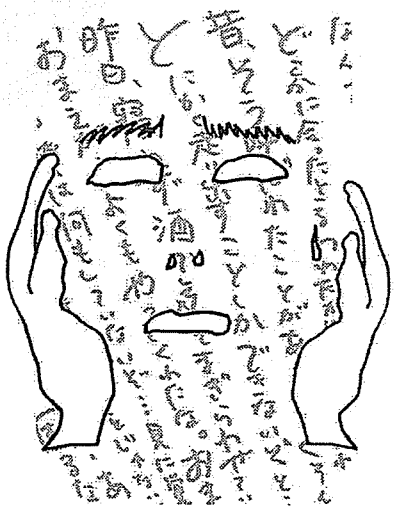
こんなことで役を取れるだろうか。夕方、コンビニのバイトを終えた俺は、稽古場に向かう電車の中でそう思っていた。

稽古場は阪神沿線の駅から歩いて五分の古いビルにある。ビルに入ろうとして、隣の空き地に何か白いものがあることに気がついた。それは無地の看板で、幅は一メートルくらいだろうか。最近不法投棄された自転車と冷蔵庫に立て掛けるようにして置いてあった。（またゴミが増えてる）と俺はつぶやいた。

●●

居残りで練習を続け、最後に部屋の鍵を閉めて俺はビルを出た。空き地の前を過ぎようとして違和感をおぼえた。少しの間を置いて、原因があの白い看板にあることに気がついた。いや看板は白くはなかった。四角い板面にびっしりと文字が書かれていた。いつの間にこんなものが。何が書いてあるのかと思い、その文字を読んでがく然とした。それは俺がすっかりおぼえてしまった明日のオーディションの台本の台詞そのままだった。

まさかそんなバカな。そう思った途端、



看板が小刻みに揺れた様に見えた。違う。文字そのものが震えていた。信じられない光景に俺は声すら出せなかった。文字の震えはどんどん大きくなり、そのうちに流れ落ちるように看板から離れ、そして俺の足元に向かってきた。文字の水たまりの中に俺はいた。台詞の一文字一文字が俺を見ている気がした。先頭の「も」の字が靴の上に滑るように乗った。（やめろ！）そのまま俺は気を失った。

●●

翌朝、俺は部屋で目覚めた。もうろうとしたままオーディションに向かう。空き地の前に停まっている廃品回収業者の軽トラに自転車と冷蔵庫が積んであった。しかし看板は見当たらない。業者の男は「そんなものは無かった」と言う。あれは何だったんだ。俺は得体の知れない感覚に包まれてぞっとした。

台本の台詞を口にするたび、昨晩の出来事を思い出さずにはいられなかった。オーディションを終えた後、劇団仲間は口々に「お前の怯える演技は、真に迫ってた」と告げた。

●●

そして俺は主役の座を射止めた。今、机の上には舞台稽古に使う台本が乗っている。

だが俺は、また文字が向かってくる気がして、台本を開くことができない。稽古の時間は容赦なく迫っていた。

（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第３８回連絡会報告

今回のテーマは「共生型住まい／民間コレクティブ住宅と公営ふれあい住宅」で、6月 11 日（金）、神戸勤労会館において行われました。

はじめに、石東直子さん（石東・都市環境研究室）より「注目をあびてきた共生型住まいの動向について」と題したテーマ解説が行われました。「共生型住まい」に関する定義や、最近の動向などが紹介されました。

次に、２氏から報告が行われました。岩崎洋三さん（県営大倉山ふれあい住宅代表）からは、「公営コレクティブ住宅・ふれあい住宅の生活」というタイトルで、約６年間 32 戸の代表としてお世話されてきた、実感のこもったお話がありました。代表としての苦労話や、協実に実感がこもって同して住まう様々な工夫、入居時に対する提案など、大倉山ふれあい住宅での生活が手に取るようにわかる内容でした。

宮前眞理子さん（ＮＰＯコレクティブハウジング社事務局長）は、「コレクティブハウジングで暮らそう」と題して、「コレクティブハウスかんかん森」に関する報告をされました。この施設は、１２階建ての「日暮里コミュニティ」の２・３階部分にあり、住戸数 28 戸（25～62 ㎡）、コモンキッチンやランドリールーム、菜園テラスなど、協同で住まう様々な仕掛けが施されています。入居前からワークショップで施設計画がされており、また世帯や年齢のバリエーションのある居住者同士が、柔軟なルールを決めながら共同の食事や、掃除、花の世話、近隣住民との交流など、豊かな共同生活が行われている様子やその仕組みが報告されました。



報告者の皆さん。左から、石東さん、岩崎さん、宮前さん

■ 情報コーナー

●第７０回・水谷ゼミナール

・日時：6月 25 日（金）18:30～21:00
・場所：こうべまちづくり会館６階（神戸市中央区元町通４丁目）
・内容：テーマ「今時の集合住宅アラカルト３題」
①西宮の長屋／森崎輝行（森崎建築設計事務所）、②北野らしさを表現した北野コーポラティブハウス／天宅毅（株式会社キューブ）、③苦悩する神戸市住宅供給公社～新長田再開発地域に市公社が建設した学生向けワンルームマンション～／西川靖一（神戸市住宅供給公社）
・会費：１，０００円
・問合せ：ジーユー計画研究所（TEL. 078-251-3593, FAX. 251-3590）

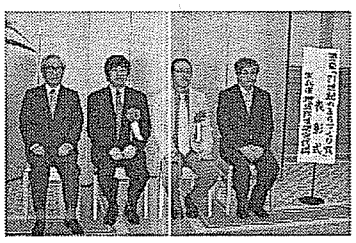
●空間像研究会第３回オープンセミナー「景観法とまちづくり」

・日時：7月 12 日（月）18:30～20:30
・場所：こうべまちづくり会館２階ホール（神戸市中央区元町通 4 丁目）
・内容：パネルディスカッション「景観・まちづくりの今日的課題」荏原明則（関西大学）、三輪康一（神戸大学）、森崎輝行（森崎建築設計事務所）、山本俊貞（地域問題研究所）
・問合せ、申込先：こうべまちづくりセンター（FAX. 078-361-4546）

★阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワークが「２１世紀のまちづくり賞」受賞

（財）兵庫地域政策研究機構（理事長・貝原俊民前兵庫県知事）の主催する第２回「21 世紀のまちづくり賞」の研究活動賞を受賞しました（なんと副賞は２０万円！）。社会活動賞は村井雅清さん（被災地 NGO 協働センター）でした。

（地道な活動に対する支援としての受賞とうけとめ、副賞の半分は「きんもくせい」の赤字補てんに使わさせていただきます。）



左から、貝原理事長、小林、村井さん、加藤審査委員長

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2004年7月26日発行

月刊

きんもくせい

04年7月号
(50+36+NO. 16)

発行：阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■震災から、はや１０年目。「市民力」が試されている。

渡邊　仁（論々神戸　編集長）

区切りがいいというのかどうか、1950年生まれの私。その年の朝鮮戦争に始まり、60年は新安保条約締結、７０年の大阪万博及び安保改定にからむ大学闘争、80年に神戸に転居し、85年に独立自営、さらにこの年は、人心を荒廃させたバブル経済のきっかけとなる前川（元日銀総裁）リポートが準備された年であることも忘れることはできない。

そして90年には父の死を迎え、95年の阪神・淡路大震災で否応なく人生の転機を迎え、2000年には、まさか参加するとは思わなかったシドニー・オリンピック（トライアスロン競技応援）と、五年・十年が、なにがしかの節目となっている。

なかでも地震以降の約１０年は、地元神戸の人たちとの交流が深まった、という意味で格別の思いがする。とはいっても、なにがしかのことができたとは到底思えないのだが、ふとしたことがきっかけで「震災」をキーワードにした雑誌『神戸から』を制作し、そのリニューアル版『WAVE117』を経て、現在のウエブマガジン『論々神戸』(www.ronron-kobe.com) にいたるには、周囲の人々の支援があってはじめてなしえたことだった。この十年、ある意味、開き直りともいえる手探りでのオピニオンの発信を行ってきたのである。

また、この間震災からの流れとはいえ、一回だけだが2001年の神戸市長選挙にも少し内側から関わった。神戸空港阻止の最後の機会だと思ったからである。残念ながら勝利はしなかったが、これもさまざまな意味をこめての貴重な体験だった。

かれこれ２０有余年に及ぶそんな神戸での生活のなかで、ずっと頭をつきまとって離れないのは、草の根の市民的広がりってなんだろう？　ということだ。

私のような、ある意味ふらふらしながらも、仕事の合間に「パブリック」について、なんだかんだと話しあうなかから小さな具体的行動を起こす市民がもっと出てきてもいいと思うのだが、なかなか新たな顔ぶれにお目にかかれない（もっとも、私が知らないだけなのかもしれないが？）。私たちの社会基盤を根底からゆるがせた震災以来、すでに十年を迎えようというのに、これはいったいどうしたことだろう？

震災が起こるまで、すべての党派議員が行政と一体になって市政を支えてきたという不思議な自治体「コーベ」という街の歴史をふまえると、そう簡単には変えられないのかもしれないが、震災以後の市民力という観点からは、「コーベ」まだまだ文化的に成熟した大都市とは思えない。

一方で、一生懸命、新たな市民的スタイルを生み出そうと苦闘している人たちもいて、彼らを見るにつけ、随分と勇気を与えられるのも確かである。そんななかで、『論々神戸』は、ますます私事の身辺雑記に堕していくか、それとも言論のうねりや波紋となるか、１０年を越えても、東北人らしくねばりづよく発信していきたい。

＊　＊　＊

次回は、詩人の季村敏夫さんにお願いします

（小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→中島克元→中村順子→海崎孝一→某市某職員→前田裕資→佐藤三郎→細川裕子→出口俊一→高田冨三→田中保三→高森一徳→渡邉仁→　）

『コンパクトシティ』を考える8

－イギリスの産業革命・工業都市・近代都市計画

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

「コンパクトシティ」の対極にあるのが、工業化のとともに成長拡大した「工業都市」である。特に 20 世紀は「工業社会」のパラダイムで、豊かな社会を実現させた。それには、都市を秩序よく発展させる『都市計画制度』が欠かせない。今回はその誕生の歴史過程について概説する。

1．産業革命から工業都市の発展へ

産業革命を達成したイギリスでは 19 世紀半ばには、一気に工業化と都市化が進んだ。首都ロンドンの人口は 200 万人、リバプール、マンチェスター、バーミンガム、グラスゴーといった工業都市では人口が 10 万人を超えた。1851 年の人口調査で都市人口が約 900 万人となり、農村人口を初めて超え、イギリスは農業国から工業国に転換した。16 世紀前半と比較すれば、ロンドンで人口 4 万人、1 万人前後の都市が 5 都市で、都市住民の人口比率が、イングランド全体の 6%程度にすぎなかったわけで、産業革命後の工業化が一気に都市化すなわち「集中化」を呼び起こしたのである。

工業都市としての発展は、技術革新による新しい機械が次々に登場し、新たに多数の労働者を雇用できたばかりではなく、平均実質賃金も、1815 年から 50 年までに 15-25%上昇し、後半の半世紀で 80%上昇したといわれている。これは工業の生産量の増大だけではなく、都市労働者の食糧や生活必需品などの物資の需要が増加することに対して、運輸通信の革命も起こり、鉄道や蒸気船が発達し、国内だけではなく新世界からの余剰農産物が運ばれて需要を満たしたからである。

都市に居住した人口の大半は、綿工業を中心に工場労働者とその家族であった。雇用される労働者の多くは賃金の安い児童と女性であった。1825 年には、イギリスの綿工業に従事する労働者の 61%は婦人と 13 歳以下の児童で、彼らは工場で 13-4 時間の長時間過酷な労働を強いられた。

賃労働者の必要となる衣料や食料等の生活物資が購入されるため、都市には庶民的な小売業があらわれはじめ、常設店舗がまとまって立地する商店街も形成されていった。商品を常備し、展示することで、都市住民の購買意欲をかき立てた。

また、地主階層であるジェントルマンも都市に生活基盤を移し、産業資本家である富裕な商人や医師、法律家などの専門職業人などの中間階層も出現した。こうした都市の新しい有閑階層の消費需要に応えて、劇場、競馬場、舞踏場、遊歩道、ティー・ガーデンなどがロンドンだけではなく、地方都市にも建設されていった。商店街での買い物や劇場での娯楽鑑賞が、「アーバン・リゾート」として、都市化の中のレジャーの様式となった。大衆消費社会の成立でもあった。

工場の進出や人口の急増する工業都市は、なすがままに拡大を続けていった。このため、現代のような都市生活に基本的に必要となる様々なライフラインや道路・公園などの都市施設の整備が全く欠けていた。それは、当時工場を経営していた産業資本家であるブルジョア階級が、アダム・スミス流の自由放任主義者であったからである。

物理的空間が限られるところに計画性もなく集中が過度におこれば、想像を絶する劣悪で非衛生な都市空間が作り出された。自由に操業を続ける工場からの煤煙、ガス、悪臭が空を覆い、工場排水と家庭排水と屎尿が一緒になって側溝や河川を流れた。満足な道路空間もない住宅環境では日照、通風も得られない。水道も完備せず、コレラやチフスなどの疫病が繰り返し発生した。75 年当時の労働者階級の平均年齢がマンチェスターで 17 歳、リバプールで 15 歳という信じがたい統計数字が都市環境の劣悪状況を物語っている。

2．近代都市計画の誕生と展開

無秩序な市街地での過密の問題は、都市の労働

者やその家族の生活上の問題ではなく、集積によるメリットを享受する産業資本側にも問題となった。熟練労働力の喪失、交通渋滞による輸送コストの増大、労働環境や労働者住宅環境の改善を求める労働組合等との対立の激化などである。

また、都市に居を構えた富裕層にとっても、伝染病の蔓延は耐え難い恐怖であった。ジェントルマンや、産業家や商人、専門職業人（医師や法律家）などの中間層は、悪化した都市環境に嫌気や生活防衛上から、郊外に住宅を移し、馬車等を利用して通勤を開始していた。工業都市は、もはや人間の住む都市の形態を喪失しつつあった。

こうした状況下に、工業化による生産と所得の持続的成長による国富の蓄積で恩恵を受けてきた国家としても、もはや都市問題を自由放任主義に任せることができない局面と理解し、重い腰を上げた。最も急がれたのは、都市衛生の問題であった。事後的、局所的であったが、改善策の先陣を切って 48 年に『公衆衛生法』が制定された。下水・排水・街路の清掃・給水の責任を持つ政府の衛生当局の全国規模の措置が定められた。

一方で深刻さを増していたのが住宅環境問題であった。採光や排水の義務づけの法制度化は、私有財産への干渉に踏み込まなければならなかった。議会主権が確立していたが、実権は地主階級であるジェントルマンが握っており、彼らの抵抗を受けた。また、権利制限の代償としての補償が財源不足もあり実現を拒んだ。しかし、工業化によって力を付けた産業資本家であるブルジョア階級と労働者階級の政治参加が選挙法の改正で着実に進んでいた。やがて、地主階級の抵抗を受けながらも、都市の物的空間をコントロールし、財産権の制限と補償に踏み込む法律が制定された。68 年の『労働者住宅法』では、地方自治体が所有者負担で非衛生的な住宅の修繕または解体を命令できるようになった。75 年の『市民と労働者の住宅改善法』では、自治体にスラムの改善と不良住宅の接収や撤去の再建計画作成の権限を認めた。やがて、90 年に労働者住宅関係法の合体法としての『労働者住宅法』などの法律が登場し、ようやく「集中化」した都市の住宅環境を改善することができることになった。

ここに、「近代都市計画」が誕生し、歴史上の第１歩を踏み出した。各種衛生法規や建築住宅規制に始まる規制的立法と、それを担保する政府や都市自治体に責任と権限を与えるものであった。

産業革命は交通革命を伴い、蒸気機関車による鉄道網が 19 世紀半ばまでにイギリス全土を網羅していた。ロンドンでは 36 年に鉄道が初めて登場し、63 年にはすでに地下鉄も開通した。鉄道時代の到来で、51 年からの半世紀で人口は 270 万人から 660 万人へ、約 400 万人も増加した。このため郊外へ市街地が拡大し、市街区域は 40%も増加していた。この背景には、鉄道通勤者の利便に対して、鉄道会社に労働者を対象に特別運賃制度の導入を義務づけた 83 年の『低運賃法』があった。鉄道網の整備が、都市集中と無秩序な郊外スプロールの「郊外化」を推進した。

イギリスにおける都市を計画的に建設する「都市計画」の実質上の出発点となったのは、1909 年の最初の都市計画法といわれた『住宅・都市計画法』であった。この法律では「都市の望ましい衛生状態、利便性の確保、アメニティの供給」が都市計画の全体的目標の柱とされた。郊外開発予定地の計画区域に地方計画当局が作成する「都市計画書」の適用により郊外新規開発の土地利用規制を前面に出した。都市開発に公共側が直接介入するため、都市計画の基本となる土地利用計画のコントロール手法である「ゾーニング（地域制）」が初めて用いられた。「郊外化」すなわち、郊外に住む人の数が増加するにつれ、都市と農村の対立が先鋭化する中で、新規開発を規制しつつ都市空間をコントロールしようとするものであった。

『近代都市計画制度』の登場によって、20 世紀には一貫して国家が主導して都市計画規制できる対象範囲を拡大し、さらに再開発などの事業手法も創設して、工業化による成長と拡大を続ける都市を何とかコントロールし、『工業社会』を発展させる道具とすることができた。

■たるみレポート（その2）「たるみ子ども和太鼓教室」

大塚　映二、村上　一徳（神戸市）

播磨の国からこんにちは。２回目は、入社２年目の若手職員＝村上くんが担当します。（大塚映二）

「ドンッ、ドンッ、ドンッ」思いのほか大きくおなかに響き、でもどこか懐かしい感じのする音色―垂水に住む人々の暮らしを紹介するシリーズ２回目は、「たるみ子ども和太鼓教室」をとりあげます。

「たるみ子ども和太鼓教室」は、子どもたちが和太鼓を通じて地域のまつりに参加し、地域で一定の役割を担えるようにすることを目的として、平成 13 年から毎年実施しています。垂水を拠点に活躍する、全国的に有名な「和太鼓松村組」の指導の下、バチの握り方や和太鼓に対する心構えといった基本的なことの習得に重点を置いています。今年は６月１２日(土)２６日(土)の２日間、開催しました。区内の学校に通う小学４年生から中学２年生までの生徒を対象に、広報紙等で呼びかけたところ、２７名の応募がありました。

さて、和太鼓教室当日。初めて参加する子どもたちは、少し不安そうな表情で集まって来ました。「うまくたたけるかな？」「誰か友達はいるかな？」・・でも、一度太鼓をたたき始めると、すぐに緊張がほぐれます。やはり実際に太鼓をたたいて自分で音を出すというのは楽しいものなのでしょう。松村組の先生方の丁寧な指導もあり、たたき始めのころはバラバラだった音もだんだんと揃ってきました。最後には、「メロディ」と「裏打ち」にパート分けをして曲を演奏、ピタッと決まった瞬間には、見ていたお父さんお母さんから思わず拍手が沸き起こりました。

今回の和太鼓教室には親子での参加が多かったことが特徴的でした。子どもよりも張り切って太鼓をたたくお父さんも見られ、子どもたちからは「普段家にいるときとはまったく違うお父さんお母さんの姿を見ることができてよかった」という感想が聞け、とてもうれしく思いました。和太鼓に限らずさまざまな活動を通じて家族の違った一面が垣間見られる機会をもっと提供していきたい、と感じました。

最後にアンケートを実施したのですが、その中で「もっと練習の回数を増やして曲を習得し、ステージで発表したい」という意見が多く見られました。こうした意見も踏まえ、今年度は冬にも和太鼓教室を開催しようと企画中です。今度は６～７回の練習をし、５月に行う神戸まつり＜たるみっこマリンフェスタ＞でのステージ演奏を目標とします。

子どものころに味わった体験は大人になってもいつまでも残るもの。和太鼓教室に参加した子どもたちが大人になり、遠い昔に練習した和太鼓の懐かしい音色を思い出す、そんな思い出づくりを私たちがサポートできれば、と願ってやみません。

（村上一徳・垂水区まちづくり支援課）





■大大特２００３年度報告と２００４年度計画

小林　郁雄（コー・プラン）

大都市大震災軽減化特別プロジェクト（大大特）の研究（Ⅳ－３復旧復興）に「地域経済復興支援方策の開発研究」というテーマで参加して、２年が経過した。５年間の計画で

当初年度・2002 年度（平成 14 年度）：地域経済復興の検証

第２年度・2003 年度（平成 15 年度）：地域商業の再建

第３年度・2004 年度（平成 16 年度）：地域工業の再建

第４年度・2005 年度（平成 17 年度）：地域業務／地場産業の再建

最終年度・2006 年度（平成 18 年度）：まとめ－地域産業の再建復興評価と地域経済復興支援方策・プログラム提案

という、予定である。

２００３年度の研究内容は、

① 近隣商業地区の再建／水道筋－ 上山卓

② 都市観光地区の再建／北野－ 山本俊貞

③ 土地区画整理事業における商業再建／新長田北－ 久保光弘

④ 市街地再開発事業における商業再建／新長田南－ 天川雅晴

⑤ 小売市場の再建／神戸市－ 大西一嘉

⑥ 地域商業の再建と活性化／一般－ 中沢孝夫

という項目であるが、過程での検討会の内容など順次「月刊きんもくせい」に連載してきた（03 年４月号、６月号、８月号、10 月号、12 月号、04 年２月号）ので参照頂けたらと思うが、６月１９日土曜に２００３年度／平成１５年度大大特研究発表会（神戸）を人と防災未来センターで、神戸で研究を進めている他のチームと一緒に行った。

○被災集合住宅の復旧・復興

概要／大西一嘉（神戸大学助教授）

災害が家計に及ぼす影響－住宅再取得の可能性／塩野計司（長岡工業高専教授）

○復興政策総合評価システムの構築

概要／林　敏彦（人と防災未来センター）

被災マンション再建の法的諸問題／千葉恵美子（名古屋大学教授）

○住宅再建支援プログラム

概要／北後明彦（神戸大学助教授）

大規模災害後の復興プロセスにおける住宅再建支援に関する教訓／北後明彦（同）

○地域経済復興支援方策の開発研究

概要／小林郁雄（市民まちづくり支援ネットワーク）

都市観光地区の再建－北野・山本地区の復興市民活動／山本俊貞（地域問題研究所）

○住宅に関する総合的な防災対策システムの開発

概要／牧　紀男（地震防災フロンティア研究センター：ＥＤＭ）

被害認定トレーニングシステムの開発／堀江啓（ＥＤＭ）

2004 年度は、震災復興における地域経済の再建のなかでも、産業再生の基本としての地域工業の再建課題と活性化方策をテーマとして、以下の各項目について既存の調査研究の再整理を行うと共に、被災地の復興実態の把握について以下の研究を計画している。

① 地場産業地区の再建／台湾と阪神の比較－ 上山卓

② 酒蔵地区の再建／灘五郷－ 山本俊貞・天川雅晴

③ ゴム工業・シューズ産業地区の再建／新長田北－ 久保光弘

④ 震災公営工場による中小工業の再建／神戸市－ 大西一嘉

⑤ 地域工業の再建と活性化／一般－ 中沢孝夫

各メンバーの研究にあわせて、コミュニティベースドエコノミーに詳しい加藤恵正教授（兵庫県立大学）や台湾大震災の地場産業再建に詳しい都市計画学者・事業支援者などの参加を得て、「震災復興と地域産業（コミュニティビジネスへの新たな展開）」というテーマのシンポジウムを１１月２７日土曜 1330～1730 に「こうべまちづくりセンター（or 人と防災未来センター）」で開催する予定である。

■Ｄｒ．フランキーの街角たんけん　第７回

JR・阪急　神戸高架鉄道物語（その２）

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

工事が進む省線の高架を睨みつつ、関西私鉄の雄・阪神急行電鉄株式会社（以下、阪急）は、神戸市の東端で止まっていた神戸線の、三宮地区直接乗り入れのプランを練り直していた。

大正９（1920）年７月の神戸線（起点：大阪梅田、終点：神戸上筒井）開通よりも約１年半前、阪急は建設中の神戸線の終点を三宮３丁目とする延伸許可申請を国に提出し、延伸部分の過半を地下式にするという条件で許可を取り付けてはいた。

しかし、その後の景気後退と高額の工費で阪急が二の足を踏んでいる間に、好敵手・阪神電気鉄道（以下、「阪神」）が、兵庫電気軌道（後に宇治川電気電鉄部を経て山陽電車）との接続も視野に、三宮から湊川公園までの延伸を大正 13 年に出願。紆余曲折はあったものの、まずは阪神国道の三宮駅前までの延伸に合わせて、灘・岩屋から三宮までの地下式での乗り入れの許可を昭和 4（1929）年に得て、工事を進めることになる。

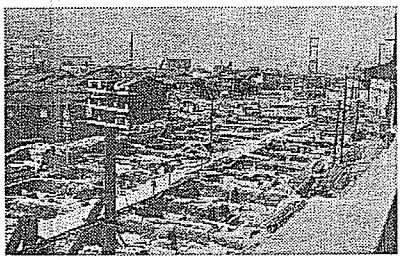
一方の阪急は、乗り入れルートを見直し、昭和３（1928）年５月に、原田付近から線路を分岐して、高架式で乗り入れ、終点も省線三ノ宮駅付近とする変更計画を申請した。

ところが、省線に引き続く高架鉄道建設に、「狭い市街地に、高架鉄道はこれ以上不要」と、市議会が猛反発。高架建設反対は広く市民の賛同を得て、ついには古宇田實神戸高等工業専門学校教授と、阪急の建築顧問・阿部美樹志が高架式の是非について誌上論争するなど、高架建設反対運動は熱を帯びた。

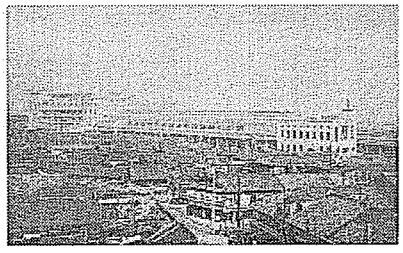
最終的には、小林一三ら阪急側の働きかけなどもあって、阪急側が、省線と隣り合わせて高架橋を建設する計画に変更することで、昭和８（1933）年８月、市議会も高架による延伸を受け入れ、県知事からの諮問に、高架式賛成の答申を行った。

阪急は、建設予定地の買収の後、昭和 10（1935）年 3 月に延伸工事に着手。翌 11（1936）年３月には、終点三ノ宮駅ビルとともに、高架橋などの施設が竣工、十数年越しのプロジェクトは完成を見たのだった。

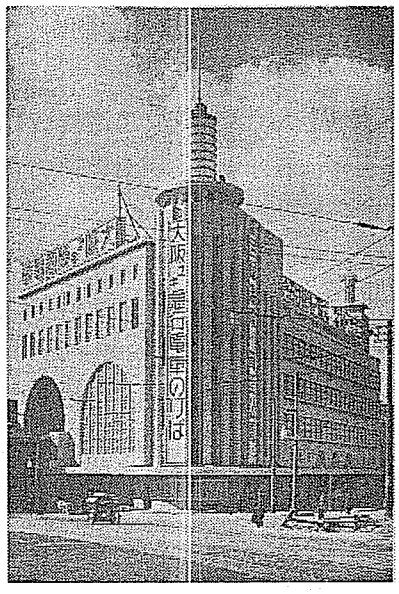
阪急三宮駅ビルは、アーチから列車が滑り出すという奇抜なアイデアと、階段室のガラスシャフトが、モダンな時代の空気を見事に体現していた。そして、この後、三宮から元町までの延伸を果たした阪神と、阪急、そして省線との間で激烈なスピード・サービス競争が展開されることになる。次号は、いよいよその夢の跡を現地に確かめに行こうと思う。　　（つづく）



基礎工事中の阪急三ノ宮駅



完成直後の阪急三ノ宮駅全景（西口にもビルがあることに注意）



阪急会館（設計：阿部美樹志、施工：竹中工務店、昭和11（1936）年竣工、平成７（1995）年取り壊し）

看板綺談・4

靴かくし

中川 紺

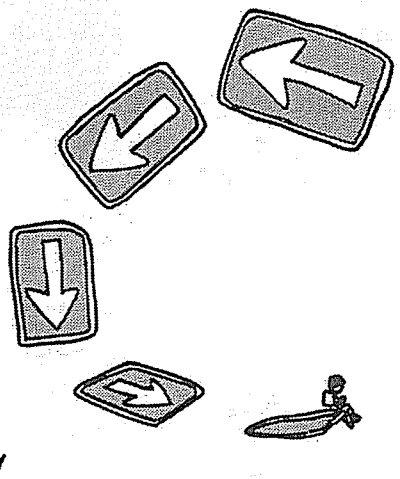
洋タンス、座イス、トースター、やかん。俺の軽トラックに積んであるものの共通点はただひとつ。捨てられたもの、ということだけだ。町中のゴミ捨て場や空き地をまわると、あらゆるものが荷台に吸い込まれていく。その吸い込まれたものをリサイクルショップや中古家具店の知合いに卸すのが俺の毎日だ。今朝は空き地で冷蔵庫と自転車を拾った。最近はこの業界も生き残りが大変だから、いい拾い場を日々さがしてまわらなきゃならない。

午後三時。マンションの粗大ゴミ捨て場にいい具合の一人掛ソファーが転がっている。使えるな、と早速荷台に積むべく手をかけた。

「それ動かしたらだめ！」

かん高い声に驚いて振り返ると、小学生になったばかりという感じの少女が俺を睨んでいる。「みつかっちゃうでしょ！」と指差す先をよく見れば、ソファーの下にピンクの小さな靴が押し込まれている。少女の片足にも同じ靴があった。隠した靴をオニに見つけられると負け。たしかそんな遊びがあった。少女はこの辺りで友達と『靴かくし』をして遊んでいるらしい。「ごめんごめん、こっちに入れとくな」と俺は横に積み重ねてある段ボールの隙間に靴をはさんだ。しっかり隠れたことを確認すると少女はマンションの中に戻っていった。オニがちょうど五十を数えた。やれやれと思ってお目当てのソファーを積み込みながら、ある靴のことをふと思い出した。

●●



小学校三年生の一学期だ。俺とクラスの男子数人で体育倉庫の奥に靴を隠したことがあった。その白い上履きの持ち主は、東京から来た転校生の男の子だ。軽いイタズラのつもりだった。ところが返す前に、上履きは誰かが間違えて履いていったということになってしまって、俺たちは何となく隠したことを言い出せなくなってしまった。その子は夏休み明けにまたすぐ転校してしまい、結局靴はそのままになった。

今になってこんなことを思い出すとは…どうやら返せない靴の存在がいつまでも俺の心の端にしがみついていたらしい。

●●

掘り出し物を求めて車を走らせていた俺は、一方通行の表示を確認してハンドルを切った。次の角にはまた青い矢印。それから何度か青い表示に従って角を曲がる。しまった。軽く舌打ちする。一方通行の路地に入り込んだらしい。まわりを見ても通ったことのない道だ。住所を確認するために車を止めて外に出ると、前に少年が一人立っていた。半袖半ズボン。見覚えのある紺色のランドセルだ。

「あいつ」だ。すぐに分かった。いつの間にか俺の手にはあの靴があった。ゆっくり近づくと、持っていたあいつの上履きを差し出して「ごめんな」とだけ言った。あいつはこくりと頷いて、靴袋にそれを仕舞った。

●●

自分の鳴らしたクラクションで俺は我に返った。車を路肩に止めたまま眠っていたらしい。景色も見覚えのある場所だ。夢か。だが掌にはまだ靴の感触がしっかり残っていた（やっと返せたんだな）

俺は目を閉じてもう一度「ごめんな」とつぶやいた。

（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■第７０回・水谷ゼミナール報告

6月 25 日（金）、元町のこうべまちづくり会館６階会議室において、第 70 回水谷ゼミナールが行われました。今回は、「今時の集合住宅アラカルト３題」をテーマに、最近竣工した、あるいは竣工予定である通常の集合住宅とは一味違った集合住宅の事例報告がありました。

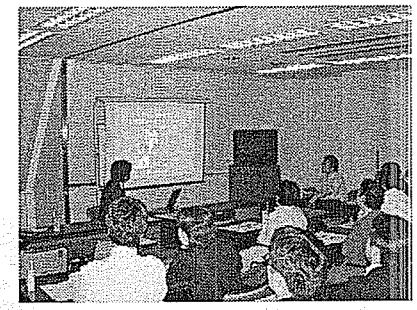
ゼミの冒頭、進行役の上山卓さんから「兵庫県におけるコレクティブハウジング等の取組」についての紹介があった後、①「西宮の長屋」／森崎輝行さんからは、西宮の閑静な低層住宅地を舞台とした定期借地権方式による 16 戸の長屋（コートハウス）の取組の報告があり、「個」から全体をつなぐ中で、自然共生やコミュニティ形成などをテーマとしたさまざまな工夫について説明がありました。

②「北野らしさを表現した北野町コーポラティブハウス」／天宅毅さんからは、旧フロインドリーブ邸跡地を舞台とした、９世帯のコーポラティブ方式による多世代共生型集合住宅の取組の報告があり、北野というブランドの中で、いかに建築としてそれを表現して物語をつくっていったかということについて説明がありました。

③「苦悩する神戸市住宅供給公社ー新長田再開発地域に市公社が建設した学生向けワンルームマンションー」／西川靖一さんからは、財務改善に向けた公社のさまざまな苦労・取組について紹介があった後、新長田駅南の再開発地区を舞台とした住戸内設備フルセット型の学生向けマンション 84 戸の取組の報告があり、実際には入居者が多世代にわたるなかで、今後の公社の取組の一つとしての可能性等について説明がありました。

そして、報告を受けて、それぞれの場所性（空間性）の魅力をいかに表現して物語をつくっていくか、環境、文化やコミュニティ等をテーマとしたさまざまな共生のあり方などについて意見が交わされました。

（コー・プラン／上山　卓）



会議風景

■ 情報コーナー

●第７１回・水谷ゼミナール

・日時：8月 27 日（金）18:30～21:00
・場所：未定
・内容：テーマ「ランドスケープ作品の紹介」、コーディネータ／辻信一（環境緑地設計研究所）（詳細は未定）
・会費：１，０００円
・問合せ：ジーユー計画研究所（TEL. 078-251-3593, FAX. 251-3590）

●「日中交流・復興クルーズ 2004」

・日時：8月 13 日（金）～25 日（水）計１３日間
・場所：神戸→天津（8/16）→玉村（8/17）→唐山（8/18, 19）→北戴河（8/20）→天津（8/21, 22）
・内容：76 年の大地震で 24 万人が亡くなった唐山を訪問、玉村では農家にホームステイ、天津の子供たちと震災ワークショップ、など
・費用：98,000 円（18 歳未満）、128,000 円（学生）、158,000 円（大人）
・企画／後援：日中交流・復興クルーズ 2004 実行委員会／神戸市
・連絡先：マイチケット（TEL. 06-6304-7800）

★久保光弘さん（久保都市計画事務所）が、都市計画学会賞論文賞受賞！

「きんもくせい」の常連執筆者である久保光弘さんが、栄えある都市計画学会賞論文賞を受賞されました。ネットワークとしてもともに喜び合いたいと思います。

受賞論文は大阪市立大学学位論文「長田駅北地区（東部）震災復興土地区画整理事業における住民主導まちづくりシステムの研究」で、住民が参加する「まちづくり」の概念が充分体系化されていない中で、コンサルタントとしておよそ１０年間にわたるまちづくりプロセスを客観的に記録し、都市計画制度の中での「まちづくり」の役割について考察してきたことが評価されました。

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2004年8月30日発行

月刊 きんもくせい

04年8月号
(50+36+NO. 17)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■亡き人の声が声として聴こえていますか

黒田　裕子（阪神高齢者・障害者支援ネットワーク）

あの日、あの時より10年の歳月が目の前に立ち上がる。「10年・・・」と思っただけで止まらぬ涙が流れてくる。この涙は10年間の何を意味するのだろうか。

阪神・淡路大震災は高齢者を直撃した。世界でもはじめての「高齢社会型震災」であった。6433名に及ぶ震災犠牲者の半数以上が60歳以上の高齢者であり、死を免れた被災者の多くもまた高齢者である。日本の高齢者人口は、震災の前年に14%を超え「高齢化社会」から本格的な「高齢社会」へと突入していた。神戸市をはじめ被災地においての高齢者人口は全国平均であった。しかし、地域的に見れば被害の大きかった長田地区は市内でも最も高齢化率が高く、震災時においては18%であったと推定されている。ちなみに18%とは平成13年の全国数値である。震災後の様々な調査からは厚生省（当時の）の予測をはるかに上回る高齢者の地域実態であった。

新ゴールドプランは改定され、新新ゴールドプランが打ち出されたが、急速な高齢化社会への対応はいまだ課題が多く問題は深刻である。

神戸市の場合は、震災を契機として全国に先駆けて高齢者問題への取り組みがあり、行政単独でなく市民を含む多方面の分野とタイアップし議論を重ねた。その成果のひとつに「高齢者にとってのやさしい住環境」がある。平成18年度には厚生労働省がコミュニティーの中に「宅老所」「グループハウス」「グループホーム」などをNPO法人が設立することを認可する見通しとなった。震災被災地の現場から声をあげ続けてきたことが実りを得たといって過言ではないと考えている。生涯を自分の好むところで過ごせることは最高である。そして、同時にショートステイの機能も展開できることがうれしい。これについてはケア者が対象の家に出向く（本人の居場所を変えない）型があってもよいのではと、現在実践を行いその成果を提言しているところである。

また介護保険制度についても「問題」とはされているが、実際現場の中ではもっと深刻である。ここでも震災で犠牲になられた方々の声が制度の不全を声として残してくれている。

神戸では、市民・企業・学者・行政といった人々がそれぞれの立場から10年の検証を進めている。亡き人の声が反映されているかと問われれば疑問がのこる。検証は「人を中心に置いた社会」に視点をおいてのもの、次世代に伝わるやさしい言葉で、興味が持てて、日ごろより取り組むことができる成果物でありたい。

人生を何段階かに分けて考えることができる。季節のように４段階に、「第２の人生」というように２段階に、またデンマークでは３段階にと。あなたは今どのステージですか？

亡き人の声がいろいろな場面に登場し、活かされるならば最後の高齢者のステージは安心して暮らせる社会になるはずです。現状の高齢社会は鳴かない「カナリア」社会です。歌わないカナリアを、私たちはそのままにほっておいてはなりません。

「豊かな日本」といわれつつ、被災地でまた全国で高齢者が安心して暮らせる社会がなぜ作れないのか、日々頭を抱え現場に近い距離で考えながら活動を展開し、提言も続けていきます。

＊　＊　＊

詩人の季村敏夫さんが日本に不在でしたので、渡邊仁さんから、黒田さんをご紹介いただきました。

（小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→中島克元→中村順子→海崎孝一→某市某職員→前田裕資→佐藤三郎→細川裕子→出口俊一→高田富三→田中保三→高森一徳→渡邊仁→黒田裕子→　）

企業文化と地域社会イノベーション

加速する企業の生産システム再編は地域社会にどのような影響を及ぼすのか

加藤　恵正（神戸商科大学）

企業活動を地域との関係から整理するために、ここで「分業」といういささか古典的な視角から考えてみることにする。実際には、それは「企業内分業」、「産業内分業」、「社会的分業」という３つのタイプによって整理することができる。企業内分業は企業中枢の意思決定に基づいて権威による資源配分が行われる。実際には、こうした企業による複数事業所の配置・再配置の動きは、いわゆるブランチ型経済の盛衰とダイレクトに結びついており、企業の機能的分化が結果として企業と地域との関係に様々な課題を生み出す契機となったことは否めない。産業内分業は一産業、一市場内部における分業を、社会的分業は社会全体における複雑に入り組んだ取引連関の総体を指している。都市や地域の経済からみれば、地域内部に形成される稠密な取引連関こそが社会的分業の実態となる。したがって、企業活動発展の過程は、企業内分業の深化が及ぼす産業内分業、社会的分業へインパクトにあるといって過言ではない。とりわけ、新たな地域産業集積の台頭といった近年における地域経済潮流のなかで、単なる経済関係だけで形成される分業構造だけではなく、地域における社会的関係をも含む広義の社会的分業のあり方を構想することは企業自身にとってもきわめて重要な課題となりつつある。グローバリゼーション・情報化の急進は、企業の空間組織自体の再編を加速化しており、このなかで従来のブランチ活動はその存立基盤を大きく変えようとしている。地域と企業の相互的関係を示唆するより広義の「社会的分業」のあり方こそが重要である。

被災地において見られた「地域と企業」の新たな関係の形成は、今後より深化すると考えてよい。ここでの目的は、こうした先進的かつ野心的な試みを発掘・紹介することにあり、その目的は達成されたと考えている。

ただ、こうした事例は一部を除くと被災地内においても知られていないのが実態である。次世代のまちづくりを考える上で、地域の主体としての企業が重要な役割を担うことは論を待たない。そのためには、かかる活動を広く市民に伝えていくことが必要である。こうした点を鑑み、ここでは次の２点を課題として指摘しておくことにしたい。第１は、県や市、経済団体等の様々な媒体を用いて企業の地域貢献活動を紹介していくことである。これまでここで取り上げた事例は特殊なケースではない。この他にも、多くの企業が地域や社会との新たな関係を模索しつつある。市民の側からみると、同じ地域におりながら相互の連携が欠落し、場合によっては「不信」の対象であったことは否めない。多様な主体間の情報共有は、今後のまちづくりを考える上で不可避の課題である。第２に、企業の地域貢献活動にたいする顕彰の仕組みづくりも有効であろう。企業の地域貢献活動を広報するという点からも、顕彰制度は有効に機能すると思われる。企業にとっても、戦略的フィランソロピーを機能させるうえでメリットはあると考えられる。

■震災復興住宅団地の6年を検証する記録誌　「暴力とカスタマイズ」

橋本　敏子（生活環境文化研究所）

●あの試みは今・・

みなさまは、南芦屋浜コミュニティ＆アート計画のことを覚えておられるだろうか？芦屋市の臨海部の埋め立て地に建設された最大規模の震災復興住宅団地で行われた、アートワークを介してコミュニティ形成のきっかけをつくりだすプロジェクトである。

このプロジェクトの特徴は、生活の場に導入したランドスケープ彫刻としての「だんだん畑」を、住民が協働して耕し草花や野菜を育てることを通して、新たな近隣関係を構築し、土地への愛着を育てるとともに、住民自身で生活環境を維持管理してゆくシステムに代表される「アートワークを介した人と場の関係の創造」である。

人が再び生きる力を見いだすための環境づくりにアートはどのように関われるのか？
このような問題意識を背景に、この記録誌は、団地完成後から現在まで、計画に関わった有志が住民の活動に応援団として関わりながら見守り続け、見えてきた実態を詳細に記録したものである。

●暴力とカスタマイズ

プロジェクトの主旨と一見違和感のあるタイトルは、美談に仕立て上げられがちなこの種のプロジェクトの本質を、6年間のフォローで実感したこととして端的に示したものである。

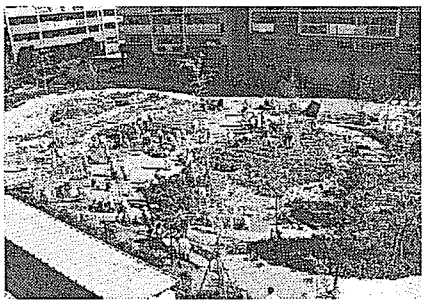
ここでいう「暴力」とは、天災がもたらした「暴力」、アートワークが住環境に組み込まれたことによる「暴力」、アートワークを受け入れてゆく人々の関係に生じる「暴力」など様々な暴力性の存在をさす。それらに対して、だんだん畑の土や植物を育てるという自然の営みがもたらす楽しみや喜び、自分の住む環境を自分たちで育てる、協働作業というシステムなどによって、私たちの場所として「カスタマイズ可能な仕組み」が組み込まれていたことが、このプロジェクトの重要なキーになっていることを読みとっていただければと思う。震災10年で学んだことのひとつとして、そしてこれからのまちづくりのキーワードとして参考になれば幸いである。

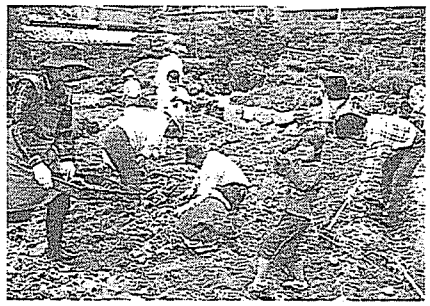
南芦屋浜コミュニティ＆アートプロジェクト
記録誌制作チーム・代表　　橋本敏子

●主なコンテンツの紹介
- プロジェクト・ガイド
- 1998～2004の経緯・変化
- だんだん畑の人々（住民の活動・意見など）
- 7年目の検証
（中川理京都工芸繊維大学教授との対談）

■お問い合わせ・購入ご希望の方は下記に。

・MACA事務局
〒541-0047
大阪市中央区淡路町4-4-5　文化農場内
・TEL/FAX:06-6231-1748　（担当：虎石・橋本）
・E-mail：maca@skb.ne.jp
・URL：http://www.skb.ne.jp
・定価：1000円+郵送料　A4・60ページ・カラー


住棟間につくられた“だんだん畑”


毎年秋に行われるサツマイモの収穫祭


2001年の収穫祭に登場した住民手づくりの屋台

ふれあい住宅（復興公営コレクティブ住宅）の検証（その3）

居住者の動態と年齢構成

石東　直子（石東・都市環境研究室）

はじめに

10地区341戸のふれあい住宅は、97年8月～99年4月にかけて入居した。入居時の居住者特性のデーターは入居後のサポート活動の中で居住者の協力を得て把握したが、入居後4年～2年半経った2001年7月にふれあい住宅の状況を詳しく知るために「第一次ふれあい住宅カルテ」を作成した。その内容は居住者動態と年齢構成、協同居住の運営状況と課題、協同スペースの維持管理と共益費、自治会、住み心地等。それからほぼ3年後の04年5月に「第二次ふれあい住宅カルテ」を作成するために第一次とほぼ同じ内容の調査をふれあい住宅連絡会の協力を得て行った。なお、脇浜ふれあい住宅は02年度から連絡会を脱会したので、04年5月の調査はできなかった。

入居から現在に至る経年データー等の整理とコレクティブハウジング事業推進応援団の継続した居住サポート活動を通して、ふれあい住宅の現状の課題に加えて将来を見通した新たな展開が見えてくる。「きんもくせい」の誌上を拝借して順次報告します。

居住者の動態

まずのっけからになるが、入居後亡くなった人が多い。神戸市営住宅居住者の年間平均死亡率は1.5～2.0%だそうだが、この値に比べてかなり高い住宅が多い。久二塚西は入居から5年半が経つが19名が亡くなり死亡率は6.0%／年で、真野は8名の死亡で3.3%である。この2住宅は多世代居住であるが神戸市長田区の下町にあり入居時に既に70代後半代から80代の人が多かったからであろう。この他死亡率が2.0%以上は3住宅あり、反対に金楽寺は0.6%、久々知は0.9%と低い。ふれあい住宅ではお葬式を居住者が参列して協同室で行うことが多く、居住者は先人を送って自分もこのように送ってもらえると思うと、今を安心して生きられると言う。これはふれあい住宅のメリットのひとつであると言えそうだ。

加齢によって自立生活ができなくなり、特別養護老人ホームやケアハウスへ移った人も少なくない。

第一次入居当時からの居住者の割合は住宅により差がある。亡くなった人が多い久二塚西と真野は、

ふれあい住宅カルテ　2004.05末診断（1）

住宅名　●多世代型　○高齢者向け	●久二塚西	○片山	●真野	○大倉山	○南本町	○
第一次の入居時期	1998年12月	1997年8月	1998年1月	1998年4月	1998年2月	1
全住戸数(うち空家数)	58（5）	6（0）	29（2）	32（0）	27（2）	2
住戸型・1DK(うち空家)	45（3）	6（0）	15（2）	32（0）	19（1）	
2DK(うち空家)	13（2）	—	12（0）	—	8（1）	
3DK(うち空家)	—	—	2（0）	—	—	
現在の居住者数(うち女)	58（40）	6（5）	37（24）	32（18）	31（20）	2
第一次入居時からの居住者と率　%	42人　58%	4人　67%	24人　65%	27人　84%	?	
入居後に亡くなった人	19人	1人	8人	5人	5人	
04年の平均年齢	67	75	65	74	75	
04年の平均年齢　男・女	65 ・ 72	70 ・76	63 ・66	70 ・ 77	79 ・ 71	7
入居直後の平均年齢　男・女	68 ・ 70	72 ・69	?	66 ・ 73	71 ・ 71	7
(＊)15歳以下を除く平均年齢推移　01/04年	68／67	72／75	69／65	74／74	74／75	
前期高齢化率推移　01/04年	70／82	100／100	64／70	97／100	94／100	
後期高齢化率推移　01/04年	36／36	25／33	39／24	34／34	41／58	
04年の後期高齢者率　男・女	11 ・ 50	0 ・ 46	8 ・ 30	14 ・ 50	100 ・ 35	4
04年の75歳以上数(うち女)	21（19）	2（2）	9（8）	11（9）	18（7）	1
04年の85歳以上数(うち女)	4（4）	1（1）	4（4）	1（1）	0	
15歳以下の人数　01年—04年	0—0	—	1—0	—	—	

前期高齢化率とは65歳以上　後期高齢化率とは75歳以上　（＊）の平均年齢の推移は01年データーが15歳以

当初からの居住者率はそれぞれ58%と65%で居住者の入れ替わりが大きいが、反対に金楽寺と久々知はそれぞれ94%と95%で居住者の変動は少ない。

ふれあい住宅は1DKは単身者、2DKは2人家族、3DKは3人以上家族の入居であるが、2DKで一人が亡くなって一人住まいになっている住戸（2DK入居戸数に対するひとり住まい率）が32%ある。今後このような状況は増えてくるし、3DKでも同様な状況になり、居住者数が減少すると計画人口に対応して設けられた協同スペースの維持運営も難しくなる。同一住宅内で家族人数に見合った住戸の住み替えができれば、新規入居世帯によって全体の居住者数が増え協同居住の活性化に繋がるだろう。なお、新しい入居者を迎えた時には各住宅ではふれあい生活に早く溶けこむようにと、食事会やお茶会などをして歓迎している。

平均年齢、高齢化率の推移

入居当初の平均年齢は、福井と金楽寺は多世代型住戸が多くかつ高齢者向け住戸の未入居が多かったので50歳代前半で、同じ多世代型住宅でも久二塚西は神戸市長田区の下町にある再開発住宅で入居当初から平均年齢は70歳近い。高齢者向け住宅の平均年齢は70歳前後で住宅による大差はない。

)岩屋北	◉福井	◉金楽寺	○久々知	○脇浜
998年2月	1998年4月	1998年4月	1999年3月	94.4.
2 (1)	30 (1)	71 (3)	22 (2)	
16 (1)	14 (1)	32 (1)	19 (2)	
6 (0)	9 (0)	22 (1)	3 (0)	
—	7 (0)	17 (1)	—	
3 (14)	48 (29)	111 (61)	22 (13)	
?	37人 77%	104人 94%	21人 95%	
3人	4人	4人	1人	
71	61	59	74	
2 ・ 69	61 ・ 61	59 ・ 58	72 ・76	
) ・ 69	50 ・ 50	55 ・ 52	?	
72／71	64／64	63／64	71／74	
63／85	54／65	65／67	88／95	
30／36	33／25	23／46	36／36	
3 ・ 31	32 ・ 21	64 ・ 31	0 ・ 67	
) (4)	12 (6)	51 (19)	8 (8)	
0	3 (1)	11 (3)	0	
—	2—2	5—9	—	

以下を除いていたので、04年も揃えた　　データー作成:石東

01～04年の平均年齢の推移をみると意外な発見があった。各住宅とも大きな変化がなく、3住宅で平均年齢が下がっている。これは一般論として年齢の高い人が亡くなり、その後に亡くなった人よりは若年者が入居して来るからであろう。この3年間で平均年齢に大きな変化はないのに、すべての住宅で前期高齢化率はかなり上昇しており、高齢者向け住宅では04年は85～100%で、多世代型住宅でも65～82%である。しかし後期高齢化率の推移は住宅によって差が大きく04年の値は24～58%の幅がある。3年間の推移は無変化型は3住宅、上昇型は4住宅、下降型は2住宅である。これは住宅固有の事情を反映しており、例えばこの3年間に75歳ラインを超える人が多かったか否か、新規入居者が75歳ラインの上か下か等にもよるものと思われる。

平均年齢や高齢化率の値だけをみて、協同居住を維持するパワーの有無を判断することはできない。真野は平均年齢が65歳、後期高齢化率は24%で他の住宅に比べると元気そうな値だが、居住者37人のうち85歳以上が4人いる。久二塚西も同様の傾向にあり、老老サポートは続かない。

ふれあい住宅の活性化に向けての模索

各住宅で現在行われている協同居住の内容（行事）については次回に記すが、居住者の加齢によって入居当初の意欲や元気がなくなり、餅つきなどの力のいる行事はできなくなり、定例の食事会やお茶会、節季の行事の回数がずい分と減ってきている。住宅全体に活気が失せ、居住者が自室を出入りする回数も減り、廊下や庭に人影がなくシーンとしており、居住者同士がふれあうことが少なくなっているという。

ふれあい住宅の財産である居住者同士の日常の相互ふれあいと豊かな協同スペースを活用して、協同居住の活性化のための新たな方策を発掘していかなければならない。居住者の元気アップと安心居住を継続するために、多分野からの知恵を得て、時代のニーズに対応したふれあい住宅の新しい住まい方を提案していく必要があると考えている。

＜追記：9月10日発行の「CO・OPステーション10月号」に関連記事が掲載されます＞

■Ｄｒ．フランキーの街角たんけん　第８回　JR・阪急　神戸高架鉄道物語（その３）

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

現在の王子公園駅の手前で高架に切り替わった阪急神戸線の軌道が、山手幹線と交差する地点に建設された原田拱橋は、歩道用の小スパンのアーチを両側に備える優美なデザインのコンクリートアーチ橋で、少し西にある灘駅前及び灘拱橋とともに、度重なる改修や補修で擬石の装飾が失われたものの、いまや西灘の一大ランドマークとなっている。

原田・灘両拱橋は、共にスパン約33 メートル。この規模の橋を鉄製桁で造る場合、中間に支柱が必要だが、それは橋下の道路の障害物となる。設計者の阿部美樹志は、支柱の必要のないコンクリートアーチ橋の利点を積極的に活かし、結果として稀有な都市景観を生み出した（写真１）。このあたりから、阪急の高架軌道は、割塚通のＪＲ軌道敷との合流点めがけて大きくカーブを描きながら降下を始める。

昼下がり、阪急三宮駅のホームに降り立つと、年代物の上屋の明り取りから淡い光が降り注ぐ。この上屋は阪急会館と同じ、昭和１１年の建設。ごついリベットで繋がれた鉄骨が支える大きなホームの空間は魅力的である（写真２）。また、西口コンコースには駅に出入りする乗客の視野を意識してデザインされたと思しき連続したアーチ型の梁や灯具など、1930 年代の「未来派」の残り香が感じられる空間がいまなお残されている（写真３）。

一方の JR線の高架で見所といえば、三宮から神戸駅まで多彩に表情を変えながら続く高架下商店街と、いまなお現役の昭和建築・兵庫、神戸の２つの駅舎だろう。

神戸駅（竣工：昭和６年、設計：鉄道省）の外観は、お隣のモダンスタイルの兵庫駅とは対照的なスクラッチタイル張りのシックな佇まいである。大きな庇を備えた玄関からコンコースに入ると、軌道敷のスラブを支える列柱を生かして重厚な空間が形作られている。現在のコンコースは、ショッピングモールを整備する際に大きく手が入れられているが、総じて昭和初期の竣工時のコンコースの意匠が随所に取り入れられ、統一されたレトロモダンな雰囲気を醸し出すことに成功している。そして、旧駅長室にあたる（幻の「ミカドホテル」ゆかりのみかど食堂から経営が替わったが）レストランの一角に、玉座も含めて当時のまま保存されている貴賓室は、東海道本線と山陽本線の終・発着点という、この駅の「格」を感じさせるのである。

（この項の結びに代えて）

前号の出稿直後、阪急神戸線の市営地下鉄乗り入れと三宮駅の地下化構想が報道された。当初、阪急の三宮乗り入れが地下式で構想されていたことを考えれば、歴史の綾を感じなくもないが、何を今更というのが率直なところだ。小林一三と阿部美樹志が残した神戸線の高架と梅田阪急ビルを活かした営業戦略を考える方が、阪急にとっても余計な金がかからず、他社との差別化に有利に働くと考えるのだが、どうだろうか。

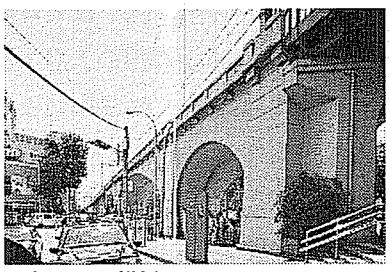


写真１ 原田拱橋

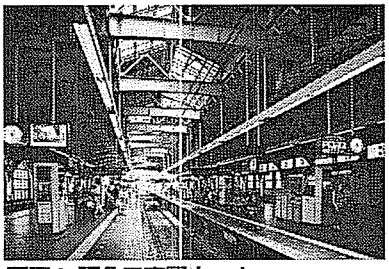


写真２ 阪急三宮駅ホーム

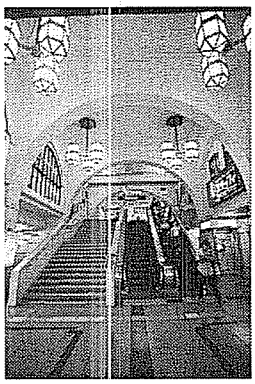


写真３ 阪急三宮駅西口

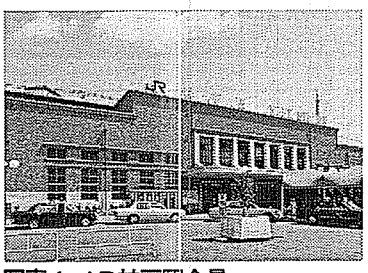


写真４ ＪＲ神戸駅全景



写真５ ＪＲ神戸駅コンコース

看板綺談・5

線路の先に

中川　紺

「サキちゃん、どこにいるの？」

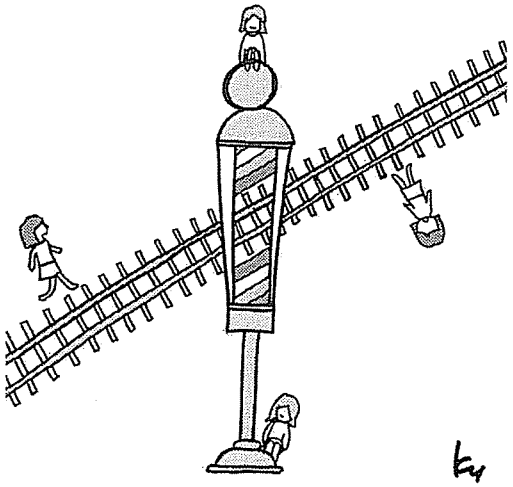
そう言うと同時にあやかは目を覚ました。小学校に通いはじめてから一ヶ月、頻繁に同じ夢を見ていた。

原因は、小さい頃から毎日一緒に遊んでいたサキと引っ越しで別れ別れになったこと。夢にはサキの家にあった赤と青と白のねじりん棒の看板がたくさん出てくる。あやかは並んでいる家を一件ずつのぞく。でもどの家にもサキはいない。がらんとした部屋に鏡とイスが置いてあるだけ。落ち込むあやかは小学校でもなかなか友達ができないでいた。

●　●

サキちゃんのとこに行こう。ある日学校から帰ったあやかはそう決心した。方法は決まっていた。家のそばの線路をたどっていけばいい。電車に乗ればどこにでも行けるのだから、線路はきっとサキちゃんの家につながっている、そう信じていた。電車に一人で乗るのは怖いけど線路沿いの道を歩いて行くことならできそうな気がした。小さな羊の形の雲がゆっくりと線路の先に向かって流れていくのを見て、必ずうまくいくと、あやかは自分に言い聞かせた。

少し汗ばんだ額を掌で拭って、また歩く。歩き始めてまだ十分ほどしか経っていないのに、あやかにはもう一時間以上歩いているように感じた。この道であっているのかな、夜までに家に帰れなかったらどうしよう、ふとそんな不安が頭をよぎると、もう心細くて仕方なくなってきた。あと少しで涙が出そうになった時、坂の下に三色のねじりん棒が見えた。思わず涙を吸い込んで、坂の下の看板に駆け寄った。



ちがう。あやかはがっかりした。看板はそっくりでも店の構えはサキのところとはまったく違ってずっと新しい感じだった。サキはいない、そう分かっていても店の中を覗いた。中には白い服のおじさんとシャンプーしてもらっているお客さん（これもおじさん）の二人しかいなかった。

肩を落としたあやかは、店の前のねじりん棒の、三色の帯がぐるぐるまわりながらのぼっていく先を見つめていた。宅配便のトラックの青年も、犬を散歩中の老婦人も、床屋の前でじっと動かないあやかを不思議そうに眺めていった。

●　●

「あのさきっぽはどこにきえるのかな？」

いつの間に現れたのか、あやかの横に女の子が一人立っていた。同じように棒の先を見つめて、あやかがいつも思っていることをつぶやき、あやかの方に振り返ると聞いた。

「なんねんせい？」

「……Yしょうがっこうのいちねん」

「えー、あたしもおんなじだよ。あたしナナミ。なまえは？　どこにすんでるの？」

ナナミは立続けにあやかに質問をした。あやかは驚きながらも、不思議といやな気分ではなかった。

●　●

ほどなく二人は一緒に遊ぶようになり、遊ぶ人数は次第に増えていった。ナナミは靴をかくす鬼ごっこやほかの新しい遊びをあやかにおしえた。もうあやかはねじりん棒の夢は見なくなっていた。

（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

連載【阪神間倶楽部８】

■ メディアイベントと阪神間　海水浴・飛行機・スポーツ

橋爪紳也（大阪市立大学）

阪神間倶楽部　第８回研究会の記録
・日時：2004年７月24日（土）14:00～16:30
・場所：鳴尾公民館　　・参加者：１６名
以下はその橋爪さんに阪神間のお話しを伺ったレジメ、語りからのまとめです。（天川佳美）

戦前期における阪神間でのイベントは、新聞社、放送局といった情報産業、電鉄会社など輸送に関わるメディアが深く関与した。いわゆるメディアイベントであった。出来事をつくり、人々の移動を促し、流行をつくりだして、従来になかった生活を呈示し、新たな消費を喚起するものであった。

とりわけ阪神間には未利用地が多くあった。その活用策として、まずイベントが開催された。その跡地が住宅地となり、またリゾート都市となっていく。

海水浴場は、新聞社と鉄道会社が経営した新たな行楽地である。甲子園では、さまざまなスポーツ施設を集積、多様なスポーツイベントが展開された。鳴尾の競馬場は、しばしば飛行機の曲芸飛行を見せるイベントスペースになった。いまだ飛行機が珍しかったころ、民間航空大会といった航空啓蒙の催しを新聞社が主催、多くの人が集まった。

このような実績があったからだろう、昭和初期には鳴尾に夜間離発着ができる国際空港の計画が提唱される。大阪市内、木津川尻に日本で最初の民間飛行場である大阪飛行場が開場した。その移転先をめぐって大阪市と神戸財界が衝突し、連日新聞をにぎわすことになる。移転先としては、大阪南港の大和川尻飛行場、鳴尾川左岸、住吉川尻、武庫川尻などが候補地にあがった。なかでも主要候補地は鳴尾川尻左岸のゴルフリンクの用地である。阪神築港が航空機営業の認可申請をしたが、用地買収が思うようにいかなかったらしく、最終的には伊丹に新空港が建設された。鳴尾空港は幻となり、のちにその近傍に軍が使用する飛行場ができたが、戦後は公団団地となった。

仮に鳴尾に本格的な国際空港ができていれば、おそらく伊丹空港はなかっただろう。また関空は？神戸空港は？と考えさせられる。未完の計画、失敗した構想に学ぶことも重要だろう。

■ 情報コーナー

●第７１回・水谷ゼミナール
・日時：８月27日（金）18:30～21:00
・場所：こうべまちづくり会館６階会議室（神戸市中央区元町通４丁目、TEL.078-361-4523）
・内容：テーマ／「ランドスケープアラカルト」、報告／①「公園の利活用最前線」長谷川利恵子（環境緑地設計研究所）、②「高木公園の公園づくり」～西宮北口駅北東地区震災復興土地区画整理事業～白井治（まち空間研究所）、③「ボランティア・リーダーを育てる」門上保雄（門上環境計画事務所）、ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀ／辻信一（環境緑地設計研究所）
・会費：１，０００円
・問合せ：ジーユー計画研究所（TEL.078-251-3593、FAX.251-3590）

●阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第３９回連絡会
・日時：９月３日（金）18:30～21:00
・場所：こうべまちづくり会館６階会議室（TEL.078-361-4523）
・内容：テーマ／震災10年まちづくり～様々な検証、報告／①「建築関係４団体10周年記念事業～フォーラム」光安善博（実行委員会副委員長）、②「震災10年市民検証研究会～出版」松本誠（市民まちづくり研究所）、③「阪神・淡路まちづくり支援機構・付属研究会～報告書」永井幸寿（弁護士）、ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾄ／野崎隆一（遊空間工房）
・会費：５００円
・問合せ：ジーユー計画研究所（TEL.078-251-3593、FAX.251-3590）

★「復興クルーズ」元気に出航！



８月13日（金）、３０名の団員は、燕京号で神戸から中国に向け出発しました。そして、震災でつながった日中友好の輪をおみやげに、25日（水）元気に帰神しました。

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク　事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり㈱コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店（普）1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2004年9月25日発行

月刊

きんもくせい

04年9月号
(50+36+NO. 18)

発行：阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■ある共生の記憶から

季村　敏夫（詩人）

協働というテーマで何か書けという。考えあぐねた。震災以降、ボランティアという言葉はできるだけ使うまいとした。心づくしをおもった。助成金には手弁当で対応した。ことほどさように、九年間へそ曲りを通してきた私に難問が舞い込んできたのだ。やっと強制収容所での労働ということに思い至ったが、原稿依頼主の思惑から逸脱するだろう。先ずそのことをおゆるし願いたい。

１９４５（昭和２０）年敗戦、内地では戦後復興が始まったが、戦争責任をいっしんに背負わされ、北満から連行、外地シベリアへ抑留された六十万人近い日本人が当時いた。そのなかの一人、詩人石原吉郎（１９１５－１９７７）によれば、劣悪な条件のため単独では生きられないという抑留者自身の自覚から、収容所には一種独特の共生システムが編み出されたという。

食事の場合。食器が極端に少ない。それ以上に量の絶対的な不足。二人分を一つの食器に配分される。一つの食器を二人でつつきあう光景は苛酷な神経戦に似ている。先ず匙の大きさが問題になる。更に相手の掬い加減の監視。食器の内容が粥類のときはまだよい。悲惨なのは豆類などのスープのときだ。底に沈んだ豆の争奪。相手より一粒多いと、それだけで明日の労働に影響する。一言も発せず、交互に一口ずつ、睨みあいながらの格闘が続く。ところが労働の際、二人の息は見事にあう。スコップをとるか、ツルハシかでその日の消費エネルギーが違うからだ。結束を固めた行動、一人は見張り、もう一人はすばやく工具倉庫に入り、使いやすい道具の確保に努める。眠るときはどうか。乏しい体温の消耗を防ぐため、互いの背中をしっかりと寄せて温めあうのだ。しかし明日白昼下で襲われる敵意が早くもぎらつき始めている。酷寒のシベリア、毛布一枚の支給しかなかったからである。奇跡的に生還した結語は次のようであった。

【孤独は、のがれがたく連帯のなかにはらまれている。そして、このような孤独にあえて立ち返る勇気をもたぬかぎり、いかなる連帯も出発しないのである。無償な、よろこばしい連帯というものはこの世界には存在しない。】

震災の明くる年、石原吉郎に関し石牟礼道子さんと語りあった。理解不能の記憶をひきずる人を忘れてはなりませんねという私に、石牟礼さんは静かにうなずかれた。雷鳴が響いていた。

＊　＊　＊

前号ご不在でご執筆いただけなかった季村敏夫さんに今月号にお書きいただきました。
次号は、寺田匡宏さんにお願いいたします。

（小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→中島克元→中村順子→海崎孝一→某市某職員→前田裕資→佐藤三郎→細川裕子→出口俊一→高田富三→田中保三→高森一徳→渡邊仁→黒田裕子→季村敏夫→　）

『コンパクトシティ』を考える9

－E．ハワードの『田園都市』構想について

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

『コンパクトシティ』は工業都市の対極にあるという前提で話を進めているが、産業革命後の工業化・都市化が一気に進展していたイギリスで、今から1世紀も前にコンパクトシティの理念に沿った都市の概念が打ち立てられ、実践されていた。

今回は、コンパクトシティのモデルになるエベネザー・ハワードの『田園都市』構想の生まれた背景と内容について、さらに次回にはその実践として産み出された『田園都市・レッチワース』について考えていきたい。

1．啓蒙主義による理想都市の運動

自由主義思想を背景に工業化が進展し、都市は成長を続けたが、計画性もなく過度な集中が劣悪な都市環境を作り出した。貧困にあえぐ労働者家族が集中したスラム街は、無気力が蔓延し、若死にする者が絶えず、道徳観も喪失していた。

企業化に成功し、富を蓄え「新・ジェントルマン」を目指す産業家の中に、啓蒙主義的経営を目指す者があらわれた。人間の貧困も罪悪も社会が作り出すもので、社会制度があらためれば消滅すると確信していた。イギリスの幼稚園の創始者であるロバート・オーウェンは、19 世紀当初にグラスゴーの近くのニュー・ラナークに理想的の工場を始めた。営利や搾取を追求しない工場経営、労務管理、教育をおこない生産効率と収益を高め、労働者用に小住宅の計画団地も造った。

その後、数人の産業家による社会主義的理想、温情主義的な規制に基づいた計画的都市コミュニティ建設実験が続いた。19 世紀の第 4 四半期になると、緑地と共同施設の配慮、整然とした配置、水質汚染を最小限化するなどの労働者用の共同住宅を目指す理想都市建設計画が各地で展開され、衆目を集めるまでになった。

2．ハワード『田園都市』構想まで

こうした産業家の善意と経済的能力に依存してきた理想都市運動の性格を一変させたのが『田園都市』構想であった。

エベネザー・ハワード(1850-1929)は、ロンドンの小さな小売商の息子として育つ過程で、産業革命により都市に集中した工場から出る煤煙と、そこに働く労働者の劣悪な居住環境に対して、疑問を抱いた。21 歳の時にアメリカの開拓期のネブラスカに定住するつもりで農民であった叔父を訪ねた。しかし性格的に農民になりきれず、英国に戻り議会の記録係の仕事に就いた。

29 歳の時、高い教養と田舎に深い愛情を持つ地方の宿屋の娘と結婚し、良き理解者で忠告者を得る。余暇には土地問題に関心を持ち、改革家ヘンリー・ジョージのサークルに入り研鑽を深めた。ヘンリーは土地私有権を維持しつつ、地代を租税で取る土地の国有化をめざす提案をしていた。ハワードはこのほかに、モデル工業都市や組織的植民計画を提唱する著述にも触れ、都市建設の方法に関心を高めていった。アメリカには仕事でも訪問する機会を得、開拓地という新しい土地の上に新しいコミュニティを形成する新たな都市の出発が可能である強い印象を持った。

こうして、ハワードは発明家的な発想のもとに、1898 年『明日－真の改革への平和な道』を出版し、理想主義的な新たな工業都市の姿を提唱した。新たな都市の姿として、田園の風景と重ね、分散的な社会におけるコミュニティの協同的な活動によって、都市がある種の魅力的な特性を持つ可能性を展開した。

『明日』の出版後、この主題について全国を講演し、99 年に熱心な人を集めて「田園都市協会」を設立した。提唱した『田園都市』構想は、郊外スプロールの懸念と快適な田園生活を望む中産階級に熱狂的に迎えられた。1902 年には『明日の田園都市』と改題して出版した。

3．『田園都市』構想の独創性

『田園都市』とは、一つの田園(garden)のなかにある都市、すなわち美しい農村に取り囲まれた

都市を意味する。必要とすることは、都市と農村の結婚であり、農村にある心身の健康と活動性と、都市の知識と技術的便益の政治的協同をはかることであった。

ハワードの理論の独創性は、独特の「統合」にあった。都市生活に生気を与え、他方、村落生活を知的に社会的に改善するために、コミュニティ内の都市機能間の相互関係と村落の統合という都市開発の問題全般にわたって取り組んだ。

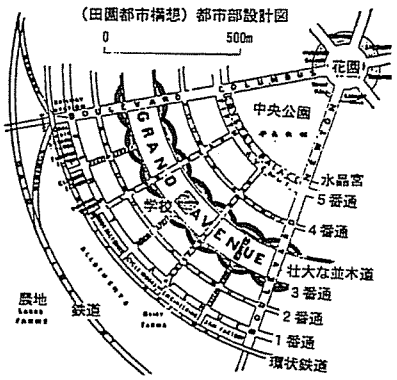
新しい都市全体の面積を 6,000 ｴｰｶｰ（約 2,400ha）とし、そのほぼ中央に半径 1,240 ﾔｰﾄﾞ（約 1,100m）の円状の 1,000 ｴｰｶｰ（約 400ha）の都市を建設する。人口は都市部が約 3 万人、農地部が約 2 千人の計 3 万 2 千人の小都市である。農業のために使用される 5,000 ｴｰｶｰの農地を都市に不可欠な永久の空地帯として設定し、都市発展による市街地の物理的な広がりを制限した。田園都市の土地の全てを自治体自身が永久に所有し、住民は借地により利用する。都市空間は個人住宅が締まりなく無限に広がるのではなく、よく引き締まり厳格に制限された都市的集団により形成させる。一定の地域の土地と社会施設が成長限界まで使用されると新しい都市地域へ産業を誘致するとともに、新しいコミュニティを建設するため準備する。

田園都市の運営のために借地人である住民からこれまでの概念にない「地方税地代」を徴収し、地代の部分で土地買収費の利息と、元金の償還に充て、地方税で公共施設の建設・維持に充てる。30 年で元金を償還した後は、老齢年金や災害・疾病保険の目的で多額の剰余金を積み立てる。

『田園都市』は大都市の混乱を救済する試みであるばかりか、土地の価値を引き下げ、大都市の改造への道を準備することであった。

4．コンパクトシティとしての『田園都市』

1,000 ｴｰｶｰの都市部の設計は、中心に 2.2ha の円形の花園があり、そこから幅員 36m 延長 1km の広いの並木道が 6 本周辺部に放射状に延びている。花園を囲むかたちで大きな公共建築物の公会堂・大ホール・劇場・図書館・博物館・美術館・病院などが建ち並ぶ。その外側には円環状の 58ha の中央公園があり、その周りに公園に向いて「水晶宮」と呼ばれる広いガラスのアーケードを持つ商店が建ち並ぶ。住民は最大でも 600m も歩けば、雨の日も苦にならず買い物ができる。



1 番通から 5 番通の環状道路の間に 5,500 の宅地があり、1 敷地は標準サイズで間口 6m 奥行 40m の 240 ㎡である。3 番通と 4 番通の間に、「壮大な並木道(Grand Avenue)」と呼ばれる 130m の幅、長さ 5km の環状の緑の帯が作られ、都市部を二つの帯に分割する。この中に学校や教会が建設される。この緑地帯まで最も隔たっている宅地からでも距離は 220m である。広くたっぷりした都市空間には、妨げられることなく日光が輝き、空気が流動し、道路に植えられた樹木と灌木と草花は、村落を思わせる景観を作り出す。

都市部の外環の 1 番通の外側の 33ha の土地には、工場・倉庫・酪農場・市場・石炭集積場・木材置き場などが 7.2km の環状鉄道に面して配置されている。鉄道敷地には貨物が工場や倉庫から直接貨車に積み込まれ、遠方の市場へ輸送され、他方、他の市場から輸送された貨物は、直接貨車から倉庫や工場に運び込まれる。したがって、包装や運賃の点で非常に大きな節約ができ、貨物の破損を最小限にくい止めることができる。都市部の道路の（当時は馬車の）交通量を減らし、道路の維持費を著しく減少させることができる。

都市部で発生するの塵芥は農業部門の肥料として土壌に返され肥沃性の向上に利用される。

『田園都市』構想は、「成長管理」「歩いて暮らせる」「ゼロ・エミッション」社会、まさに『コンパクトシティ』のモデル構想でもある。

〈参考文献〉 E. ハワード（長素連訳）「明日の田園都市」、鹿島出版会、1968 年

■「震災後－7」

小野　幸一郎（元まち・コミ代表、聖水／修行僧）

以下の文章は、私が開設している「震災検証メーリングリスト」に投稿したものです。

「震災後」というタイトルは、震災によって露わになった現実が、その後の日本や世界の出来事といかに関連しているかを検証するという趣旨のもとにつけました。つまり、震災前は曖昧だった社会への理解も、震災後はかくも明白である、ということであります（私が）。まあ結局、震災はその後の世界に、微妙に、されど確実に影響している（はず）、ということを、私節で好き勝手に書いている訳ですが。

突然に「7」でありますが、つまりそれ以前にも以後にも書いてる訳です。読んでみたいという奇特な方はhttp://soukou.air-nifty.comをご覧下さい。余計な文章もありますが。

内容的には参院選の前に書いたものですのでちとずれてるのですが、文章の趣旨には全く影響してないので小林さんのご厚意に甘えて、転載させていただきます。

「年金の未納」というとんでもない理由で、ついに民主党の管さんが代表を失脚しましたね。これで、ここ数年リベラル（←死語？）なイメージのもてる著名な国会議員のほとんど全てが、国政の影響力あるステージから姿を消した事になるんじゃないでしょうか。

一昨年、秘書の給料流用が発覚して衆議院議員を辞職した社民党の辻元清美さんを皆さん覚えておいででしょうか？　私、彼女とは旧知の仲でございます。と、いうのも1986年から89年までピースボートのスタッフをしてたからで、まあ、いわば「同じカマの飯を食べた仲」ということになる訳です。ただし、彼女は私より随分年上ですし、当時すでに「雲の上」とまではいかないまでも、18歳の何も知らない男の子にとってはだいぶ遠い存在ではありましたけれども。

そもそもなんで私が長田に来たのかというと、「印刷機を持ち込んで新聞を作ろう」と発案したのが私が当時勤めていたあらばき協働印刷のおばちゃんこと関根みい子さんであったからであるというのが一番の理由ですが、その話をピースボート（以下ＰＢ）に持ち込み、さてどこに入ろうという話になった時、ＰＢの古参スタッフによる「一番被害のひどい長田に行くべきだ」の一声で長田入りが決まった事がそもそもの発端なのでありました。その古参スタッフが実は長田出身者であり、そして田中社長と高校・大学が一緒なのであります。

辻元清美さん（以下清美ちゃん）はまだ当時は議員ではなく、ＰＢの責任パートナー（ＰＢでは責任者の事をこう呼ぶ）の一人として活動していました。神戸の救援活動では現場の活動には直接携わらなかったですが、頻繁に視察にはこられてました。ＰＢが自転車やコンテナをチャーター船に積んで神戸に来れたりしたのは彼女の交渉の賜物ではないかと思います。

やがて兵庫商会駐車場跡地にＰＢのプレハブが建ち、そこでＰＢの跡を継いだ「すたあと長田」が生まれ、そこに「出戻り」で私が合流し、その隣にＳＶＡが引っ越してきて浅野幸子さんらがやって来ると、まち・コミ設立まであと一歩ということになる訳です。

清美ちゃんは震災の翌年、分裂した社会党改め社民党から立候補し見事当選を果たします。

「ＰＢの清美ちゃん」ではなく「国会議員の清美ちゃん」に私たちが会う事になるのは元日銀神戸支店長のかの遠藤勝裕さんと繋いでもらった時でした。私と田中社長が初めて遠藤さんとお会いしたのは実は霞ヶ関の清美ちゃんの議員事務所であったりします（ちなみになんで繋いでもらったのかというと、遠藤さんに「神戸市長になって下さい」というとんでもないお願

いをする為でした）。

その後清美ちゃんが被災地の視察に来たときには案内をさせていただいたりもしました。

と、そんなに濃密な関係にある人とならば、さぞかし被災地の問題も共有できていただろうと思われるかもしれませんが、残念ながらそうとはいえません。そんなに接していながら伝えきれなかった私たちの力不足は勿論ですが、正直私は彼女の問題意識の中での被災地の比重はそんなに重くなかったんだと思っています。それもそのはず彼女には取り組まなければいけない問題や国会の議題は山ほどある訳で、被災地にだけ関わるわけにはいくはずがありません（別に嫌味で言ってるわけではありません）。彼女はＮＰＯ法成立に向けても尽力されていましたし。

でも、しかし、なのであります。

私は冒頭「リベラルなイメージのもてる著名な国会議員」という表現をしましたが、管さんにせよ、土井さんにせよ、そして清美ちゃんを始めとした社民党の「土井チルドレン」と呼ばれている人たちにせよ、共通して言えるのがその行動を支える思想的・精神的バックボーンというのは人権思想を軸とした社会運動にあるんじゃないかと私は思ってます。護憲の土井さんは言うに及ばず、管さんの名前は天皇制問題を議論する雑誌で拝見した事がありますし、清美ちゃんは「ベ平連の小田実」のお弟子さんです。つまりどの方も戦後から連綿と続く、つまるところ反体制的な、社会運動の流れの中から生まれたスターであるとも言えるわけです。

時に、震災時の日本の首相は社会党のトンちゃんこと村山富市氏でありました。すでにして社会党が連立与党となっているご時世であった訳ですが、さてその村山首相が震災という事態に迅速かつ的確に対処できたかというと、ご存知の通りであります。それは村山氏個人の能力の問題なのか、社会党という組織の問題なのか、政府という機能の問題なのか、もしくはその全てなのかは知りませんが、問題があったのは間違いありません。まあ、あの時に必要だったのは社会問題意識云々とは全く無関係の危機管理能力であったとだけは言えますが。

ではでは、震災直後のことはともかく、その後の復興を巡る問題にはどうであったかというと、これも言わずもがなでありましょう。そうこうしている内に社会党は下野してしまい、分裂し社民党となり、「土井チルドレン」の方々が政界に乗り込むことになったのでありました。

震災に伴う、もしくは震災で見えてきた様々な問題に、既存のイデオロギー対立や社会運動のノウハウでは対処できない、できなかった。と、いうことはどういうことかというと、これからの日本の有り様に対処できないということでもあるというと言い過ぎでしょうか？　しかし、直視しなければいけないのは実はそのことではないかと思うのです。

一応は「革新」を標榜する政党で被災地の現場で姿が見えたのって、共産党か新社会党ぐらいじゃありませんでしたか？　しかし共産党は、もうとことん我が道しか行かないし、新社会党は濃厚に傷を引きずりながらのたうちまわってる感じで、まあどちらも「現場にいながら現場を見ず」という印象を禁じえませんけれども。

本当は現場の中からニーズを拾って何を為すべきか再構築していくというごく当たり前の作業が、政治を担う自覚のある方々には求められたと思うのですが。

リベラルの旗印華やかなる方々が表舞台を降り、参議院選挙が近づくなか心中複雑なる思いををもたれてる方もいらっしゃるでしょうが、私たちは現在の政局などには目を奪われず、これからのための「土台づくり」を模索すべきだと思います。そのための材料は震災から 10 年目の被災地には累積してるはずですし、清美ちゃんはなんと思うかわかりませんが、落とし種のまち・コミは今も活動を続けているし、御蔵のまちは今もその鼓動を止めてないし…。

■たるみレポート（その3）「窓口に来られるお客様」

大塚　映二（神戸市）

私は区役所のまちづくり支援課という職場に属していますが、まちづくりを総合的に推進するという趣旨でまちづくり推進課とともに一つの窓口を設けています。行政にとってまちづくりの最前線と位置づけられるわけですが、今回はここを訪れるお客様（区民の方）がどんな用事で来られるのか、ある日の様子をちょっと紹介します。（案外知られていないのでは？）

まず“一見さん”で一番多いのが、公営住宅に関するお問い合わせ。「市住・県住の募集はいつですか？」「母子家庭なんやけど、申込資格は？」「常時募集やと聞いて来たけど、年4回しか募集してないのはおかしいんとちゃう？」たいていの方は、職員の簡単な受け答えと“詳しくは住宅募集（管理）センターに聞いてください”という説明で納得して帰られます。が、中には細かな入居条件まできちんと答えられないと「おまえらは税金泥棒か！」と怒り出す方もおられます。それだけ切実なんだと思います。窓口で見る限り、公営住宅に関する需要はかなり高いようです。

続いて、区役所や行政の各種サービスに関するお問い合わせもたくさんあります。「身体障害に関する窓口はどこ？」「住民票をとりたいんやけど」「福祉パス（バス無料乗車証）を落とした・・・」「垂水区の地図が欲しい」「絵や習字の教室に行きたい。どんな講座があるの？」「ゴミの分別方法が変わると聞いたが、具体的な方法を知りたい。」「老人クラブに入りたいが、どこでどんな活動をしているか教えて欲しい」などなど。とりあえず区に来れば情報が得られるだろうという期待の表れです。

切実な話としては、悪徳商法がらみの相談。オレオレ詐欺まがいのものから、催眠商法など人ごとではないと感じます。被害にあった、遭いそうになった方の気持ちを受け止めて、丁寧に迅速に対応すべき瞬間です。また、隣の空き地の管理を何とかして欲しいという相談もかなり多いです。「草ぼうぼうで、害虫に困っている。市で何とかして欲しい。」たいていは遠くにいる不在地主の所有地で、市民個人の力ではいかんともしがたいというお気持ちはよくわかります。市民の方と手を組んで良好な環境を守っていきたいとは思うものの、なかなか実効性のないのが現状です。新しい政策提案が求められます。

あとは、“固定客”の方々。日頃からおつきあいのある住民組織の代表の方々がいろんな用事で来られます。ふれあいのまちづくり協議会委員長が活動助成申請書や地域行事の案内を持ってこられたり、市民花壇のお世話をされている方が「助成金の振り込みはまだか？」と催促に来られたり、老人クラブの方が「老人美術展」の申込用紙を取りに来られたり・・・。「ちょっと印刷機を貸して！」と隣の地域活動交流コーナーに導入した印刷機を使って印刷しに来られたり。（紙を持ち込めば印刷代はタダというこのサービス、地域団体の方には好評です。）

・・・いったいどこが「たるみレポート」やねん！というツッコミがきそうですが、垂水区の場合、窓口でのトラブルはほとんどありません。区民の方と区役所が比較的いい関係を築いている証しと思っています。表面的すぎるでしょうか。



看板綺談・6

いつかの風景

中川　紺

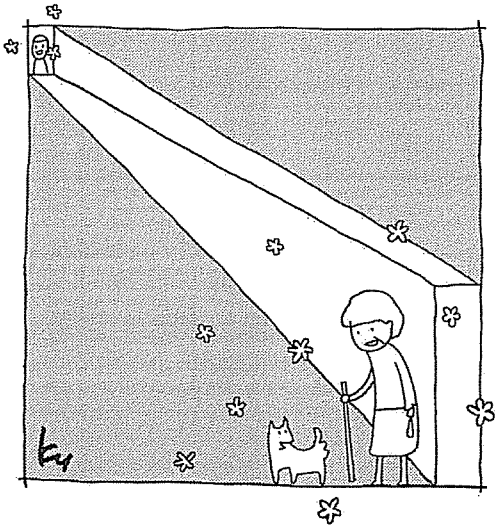
あの場所に近づくと知らないうちに早足になってしまう。今日は何が見れるかしら、そう思って空地に放置されている看板を一つずつ目で確認する。ペンキが剥げた定食屋の看板、つぶれたのかしら……「あっちゃん」……聞き覚えのあるその名前、それは女学校時代の親友のあだ名と同じだった。

●　●

朝夕のクロの散歩コースを変えたのは最近のこと。いつも床屋の前をまっすぐに行くのにその日に限ってクロはどうしてもその角を曲がりたがって小さく吠えた。私ももう年だし、あんまり長く歩くのも疲れるのだけれど、珍しいと思ってそこを曲がって、そしてこの場所を見つけてしまった。

たぶん隣の看板屋の駐車場兼物置き。撤去した看板が頻繁にやってきてまるで粗大ゴミ置場みたいに積まれていく。古いのもあれば随分新しいのもある。お店の入れ替りが早いみたい。その中の一際新しい看板に目がいった。看板の金融会社の名前が子どもの頃によく行った母の田舎の町と同じ読み方だったから。

それから毎日のように、私にとって懐かしい名前や風景が隠された看板を見つけるようになった。郊外の住宅地の看板の時は……そう、家並みの背景に描かれた山が、通っていた小学校の裏山と同じ形だった……まん中の山がお椀をふせた形をしていて。どうしてあんなことが起こるのか分からないけど、これもクロのおかげかしら。でも前よりも散歩に出るのが楽しくなっていた。



●　●

あら、私は思わず声をあげた。そこにあるのは交通整理に使うガードマンの人形。こういう類のものが置いてあるのは珍しかった。でも声を出したのはそのせいでなく、人形の顔に学生時代の初恋の人の面影を見つけてしまったから。若くして戦地で亡くなってしまったけれど、名前を忘れたことなどなかった人。懐かしさ以外の気持ちが込み上げてきて、私はずいぶんと長い間、立ち止まっていた。

次の日、いつもより随分早めに朝の散歩に出かけた。人形は変わらずにそこに立っていて、そして、あまりに普通に言った。

「マサちゃん、元気だっだ？」

人形は、彼になっていた。ずっと片思いで私は彼と話したことなどほとんどなかったのに、思い出は何て都合いいんだろう、そう思った。今、幻を見ているなら、もうしばらく消えないでほしかった。彼と私は昔住んでいた町の思い出をゆっくりと話した。日が高くなってきて道行く人が増えはじめると、彼は元の人形に戻ってしまった。

●　●

〈誰かの独白〉この日の夜、彼女は自宅の寝室で、静かに息を引き取った。とても穏やかな顔をしていたという。近所の人から知らせを聞いて、親族がやってくる前に、犬のクロはそっと姿を消した。首輪ははずしてあった。親族はクロを探したが、結局見つけることはできなかった。

この犬はのちに二人の奇術師に拾われることになる。そしてまた物語は続いてゆく。

（完）

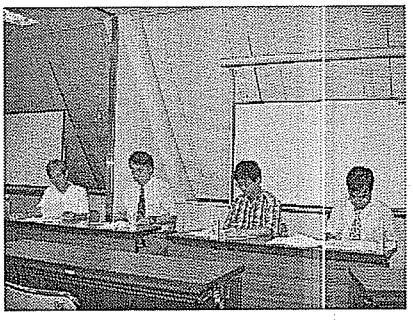
（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第３９回連絡会報告

今回のテーマは「震災１０年まちづくり～様々な検証」で、９月３日（金）こうべまちづくり会館で行われました。野崎隆一さん（遊空間工房）のコーディネートで、３氏から報告がありました。

①「建築関係４団体 10 周年記念事業～フォーラム」光安善博（実行委員会副委員長）、②「震災 10 年市民検証研究会～出版」藤室玲治（震災 10 年市民検証研究会事務局）、③「阪神・淡路まちづくり支援機構・付属研究会～報告書」永井幸寿（弁護士）

光安さんからは、平成１７年２月に「建築家・建築士の責任と果たすべき役割」をテーマに兵庫県下の建築４団体が共同で行うパネルディスカッションについてや、各団体独自のテーマで計画している討論会や講演会についての報告がありました。藤室さんからは、震災で生まれた「もう一つの生き方」や「新しい市民社会への動きや仕組み」について検証し、これを出版する計画（岩波新書など）についての報告がありました。永井さんからは、地元の復興を専門的にサポートするために弁護士、司法書士、土地家屋調査士、建築士、税理士、不動産鑑定士などで構成する「阪神・淡路まちづくり支援機構」について、同様の組織を全国行脚を行いながら呼びかけている活動について語られました。（中井都市研究室　中井　豊）



左から、野崎さん、光安さん、藤室さん、永井さん

■ 情報コーナー

●「日中交流・復興クルーズ 2004」中間報告会
- 日時：9月25日（土）13:30～15:30
- 場所：神戸市青少年会館６階工作室（中央区役所隣り、神戸市中央区雲井通５丁目 1-2、TEL. 078-232-4455）
- 内容：青池監督の映像報告「日中交流・復興クルーズ 2004 の記録」、日中交流・復興クルーズ 2004 参加者の見た中国、天津、唐山地震報告、日中交流・復興クルーズ 2004 上田耕蔵さんのまとめ
- 問合せ：日中交流・復興クルーズ 2004 事務局（TEL. 06-6304-7800）

●阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第４０回連絡会
- 日時：10月８日（金）18:30～21:00
- 場所：神戸市勤労会館 406 号室
- テーマ：「テーマパーク型まちづくり／らしさの都市像を求めて」
- 解題：「こだわり型のまちづくりの取り組みについて」後藤祐介（GU計画研究所）
- 報告：①「戦前郊外住宅地『武庫之荘』の保全と再生」岩崎光正（尼崎市都市計画課まちづくり担当）、②「緑のこだわり『甲陽園目神山』のまちづくり」前田豊稔（甲陽園目神山地区まちづくり協議会）、③「近代神戸の原点『旧居留地』のまちづくり」山本俊貞（㈱地域問題研究所）
- 会費：５０００円
- 問合せ：ジーユー計画研究所（TEL. 078-251-3593, FAX. 251-3590）

●2004 日本造園学会関西支部大会
＜シンポジウム＞
- 日時：10月９日（土）13:00～16:30
- 場所：相楽園会館（JR 元町駅より北西へ徒歩８分）
- 内容：語り部のお話、パネルディスカッション

＜研究発表会・講演会＞
- 日時：10月10日（日）10:00～16:30
- 場所：神戸芸術工科大学（市営地下鉄学園都市駅より徒歩７分）
- 内容：研究発表会、ポスターセッション、講演会
- 問合せ：日本造園学会関西支部事務局（TEL. 075-753-6099）

●第７２回・水谷ゼミナール
- 日時：10月29日（金）18:30～21:00
- 場所：こうべまちづくり会館
- テーマ：「再開発住宅の入居者」
- 内容：コーディネーター／小林郁雄（コー・プラン）、詳細の内容は未定
- 問合せ：ジーユー計画研究所（TEL. 078-251-3593, FAX. 251-3590）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
- ◆ http：//web. Kyoto-inet. or. jp/org/gakugei/kobe/index. htm
- ◆ http://www1. plala. or. jp/hos_a/kinmokusei_international. html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca. mbn. or. jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2004年10月30日発行

月刊 きんもくせい

04年10月号
(50+36+NO. 19)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■地震と偶然性－「まちづくり」の前提として－

寺田　匡宏（国立歴史民俗博物館外来研究員
[記憶・歴史・表現]フォーラム代表）

時とは次々と過ぎゆくものであり、その過ぎゆく時の中で人間は過去を生みだして生きている。わたしたちがどれだけ現在にとどまろうとしても、その現在は、いつのまにかわたしたちの前をすり抜け、通り過ぎ、流れ去ってゆく。時の流れる三次元空間に定位しているわたしたちは、現在が過去になるのを押しとどめることはできない。時はわたしたちの意思とは無関係に存在する。わたしたちの意思とは無関係に存在するものの中に、わたしたちはわたしたちなりの文脈を見出しながら生きている。

すべては偶然である。わたしがわたしとしてこの世に生まれてきたのも偶然であれば、わたしがいまここでこのようにしてあるのも偶然である。だが、わたしたちはその偶然を偶然とは感じない。いや、仮に偶然と感じたとしてもそれを必然だと自分を納得させている。人間は、さまざまな偶然の中から、必然に転化しうるものごとを見つけだし、それをつづり合わせながら「わたし」という一つの物語をつくる。

通常、そのような偶然が必然に転化するメカニズムは、ささやかでひそやかなものだ。たとえば、高校時代、偶然席替えでとなりになった彼と彼女の好きなバンドがたまたま一致したのが二人がつきあうきっかけだったとか、旅先で雨宿りした無人駅でたまたま一緒になったのが彼と彼女のなれそめだったとか。これはとても不思議なことである。けれど、わたしたちは本当は不思議なそのことを不思議であると考えずに生きている。

その「不思議」が一挙にふりかかってきたのが阪神大震災であった。あの出来事とは、まさに巨大な「不思議」である。あのとき、あの場所で断層が動いたのは偶然である。それがあの時刻であったことも偶然でしかない。だがしかし、どうしてわたしはその偶然に遭遇したのか。

神戸という場所でわたしたちが何かを考えるとき、思考の原点にあるべきはこの問いであろう。偶然が必然であるという謎。これまで数千年、いや数万年、この「不思議さ」に気づいた者がそれについて考え、そして考えた末の答えを次のだれかに手渡してきた。

「まち」とは人間の生活空間であり、「まちづくり」には人間の存在と関わるあらゆる現象を包摂した知識を要する。今回は少し毛色の変わった文章だったかもしれない。でも、神戸で「まちづくり」を考えようとすると、このような視点も必要ではなかろうか。

※【宣伝】「someday, for somebody いつかの、だれかに～阪神大震災・記憶の〈分有〉のためのミュージアム構想｜展　2005 冬　神戸～」(2005年1月14日～23日、神戸元町 CAP HOUSE) を開催します。わたしたちが震災の記憶を伝える方法を、ドキュメント資料、映像、インスタレーションから探ります。

＊　＊　＊

次号は、豊岡・出石・洲本水害と中越地震について書いていただく予定です。

（小林郁雄→野崎隆一→宮西悠司→佐野末夫→中島克元→中村順子→海崎孝一→某市某職員→前田裕資→佐藤三郎→細川裕子→出口俊一→高田富三→田中保三→高森一徳→渡邊仁→黒田裕子→季村敏夫→寺田匡宏　）

「新在家まちづくり委員会」の紹介

ー発足 15 年目の神戸市型まちづくり協議会ー

後藤　祐介（ジーユー計画研究所）

1、はじめに

新在家まちづくり委員会は、平成２年３月の発足であり、私が支援しているまちづくり協議会（以下「まち協」と略す）の中では、岡本のまち協に次で古い長寿のまち協である。これは、幸か不幸か、阪神・淡路大震災をくぐりぬけるなかで会長、副会長、事務局長等のリーダーの世代交代が比較的円滑に行われて来たことが大きな要因の一つに挙げられ、現在は、発足以来４代目の会長のもと、比較的活発、かつ、有効に運営されているまち協である。本稿では、この新在家まちづくり委員会の長寿の背景や活動経過を紹介する。

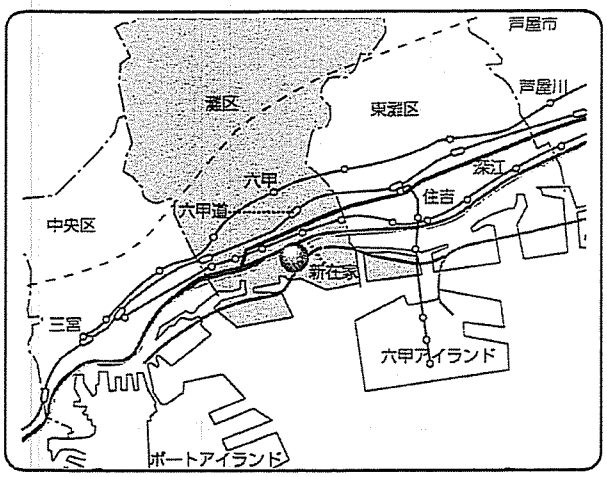
2、公害対策に始ったまちづくり委員会

新在家南地区は、神戸市灘区東部の臨海工業地帯に位置し、北側を国道 43 号並びに阪神高速道路により一般市街地と分断され、車による道路騒音や大気汚染に悩まされて来た。加えて、地区の南側に港湾幹線道路（ハーバーハイウエイ）の建設問題が浮上して来た。また、当地区は臨海部の低地であるため、大雨の際には、マンホールから雨水が噴き出すなど、都市基盤施設も充分とは言えなかった。

このため、地元の各種団体が中心になって、住み良い、働き良いまちをつくるため“新在家まちづくり委員会”を灘区役所等行政の支援を得て発足した。

こうして発足したまちづくり委員会の第５回委員会（Ｈ２．10）において、私は、東灘区の“美しい街岡本協議会のコンサルタント”として「住民参加型まちづくりの進め方」についてお話する機会を得、その後、地元からの要請もあり、神戸市から新在家まちづくり委員会へも派遣されることとなった。

・位置図



3、新在家まちづくり委員会の構成メンバー

新在家まちづくり委員会の区域は、神戸市灘区新在家南町１丁目～５丁目の区域であり、同町１～３丁目が東部町内会、同町３～５丁目が西部町内会となっており、まちづくり委員のメンバーとしては、両町内会の会長、副会長、幹事長等の代表に加えて、婦人会、青年会、ＰＴＡ、財産区等各種団体の代表に加えて地元企業としての小泉製麻（株）、神戸製鋼所及び地場産業である清酒メーカーの団体である西郷会の代表としての沢の鶴（株）と富久娘酒造（株）が参加して、当初、26 人の委員構成で発足した。

初代の会長は、新在家財産区管理会長の鷲尾正夫氏であった。

平成 13 年７月に「神戸市地区計画及びまちづくり協定に関する条例」（以下これを「神戸市まちづくり条例」と略す。）に基づく正式なまちづくり協議会に位置づける段階で、会の名称についても検討したが、前述のように各種団体の代表で役員を構成する方針から「新在家まちづくり協議会」とせず「まちづくり委員会」とすることになった。但し、これは名称だけであり、まちづくり委員会の運営にあたっては、ニュースの配布、アンケート調査等の実施にあたって全員参加型で運営しており、平成５年５月には神戸市まちづくり条例に基づく、“協議会認定”を受けている。

4、震災前の新在家まちづくり委員会の活動

震災前のまちづくり委員会としては、公害対策がきっかけとなって官民協働で発足したまち協であることから、ものづくりとしては、行政の灘区役所や当時の港湾局、建設局等からの支援をうけ、平成４年に地区南部に位置する運河プロムナードが整備され、地区中央部に位置する若宮神社境内の一部に新在家地域福祉センターが建設された。この地域福祉センターには大気汚染観測装置が設置されており、土地は地元財産区の提供、建物は神戸市による建設、管理・運営は地元まち協や各種団体で行っており、官民協働まちづくりのシンボル施設となっている。

まち協自身の自律的活動としては、アンケート調査等による住民意向を反映した（第１次）「まちづくり基本構想」を策定し、平成５年７月に、当時の笹山神戸市長に「まちづくり提案」を行っている。

この当時は、鷲尾氏が高齢のため引退され、西部町内会長の見掛武氏が会長を引き継がれていた。

5、阪神・淡路大震災復興まちづくり

平成7年1月17日、兵庫県南部地震が起り、地区内で39人が死亡、約8割の家屋が全半壊した。

復旧と復興にあたっては、まちづくり委員会が中心となるとともに、ＲＣ造2階建ての地域福祉センターが避難所兼情報センターとして機能した。

私自身も被災したが、当地区のコンサルタントとして、同年2月1日から地域福祉センターの片隅で復興まちづくりの協議や小規模住宅の共同再建計画の勉強会を始めた。この取組みが早かったことにより、地区内では4棟約120戸の共同建替え住宅や3棟約100戸の公的支援のある民間賃貸集合住宅が建設された。

また、神戸市から重点復興地区に指定されたが、任意事業としての密集住宅整備促進事業並びに住宅市街地総合整備事業地区に編入されただけで、原則、自主、自立的復興地区として、任意の共同再建や個別再建を基本に復興まちづくりを進めて来た。

その中で、当地区の都市計画用途地域が準工業地域であることから、健全な市街地形成にふさわしくないファッションホテルやパチンコ店等の風俗営業店の立地を防ぐため、平成8年6月に神戸市長と“まちづくり協定”を締結し、適正な復興の誘導を図って来た。

そして、当地区が旧西国浜街道沿いに立地し、灘五郷の酒造地区であることから、「まちづくり協定」の中に、“意匠配慮道路”を設定し、新在家らしい街なみデザインの誘導を行っている。また、この取組みを支援するため、行政では、平成9年から街なみ環境整備事業の適用が図られている。

この間に、震災の心労等から、平成8年に見掛武会長が、平成10年に小西千代治会長が相次いで亡くなられ、その後、現在の麻生俊雄会長に引き継がれている。

6、ポスト震災復興と第2期まちづくり基本構想

平成13年8月には、ポスト震災復興まちづくりとして、今後の10年間の重点整備、誘導項目を定めた「第2期まちづくり基本構想」を策定し、実行に努めている。

① まちづくり協定の健全かつ、有効な運営
② 酒蔵のまちとしての景観整備の促進
③ 緑花推進活動の継続
④ 被災空地等を活用したイベント等の継続
⑤ 住宅密集ゾーンの住環境改善の促進
⑥ 国道43号横断のための施設整備の促進
⑦ 水と緑のモール構想の推進
⑧ 国道43号沿道整備への取組み
⑨ 旧西国浜街道の美装化の推進
⑩ 酒蔵の道の整備とネットワークの促進
⑪ 魅力的な集客施設の整備充実
⑫ 都賀川・運河プロムナードの充実と灘浜緑地へのアクセスルートの整備

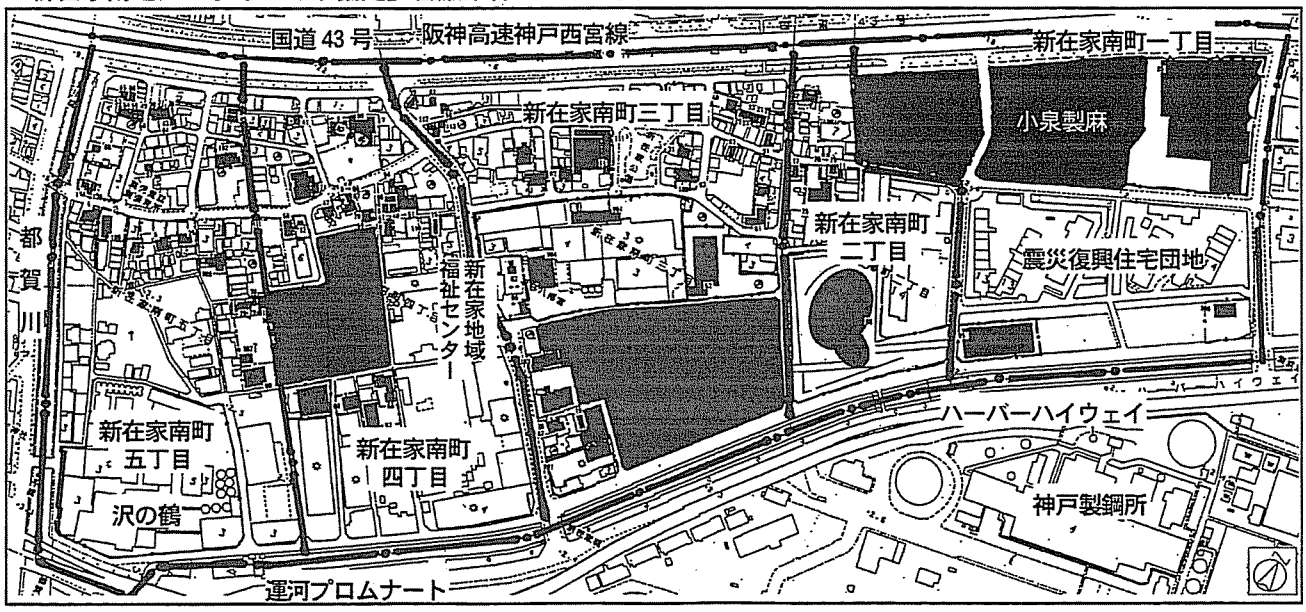
7、おわりに：工場跡地の土地利用転換期を迎えて

当まちづくり委員会は、公害対策で始まり、神戸市まちづくり条例に基づく“協議会認定”、“まちづくり提案”、“まちづくり協定の締結”を図って来た。

この間、阪神・淡路大震災の復旧と復興まちづくりに対応するとともに、最近は、企業のリストラの波をかぶり、工場の閉鎖、縮小、用地の売却が続いており、大規模な土地利用転換が進んでいる。そして、この問題に対して「まちづくり協定」により、計画の協議、調整を図っているところである。

このように当まちづくり委員会は、神戸市との協働のもと、“神戸市まちづくり条例型まちづくり協議会”として、その役割は、増々重要になって来ている。

・新在家南地区「まちづくり協定」審議案件プロット図（H8～H16）



■まちづくりシステムの研究　（6）

久保　光弘（久保都市計画事務所）

なぜこの稿で複雑系を持ち出すことになったか。その理由をすこし述べておきたい。

まちづくりによる市街地整備計画は、まちづくり協議会から出てくる意見などの情報をまちづくり提案に発現し、制度の対応によってなされるといってよい。まちづくりによる計画形成には従来の計画形成とはまったく異なった特質がある。第一は、協議会活動が終わればまちづくりによる計画形成は終わること、第二は専門家の役割が、従来の「計画をする」ことでなく、まちづくり協議会に「計画を促す」ことである。

このための専門家の計画技術として、協議会活動のプロセスにおける情報をまちづくり提案に発現する計画技術、制度への対応を図る技術があるが、これは従来技術の延長線上にある。しかしこれらの前提にあってかつ重要なのは、生命体ともいえる協議会が、継続的に創造的活動ができるよう支援する技術である。言い換えれば、協議会活動における現象に注意し対応する技術であるが、これが未解明であるどころか、現在の都市計画の技術では、共有できる言語すら持っていない。私はこの手がかりを「複雑系」に求めようとしている。

5．情報やビジョンによる揺らぎ

1）摂動敏感性

まちづくりによる計画形成は、協議会活動のプロセスの結果の発現であり、まちづくりを支援する行政やコンサルタントによる計画の作成・管理・制御ではない。それでもコンサルタントなどに影響力があるとすれば、小さなビジョンや情報の揺らぎによる影響力である。たった一人の住民や専門家が生みだした小さな情報やビジョンの揺らぎであっても、これが共感を得られるものであれば、増幅されて伝播し、まちづくり全体に大きな影響を与える。これは複雑系でいう「摂動敏感性」（初期値の鋭敏性、揺らぎ）、すなわち「部分の小さな揺らぎにより、全体が大きな変動を生じる」という性格、又は「わずかな初期値の差異に対して結果が大きく異なる」という性格に類似している。

2）復興初動期の情報

特に住民に情報が少なく且つ情報の伝達力が強い復興まちづくりの初動期において、マスコミ、学者やコンサルタントなど専門家の情報が、まちづくりの将来に良くも悪くも影響したことは事実である。

コンサルタントは、例えば、区画整理の是非、道路は狭いほうがよい、公園は小さい方が良い、共同化をすべきである等、個人の「思想」で語るべきでない。思想は思想の対立を生む。初動期に必要なのは、区画整理とはどのようなものか、道路の幅員構成の意味、公園の機能、選択できる住居形態の種類など、基礎的でスタンダードな情報を地道にできるだけ多く提供することである。これが話し合いの土俵をつくることになる。基礎的でスタンダードな情報による技術移転こそが、その後の協議会の自立的な発展につながる。

3）小さなビジョンの揺らぎ

摂動敏感性の比喩としてよく持ち出されるのにバタフライ効果がある。これは、中国の北京で蝶が羽ばたくとその大気振動が増大して伝達しブラジルでハリケーンが発生するというものである。

これとよく似たことが長田の戦後まもない時期でのケミカルシューズの誕生時にみられる。

昭和 20 年代前半、それまで長田の地域産業であったゴム長靴などのゴム履物は、生ゴムの急騰、ゴム履物の市場価格の著しい低落により中小企業の半数が倒産した。その混乱の状況の中、塩化ビニールを靴の素材に活用するという小さな揺らぎが起こった。塩化ビニールを素材とする靴製造の発端が誰であったとは特定できていない。それほど小さい揺らぎであった。これが長田のケミカルシューズ産業へと発展させた。まさに上で見たバタフライ効果である。当時を知るケミカルシューズ業界の人に聞くと、当時の長田地域には「混乱に近い熱気」があつたという。この混乱に近い熱気の環境が強い情報の伝達力をつくりだし、これに社会的、経済的背景とうまく合致し、地域において大きく共振化した結果であろう。

新長田駅北地区東部の協議会でシューズギャラリー構想を検討する組織が生まれた契機も少数の役員たちとの雑談の中から始まり、それではということで当地域の主要な２つの企業の経営者に会いに行き始まったものである。この発端、いいかえれば、小さなビジョンの揺らぎから、シューズギャラリー構想、アジアギャラリー構想などの地域産業ビジョンが立ち上がってきた。このときこれを後押しする外からの影響もあった。シューズプラザやアジアギャザリー神戸の建設前後の時期には、これ

らの産業ビジョンに共鳴する地区内の地権者も少なからずいた。だからこそ民間資金でアジアギャザリー神戸がつくられたのであり、続いて飲食店などをつくりたいという地権者やシューズプラザ周辺に進出したいというメーカーもいるという状況をつくっていた。しかし、仮換地や道路整備に時間が要する一方で、時間とともに経済的環境の悪化がますます進んだ。区画整理の進捗とともに当地区におけるケミカルシューズ事業所の減少が進み、シューズギャラリー構想やアジアギャラリー構想の共鳴力は失われつつある。このような状況から１４年に当地区の協議会連合会は現実に対応した第２次産業観光構想を提案している。

震災後 10 年を迎えるにあたって現在、新長田駅北地区東部協議会連合会は復興誌に取り組んでいるが、平成 9 年頃にシューズギャラリー構想を検討したときの協議会合同による産業地区創造懇談会のことを語ることができるシューズ事業者が既にこの地区に誰もいないという現実がある。

しかし、シューズギャラリー構想やアジアやラリー構想がいえなみ基準の生まれる契機になり、小規模協議会の林立した状況から地区全体のまちづくり組織へと発展する契機をつくった。シューズプラザは、手作り工房へのリニューアルや各種イベントの開催など経営努力がされているし、協議会の会議にもよく利用されている。シューズプラザがあると無いとは大違いである。

複雑系に「自己組織的臨界現象」というものがある。砂山にゆっくりとした一定速度で砂を加えていくとやがては雪崩が起き始めるというものであり、雪崩の多くは小さいものであるが、稀には地滑りを起こすこともある。そしてこの地滑りはいつ起こるかわからないというものである。これは小さくても漸進的にビジョンを積み重ねることが必要であることを教えている。このような中から、共鳴力のあるビジョンを語り、これを戦略として展開することによって地域を大きく変えることになる起業家やNPO が現れる可能性もある。

シューズギャラリー構想やアジアギャラリー構想を失敗であるとか、無残な結果であるとか評する人がいるが、これは予定調和に固守する機械論的な見方である。まちづくりにとって重要なのは、プロセスであって結果でない。

６．ポジティブ・フィードバック

かつて灘区味泥地区まちづくりで、まちの「悪循環」を「善循環」に変えていこうという合言葉のもとにまちづくりに取り組まれたことがある。この「悪循環」も「良循環」も「ポジティブ・フィードバック」である。

「ポジティブ・フィードバック」とは、発信した情報がフィードバックしながら変化し、増幅する状況へ働くことを言う。

例えば、シューズギャラリー構想、アジアやラリー構想、いえなみ基準が相次いでまちづくり提案された平成 9~10 年頃、協議会の多様な組織からのまちづくり提案とそれを受けた行政の対応との間の循環的なフィードバックが、協議会活動を良循環させ、当地区が事業型協議会からビジョン共有型協議会へと大きく変わることになった。いえなみ基準の作成は、各協議会での街区計画の検討や部会活動による共同建替・協調的建替、産業ビジョンづくり等のそれぞれの検討と互いに並行して行われ、それぞれの情報のフィードバックがいえなみ基準だけでなく、それぞれのプロジェクトを進化させた。この動きは同時に、林立した協議会どうしでの「自己組織化」を進め、いえなみ委員会という地区全体の組織を生んだ。「自己組織化」とは、混沌とした状況の中から自発的に秩序を生み出す現象をいう。

田坂広志（「複雑系の知」講談社）の引用によるイリア・プリコジンの説では、「自己組織化」を生じるためには、三つの条件が必要だとし、「オープン(開放系)であること」「ダイナミック(非平衡系)であること」「ポジティブ・フィードバック（自己加速系）であること」を上げているが、これは、上で述べた当地区の当時の状況を説明することを容易にするものである。

下図は、まちづくりにおけるイベント、ビジョンづくり、事業との間においてもポジティブ・フィードバックの関係があることを示したものである。

ポジティブ・フィードバックは、並行する課題を相互に関連付けることにより、情報を相互にフィードバックさせて、良循環を行うものである。これには個々の問題だけ取り上げて解決するということでなく、同時水平的に問題に対応するという水平的思考が大切となる。

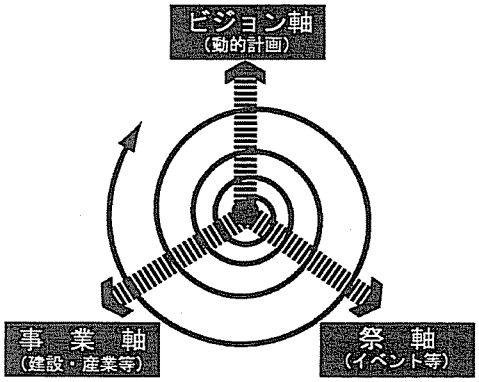


図　　まちづくりのスパイラルアップ

■Dr.フランキーの街角たんけん 第９回 再見 豊岡「中枢街区」の建築

中尾 嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

台風 23 号、新潟県中越地震で被災された皆様に、衷心よりお見舞い申し上げます。

この９月下旬、県建築士会有志主催の見学会で、豊岡市役所のご好意により普段立ち入りが困難な豊岡市役所本庁舎（旧同町役場、昭和２(1927)年、原科建築事務所）とその周辺の市関係の近代公共建築をつぶさに見学する機会に恵まれた。関係者の皆様には、この場をお借りして厚く御礼を申し上げたい。

北但大震災の復興都市計画で旧町役場庁舎を中心に設定された「中枢街区（シビック・ゾーン）」には、昭和初期に警察署・税務署・郵便局等が相次いで建設された。移転に伴い姿を消した警察署以外の庁舎は、用途を変えつつ建設後 80 年近く経った今日でも現役で活躍している（注１）。中でも、大開通りを挟んで向かい合う市南庁舎と山陰合同銀行豊岡支店は、市内の近代建築の中でも横綱的存在だろう。

現在は市建設部が入る南庁舎は、昭和２年８月に完成の旧豊岡郵便局庁舎である。豊岡郵便局は明治 5(1872)年に開設。後に電信電話局も併設し、大正 14（1925）年 5 月の北但大震災を契機に、中枢街区に恒久建築の庁舎を建設した。モルタル仕上げの平滑なファサードに、階段室上部には表現派特有のカーブ。スクエアな開口部の処理も印象的だが、竣工当初はアーチ型であった（現在のフラットアーチに改造された時期は不明）。内部は改造されているが、吉田鉄郎や山田守の影響下にあった、逓信省営繕組織の作品として貴重である。

山陰合同銀行豊岡支店の建物も、当初は兵庫県農工銀行豊岡支店として昭和９年に竣工した。タイル貼や擬石仕上げを多用し、正面に付柱を４つ連ねるところは、神戸朝日会館（旧神戸取引所、昭和 9(1934)年）、側面の連続するアーチ窓は日本綿業会館（昭和 6（1931）年）を、それぞれを想わせるが、この建物の設計者は他ならぬ戦前関西建築界の名手・渡邊節である（注２）。内部は間仕切りの追加など手が加えられているが、当初は擬石仕上げの古典的な空間であった。

山陰合同銀行の建物は、広域合併後の市役所機能充実のため、市による買収が既に決まっており、将来は中心市街地活性化の核施設とすることも検討されているという(注３)。付け加えての提案だが、山陰合同銀行ビルと元豊岡税務署庁舎（昭和 4(1929)年）である市西庁舎も含め、中枢街区の歴史的建造物をリニューアルし、一体的に活用する「平成中枢街区」構想を提案したい。更には、市内の他の震災復興期建築についても、再評価され新たな活用の道が探られることを期待したい。

(注１)大正 14(1925)年に起きた北但大震災で大きな被害を受けた豊岡町（現豊岡市）中心市街地において、県・町当局主導による復興都市計画が展開される中、官庁街「中枢街区（シビック・ゾーン）」の形成や、民間に対する公的な建設費助成により、戦前の地方都市としては異例の数の RC 造建築が目抜き通りを中心に建設された。詳細は拙稿「温故知新ー豊岡に見る約 70 年前の震災復興まちづくりー」（復刊きんもくせい 50 号+36 号）を参照。

(注２)「工事年鑑 皇紀二五九五（昭和 10 年）」合資会社清水組 写真脚注による。

(注３)平成 16 年第１回豊岡市議会定例会市長総括説明による。

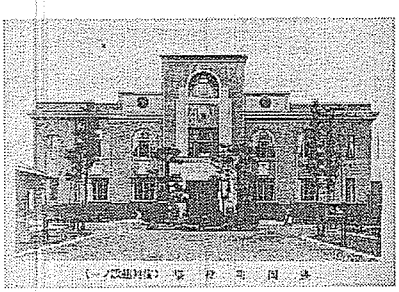


写真１ 竣工当時の豊岡市役所庁舎（旧豊岡町庁舎、出典：「豊岡復興誌」）

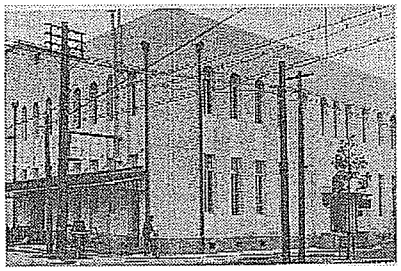


写真２ 竣工当時の豊岡市南庁舎（旧豊岡郵便局庁舎、出典：「豊岡復興誌」）

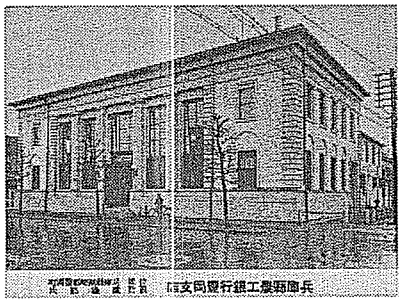


写真３ 竣工当時の山陰合同銀行豊岡支店（旧兵庫県農工銀行、出典：「工事年鑑 昭和10年」清水組）

交差点の落とし物・1

扉

中川 紺

扉をひろった。

といっても、マッチ箱程度の大きさの、おもちゃの扉だ。自宅からスーパーに行く途中の一方通行が交わる交差点。錆びたマンホールのふたの上に、プラスチックの鮮やかな赤色が映えていた。身長百八十センチの俺がそんな小さなものに気付いたことは不思議だが、どうにも気になって家に持ち帰った。

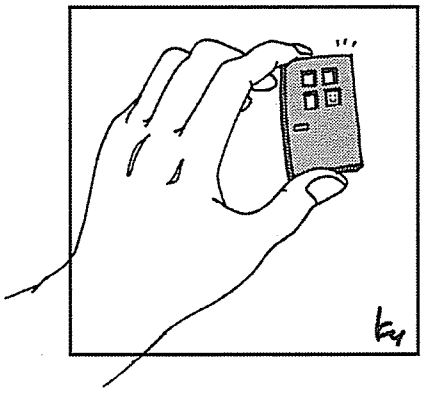
よくよく眺めてみると、扉には小窓が四つあいていて、ドアノブは爪を引っ掛けて開けられるつくりになっていた。ずいぶん使い込んでいるらしく小さな傷があちこちについている。おもちゃの家のパーツであることは、確かだと思ったが、一体どんな家なのかは皆目検討がつかなかった。俺が玩具メーカーの社員だったら即座に分かったかもしれないが、建物の模型ばかりを十年以上作っている独身男が、子どものおもちゃに詳しいわけがなかった。

それでも、その小さな扉がどんな家をつくる部品なのか、いろいろ想像してみるのは面白かった。

●●

次の日の日曜、俺は朝から電車に乗っておもちゃ専門の大型店に出かけた。頻繁に広告が入る有名店で、赤ちゃん用からテレビゲームの類まで、かなりの種類の玩具を扱っていた。ここでなら扉のことを解明できるかもしれない、そんな気がした。

ビルの二階にあるその店は、開店早々というのに、親子連れや子ども同士の買物客で、すごい賑わいを見せていた。



店内案内図を見ながら、俺は人形や家のおもちゃを扱う売場に向かった。店員に扉を見せて聞けば済む話だが、それはしたくなかった。自分で探し出してみたい。俺は棚の端から商品をチェックしていった。

しかし、最近のおもちゃはあまりに種類が多すぎて、結局見つけることができなかった。午後から大事な約束があったので、あきらめて待合せのファミレスに急いだ。

●●

「こんにちは、アサミちゃん」

ゆみこの隣に座っていた三歳の女の子に声をかけた。でも女の子はすぐに目をそらしてテーブルにお気に入りのおもちゃを広げて遊びはじめてしまった。

俺の恋人には子どもがいる。徐々に仲良くなれればいいなと思って最近は三人で会う機会を増やしているが、これがなかなか難しい。ゆみこが言うには、人見知りが激しいだけで嫌われている訳ではないらしいのだが。

●●

「あれ?」俺はアサミちゃんが遊んでいるおもちゃの一つを見て声を上げ、ポケットから例の扉を取り出した。きのこを模した小さな家の四角い穴に、赤い扉は見事に収まった。女の子は手品でも見たように驚いている。

「なあ、最近うちの近くに来なかった?」

「おとといね、そばまで行ったんだけど、アサミがぐずって、すぐに帰ったの」

ゆみこの答えを聞いて俺は納得した。

「すごい、ねえどうやってだしたの?」

アサミちゃんが初めて俺に話しかけてくれた。その笑顔を見て、小さな赤い扉を拾ったのは偶然じゃないな、と思った。(完)

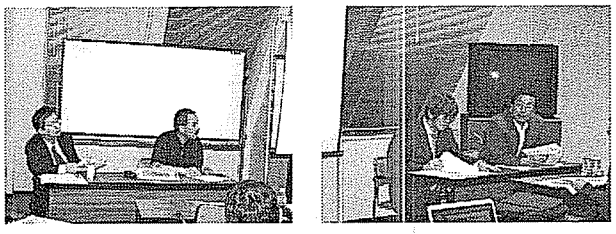
(イラスト やまもとかずよ)

■ 阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第４０回連絡会報告

今回のテーマは「テーマパーク型まちづくり／らしさの都市像を求めて」で、10月18日（月）こうべまちづくり会館で行われました。まず、後藤祐介さん（ジーユー計画研究所）よりテーマ解説（副題が「こだわりのハード型まちづくりの取り組みについて」）が行われたのち、以下の報告がありました。

①「戦前郊外住宅地“武庫之荘”の保全と再生」／岩崎光正（尼崎市都市計画課）、②「緑にこだわる“甲陽園目神山”のまちづくり」／前田豊稔（甲陽園目神山地区まちづくり協議会）、③「近代神戸の原点“旧居留地”のまちづくり」／山本俊貞（（株）地域問題研究所）

岩崎さんからは、昭和１２年に開発された武庫之荘住宅地について、その概略の歴史を述べられたのちに、若い女性を中心とした「武庫之荘まちなみ倶楽部」の活動や、用途地域等の都市計画の課題（特に駅前の近隣商業地域）、景観形成上の課題や対策などのお話がありました。前田さん（まちづくり協議会会長）からは、西宮市の山麓部で昭和の初め頃より開発され始めた“緑豊かな住宅地”である甲陽園目神山のまちづくりについて、先進的な自主的ルールによってまちづくりがなされてきたことや、それが年を経るにつれて機能しなくなってきたことで地区計画（最低敷地のルール：330㎡！、他）に取り組んできたこと、などのお話がありました。山本さんからは、神戸の都心部である旧居留地の震災後のまちづくりについて、大正から昭和初期の近代洋風建築によるまちなみを原点として景観形成を図ることとし、これを地区計画（壁面後退や段階的な高さ制限など）によって担保すること、などについての詳しい説明がありました。（中井都市研究室　中井　豊）



左から、後藤さん、前田さん、岩崎さん、山本さん

■ 情報コーナー

●第７２回・水谷ゼミナール
- 日時：10月29日（金）18:30～21:00
- 場所：ひょうごボランタリープラザ（ｸﾘｽﾀﾙﾀﾜｰ 10Fｾﾐﾅｰ室、JR神戸駅前すぐ）
- テーマ：「震災復興各種共同住宅の入居者の特徴について」
- 内容：「民間コレクティブ住宅等の入居者について」／野崎瑠美（遊空間工房）、「公団震災復興再開発住宅の入居者について」／田中貢（大阪府都市整備推進センター）、「震災復興公営住宅等の入居者について」／立木茂雄（同志社大学文学部社会学科）、コーディネーター／小林郁雄（コー・プラン）、コメンテーター／太田尊靖（UR神戸事務所）
- 会費：1,000円（資料代、学生無料）
- 問合せ：ジーユー計画研究所（TEL. 078-251-3593, FAX. 251-3590）

●芦屋市総合公園オータムフェスタ
- 日時：10月31日（日）10:00～15:00
- 場所：芦屋市総合公園（芦屋市陽光町、浜風大橋南バス停すぐ）
- 内容：グランドゴルフ大会、フォークダンス、フリーマーケット、コーラス、花の講習会、キッズワークショップ、他
- 主催：ＰＭＯあしや
- 問合せ：芦屋市公園緑地課（TEL. 075-753-6099）

●神戸大学震災文庫展示会「阪神・淡路大震災の記録と記憶」
- 日時：11月8日（月）～14日（日）10:00～17:00
- 場所：神戸大学社会科学系フロンティア館３階プレゼンテーションホール（市バス36系統神大正門前前下車徒歩５分）
- 内容：＜展示会＞４万点近い資料のなかから約１００点の展示。＜記念講演会＞「震災文庫からく震災>を読み解こう」／岩崎信彦（神戸大学文学部教授）、「震災文庫の足跡―10年を振り返る―」／渡辺隆弘（神戸大学付属図書館）
- 入場料：無料
- 問合せ：神戸大学付属図書館震災文庫（TEL. 078-803-7315）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
- ◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
- ◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:micanca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2004年11月30日発行

月刊 きんもくせい

04年11月号
(50+36+NO. 20)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■水害がやってきた

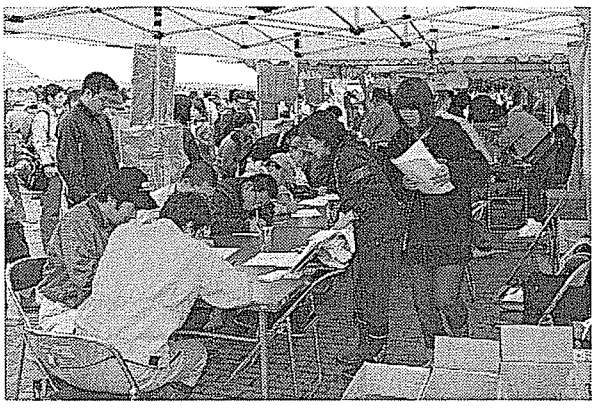
安田　真明（豊岡市ボランティア・市民活動センター）

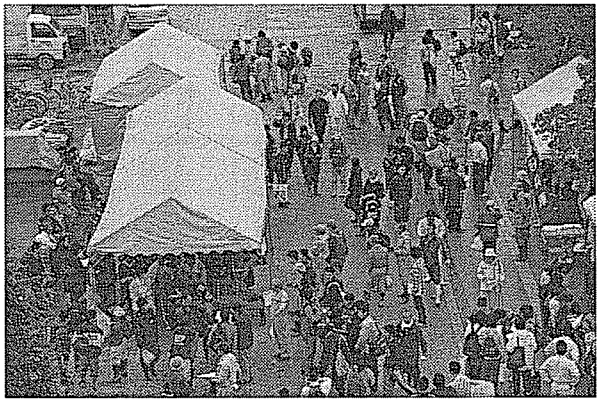
10月20日夜、叩きつけるような雨と風が街のノイズを完全にかき消し、台風23号によって私のまち豊岡は完全制圧された。インフラ機能が次々と麻痺し、陸の孤島となった事務所で増え続ける水を前に何も出来ず夜を明かし、翌朝、非常事態を告げるヘリコプター編隊の轟音と緊急車両のサイレンが、街中に響いていた。私たちは、ただ、ただ、街を飲み込んだ泥水が引いていくのを見ているほかなかった。既に現地入りしているＮＰＯからのボランティア受け入れ要請が入り、このときやっとこれから我々が何を成すべきなのか気がついた。「よし､ボランティアセンターを開設しよう！」と意気込んだものの、インフラが機能しない中、開設の準備は捗らず、2日後の22日に兵庫県社協、ＮＧＯ、ＮＰＯなど災害救援の経験者達が駆けつけ、ようやく形になり始めた。

23日市役所隣に豊岡市水害ボランティアセンターを開設したが､ニーズ受付とボランティア問合せ用に設置した電話は途切れることなく鳴り続け、あっという間にニーズ書類の山となった。開設2日目には700人が到着したがニーズを処理するには人も資材も不足しており、ボランティア確保の対応を迫られた。そこで、これまで冷遇していたマスコミの対応を変え、時間を割きボランティア募集を積極的にアピールした。新聞に記事が出るとテレビ局が取材に来た。テレビの反響は大きく、人が集まりにくい平日でも着実に増え続け10月31日（日）の登録者数は2100人を超えた。

市の対応は、災害対策本部との連携を図るため情報担当者を常勤で派遣し、ボランティア活動拠点の確保､資材の調達､ビラの全戸配布､災害対策本部との情報共有やニーズのフィードバック等々、裏方に徹しあらゆる面でセンターを支えた。

センターでは「ボランティアを30分以上待たせない」をモットーにコーディネートを行った。被災者とボランティアの双方に満足してもらうことが最大の目的だが、毎日変化するボランティアの人数は予測が難しく、翌日に備え市内の被災地域をニーズ調査し、午前中に殺到するボランティアの待ち時間を無くすため毎日入念な準備を行った。災害経験のない私たちは現地入りした経験者の経験や知恵、ノウハウに頼るほかなく、センター開設時の最大の救援物資は「経験者の知恵」であった。





結果的に、センター運営を希望する全ての団体、個人を運営スタッフとして取り込んだことで、様々な市民団体との連携・協働によって、ボランティアが何人登録しても、ニーズの電話が鳴り続けても対処できるスムーズなセンター運営を図ることができた。

多くのボランティアの協力により暫定的な生活復旧は１１月７日に概ね目処が立ったが、今後は、地域でのコミュニティが要援護者等の生活支援を大きく左右する。コミュニティが日常的に機能している地域では、センターが介入する余地が無いほど地区内での助け合いが行われているが、水害に因るところも大きいが機能ができていない地域ではまだまだ支援が必要である。

○豊岡市での被害状況－建物被害（11 月 15 日現在）

住家	全壊	5 棟	5 世帯	半壊	5 棟　4 世帯
	床上浸水	3,801 棟	4,007 世帯	床下浸水	2,281 棟　2,308 世帯
	一部破損	164 棟	148 世帯		
非住家	3,743 棟				
ボランティア活動者数	11,316 人		ニーズ完了件数	1,235 件	

■新潟県中越地震報告

澤田　雅浩（長岡造形大学）

平成16年10月23日（土）に発生した新潟県中越地震において、長岡市内に居住する一地域住民として、そして現地の研究者として現地調査により得られたさまざまな情報を元に被害の特徴ならびに災害対応そして被災地の今後について第一報として簡単にまとめてみたいと思います。しかしながらこの原稿を書いている時点では正確なデータに基づく分析ではなく、現地の雰囲気を筆者なりに感じたことをまとめるにとどまっています。その点を踏まえた上でご一読いただければと思います。

被害の特徴

今回の被害の特徴は、大きく三つあると思われます。一つ目は液状化をはじめとする地盤災害が建物やインフラに及ぼした影響が極めて大きかったこと。二つ目は最初の地震（最大震度7）から30分以内に2度の強い余震が発生したばかりか、復旧作業を開始しようとした矢先の5日目に起きた余震などによって応急復旧活動に大きな支障を与え、さらには被災者の避難行動に大きな影響を与えたこと、三つ目は山古志村に代表される中山間地域における甚大な被害と復旧段階での冬の到来です。特徴的には9年前の阪神・淡路大震災とは様相が大きく異なるといえるのではないでしょうか。

地盤災害の大きさ

中越地震が発生する直前、台風23号による影響で大雨が続きました。この雨で地盤が多く水を含んでいた矢先に地震が発生したことで、地滑りをはじめとする土砂災害が山間地で頻発したと思われます。その様相は 1999 年に発生した台湾集集地震における原住民集落が多く点在する山間部における様相と極めて似ています。多くの箇所で土砂崩れが起きた結果、道路閉塞や道路陥没、そして河道をせき止めることによる天然ダムの発生や道路への土石流の流出といった二次的な被害も発生したといえるでしょう。小千谷市から山古志村へ向かうルートの一つに浦柄地区を通り抜けていくものがありますが、その浦柄地区においては土砂崩れでせき止められた川の水が家の中を通って道路側へ流出し、さらには土石流を発生させ付近一帯にまるで7.13 水害の被災地のような被害をもたらしているのがその典型的な例の一つです。

加えて、液状化をはじめとした地盤の被害が建物の被害を誘発しているケースも大変多く見られました。長岡市の南東部、国道17号線に程近い場所に立地する高町団地では盛土をした箇所の地盤が完全に崩落し、外周道路を寸断するだけでなく、崩れた地盤に引きずられるようにして建物も傾いたりしている状況が発生しています。加えて土中に埋設されていた各種ライフラインも重大な被害を受け、高町地区は仮設水道の設置がなされたものの、本格的な復旧のめどは立っていません。さらに道路などでも液状化による多くの被害

が発生しており、長岡市東部や小千谷市ではマンホールが 30 センチ程度浮き上がりその周辺が陥没したり、電柱が傾いたり沈み込んだりする状況を生み出しています。これらの被害がさらに上下水道やガスといったライフラインに与えた被害もまた甚大であるといえ、地震動の強さだけで被害程度を推測できない状況を作り出しているといえます。これまでは建物の耐震補強が震災対策における被害軽減のための主な手法の一つでしたが、今回はたとえ耐震性の高い構造物であっても地盤の被害によって大きく影響を受けてしまうことが明らかになりました。このことは今後の震災対策を考える上で重要なポイントとなりうると思われます。

余震の継続による影響

発生直後の強い余震に始まる一連の余震活動は、被災者の心理状況をかなり悪化させてしまいました。周囲に比べ最も強い震度を記録し続けた小千谷市などでは地震発生後数日の時点で徐々に回復しつつあった自宅に戻った被災者が、25 日の余震で再度屋外もしくは車中での避難生活に戻ってしまい、今度はなかなか自宅に戻って生活するという気持ちにならなくなってしまったようです。小千谷市側は応急危険度判定で危険がないと判断された（緑紙をはられた）家屋の住民には避難所から出て自宅に戻るようにと促したようですが、結局は自宅前にテントを張ったり自動車の中で相変わらず寝泊りをしている状況が継続することとなりました。そのような状況の中、「エコノミークラス症候群」と思われる症状が原因となって亡くなられる方も出たことから、自衛隊などによるテントの提供なども予想より多く実施されました。「建物の中が怖い」状況が長期にわたることによる避難生活への影響は今後の震災においても留意しておくこととなるのではないでしょうか。

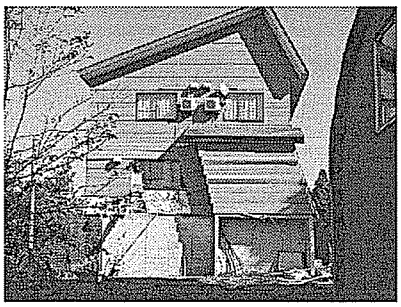
中山間地域における被害の大きさ

連日メディアでも取り上げられていたように、典型的な中山間地の過疎集落である山古志村などでの被害もまた大きいものとなりました。山古志村は土砂災害がもたらした被害によって全村避難という状況になっていますが、川口町田麦山地区などでは地震動によって建物がかなりの割合で倒壊しており、地区のほとんどの方が避難生活を継続しなくてはならない状況にあります。被害発生の原因は異なるものの、これらの農山村の復旧・復興は今回の中越地震においては重要なポイントとなります。当面特に懸念されるのが、もういつ降ってもおかしくない「雪」の問題です。地震によって被害を受けた建物が冬の積雪によってその被害が拡大することへの懸念や、春が来て雪解け水となったときに新たな土砂災害が発生してしまうのではないかという不安感が避難者の方々に重くのしかかっているというのが現状です。山古志村の人々は、この冬を自宅で過ごすことはあきらめたものの、とりあえずできる限りのことはしておきたいと願っています。集落ごとに車の台数を制限しながら一時帰村を行っていますが、降雨などによって突然中止が決定されるなど、思うように家財を持ち出したり最低限の補強や雪囲いを行えない状況が続いており、心配が続いている状況です。さらには集落によって被害の程度に差があることが徐々に明らかになっており、なんとか春から再建への一歩を踏み出せそうな地区がある一方で、完全に水没し、風景が変わってしまった地区もあります。つい「山古志村」としてひとくくりに捉えられがちですが、冬を越えていわゆる「ユートピア」的な状況が解消された時点で顕在化するであろう問題に対して、地区毎のきめ細やかな対応が必要となると思われます。山古志村は平成17年4月に長岡市と合併を行います。行政の効率化という点では山古志村は今回の被災を契機に一気に縮小される可能性もあります。その点も踏まえ、この冬にどれだけの計画を組み立てておくかということもとても大切なことであろうと思います。

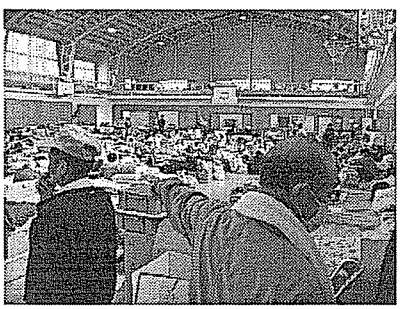
また、山古志や小千谷には「錦鯉」や「闘牛」があります。鯉に関しては震災後に大規模な品評会が行われる予定であったたため、各事業者の



10/26　小千谷市役所



10/29　川口町田麦山地区



11/03 長岡大手高校の山古志村民避難所

もとには多くの美しい鯉が集まっていたようですが、それが被害を受けたことによるダメージの大きさは、収入という点からもきわめて大きいものです。闘牛はそれ自体が対価を得るものではなく、地域の文化の一つとして存在しているものです。これら地域のシンボルをどのように復興計画に位置づけるかということもとても重要な問題となるでしょう。

災害対応状況

地震発生直後からの行政による災害対応は特に川口町と山古志村において大きく出遅れたといえます。川口町は役場の建物が被害を受けた上にライフラインの途絶もあり、地震発生から 2 週間程度は庁舎前のテント内に災害対策本部を設置し、不便な状況の中での対応を行わざるを得ませんでした。山古志村に関しても全村避難に伴い役場も移転せざるを得ず、少ない資料のみで長岡市や新潟県の施設に間借りする形で役場機能と災害対策本部を設置しての対応となりました。さらにこの二つの町村は行政職員そのものの人数も少なく、本来は考えなくてはならない各種の対策についてすべてには手が回らず、緊急対応とそのための情報収集にのみ労力を傾注せざるを得ない状況となっていたようです。その結果、川口町では仮設住宅の入居希望者の把握や敷地の確保などが他の市町村に比べて遅れるなどの問題が発生することとなりました。周辺自治体も同様に被災しているため、なかなか協力体制を構築することができませんでしたが、これらの地域にはまだコミュニティの力が厳然と維持されており、避難所の運営や各種連絡についてはそれが大きく機能しました。特にそれぞれの部落における区長（自治会長のような存在）や消防団長は重要であったといえます。地域の人も県の職員などの意見よりも区長さんの指示に従う傾向があり、今後も区長さんはさまざまな場面で重要な役割を担うこととなりそうです。

少ない人数で何とか対応する行政の支援として、川口町には姉妹都市協定を結んでいる東京都狛江市が多くの仮設トイレと行政職員を送り込み、支援を実施しています。職員に関してもローテーションを組みながら職員が常駐し、川口町の職員が手の回らない仕事を継続してサポートし続けています。他にもいくつかの都市が行政支援を行っており、それらの協力を得ながらの復旧・復興活動となっています。さらに川口町には自衛隊がかなり早期のうちに現地入りし、炊き出しやテントの設営、入浴施設の設置などを行いながら復旧活動を支援しています。これらの支援はきわめて有効であったといえます。

今後の動向について

被害状況のところでも触れましたが、現時点で一番懸念されているのは雪の問題です。積雪によって被害がさらに拡大した場合の取り扱いに関する懸念が払拭されていません。雪によりさらに被害が拡大した場合、その被害を震災によるものと認定されることが明らかとなれば、建物の補強などよりも家財道具の持ち出しや雪囲いによる内部の保護に傾注できますし、そうでない場合には何かしらの補強をしながらなんとか積雪加重に耐えるような対応を限られた時間でしておきたいという思いの間で判断に迷っている被災者がかなり多くいらっしゃいます。それだけでなく、仮設住宅での雪の処理も問題となりそうです。一応積雪地域用のスペックや配置で仮設住宅は建設されているようですが、陸屋根形式の仮設住宅では一定以上の積雪で雪下ろしの必要が発生しそうです。その場合のスペース的な問題や人手の問題などへの対処は現時点では定かではありません。

また冬を経てしまえば村を離れる決心がつくかもしれないという思いを被災者が少なからず持っていることが今後の再建に際して影響を及ぼすかもしれません。現時点でも少なからずそのような思いを持っている人はいるものの、部落全体の意見として現地での再建が前面に出ている現在はそのような行動に移ることははばかられるというのが実情です。コミュニティの力は避難生活を円滑に進めるために有効に機能するものの、そのような個々人の意見を封じてしまう力も反面持っているのです。それが冬を越すことで多少それぞれの判断が尊重され、町が縮小していくことを許容してしまうのかもしれません。

さいごに

新潟中越地域、特に中山間部の人々の我慢強さ、慎ましやかさには感心するとともに、今後行政が提示してきた復興策を特に文句もなく受け入れてしまいそうな恐れを感じます。自分たちの本当に望む復興のすがたをなんとか作り上げられることができないだろうかとおもいます。ただ、よそ者はなかなか信用しない地域性を持つ今回の被災地において外部からの支援はなかなか難しいかもしれません。相手のことを理解しながらうまく協力できる方法を模索して行こうと思います。なお、被災地の状況ならびにこれまでの活動に関しては筆者による「中越ホープダイアリー」http://sawada-lab.cocolog.nifty.com/hopediary/ にアップしてあります。興味のある方はたずねてみてください。

（文中の写真は筆者が撮影したものです）

■たるみレポート（その4）地域で子どもどうしの交流を進める

大塚　映二・野口　千晶（神戸市）

かつては当たり前だったことですが、子どもは家庭や学校だけでなく、地域の中で様々な人々と関わり合いながら育ちました。その「地域の教育力」を復活させようと、神戸市内でもふれあいのまちづくり協議会を中心に地域での子育て支援の取り組みが盛んです。垂水区ではほとんどのふれまち協で子育てサークルができています。いま一歩進み、地域における子どもどうしの交流～年齢差を超えた関わり合い～を図る動きが出ています。

今回は、わが課のヤンママ職員＝野口千晶がその一端をレポートします。　（大塚映二）

※ヤンママ：ヤングママ、ヤンキーママ。彼女は○者？

夏休み直前の土曜日、つつじが丘ふれあいのまちづくり協議会主催で「高校生の話を聞く会」が開催されました。

この会は、地元の中学校を卒業した高校生が、後輩の中学３年生へ、高校生活について話をする、というものです。

当日は、１７名の中学生と８人の保護者、１５校・１９名の高校生、また中学校の先生も参加しました。高校生は、自分たちの学校の制服を着て、校則、授業・テスト内容、クラブ活動、現在の高校の志望理由や、通学方法・通学時間、１ヶ月の定期代、携帯電話の使用の可否、学食の人気メニューなどについて話してくれました。

あまり人前で話す機会がないのか、最初は緊張した面持ちで、小さな声で原稿を読み上げるのが精一杯でした。しかし、時間が進むにつれ、会場の雰囲気も和やかになり、飾らない、高校生らしい自分自身の言葉で話すようになりました。また、直接勉強していない授業や、入部していないクラブ活動などについても、事前に先生や友達、先輩に取材をし、自分たちの学校についてとても詳しく調べていました。オープンキャンパスではなかなか聞くことのできない内容に、中学生も興味深く耳を傾けていました。

続いて懇談の時間になり、中学生の保護者より「今の学校に満足していますか？」との質問。これには、８割以上の高校生が「満足しています。」と答えていました。

恩師でもある中学校の先生からは「学校で流行しているものは？」と聞かれ、制服の着こなし方、筋肉トレーニング(!?)、などユニークな答えがかえってきました。

この会に参加したことがきっかけとなり、夏休みの終わりに行われた地域の夏まつりには、高校生がポップコーンの屋台を出すなど、地域行事へ積極的に参加するようになりました。

そして、中学生は、先輩のアドバイスを聞いて、これからの受験勉強の励みとなったものと思います。　（野口千晶）



「なんか照れるやん・・・・」



「赤ちゃんが抱けた！！」
（本多聞子育てサークルでのひとコマ）

■ふれあい住宅（復興公営コレクティブ住宅）の検証（その４）

住人のふれあい活動のうつり変わり

石東　直子（石東・都市環境研究室）

ふれあい住宅の財産は、豊かな協同室と協同室を核にした住人の日常的なふれあい活動と言えるが、これらが住人の加齢によってその輝きを失いつつある。震災の辛い体験をした人たちは入居当初は、新しい住まい方に戸惑いながらも自治会役員の奮闘や外部サポーターの協力を得て、希望を膨らませて和やかに食事会やお茶会をスタートさせた。幾つかの住宅では住民間のトラブルも発生したが、しばらくすると住人たちの自律した協同の生活運営がなされるようになった。住宅によって多少のちがいはあるが、月ごとの食事会、週ごとのお茶会やモーニングサービスなどがあり、クリスマス会、忘年会、お餅つき、新年会、雛まつり等々の節季行事が行われていた。２ヶ月ごとの「ふれあい住宅連絡会」にも各住宅から有志の多くが参加されていた。これらのふれあい活動を通して短期間のうちに住人たちは親しくなり、信頼関係を育んできた。「誰かのお葬式を重ねるごとに皆の気持ちが寄り添っていくわ」という声も聞かれた。その後住人の加齢とともに少しずつ定例の行事は減少されてきたが、それでも 2001 年の時点では表あるようなふれあい活動が続けられていた。それが 2004 年 5 月実施の第二次ふれあい住宅カルテをみると、様相はかなりちがっている。一部の住宅をのぞいて多くの住宅が定例的な食事会やお茶会はやめており、節季の行事も少なくなっている。ゴミステーションや共用廊下の清掃を人材センターに外注した住宅もある。また、ふれあい住宅独自の活動をやめて地元の自治会や老人会の行事に参加するようにしている住宅もある。そんな中で外部サポートの協力でお茶会を継続している、または再開した住宅がある。元気な住人がボランティア登録をして活動助成金を得て友愛訪問や安否確認をしたり、同一敷地内の隣接の住宅と一緒にお茶会を続けている住宅がある。

住人の自律したふれあい活動の減少の要因は、何といっても住人の加齢によって活動エネルギーがなくなってきたことや自室にこもる人が出てきたこと、新しく入居してきた人がふれあい住宅の住まい方を知らないことなどがあげられる。なお、住人の中には定例の食事会を楽しみにしていたと言う人は多く、行事は減ったがこれまでの行事を通して住人同士の信頼が深まり、人間関係は良くなったという声も少なくない。ひとつ屋根の下に暮らしているという連帯感があり、夜中に救急車で運ばれていくような時は誰かが付き添って行く。また、自分たちだけでやるエネルギーはないが何とかして住民同士のふれあいの場を持ちたいという願いをもっている人もいる。住人が自分たちでふれあい活動を行うエネルギーがなくなった時、継続した外部サポートの導入が望まれている。

真野ふれあい住宅では今春の新役員から新たなモーニングサービスが再開された。神戸芸術工科大学の学生と教師が特別講義で真野ふれあい住宅を訪れたのをきっかけにサポートするようになった。これ



県営岩屋北町住宅の「お茶屋いわや」04 年 2 月 14 日



神戸市営真野ふれあい住宅のモーニングサービス
04 年 7 月 18 日（神戸芸工大・石井清己さん撮影）

までの居住者だけを対象にしていたモーニングサービスを地域の人たちもオープンにして、第1と第3の日曜日に開かれている。来場者は 40～50 人で「花が咲いたみたいねぇ」と喜びの声をあげている。岩屋北町ふれあい住宅では神戸大学総合ボランティアセンター灘地域活動センターの学生が隣接の復興住宅も対象にした「お茶屋いわや」を毎週土曜日の午後開いており、毎回 50 人以上の来場者があり、もう何年も続いている。

私が考えているアイデァのひとつに介護保険制度の活用がある。家事ヘルパーの食事づくりを依頼している人たちが寄って協同室でまとめて食事を作ってもらって一緒に食べる。ある会合でこの話をしたら、介護保険制度に係わっている人たちから「そんなことはできない」と一笑に付されたが、ひとりのヘルパーさんからはこんな話が披露された「一人分の食事づくりは作りにくいし無駄が多い。例えば『肉じゃが』を一人分作る場合の食材は、ジャガイモ 1 個、玉ねぎ半個、しらたき少し、牛肉 30～50 グラムぐらいで十分だが、こんな買い物はしにくし、少量を作るのは味も良くない。3、4 人分まとめて作ると作りすいし味も良くなり、調理時間はそんなに変わらない。同じ介護保険制度を利用している近隣の人たちが集まって食べられるようなことができればいいのに」と。これはふれあい住宅なら実現できそう。協同室で一緒に食事を作ってもらって皆でいただく。他の住人たちも一緒になって作れば定例の食事会が再開されたことになる。現行の制度上では難しくても、まず運用面で工夫をしできそうな住宅で試してみたいと思っている。あるいは、希望者たちが食事づくりの有償ヘルパーを共同で雇うことも一法であるし、それを元気な住人が有償ヘルパーとして行うことも考えられる。

このような方策を提案して実現化していくコーディネイトの人材と、継続したふれあい活動をサポートする制度が必要である。

豊かな協同室を閑散としておくのは宝の持ちぐされである。住人が自室にこもらないで日常的に隣人たちとふれあうことは楽しみをもった暮しであり、健康保持につながる源のひとつである。

ふれあい住宅の主なふれあい活動　（「第一次ふれあい住宅カルテ」2001. 7. 診断より）

久二塚西	・総会と新年会、役員選出（年1回） ・協同スペースの大掃除、モーニングサービス、役員会（月1回） ・雛祭り食事会、端午の節句食事会、忘年会、臨時集会
片　山	・食事会（月1回）　・地域の人たちとの食事会（3ヶ月に1回） ・忘年会、新年会、雛祭り、クリスマス会、夏休み地域の子どもたちとの交流
真　野	・モーニングサービス（月2回）　・役員選出（年1回）
大倉山	・各階食事会、1～4階の合同食事会、協同スペースの大掃除（月1回） ・朝食会（週1回）　・保健衛生講習会（年2回） ・夏祭り、敬老会、クリスマス会、餅つき大会　・有志のボランティア活動（友愛訪問、安否確認）
脇　浜	・全員集会（年2回）　・役員会（2ヶ月に1回）　・協同スペースの大掃除、お茶会（月1回）
南本町	・総会と役員選挙（年1回）　・食事会、協同スペースの大掃除（月1回） ・ぜんざい会、節分豆まき、雛祭り、端午の節句、素麺大会、敬老会、クリスマス会、 ・有志のボランティア活動で1号棟と2号棟合同のお茶会（月3回）
岩屋北町	・モーニング喫茶、デイサービス食事会、お茶会（週1回） ・新年会、地域の盆祭り、ビンゴゲーム、餅つき大会、地域の敬老会
福　井	・お茶会（月1回） ・ぜんざい会、雛祭り、七夕祭り、敬老会、クリスマス会
金楽時	・各階食事会（年6回）　・喫茶（週1回） ・ふれあいコンサート、盆踊り大会、秋祭り、消防訓練、秋のクリーン運動、餅つき大会
久々知	・総会、年期末臨時会合、1、2号棟合同会議（年1回）　・食事会（年3回） ・定例会、お茶会、手芸会、囲碁将棋会、健康相談会、カラオケ（月1回） ・新年会、春祭り、夏花火大会、敬老会、餅つき大会

■地域工業復興－「酒蔵地区の再生」

上山　卓（コー・プラン）

大都市大震災軽減化特別プロジェクト（地域経済復興）研究検討会の第５回研究検討会が、平成16年10月14日（木）18：30から、こうべまちづくり会館６階会議室で開催された。今年度は「地域工業復興」をメインテーマにして研究を行っており、今回は阪神間の伝統産業の一つである酒造業を取り上げ、「酒蔵地区の再生」をテーマに２つの事例報告と講演を行った。

事例報告１：魚崎郷地区の取組

山本俊さん（地域問題研究所）からは、灘五郷の一つである「魚崎郷」の事例報告が行われた。

魚崎郷地区は、震災で木造蔵を中心に壊滅的な被害を受け、震災を契機とした魚崎郷の変化として、①酒造企業の減少など地場産業（酒造業）の低迷、②ホームセンターの進出、観光蔵や酒造記念館などへの転換による産業の多様化・観光化、③震災前から増加傾向にあった人口・世帯数が、大規模敷地へのマンション立地によって拍車がかかったことなどが紹介された。

このような急激な土地利用とまちなみの変化を住民としてどのように考えるべきかということで、まち歩きなどを通じて検討を行い、平成10年に神戸市と「魚崎郷地区・景観形成市民協定」を締結し、「魚崎郷清流プラザ」の整備と管理・運営、ゲートポイントのモニュメント整備、新住民も含めてまちの歴史を再発見する「まちなみウォーク」の実施など、酒蔵地区にふさわしい景観形成とコミュニティ形成に向けた取組が報告された。

事例報告２：西郷（新在家）地区の取組

浜村吉昭さん（神戸市地域支援室）からは、灘五郷の西端に位置する「西郷地区」の事例報告が行われた。

西郷地区では、平成２年に結成された「新在家まちづくり委員会」を中心に、酒蔵と住環境の共生をテーマとしたまちづくりの検討を進めていたことと、まちづくり協定を締結しようとした矢先に震災があり、その内容を再検討したうえで、平成８年に神戸市と「新在家南地区まちづくり協定」を締結したことが報告された。

そして、「酒蔵の道」整備も進み、和風を基調としたデザイン誘導が進むなかで、２年前くらいから土地利用転換の動きが見られ始め、遊休地にホームセンターなどの立地が進み、地域としても酒造企業としてもまちづくりのむずかしさが見え始めており、まずは市内の灘三郷が一体となった取組が必要であるという話があった。

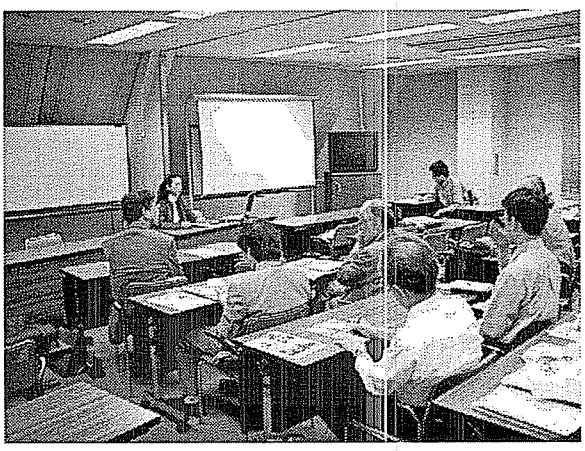
講演：西宮郷の酒蔵再生

辰馬朱満子さん（白鷹禄水苑）からは、西宮郷における「白鷹禄水苑」の事業の紹介を中心とした、「酒文化再生」に向けた取組について話をしていただいた。

白鷹禄水苑は平成13年に設立され、「灘の酒のアイデンティティ」を明確にすることが酒蔵地区の再生につながるという考え方のもと、①酒蔵と住居が一緒になった内蔵形式の「蔵元のくらし」の紹介、②酒質の原点である「生酛造り」「宮水井戸」の紹介、③華美ではないが、ものを大切にする「造り酒屋」のさまざまな道具の展示、④地域文化を応援し、自身も文化人であった「旦那衆」の紹介などを行っていることが報告された。

そして、「清酒」を今に活きる酒としてＰＲするために、①四季折々に旬の美酒を提供する、②日本酒の楽しみの幅を広げる、③地域文化の応援者を継承する文化アカデミーを開催する、④地域の人々が集まるコミュニケーションの場として、各種イベントを開催するなど、さまざまな取組が紹介された。

出席者との意見交換では、「灘五郷の酒造業の連携が必要。」「地元の人が灘の酒に愛着が薄い。」「地域として一体的な取組が必要。」「観光業はあくまで副業で、生産を基本とするべき。」「外国人観光客への対応もきちんとして、酒文化を世界に紹介するべき。」といった、酒蔵地区の再生に向けた意見が出された。



交差点の落とし物・2

布

中川 紺

布をひろった。

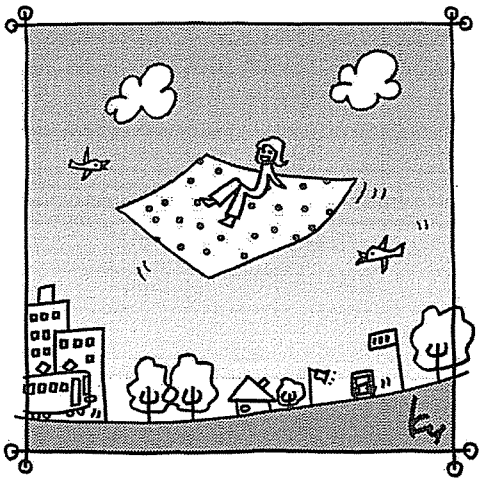
黄色い地に小さな水玉模様の布で、手触りから綿だと思われた。よく見れば水玉模様の「水玉」は円形をしておらず、ひとつひとつが花のシルエットを描いていた。コスモス、桜、パンジーくらいは判別できるがあとはよく分からなかった。珍しいけれど、なかなかかわいい模様で、こういう布でなら裁縫が苦手な私も何かつくれそうに思えた。

広げると正形をしていない。何かに使った残り布のようだ。それなのに拾ってしまったのは、とてもていねいに折畳まれていたからだった。捨てたものとは思えない。ついさっき、パッチワークを趣味にしているおばあさんが材料の入った袋からそっと落としていった、そんな雰囲気だった。

元に戻しておこうか、どうしようか。もうすぐ学校へ行く子供たちがたくさん通る。踏まれて足型をつけられるかもしれないし、溝に蹴飛ばされるかもしれない。私は布をすぐそばの生垣の枝に、道から見えるように引っ掛けておいた。きっとお昼までには持ち主が来ますように、そして布に気付きますように。ささやかに祈って私は会社に向かった。電車を一本遅らせることになってしまったけれど。

●●

会社に着くと私の頭の中に「黄色い布」の居場所はほとんどなくなり、仕事が始まるとそれは消えて無くなってしまっていた。担当していたプロジェクトに問題が発生してそれどころではなかった。その日から数日、残業で帰宅は深夜になった。布のことを思い出したのはトラブルがようやく片付いた翌日の朝、最初の日から五日も経った時だった。



あの花水玉の黄色い布は、生垣から跡形も無く消えていた。持ち主に拾われたのか、小学生にいたずらに持ち去られたのか、今となっては分からないことだけれど、私は前者であると信じることにした。

あの布は何に使われるだろう。はぎれを大事に扱う人だから、きっと素敵なものをつくるに違いないと思った。

●●

数カ月が過ぎた。入学式が済み、新しい小学生たちが家の前を通る季節になっていた。私は三月に仕事をひとつやり終えて、久しぶりに週末を家でぼんやりと過ごしていた。

縁側で母親が入れたお茶を飲みながら、うつらうつらと小さな庭を眺めていると、モッコクのつややかな葉の間に、見覚えのある黄色を見つけた。

近づいてみれば、それは作りかけの鳥の巣で、あの花水玉模様の布が巣作りの材料に使われているのだった。庭の木に巣を作られるのは、私が知っている限りでは初めてだった。何より、あの布とこんなところで再会したことに驚いてしまった。

布自身もこんな使われ方をされるとは思ってなかっただろう。でも黄色は巣にとても似合っていた。どんな経緯で巣になってしまったのか……あの日持ち去ったのがこの巣の鳥なのか、布の持ち主から巡り巡ってこうなったのか……いろいろ想像していると、何かをくわえた一羽の鳥が戻って来た。お腹の白い小さな鳥だった。

（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■第７２回・水谷ゼミナール報告

今回のテーマは「震災復興各種共同住宅の入居者の特徴について」で、10月29日（金）ひょうごボランタリープラザで行われました。まず、進行役の小林郁雄さん（コー・プラン）よりテーマ解説が行われたのち、以下の報告がありました。

①「民間コレクティブ住宅等の入居者について」／野崎瑠美（遊空間工房）、②「公団震災復興再開発住宅の入居者について」／田中貢（大阪府都市整備推進センター）、③「震災復興公営住宅等の入居者について」／立木茂雄（同志社大学文学部社会学科）

野崎さんからは、ご自身が手がけられた民間コレクティブ住宅である「ココライフ魚崎」（神戸市東灘区）、「ココライフ御影」（同左）、「芦屋１７℃」（芦屋市）について、建設のきっかけや、地元ＮＰＯによる運営、建物のコンバージョンによる種々の課題などが語られました。特に「芦屋１７℃」では、様々な居住者が協同居住によって気持ちや行動が変化していく様子の報告が印象的でした。

田中さんからは、震災復興区画整理地区などで建設されてきた共同建替住宅７棟について、居住者の特徴（年齢、家族形態、収入、共同建替への参加意識、現時点の満足度や課題など）から様々に調査し分析している様子が、中間報告として話されました。

立木さんからは、まず震災後５年及び１０年検証として行われた草の根ワークショップから生活復興過程を俯瞰した上で、震災後大量に供給されてきた復興公営住宅について、「ＬＳＡ活動実態調査（2001年）」や悉皆調査が行われた「災害復興公営住宅コミュニティ調査（2002年）」を社会学的に分析し、多様な“重要他者”とのかかわりが重要で、そこからあらためて自己が形成されるということが報告されました。（中井都市研究室　中井　豊）

■ 情報コーナー

●第７３回・水谷ゼミナール
- 日時：12月27日（月）18:00～19:45（～22:00忘年会）
- 場所：北野ガーデン（神戸市中央区北野町2-8-1）
- テーマ：「今年できた私の作品、私たちの作品」
- 内容：未定
- 会費：1,000円（資料代、学生無料、忘年会は4,000円）
- 問合せ：ジーユー計画研究所（TEL. 078-251-3593, FAX. 251-3590）

（2005年2月11日に記念事業を行います。詳細は次号にて。）

●被災者復興支援会議Ⅲ連続フォーラム「自律と連帯－まちづくりは運動である」
- 日時：12月18日（土）14:00～16:00
- 場所：県立神戸学習プラザ第５会議室（阪急・阪神三宮駅すぐ、交通センタービル４階）
- 内容：映画「野田北部・鷹取の人々」の上映、「自律と連帯」についてのワークショップ、他／小森星児（ひょうごﾎﾞﾗﾝﾀﾘｰﾌﾟﾗｻﾞ所長）、青池憲司（映画監督）、日比野純一（たかとりｺﾐｭﾆﾃｨｰｾﾝﾀｰ専務理事）、岩堂美智子（大阪私立大学生活科学部教授）、ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ／小林郁雄（復興市民まちづくり支援ﾈｯﾄﾜｰｸ）
- 問合せ：被災者復興市民会議Ⅲ事務局（TEL. 078-362-4218）

★阪神大震災１０周年関連事業についての概要（詳細は12月号に掲載）

●震災１０年 市民とNGOの「防災」国際フォーラム
12月11日（土）13:00～15:00、神戸市勤労会館７階大ホール、出演者／柳田邦男（ノンフィクション作家）、他

●台湾－神戸 震災被災地市民交流会
＜震災映像上映会＞
1月16日（日）10:00～17:00、ピフレホール（神戸市長田区）
＜シンポジウム「台湾－神戸 震災と復興」＞
1月17日（月）14:00～17:00、こうべまちづくり会館（神戸市中央区）

●１．１７ひょうごメモリアルウォーク２００５
1月17日（月）、神戸市・芦屋市・西宮市内の山手幹線、HAT神戸

●国連防災世界会議
1月18日（火）～22日（土）、神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場、他

※中山久憲さん連載「『コンパクトシティ』を考える」は、災害関連の記事が増えたため１２月号に掲載します。

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
- http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
- http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2004年12月25日発行

月刊 きんもくせい

04年12月号
(50+36+NO. 21)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■041023 新潟県中越地震・中山間地の復興・再生について

平井　邦彦（長岡造形大学教授）

新潟県中越地震の主要被災地は13市町村、東西約30km、南北40kmの範囲で、被災中山間地集落の数は数百にのぼり、小水系ごとに形成されていた棚田群の被災数はその数倍であることは確実であり、数千のオーダーに達しているとも考えられる。

今回の中越地震は地盤災害であり、棚田の命ともいうべき水系が崩れ、埋まり、消失している。地下の水系がどうなったか分らないところも多い。棚田自体も崩落、陥没により全く形状が変わっているところもある。地すべりによって棚田群自体がズズッと動いているところもある。ものすごい棚田破壊も起こっている。斜面、崖、山の崩れあるいは滑りにより、水路も棚田も農業用道路も一般道路も完全に土砂に埋ったり、持ち上げられたり、移動しているところもある。地元の人でさえ地震前の形状との関係が理解できないところもある。したがって、原形復旧や改良復旧がイメージできるところもあるが、全く新しい復興・再生像を描かなければならないところも数多い。

中山間地復興・再生が地元農家の意志にかかっていることは言うまでもない。しかし、営農継続意思は今のところ不明確である。営農意欲の強い地権者もいればもはやそれを失っている地権者もいよう。地震前の権利関係さえ不明確なところもあり、まして形状が変わってしまった棚田群の権利関係の確定は困難を極めるであろう。

棚田と集落も含めた中山間地復興・再生計画は、地元の意向を固めつつ、しかも権利関係を明確にしつつ作成されなければならないし、国交省、農水省、林野庁につながる諸事業部局の同意も必要である。計画の実行にあたっては費用負担を明確にし、諸事業のスケジュール管理が必要不可欠であり、計画検討から作成、合意、事業完了までの期間は最短でも3−5年をみなくてはなるまい。

棚田の復興・再生は住いと集落の再建と一体不可分の関係にある。中越地方はこれから雪の季節に入り、被災地は豪雪に閉ざされる。被災者は自宅であるいは仮設住宅で、住い、集落、棚田の再生という3つの課題に向き合うことになる。来年の雪解けまでの今後の4−5ヵ月の間に、新しい方向、可能性を見出していかなければならない。

被災中山間地の復興・再生に関し、人材、ノウハウ、技術が圧倒的不足している。都市側と農林側の技術者、実務者、研究者の一致協力の対応体制を早急に作り上げ、地元できめ細かく息の長い活動を行い、自治体、国との調整を行いつつ合意形成を図るチームを生み出す必要がある。また、そうしたチームの活動をサポートするアンカー的機構も必要とされている。

1923年の関東大震災後の帝都復興は、耕地整理を都市に適用して土地区画整理という都市整備手法を生み出すとともに、その後の都市整備、まちづくりにつながる多数の人材とノウハウを生んだ。2004年の新潟県中越地震の中山間地復興・再生は、今度は都市から農村へと向かう大きな還流の生み出しとしなければならない。

■『コンパクトシティ』を考える 10

－『田園都市』レッチワースの魅力と限界

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

1．『田園都市』の実現に向けて

E．ハワードが 1898 年に発表し、全国を講演した『田園都市』構想の中心思想は、独立した職住近接型の新都市の建設を、都市と農村の統合によって、アメニティ豊かな調和あるコミュニティを作り上げることであった。構想に賛同する下層中流階級の直接参加によって、あこがれのジェントルマンのライフスタイルである「田園生活」を提供し、大都市の過大な過密を解消しようとした。ハワードは都市建設を段階毎に進める具体的道筋を示し、多くの熱心な人を集め、「田園都市協会」を設立した。

1903 年には、協会は十分な援助と資金を集め、9 月に「第１田園都市会社」が誕生し、『田園都市』の実現を目指す運びとなった。ロンドンの中心から約 56km 離れたレッチワースの土地が選ばれ、3,818 ｴｰｶｰ(約 1,544ha)の広大な農地が会社により買収された。1904 年 2 月に、基本計画のため指名設計競技が行われ、レイモンド・アンウィンとバリー・パーカーのプランが採用された。

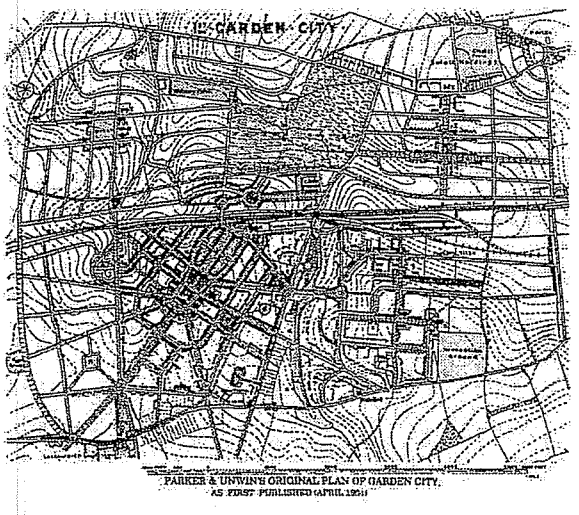


図１　1904 年のレッチワースのオリジナル設計図

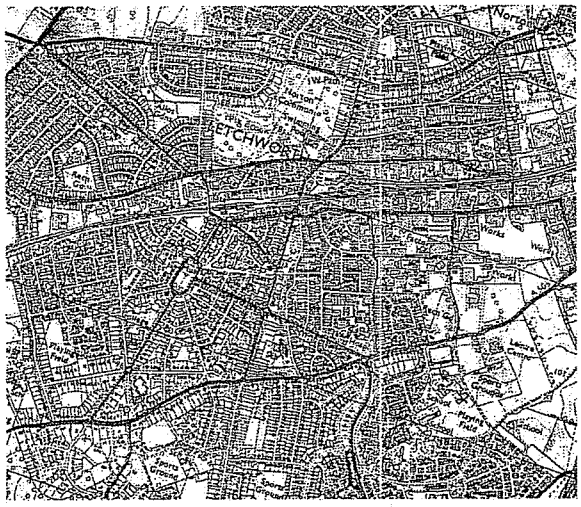


図２　現在のレッチワースの平面図

2．レッチワースの都市設計

アンウィンとパーカーの両氏は、ハワードが提示した新しい型のコンパクトな都市のスケッチ（前号で紹介）を、一つのダイヤグラムとして理解し、『田園都市』の理念を十分に理解し、その諸原則を設計上に反映させた。

具体的なレッチワースの設計は、都市部の中央にロンドンとつながる鉄道のレッチワース駅を置いた。全てが借地という条件の下、駅の周辺にはショッピングセンター、線路沿いには工場等を配置し、住民のほとんどがそこに勤め先をもつことができるよう多様な企業をバランスよく誘致した。それを取り囲む形で、人口 32,000 人のための住宅と庭園によるまちが広がり、活気ある地域社会を形成させようとした。都市の骨格は、既存の道路や丘陵の尾根線と谷筋の小川に配慮したため、道路網は曲線となり、まちの街区は表情豊かな構成となっている。また、会社の持つ土地の約半分を、都市部を取り囲む不可侵のグリーンベルトとしての農業地帯とし、会社が農業従事者を雇用し、市場作物としての小麦栽培を中心とした農業が営なまれている。

ハワードの構想の重要な鍵である全土地の会社による単一所有を実現したことで、田園都市開発による地価の上昇を個人が占有することなく、開発利益はコミュニティの便益のために充てる諸原則が完全に維持された。これによって、グリーンベルト機能の農地が、都市化の波を受けて、収益

性の高い土地利用に売却処分されることもなく、美しい田園都市を維持することができた。つまり株式により土地所有を小口化し、たくさんの市民を株主として結集させて大地主にすることで、美しいまちの成長の理想像を共有する一方で、株主への配当を低く抑え、痛みを分かち合いながら「持続ある社会」を築くことに成功した。

ただし、現在までに、土地の所有者は会社から、公社を経て、財団法人へと変遷しているが、レッチワースの大地主であることには変わりない。

3．コミュニティ重視の住宅地設計

アンウィンにはさらにいくつかの重要な課題を解決しなければならなかった。下層中流階層が購入可能で、様々な家族構成に応じ、さらに新しい土地の上に強い絆で結ばれたコミュニティを築くことができる、田園的雰囲気の感じられるアメニティ豊かな住宅の設計であった。経済性の追求と、彼自身が「過密から得られるものは何もない」と論証する相矛盾する命題の解決を迫られた。住宅地設計は全く革命的なものとなった。

1)宅地はスーパーブロック方式を採用し、街路形態に曲線の街路やクルドサックを多用し、必要な街路面積を最小化するとともにオープンスペースを生み出す。

2)宅地開発のみならず、さらに日常生活上必要とされる各種のコミュニティ施設の充実を図る。

3)住宅建設は低所得階層の入居を可能ならしめるためコストの軽減を図るだけではなく、デザインコードを策定しまち並み景観に配慮する。

4)「民主的コミュニティ」を形成すべく、共同で利用する必要な施設を整備に際して、住民の組織化を図る。

具体的な宅地設定及び住宅の建設は、ハワードが設定した標準敷地である間口 6m、奥行き 40m という規模にこだわらず、間口や奥行きの長さに多様性を持たせた。ブロック毎に、テラス式の数戸の連続住宅の建設を基本として、大きな１戸建住宅や２戸建住宅を組み合わせながら、通り毎の細かい建築デザインのルールを決めることや、道路から様々な距離で後退させ、共有のオープンな前庭空間をとることで視覚的にも開放させ、ゆったりした個性豊かな家並みの景観を作り出した。現在の約 13,000 戸の住宅形式の内訳は、テラス式 5,400 戸、戸建 2,600 戸、２戸建 2,700 戸、共同住宅 2,300 戸になっている。

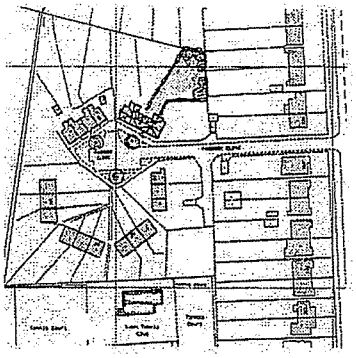


図３　住宅地・道路配置例

アンウィンたちは住宅の設計に始まり、前庭空間の取り方、裏庭の使い方、街区の構成、道路や家並みの景観について、住民の参加によってルールを作っていった。住民は生活を成立させながら、個々のコモンを処理することで、コミュニティ(Common+Unity)としての結束を強めることができるようにしたのであった。

アンウィンが提言の手本としたのは、中世ドイツの丘の町の不規則な配置のまちづくりの伝統であった。『田園都市』のイメージを、中世の都市のスケールを持つ自律的な都市の姿に求めた。

4．『田園都市』構想の発展の限界

田園都市の基本である職住近接による自己充足性の理念も、1930 年代以降に崩れ去った。鉄道で当時も１時間かからない中心都市のロンドンが発展拡大し、職種の豊富さと便利さから、通勤して働きに行く人が増えたからである。当初描いた自律性の高い本来の「衛星都市」の意義が徐々に変質していった。

また、下層中流階層に豊かな職住環境を供給する目的の民間による住宅事業も、当初は公共による補助金もなかったことや、アンウィンらの努力の結果、豊かなアメニティと利便性のため、かえって皮肉にも富裕者の優雅な生活の場になってしまった。

田園都市構想は、第２の田園都市ウェルウィンに続いては建設されず、結果的には母都市の大工業都市の都市問題を解決する自律的な衛星都市群を形成するまでには至らなかったのであった。

〈参考文献〉齋木崇人「最初の田園都市・レッチワース」、造景 No.16、1998 年

■環境循環型都市：阪神間の農

中瀬　勲（兵庫県立　人と自然の博物館）

農へのこだわり

昭和 23 年 2 月に農家の長男として生まれました。農へのこだわりは、子どもの頃からの農地、ため池、河川での、近所の子どもたちとの遊びが原点になっています。我が家のにわ、野原、田畑周辺でのツクシ、ヨモギ、イタドリ、スギノミ、クワノミ、グミとり、河川やため池でのウナギ、ナマズ、フナ、モロコとりなどは懐かしい思い出です。今から思うと、祖母、祖父をはじめとした家族や近所のガキどもが遊びの師匠でした。

しかし、高校、大学になるにつれて、農家では、春、秋の休日毎に労働しなくてはならなかったので、余り良い思い出はありません。嫌で嫌で、逃げていたように思います。しかし、今から思うと、懐かしい農の風景です。

そのころ、社会では、科学技術の飛躍的な進展と共に、快適、利便、安全、健康な都市環境の構築を成し遂げたともいえます。しかし、その過程で、意識的、無意識的に自然環境をないがしろにしてきたことも否めません。同時に、田畑は都市的土地利用に転換されていったのです。今日、原風景、循環、生物多様性、自然再生、環境学習などが重要なテーマになりつつあるように、成熟社会、少子・高齢社会の今、自然や環境、さらには農に対する私たちの価値観が問われています。

都市が育む農

高度成長期以前の阪神間では、地形上の影響で、都市、森林、農地が近接して分布していました。この近接して分布していることが、阪神間が、「環境循環型都市、有機農業都市であった」と言及したい理由です。都市から農地に様々な有機物が供給され、森林からも、肥刈り、しば刈りとして農地に有機物、そして水が供給され、農業生産物としての農産物が都市に還流していたのです。まさに、環境的に健全な循環を形成していたのです。

都市と農地の間で、有機物を循環させる装置の役割を、生産活動としての農業は担っていたのです。循環装置として、農業生産活動を中心にして、それを支える牛馬の飼育、水路、ため池、野ツボなどの維持・管理・運営があげられます。農文化の再発見、循環のための仕組みや装置などは、今の私たちの町づくりに多くの示唆を与えてくれるものといえます。

宝塚の植木産地は、武庫川とその支流から供給される水、砂、河川からの湿気が背景となって形成されているといえます。さらに、扇状地地形、瀬戸内気候は、二毛作としての阪神間農業に影響しています。これに関連して、ため池かんがいの仕組みが見られます。取水樋門の工夫を通じた水温調整機能、他に、ため池の、底樋、堤体のはがね、水路やサイホンなどがあります。これらは重要な農業文化ともいえるでしょう。

阪神の農・森林あれこれ

かつてから、阪神間の農地は住宅などの開発適地であったといえます。例えば、鳴尾浜などでは海水面が埋め立てられ、新田が造成されてきました。その後、住宅地、工場地へと転換が進んでいます。かつて、景観計画（鹿島出版会）を翻訳したとき、1900 年当初、T.チャーチの時代、「カリフォルニアは呼んでいる」とのキャンペーンで住宅開発が進行したことを記憶しています。まさに、「阪神間は呼んでいる」とのテーマのもとで、山林、農地、ため池、海水面が住宅地へと土地利用転換されたといえます。

一方、阪神間の森林は、欧米型森林レクリエーションのパイオニアといえます。まず、後背地の森林は、本多静六(1900)らによる緑の回復のフロンティア、応用生態学のはじまりであり、近代日本の緑の回復の原点なのです。この森林を舞台に

総合的保養地整備が森林型のレクリーションとして進展しています。ウイーンの森、フォンテーヌブローの森、リッセンの森、エピングフォレスト、セントラルパークなどに匹敵する都市林といえます。欧米型の森林レクリエーションの芽生えと成熟がみられます。

未来に向けて

かつて、「神戸市エコポリス計画」の策定をお手伝いしたことがあります。自然との共生へ、ビオトープネットワークの回復など、当時としては画期的な内容であったと自負しています。水系、流域を基礎にして、水、生きもの、有機物などの流れの関係性の再構築を通じて、再び環境循環型都市に向かうことを期待します。特に、神戸市西区、北区、宝塚市などにはまだまだ農地が健在です。地産地消、地域内循環、グリーンツーリズムなどの仕組みを通じて、市民主体で進めたいものです。

阪神間倶楽部　第９回研究会の記録

○日　時：2004 年 10 月 16 日（土）14：30～16：30
○場　所：相楽園会館
○参加者：6 名

この日は天候にも場所にも恵まれたのですが、何と！参加者が、お願いいたしました講師も含めて６名という驚きの研究会でした。
中瀬先生のご幼少？のころの原風景から話しが始まり、阪神間のとても興味深い結末まで時間を忘れた半日でした。
少人数ではなんともったいないことだったか、と反省しきりでした。

当日、中瀬先生がご用意下さったレジメを少し載せさせていただきます。

はじめに
○原風景から、農へのこだわり／農家の経験から、
原風景、農風景、水循環

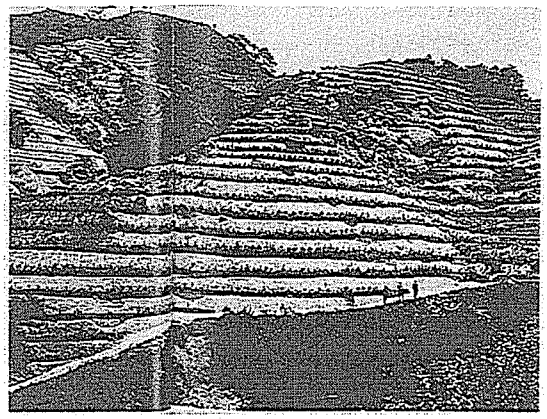
1、20 世紀に失った自然環境の回復、修復／科学技術の残したもの、私たちの価値観
成熟社会、高齢化社会って何？

2、都市・森林が育む農地／阪神間は循環型都市、有機農業型都市、農文化の再発見
（『地図：神戸』『灰小屋』『地図：大久保、須磨』）

3、地図から読み取る阪神の農・森林あれこれ／平地の住宅開発、森林レクの開発
（『地図：鳴尾浜、有馬』）

4、未来にむけて、再び循環型都市へ／水、生きもの、有機物などの関係性確立へ


植林前の六甲山（明治 36 年）


植林後 1 年目（明治 37 年）


植林後 10 年目（大正 2 年）

■Dr.フランキーの街角たんけん 第１０回 消え行く阪急西宮球場

中尾 嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

今年は、何かにつけ激動の年であった。プロ野球も例外ではなく・・・っと、年末モードの書き出しである。パ・リーグの再編が賑々しくマスコミ各メディアで報じられていた９月、或る球場の解体工事が始まった。今回は、近鉄と合併したオリックスの前身、旧阪急ブレーブスの本拠地で、現在解体工事が進む西宮球場について触れたい。

阪急ブレーブスの前身・大阪阪急野球協会が、日本で５番目の職業野球チームとして結成されたのは昭和11(1936)年１月のこと。ライバル阪神電鉄を意識した小林一三の意向があったと伝えられる。本拠地となる西宮球場は、阪急西宮北口駅南東の面積二萬五千坪の用地を買収し建設された。工事は同年 12 月から開始され、翌昭和 12 (1937) 年４月末、工期５ヶ月の突貫工事で完成した。

私の手元にある竣工当時の工事概要を見ると、球場面積七千八百坪、構造は鉄骨鉄筋コンクリート造五階建、収容人員五万五千人の、堂々たる大スタヂアムであった。

設計は、阪急梅田駅ビルや阪急神戸線西灘～三宮間の高架橋、阪急会館等を手がけ、すでにこのシリーズでも幾度かその名が登場している阿部美樹志である(施工は竹中工務店)。

阿部は明治 16 (1883) 年、現在の岩手県一関市に生まれた。明治 38 (1905) 年、札幌農学校土木工学科を首席卒業後、鉄道院に入る。その後、農商務省海外実業練習生に選抜され、米国イリノイ大学大学院に留学。鉄筋コンクリート構造を学び、博士号を取得。大正 3(1918)年に帰国し、東京～万世橋間に建設された本邦初の高架橋建設の設計を取り仕切った、わが国の高架鉄道設計の権威であった。その後、官を辞して、阿部美樹志設計事務所を設立。浅野総一郎の仲立ちで小林一三と出会い、阪急関係の主要な建築物・造営物の設計に関与。その後、戦災復興院総裁等の公職を歴任し、昭和 40 (1965) 年に亡くなった。

もともと土木が専門の阿部は、外観のデザインにあたっては、装飾で飾り立てず、たとえばこの西宮球場のファサードに見られるように、柱型を意識的に配置することで垂直性を強調したり、階段室を等間隔に配置し、丸窓を最上階に連ねたりするなど、構造と意匠とを融合させるように意識したように思われる。派手さこそないが、印象的な作品を残した。

ブレーブス、オリックス、そしてアメリカンフットボール、にしのみや競輪と幾多の名勝負を見つめてきたこのスタヂアムも、来年８月には完全に姿を消す。跡地には商業施設が誘致されるという。

【参考文献】
「阿部美樹志と阪急の構造物」
小野田滋（「鉄道ピクトリアル」No663 所収）
平成 10 年「京阪神急行電鉄五十年史」茂原庄三編、京阪神急行電鉄株式会社、昭和 34 年



写真３ 阿部美樹志（出典「阿部美樹志と阪急の構造物」小野田滋（「鉄道ピクトリアル」No663 p120）より）

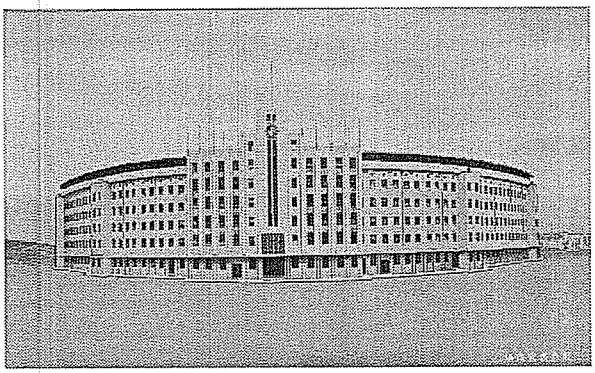


写真１ 阪急西宮球場全景
「阪急西宮球場会場記念」絵葉書より

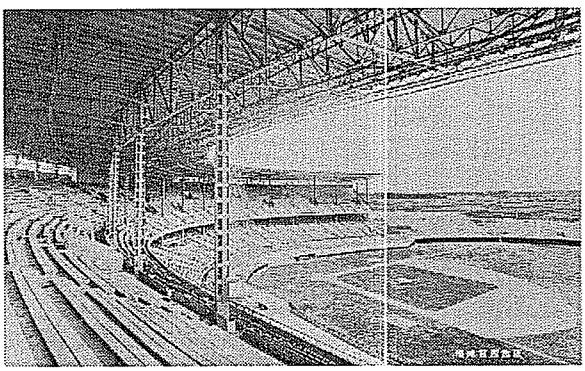


写真２ 阪急西宮球場内景
（戦時中に供出された幻の大銀傘に注目）
「阪急西宮球場会場記念」絵葉書より

交差点の落とし物・3

実

中川　紺

実をひろった。

何の実かは分からない。コンビニを出たところで落とした小銭のそばに転がっていた。クレヨンで塗りつぶしたようにしっとりとしたオレンジ色で、形は小さな桃に似ていた。ピンポン玉くらいなのに、手に持つと硬式野球ボールくらいの重さはあるように感じた。まわりに同じ実をつけた木は見当たらなかった。俺は何気なくリュックのポケットにそれをつっこみ、そのままバイトに向かった。

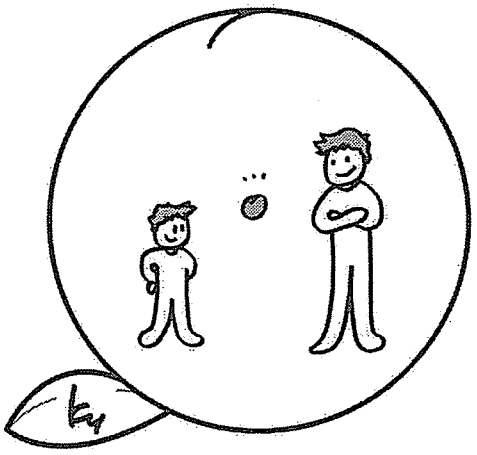
●●

帰宅は深夜になった。いつものキムチ味のカップ麺をすすりながら、実のことを思い出し、リュックから取り出して机に置いた。

艶のあるオレンジ色だ。きんかんに似ている、と思った。鹿児島の実家はきんかん農家で、子どもの頃はいやになるくらいきんかんを見ていた。こっそりボールの代わりに転がして遊んで、親父に何度も叱られた。

ボールが昔から好きだった。そういえばスーパーボールが流行ったことがあった。ちょうどきんかんくらいのゴムボール。見飽きたオレンジは大嫌いで、青いのや透明でラメが入ったのばかりを集めていたけど、たしか一つだけオレンジ色のボールがあった。そうだ。あれはアベちゃんにもらったんだった。小学校のときの大親友だ。

小さな小学校だったけど、楽しかったことしかおぼえていないな。あ、そうでもないか。一度ジャングルジムから飛び下りて足にヒビが入ったことがあった。あの時は先生にずいぶんと怒られて、そしてすごく心配された。田上先生、年齢は父親くらいだった印象があるから、多分、三十代だったんだろう。いつもスーツを着ていて、ちょっと他の先生と違っていた。それがまたカッコ良くて、男子に人気があったな。俺もその一人だった。



思い巡らしているうちに、ちょうどカップが空になった。俺はそのままコタツで眠りについた。

●●

ある日家に帰ると、しばらく放っておいた実はすっかり乾燥して茶色く変色していた。それだけでなく、弾けてちょうどイガに入った栗のような状態になっていた。栗のかわりに小さな種が三つ、きゅっと詰まっていた。ひとつを取り出してみて、ふと思い付いた。そうだ、これを植えてみよう。

植物を育てた記憶は、夏休みの「朝顔の観察記録」をやったときにさかのぼるほど、俺には無い。元々何かと育てることは苦手だ。

でもこの種は何が出てくるのか、少し興味をそそられる。あとで、カップ麺の容器に土を入れて来ることにしよう。

実に残っている種をつまんでみる。

二つ目、三つ目。

最後の種だけ、感触が違った。試しに振ってみると乾いた「からから」という音がした。

少し力を入れると難無く割れた。中から出てきたのは、使い古した小さな金ボタンだ。表に獅子の絵がついている。その獅子を、見たことがある気がした。あの頃の先生のスーツのボタンにとても似ていた。

今年の年末、実家に戻ったら小学校を見にいこう、と俺は今、決めた。

（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 情報コーナー

●創造的復興フォーラム「伝えよう1.17の教訓ー創造的復興から未来へー」

＜復興10年総括検証・提言報告会＞

・日時：1月12日(水)～14日(金)
・場所：神戸国際会議場 国際会議室(ﾎﾟｰﾄﾗﾝﾅｰ市民広場駅下車10分)
・内容：12日／まちづくり(11テーマ)、防災(8テーマ)、13日／産業雇用(8テーマ)、総括検証(8テーマ)、14日／社会・文化(8テーマ)、健康福祉(11テーマ)

＜復興10年総括フォーラム＞

・日時：1月15日(土)16:30～18:30
・場所：神戸国際会議場 ﾒｲﾝﾎｰﾙ
・内容：総括報告／新野幸次郎(復興10年委員会座長)、ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ／安藤忠雄(建築家)、井戸敏三(兵庫県知事)、伊藤滋(早稲田大学特命教授)、中村順子(ｺﾐｭﾆﾃｨｻﾎﾟｰﾄｾﾝﾀｰ神戸)、水越浩士(兵庫県商工会議所連合会会頭)、山崎正和(東亜大学学長)、野尻武敏(復興10年委員会副座長)
・問合せ・申し込み：兵庫県創造的フォーラム実行委員会(TEL. 078-362-4040、FAX. 078-362-4459)

●メモリアルコンファレンス・イン・神戸X

・日時：1月15日(土)～16日(日)
・場所：人と防災未来センター（神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2、JR灘駅より南へ徒歩12分、tel. 078-262-5060)
・内容：

＜メイン会場＞

15日(10:00～16:45)、16日(10:00～12:00) メモリアルコンサート

＜会議会場＞

15日(12:00～16:45)
分科会･･･「被災者の自立とその支援は適切だったのか？」、「市民は地震とどうつきあえばよいのか？」、「すまい・まちの再建は、どう進んだのか？」、他3セッション（危機管理、社会基盤、地域経済）
16日(10:00～15:00)
分科会（15日と同じ）、こども討論会、総合討論、他

＜野外ステージ＞

防災ゲーム、防災ファッションショー、他

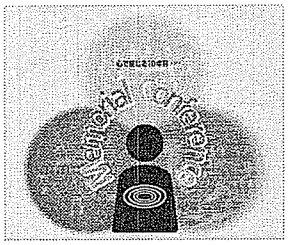
＜炊き出しエリア＞

震災10周年炊き出し大会

＜屋外展示エリア＞

防災関連展示、他

・ 問合せ：ﾒﾓﾘｱﾙｺﾝﾌｧﾚﾝｽ事務局(tel. 0774-38-4273)



●台湾ー神戸 震災被災地市民交流会

＜震災映像上映会＞

・日時：1月16日(日)10:00～17:00
・場所：シーガルホール（JR神戸駅を東へ徒歩5分）
・内容：〈午前の部〉「阪神大震災 再生の日々を生きる（青池憲司監督）」上映、舞台あいさつ・対談／青池監督、呉乙峰監督、映画出演者、〈午後の部〉「生命(いのち)希望の贈り物（呉乙峰監督）」上映
・入場料：無料

＜シンポジウム＞

・日時：1月17日(月)14:00～17:00
・場所：こうべまちづくり会館2階ホール（神戸市中央区元町通4丁目2-14)
・内容：「台湾ー神戸それぞれの震災と復興」
・入場料：無料
・問合せ：まちづくり(株)コー・プラン(TEL. 078-842-2311 FAX. 078-842-2203)

●国連防災世界会議

・日時：1月18日(火)～22日(土)
・場所」神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場、神戸国際展示場(ﾎﾟｰﾄﾗﾝﾅｰ市民広場駅下車)
・内容：「政府間会合」、「テーマ別会合」、「パブリックフォーラム」の3つで構成。「パブリックフォーラム」は一般参加型事業で、シンポジウム、展示などが行われます。

●1．17ひょうごメモリアルウォーク2005

・日時：1月17日（月）
・場所：神戸市・芦屋市・西宮市内の山手幹線、HAT神戸
・内容：〈山手ふれあいﾛｰﾄﾞｳｫｰｸ〉
西宮市役所(7:30)、芦屋川西運動場(8:00)、県立文化体育館(8:00)、大倉山公園野球場(9:00)、王子公園(9:45)を出発点にして、HAT神戸をめざして歩きます。
〈阪神淡路大震災10周年追悼式〉
HAT神戸にて、11:45分から行われます。
〈ふれあい元気アップステージ〉
13:00より、HAT神戸内のひと未来館ウッドデッキにて、出演は高石ともや、ばんばひろふみ、紙ふうせん、イルカ、他
・問合せ：1.17メモリアルウォーク実行委員会（兵庫県復興推移進課内、TEL. 078-361-5557）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http：//web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興 市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024 神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311 FAX. 078-842-2203 Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327 郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄 担当：天川佳美、中井 豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2005年1月28日発行

月刊 きんもくせい

05年1月号
(50+36+NO. 22)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■1．17を迎えて

井戸　敏三（兵庫県知事）

あの阪神・淡路大震災から10年を経過するその日、1月17日を迎えた。長かった10年、あっという間の10年、人々の思いはそのないまぜだろう。私もこの10年の取り組みを振り返れば、その時々の課題、地震直後の救援救助、避難所対策、仮設住宅対策、恒久住宅での生活再建、本格的生活復興、あわせてインフラ整備、産業振興など、各ステージごとの主題に対決してきたなかで、解決できたこともあり未だ課題が残され取り組んでいることもあるため、長短それぞれの思いがしている。

私たちは、この10年間必死の思いで頑張ってきた。被災者や被災地はもとより県民あげて、創造的復興をめざして1歩でも2歩でも前に進めようと努力してきた。しかし、総じていえば、やはり大きな被害を回復すること、埋めることで精一杯だったといえるのではないか。私たちの意識も、人口や産業活動など震災前と比べて上回っている、いないという判断をしているが、これはやはり震災前意識を乗り越えていないことの表れといえるのではないか。だが、この10年で大きな被害を埋めることはできた。これからようやく大きな飛躍をめざす、創造するスタートラインについた、つくことができたとはいえる。21世紀の成熟社会にふさわしい兵庫県づくりに大きく飛躍しうる礎ができた、これこそがこの10年の到達点だったのではないか。

また、この10年を経過した今だからこそ、阪神・淡路大震災とは何だったのか、これまでの復旧・復興の意義は何だったのかを考えてみることが大切ではないか。まさしく、我が国の一地域に大きな被害をもたらしただけでなく、成長社会から成熟社会への時代の転換期に発生し、我が国社会のあり様そのものを問いかけた震災だったのだろう。

まず、災害文化、防災文化が生まれる契機となったのではないか。今までも大きな災害に幾多も襲われてきたが、それぞれの災害への対処、復旧・復興のみに終始し、個別課題として対応されてきた。あの阪神・淡路大震災を契機に、災害そのものは避けられないが、災害が起こってもできるだけ被害を小さくする、そのために防災機関だけでなく、市民レベルを含めて、ハード・ソフト両面から総合的に社会全体として取り組んでいくとの減災の共通認識が生まれたといえるのではないか。

第2は、大都市における高齢者の課題を浮き彫りにした震災であった。阪神・淡路大震災は高齢社会下における大都市直下型地震といわれているが、まさしく都市内部の課題が高齢者であり、この災害弱者対策に直面した。しかし、これは震災復旧・復興のみならず、今後の高齢社会下における課題として取り組み続けねばならない。高齢者の見守りや生活支援は新たな展開をとげつつある。

第3は、21世紀の成熟社会の課題の先取りを行ったことである。経済的豊かさを築き上げたが故に今私たちが直面しているのは、この戦後60年の間に忘れてしまったといわれる、人と人との結びつき、人と人との社会貢献、人としての絆である。ボランティア元年と当時いわれたように、多くの人々が自主的に、得意技をもつ人々がそれぞれの分野で活躍された。21世紀は人の時代であろう。

私たちは、この阪神・淡路大震災とその復旧・復興過程を常に原点としてこれからの10年に1歩を踏み出さねばならない。これまでできたことは次の10年もできるはず。ぜひ頑張っていこう。

■スリランカにおけるインド洋大津波現地調査

深澤良信（人と防災未来センター）

（１）海外での大災害時における人と防災未来センターの果たす役割

■海外での大震災時における人と防災未来センターの活動履歴

震災が起こった場合、人と防災未来センター（DRI）では、日本だけにとどまらず海外にも専門家の現地派遣を行っている。

・2002 年 06 月発生　イラン北西部（M6.3 死者 227 人）2 名派遣。現地受入れ機関は IIEED（イランにおける地震の調査研究機関）。震災１月後、現地調査に入る。

・2003 年 05 月発生　アルジェリア北部（M6.7 死者 2,266 人）国際緊急援助隊・専門家チームの一員として、１名派遣。

・2003 年 12 月発生　イラン南東部バム（M6.3 死者 26,796 人）2 名派遣。国際協力機構（JICA）と協力して現地調査。兵庫の防災関係者同士がゆるやかに連携し情報交換する枠組を作った。

・2004 年 12 月 26 日発生　スリランカ（スマトラ沖地震の津波）（M9.0（推定）　死者 157,288 人（H17.1.23 現在））

（上記のデータはルーベンカトリック大学のデータを参照した）

アジア防災センター（ADRC）中心の派遣チームに、DRI より深澤が同行。ADRC のネットワークで受入れ先を調整。なお ADRC よりタイ・プーケットとインドネシア・アチェへ別チームを派遣。

■海外での大震災時における、人と防災未来センターのミッションは

ミッションは災害ごとで異なるが、数回の被災地派遣を経て、見えてきたことがある。

1. まず現場を見る。

被災直後の現場に行くと迷惑になる。しかし、専門家として被災地を知っておくことは重要である。光景や匂いを心に焼付け、実践的な防災研究の原点としなければならない。具体的な研究の為の現地調査は震災後１か月頃から始まるが、テーマにより適切な時期に行っている。

2. 阪神・淡路大震災の経験に照らし合わせて、気づいたことを（状況が許せば）現地担当者に進言する。

神戸から来た大震災の体験者を代表する者として心からお見舞いを申し上げることにしている。被災のつらさを分かち合う者の言葉として先方に受けとめてもらっていると思う。

3. 防災関係者のネットワーク

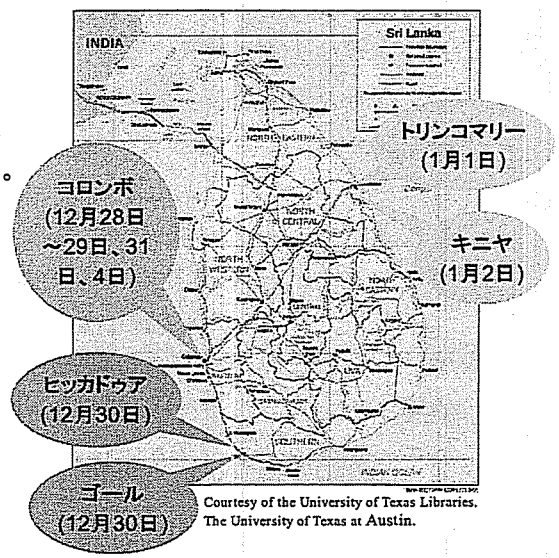
DRI の人材育成研修は有効である。これは国内の中越大震災でも手応えを感じている。また ADRC の客員研究員制度も有効である。半年に１人ずつ、各国より研究者を招いているが、帰国後、自国の防災関係の中枢で活躍している彼らと、国際的なネットワークが生れている。スリランカでも、元・客員研究員が国家防災委員会の中心人物となっており、今回の現地調査に協力してくれた。

（２）スマトラ沖地震による津波の被災地・スリランカへ

12 月 28 日より９日間、スリランカ現地調査で見聞きし感じたことをお伝えしたいと思う。

■調査概要

2004 年
12/28 神戸からコロンボへ移動
12/29 日本大使館、JICA、スリランカ政府、サルボダヤ(NGO)
12/30 現地調査(ゴール及び周辺被災地)
12/31 スリランカ政府(再訪問)
2005 年
01/01 コロンボからトリンコマリーへ移動、現地調査
01/02 現地調査(キニヤ)
01/03 コロンボへ移動
01/04 日本大使館(報告)
01/05 帰国



■調査地の状況

1. ゴール（スリランカ南西部、人口約 50 万人の中核都市）（写真１）

・学校・寺院（仏）・モスク（イスラム）等は避難所になっており、信仰に関わらず受け入れ。

・ボランティアによる相互扶助が活発に行われている。

・NGO による救援物資配布に人々が我先に殺到するという状況ではなかった。当面のニーズは満たされているのではないか。

・トイレと水の問題があるが、

疫病は発生していない。
・建物は、RC 造がかろうじて残っていたが、木造やブロック造は跡形も無い。この点は地震の被害に似ている。地震と異なるのは、1 階部分は津波の被害を受けたが 2 階以上は問題ないこと。携帯電話などの通信網、行政網や情報網が生きており、兵庫県の陥った様な混乱状態にないこと。
・イスラム教では死後 24 時間以内に埋葬しなくてはならず、身元確認が十分行われる前に集団埋葬を行った。

2. トリンコマリー（スリランカ東部）（写真２）
・東部は大きな都市が無く、南・西部に比べ所得水準も低いようだ。
・南部ほど組織だった共助が進んでいないようだ。
・シンハラ人とタミル人が対立しながら暮らしてきた地域である（反政府過激派「タミル・イーラム解放の虎」の支配下だったが 2 年前に停戦）が、津波災害後、行政・警察・反政府組織など各団体の代表が集まり、情報交換する体制ができている。

3. キニヤ（トリンコマリー周辺）（写真３）
・避難所 80 箇所のうちの一箇所は、850 家族・3000 人程度を収容しているが、行政側担当者は 1 人だけ、避難民を収容するだけで精一杯、という状況。
・近くまで救援物資が届いても、皆の手元に届かない。その原因は、配布のマンパワー不足と分配の仕組みが未整備であること。共助に避難民自身が気づけばよいのだが･･･。
・モバイルクリニックが印象的であった。

■今回の現地調査で感じたこと

1. 津波の破壊力の凄まじさ
・それなりに整った中核都市も壊滅的打撃を受けている。
・ゴールとコロンボをつなぐ重要な幹線がダメージを受けた。道路の復旧は進んでいるが、鉄道は線路が乱れ利用不能。
・災害弱者である低所得者層のダメージが大きい。住まいを失い、収入を得るための船と網を失っている。生活再建（特に生計手段の復旧）に向けて支援が必要ではないか。
・地方都市と集落の孤立の問題。

2. 防災教育の重要性
今回、ほとんどの人々が「津波」の概念さえ知らなかったために、早期避難できず被害を拡大した。むしろ海が引くのを珍しがって海岸にわざわざ集まってくるような状況だった。防災情報システムの構築と同時に、防災教育を進めることが重要。

3. コミュニティの相互扶助精神の高まり
スリランカでは被災地の内外で、人々が立ち上がり助け合っている。このことを神戸の人に知ってもらいたい。
一方で、まだそこまで到達できていない地区もある。きっかけや気づきがあれば、潜在的な力が発揮されるはずであり、それを支援する必要がある。
ふいに遭遇した災害に対して、国（政府）もよくがんばっている。一例を挙げると、万一の災害に備えて様式等が既に用意されており、各プロビンス（県）、ディストリクトから同一の様式で情報が順次あがってきている。

（３）今後の防災研究に向けて

○ 被災国防災力の向上、我国の東海・東南海地震への備え、国際社会への貢献
○ 超広域災害での政府対応、地域防災計画、コミュニティ力の引き出し、地域経済の復興、観光地の防災計画、被災者支援、都市復興、津波防災情報システム、災害文化、環インド洋津波警報体制構築への協力、防災教育・人材育成
○ 同趣旨の研究成果を世界的に共有する仕組みの提案
○ 復興計画支援オブザーバーチームの提案
・世界の専門家を集めてゆるやかなネットワークを作る
・被災地の課題や要望に専門的立場から情報提供を行う
○ 21 世紀における防災研究の原点

（この記事はインタビューを元に構成しました）



写真１　ゴール周辺のヒッカドゥアでは、津波で列車が転覆し乗客のほとんどが死亡。

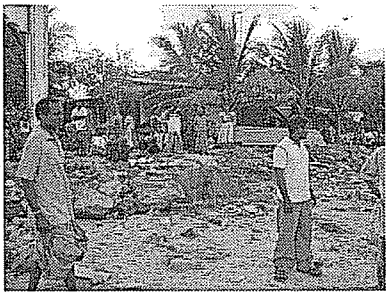


写真２　トリンコマリー周辺の海岸沿いの漁村。漁船、魚網など漁業用具に大きな被害。

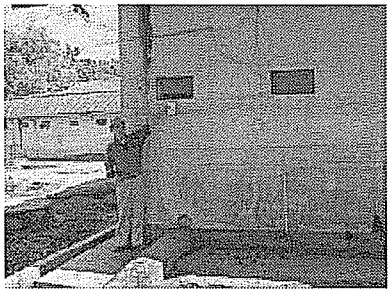


写真３　キニヤ地区。津波の跡を指す。キニヤでは海辺の病院が津波で壊滅した。

■『コンパクトシティ』を考える 11

－集権型国家イギリスの分散化政策と都市計画の変遷

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

1．1909 年住宅・都市計画法

中央集権型国家イギリスでは、工業化の進展でロンドンには産業や人口が集中し、地下鉄網の拡大や南部鉄道の電化と並行して、周辺の村が次々に郊外都市の新しいセンターへと開発された。しかし、E.ハワードのような少数の例外を除いて、良心的なディベロパーや建築家が存在せず、利益追求の無秩序な開発が現状であった。

このため、郊外の都市開発に公共側が直接介入し、土地利用にゾーニングの公共コントロール手法を用いる都市政策が初めて必要となった。最初の都市計画法といわれた『1909 年住宅・都市計画法』の登場である。郊外開発予定地の計画区域に地方計画当局が作成する「都市計画書」を適用し、新規開発の土地利用規制を前面に出したものである。この法律では「都市の望ましい衛生状態、利便性の確保、アメニティの供給」が都市計画の全体的目標の柱とされた。すなわち、郊外部の開発が増加するにつれて、都市と農村の対立が先鋭化する中で、新規開発を規制しつつ都市空間をコントロールしようとするものであった。

ただし、民間の開発地や政府主導のニュータウン建設は、職住近接自立型の「田園都市(Garden City)」としてではなく、環境に配慮しコミュニティ施設を備えた住宅地機能を主とする、いわゆる「田園郊外(Garden Suburb)」住宅地（日本でのベッドタウン）の性格の強いものであった。

2．1932 年都市・農村計画法

1929 年からの大恐慌で先進工業国が苦しむ中、自動車・レーヨン・化学などの新産業の成長で経済活動が急速に回復したロンドンでは集中化と過密化が、郊外ではスプロールによる大都市化が進んだ。32 年から 37 年まで持続した住宅建設のブームが起こり、多くの方面に波及効果を生んだ。

政府は住宅建設ブームに対して、『1932 年都市・農村計画法』で計画書作成区域の対象を市街地だけではなくほとんど全ての土地にまで拡大した。中産階級のための質の高い環境アメニティの確保に重点を置き、郊外部の住居地域の設定などの土地利用規制と住宅・建築規制（＝郊外住宅地ゾーニング）が定められた。

この時代の象徴は、住宅水準の飛躍的な向上であった。労働者向けの公営賃貸住宅と、都市の郊外を中心にした民間住宅の建設が大量に行われた。両大戦間期には、430 万戸の住宅が建設された。そのうち 7 割を民間住宅が占めた。こうして、中流階級＝郊外の持ち家、労働者階級＝公営賃貸住宅という新しい図式が生まれた。この 2 種類の住宅はともに広い裏庭があり、4～5 部屋を持ち、電気、ガスも整備された。田園郊外と呼ばれた郊外住宅地は 80 人／ha の田園都市運動の住宅基準を満たす豊かな緑の環境の中に建設された。物価の下落と低金利政策が反映し、家の価格は安く、ローン金利は低く、家の購入がきわめて有利な時代であった。熟練労働者の間にも持ち家所有者が現れる「マイホーム主義」が顕著になった。社会の平準化がさらに進行し、中流階級の物質的な充足、生活の安定をもたらせた。イギリスの社会的な安定を維持することができた時代であった。

3．1947 年都市・農村計画法（基本法）

第 2 次大戦前、ロンドンから産業や人口をいかに再配置するかの検討していた「バーロウ委員会」の 1940 年勧告に基づき、1944 年に『グレーターロンドンプラン』が発表された。特徴は、スプロールは好ましくないとして、既成市街地の外延化を抑制する土地利用規制政策として、「グリーンベルト」が提案された。グリーンベルト内では新たな都市開発を厳しく規制し、その内と外で職住近接自立型衛星都市の重点都市開発を促進し、ロンドンからの産業や人口の受け皿を作ろうとするものであった。まさに、この政策は半世紀前に提言されたE.ハワードの『田園都市構想』の理

念を受け継ぐものであった。

グリーンベルトの土地利用規制は、労働党政権下でイギリス近代都市計画の集大成といわれた『1947 年都市・農村計画法（基本法）』の中に反映された。この法律は、都市計画の規制権限を大幅に地方自治体に委譲し、計画立案権限を与え、「デベロップメント・プラン」として統一した様式の開発計画と開発プログラムの策定を義務づけた。計画規制制度により開発をさせる徹底した計画主義に立つものである。また、「土地に関する開発権は私有のものではなく公共のものである」という理念が打ち出され、開発権は国に付与され、「計画なくして開発なし」という基本理念が確立した。具体的には、土地所有者は現在の目的のために土地を利用する以外の全ての権能が奪われ、開発権に対する補償は国家の資金から一回きりで支払われる。さらに、開発によって得られる地価上昇などの開発利益は「キャピタルゲイン課税（開発負担金）」として 100%社会に還元するものであった。

また、『1946 年ニュータウン法』が定められ、ニュータウンとして開発すべき区域が環境大臣によって指定され、国主導型の開発が促進された。指定を受けると、事業主体として地方自治体とは独立した「ニュータウン開発公社」が設立され、公社には事業推進のため国の予算が与えられ、強制収用等の広範な権限を有し、自ら開発計画を策定して事業を実施する。これらの都市政策の枠組みにおける最大の関心事は、公共住宅であり、計画的都市開発であった。公共部門の支配的地位を確立し、民間が開発する場合には公共側の代替をさせる制度化でもあった。

4．1968 年都市・農村計画法

開発計画と開発規制の制度は、政権移動で法律の修正はされるが、基本法によって 20 年間機能してきた。しかし、実際の開発計画では地域開発の細目まで指導するには力不足であり、デザインの質や環境の質の向上に寄与していないことが指摘された。『1968 年都市・農村計画法』が新たに定められ、「ストラクチャー・プラン」（広域計画：カウンティのレベルで策定される広域的な基本計画で、自然的美観やアメニティの保全、物理的環境の改善、交通管理に関する政策の明示）と「ローカル・プラン」（地域計画：市町村が策定する具体的開発プラン）の 2 層制に改編された。また、都市中心部の再開発、荒廃した土地の再生・利用等を促進する「事業地域」が導入された。事業地域に指定されることで、再開発が地方公共団体の主導で行われ、上記の広域計画や地域計画を必ずしも前提としない柔軟な手法が可能となった。

さらに、都市の社会的諸問題に対処するため、『1969 年地方自治法』で中央政府から地方自治体への補助金（補助率は 4 分の 3）を拡充する「アーバンプログラム」が創設された。対象事業は経済の活性化、生活環境の改善、社会的サービスの充実の 3 分野である。また、70 年代には地方政府再編成が実施され、地方自治体数が 1000 から 400 強に減少し、議員数も約 15,000 人削減し、80 年代の中央集権化の基盤づくりとなった。

このように第 2 次大戦後の国家主導の経済政策の計画化などを背景にして、都市政策の枠組みの特徴も、「都市のマスタープラン（基本計画）制度」で、都市化による変化を公共部門の支配的地位の確立で封じ込めようとした。工業社会の発展で、政治・経済の中枢として大都市と大都市圏の重要性が飛躍的に増大するだけでなく、大都市圏全体の高度な空間整備計画が要求された。都市の業務・商業・工業・居住・レクリエーションなどの土地利用の総合的な調整と、都市機能を支える交通・運輸・ライフライン・情報施設の整備、都心部や拠点地区の再開発事業など長期的な視点からの総合空間計画とその事業手法を都市計画制度の中に包含することとなった。これは戦後のイギリスが求めた中央集権型混合経済・福祉国家の都市政策における一つの姿であった。

しかし、1973 年のオイルショック以降工業社会は終焉し、重厚長大産業の衰退が顕在化した。同時にインナーシティ問題が台頭し、分散化政策は経済衰退を助長すると批判され、79 年サッチャー政権誕生で都市計画制度に転換が起こった。

■Dr.フランキーの街角たんけん 第11回 31年目の「田園都市」住吉・御影（前編）

中尾 嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

唐突だが、筆者が町歩きの幅を広げたのは、高校3年の秋に大倉山の図書館で手にした「都市と保存・下」（雑誌「都市住宅」1974 年年間特集記事合本、同編集部編、鹿島出版会刊）に収録されていた故水谷頴介氏（当時 39 歳）執筆の「田園都市・阪神間」を読んだのがきっかけである。それまで、長田区東部から中央区西部、少し飛んで灘区、つまりかつての市バス 91・92 系統の運行区域が行動範囲であった私は、「田園都市」の片鱗を垣間見ようと、次の年の春、西岡本から住吉山手を経由して阪急御影まで歩いた。武田長兵衛氏邸と、蘇州園の御影石で組まれた大きな外構、小寺氏邸の白亜の洋館、味わい深い乾氏邸のたたずまい、個人の住まいという点ではアウトオブスケールだが豊かな杜を誇る大林邸など、その後の私の「御屋敷小僧」としての町歩きの方向性を決めた町歩きとなった（余談だが、水谷氏が、筆者が住む南五葉地区も含む鈴蘭台団地の基本計画を立案し、その業績が評価され都市計画学会賞を授与されたことを知ったのはずっと後のことだった）。

去秋は、「田園都市・阪神間」が発表されて三十年の節目の年であった。記事の発表当時、住吉・御影地区で始まったばかりの区画整理事業は、ようやく阪急神戸線以南がほぼ収束に向かいつつある。それとは対照的に、区画整理事業が着手されていない住吉山手地区は、いまだに「日本一の長者村」旧住吉村の面影を色濃く伝えている。いや、全国的に見ても、実体を残している貴重な近代の御屋敷町のひとつに数えられるだろう。

もちろん、この地域も、いくつかの御屋敷跡は大規模なマンションや「群住宅」によるミニ開発によって更新されている。また最近、旧野村元五郎邸や旧東畑謙三邸跡などを筆頭に、宅地造成や集合住宅建設など開発の手が入る敷地も出始めている。採算性がすべてのこうした開発活動は、私たちが守り育てたい地域環境を、折り込みチラシなど、イメージ戦略で利用するだけ利用して、最後にはそのものを「食べ尽くす」ように町並み・景観を一変させてしまうのである。

そして、相続のため国に物納されて 10 年となった旧乾邸も、今後の行く末が案じられている。渡邊節の現存する非常に数少ない住宅作品であると同時に、昭和初期のわが国を代表する住宅建築である同邸建物については、「旧乾邸活用応援倶楽部」などの市民団体が、その保存活用に向けた要請活動を起こしているが、先行きは不透明である。しかし、この種の建物としては異例の自由度の比較的高いパブリックスペースとして、地域に定着してきたという経緯を尊重して保存活用方策を考えていく必要がある。また、その際には、従来の公共団体が買い上げるという図式を超えたスキームを考えていかなくてはならないだろう。そのためにも、この時期、関係機関の慎重な判断が求められるところである。

（この項続く）

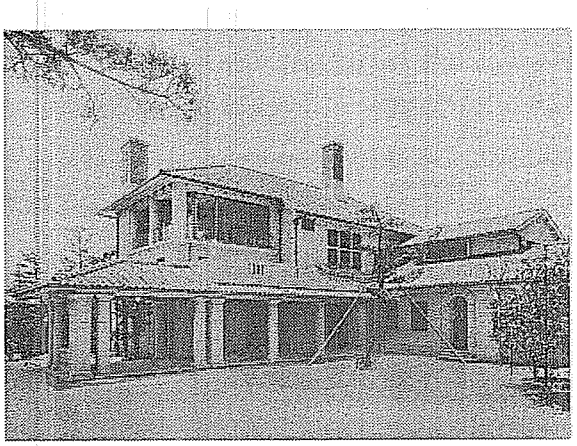


写真1 昭和10年代の旧乾邸
出典「建築写真集第四輯」竹中工務店、昭和14年

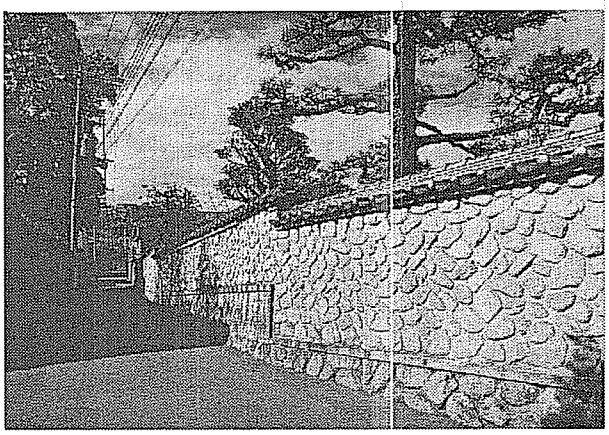


写真2 住吉山手の石塀

交差点の落とし物・4

夜

中川 紺

折り紙をひろった。

たしか私が小学校一年生の時だから、もう十二年も前。目を閉じると今でもあの時のことを思い出す。

●●

家の近くの狭い道で一緒に遊んでいたあかねちゃんが、「おトイレいってくる」と帰ってしまったので、私はしばらく一人で時間をつぶしていた。鳥のような影が横切ったような気がして顔をあげると、ちょっと先の交差点に緑の紙のようなものが落ちていた。

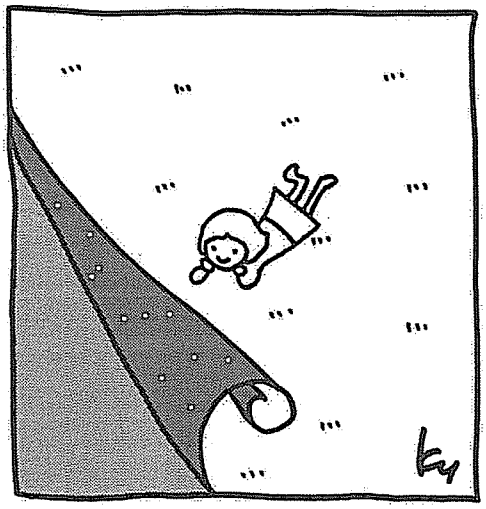
私は好奇心で手にとってみた。それが「折り紙」だということは子どもの私にもすぐ分かったが、裏返してみてがっかりした。裏は真っ黒で、せっかくの両面折り紙が“台無し”だった。どうせだったら赤とか黄色とか出来れば銀色だったらよかったのに。私のテンションは一気に下がってしまった。こんな色でつくれるものなんてないもん。そう思った時に、黒いコートを着た老人が私の横で立ち止まった。

「何だかつまらない顔をしてるね。その紙おじいさんに少しだけ貸してくれないかな？」

「いいよ。だって色きたないもん」

私はあっさり折り紙を手渡した。その老人は素早い手付きで何かを折り始めた。

ほら、と言った手のひらには、サイコロのような形にふくらんだ緑の折り紙が乗っていた。「ふうせん！」と私は言う。母親に折ってもらったことがあった。老人は微笑んだままポケットからペンのようなものを取り出して、おまじないのような言葉を唱えながらふうせんに何かを施した。



ほら見てごらん、と言われて、息を吹き込むための小さな穴を覗いた。

私が見たものは、真っ暗な中に光るいくつもの点……星がまたたいている景色。そう、ふうせんの中に“夜”があった。外側をよく見れば、小さな小さな穴がいくつもあいていた。さっきのおまじないはこれだったらしい。

「それはね、冬の空の星だよ。星座って知ってるかな？」

「星占いでしょ？　私、ふたご座」

「昔の人が夜の空に光る星たちにつけた名前なんだよ。こう並んでるだろ？」

老人は白いメモ用紙を取り出すと、ふうせんの中の星と同じように点を書いて、さらにいくつかを線でつなげて言った。

「この三つ並んでいるのがオリオン座。狩人の名前だよ。こうつなげると人の形だろう。その下にうさぎ座。このうさぎはね、オリオンに殺されてしまって、かわいそうに思った神様が空にあげて星座にしたんだよ……」

その話はなぜか私の心に残った。夢中で覗いていると、いつの間にか老人は去っていて、戻ってくるあかねちゃんの姿が見えた。私はそっとふうせんをポケットにしまった。

●●

「あれが、うさぎ座だよ」

「そんなマイナーな星座よく知ってるなあ。俺、オリオン座くらいしか分かんねーよ」

恋人の準一が隣で言う。

（だって、最初におぼえた星座だもん）

あの時のふうせんを私はまだ持っている。

（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■水谷ゼミナールシンポジウムのお知らせ

水谷頴介先生の１３回忌を記念して、以下のようにシンポジウムを開催します。なお、これは、「情報コーナー」に示す「こうべまちづくりセンター研究ネットワーク」が行う連続シンポジウムの一環として行われます。

◐日時：２月11日(金)13:30～17:00

◐場所：こうべまちづくり会館２階ﾎｰﾙ（神戸市中央区元町通４丁目、TEL.078-361-4523、FAX.078-361-4546）

◐内容：

テーマ「まち住区と震災復興･都市再生･遊芸空間」

＜司会・総合司会＞辻信一、天川佳美、山地孝之

＜第１部：水谷先生を偲ぶ＞

パネラー／小林郁雄「水谷先生の『まち住区』」、石東直子「水谷先生が『震災復興』に取り組んでいたら」、後藤祐介「水谷先生の『都市再生』『遊芸空間』への取り組み」、締めくくりの語り／三谷幸司

＜第２部：『震災復興』と『まち住区』＞

パネラー／山口憲二、山崎満、太田尊靖、岩崎俊延、猿渡彬順、締めくくりの語り／宮西悠司、

コメンテータ／小森星児、土井幸平、久保光弘、

＜第３部：『都市再生』と『まち住区』＞

パネラー／山本俊貞、上山卓、中井豊、朝平武文、曽家末晴、締めくくりの語り／西川靖一

＜第４部：『遊芸空間』と『まち住区』＞

パネラー／高月昭子、白井治、松下慶浩、吉原誠、中川啓子、締めくくりの語り／武田則明

コメンテータ／垂水英司、森栗茂一、森崎輝行

＜閉会＞水谷元、有光友興

■ 情報コーナー

●こうべまちづくりセンター・連続シンポジウム（水谷ゼミナール以外）

・場所：いずれも、こうべまちづくり会館(TEL.078-361-4523)

◆再開発シンポジウム（仮称）

・日時：２月10日(木)13:30～17:00

・内容：<第１部：西神ﾆｭｰﾀｳﾝ研究会>「西神ﾆｭｰﾀｳﾝの歴史と建設」／大海一雄、<第２部：再開発研究会>「元気の出る都市再生とまちづくり・復興から次世代へ繋ぐまちづくり」、問題提起／乾亨、現地報告／天宅綾･･渦が森台、野崎隆一･･明舞団地、<第3部：都市基盤整備研究会>「神戸市内の都市再生」

◆まちづくり法制研究会

・日時：２月10日(木)18:00～21:00

・内容：「震災後、建築基準法はどう変わったのか～安全・安心のための取り組みと課題～」

◆阪神白地･まちづくり支援ネットワーク

・日時：２月11日(金)18:00～21:00

・内容：テーマ「北京と京都 歴史都市の保存と再生について」

報告１／「北京の街区空間の変容と保存と再生について」鄧奕、報告２／「京都の街区空間の変容と保存と再生について」小浦久子、ｺﾒﾝﾃｰﾀ／久保光弘、江川直樹

◆神戸防災技術者の会（K-TEC）

・日時：２月13日(日)13:30～17:00

・内容：テーマ「新潟県中越地震から学ぶ」、神戸防災技術者の会からの報告、基調講演「2004年自然災害をふりかえって」、阪神･淡路大震災の教訓は中越地震で生きたか、ディスカッション、シンポジウムから学んだこと／笹山幸俊

◆神戸大学まちづくりｱｰｶｲﾌﾞｽﾞ研究会

・日時：２月14日(月)18:00～21:00

・内容：テーマ「神戸の地域まちづくり～これまでとこれから～」、<基調講演>／佐藤滋、<パネルディスカッション「まちづくりアーカイブズ構築への期待と課題」>ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀ／安田丑作、パネラー／松原永季、森本米紀、浜田有司、ｺﾒﾝﾃｰﾀ／武田則明、小林郁雄、森崎輝行

◐「わかばと共に住みたいまち、住みやすいまちをめざして、2005年兵庫」

・日時：２月12日(土)13:30～17:30

・場所：兵庫県公館（神戸市中央区下山手通4-4-1、JR元町駅北へ約5分）

・内容：<ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ>ﾊﾟﾈﾗｰ／井戸敏三（兵庫県知事）、原口洋一（NHK神戸局長）、小林千洋（わかばﾁｰﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰ）、林まゆみ（兵庫県立大学助教授）、瀬戸本淳（建築家）、ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ／野崎瑠美（建築家）、<ｺﾝｻｰﾄ>伍芳（ウー・ファン）

・問合せ：兵庫県建築士事務所協会(TEL.078-351-6779、FAX.371-7913)

◐ きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm

◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局

〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内

TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp

銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129

編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2005年2月28日発行

月刊 きんもくせい

05年2月号
(50+36+NO. 23)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■被災したメデイアとして－ＮＨＫ神戸の震災１０年

原口　洋一（ＮＨＫ神戸放送局長）

震災10年の1月17日、私は新しい神戸放送局の1階オープンスタジオで朝を迎えた。スタジオでは、前日の午後6時から「いのち守るために」のタイトルのもとに30時間連続で震災10年の特集番組が進行中だった。メモリアルウォークで、中山手通りを歩いてきた市民のグループが、次々に立ち寄って生放送を視てくださった。

10年前の1995年1月17日、私は、東京・社会部のデスクにいた。被災した神戸放送局は、満身創痍の状態で1週間ほど持ちこたえたが、余震で崩壊のおそれありというので近くの小学校の敷地を借りて仮設のスタジオを造り全員が退去した。私は、その直後短い期間だったが、神戸に応援取材に入った。被災地・神戸と私とのささやかな接点である。

2000年6月、私は神戸で勤務することになった。震災5年が経過していた。この年の1月には、仮設住宅の入居者がゼロになった。街並みの復興が進むなかで、トアロードにあったNHKの跡地は、駐車場になっていた。「トアロードに早く戻っておいで！」という地元の切実な声を聞いて、私は、NHK自身の震災復興を急がなければと痛感した。

放送局の再建にあたって、大震災の第一報が、全世界に向けて発信されたトアロードの跡地こそ神戸放送局の原点だとの思いは、職員一同が共有していた。局舎の再建に時間は要したが、被災したメデイアとして、神戸放送局は、「いのちを守る公共放送」を改めて仕事の原点に掲げたい。冒頭に紹介した特集番組のタイトルにも、その思いがこめられている。昨年12月から始めた地上デジタル放送では、データ放送に「暮らし・安全情報」の項目を設け、地域ごとに災害時の避難所や休日・夜間診療所などを紹介している。

神戸放送局が、震災10年に向けて発信してきた番組に「震災メッセージ」がある。様々な分野の人に、震災の経験や教訓を語っていただいてその数は80人を越える。この制作プロジェクトが、このたび防災まちづくり大賞を受けた。評価を率直に喜びたい。

震災の記憶を伝え続けることも、神戸放送局の重要な任務だ。「神戸放送局がこの地にありつづけるかぎり、私たちは1月17日を忘れない」。震災10年の朝、私は、新会館を訪ねた方々と言葉を交わしながらそのことを自分に言い聞かせていた。

原口さんとのおつき合いは、2001年1月に開催しました「第1回世界震災復興ドキュメンタリー映像際」でお世話になって以来です。その後、2002年5月のニューヨークでの種まきの時も現地支局の取材を連絡していただきました。
いつも勝手なお願いをあのニコニコとした笑顔で聞いて下さり、ずいぶん助けていただきました。
本当に感謝しております。ありがとうございます。
いつまでも神戸放送局がある限り私たちも何かお手伝いができればと思っています。
（天川佳美）

■台湾－神戸震災被災地市民交流会

天川　佳美（実行委員会事務局）

阪神・淡路大震災から１０周年という記念の年に相応しい様々な催しがこの１月に開催されました。国連防災世界会議をはじめとして国際会議も数多く開催されましたが、我々は台湾・集集地震の被災地と交流をはかるために、地元住民やＮＰＯどうしの交流、震災をテーマにした台湾と神戸の映画上映会、復興を語るシンポジウムなどを、１月１４日～１８日の５日間、「台湾－神戸震災被災地市民交流会」として、神戸で開催いたしました。

昨年（2004 年）９月に神戸から台湾の「９２１（集集）地震」５周年の被災地へ、神戸市長田区の住民の方々を筆頭に学識経験者やまちづくり専門家など計１７名でお尋ねし、被災地各地を巡り復興の様子を見せていただき、それぞれの地区で復興に携わっている方々と意見交換をしてきました。そして今年（2005 年）１月、１０周年の神戸に台湾の被災地住民の方々をお招きいたしました。台湾からの来訪者は、被災地域住民とＮＰＯの方々、大学関係者、映画監督と出演者などの合計２９名です。

台湾の呉乙峰監督のドキュメンタリー映像「生命」と青池憲二監督の「野田北部・鷹取の人びと」の上映会やそれぞれの地域復興のシンポジウム、そして野田北部、真野、御蔵の各地での住民同志の交流会を開催いたしました。そして、様々な活動の交流の最後に、台湾のメンバーから新潟県中越地震の被災地への義援金をお預かりいたしました。（今回、台湾側の団長をつとめて下さいました、埔里のＮＰＯである新故郷文教基金会理事長の廖嘉展さんの文章を載せさせていただきましたのでご参照下さい）

訪台メンバーの団長をつとめていただいた野田北部まちづくり協議会の浅山三郎会長と事務局の天川佳美が２月１９日（土）、雪深い新潟県十日町市のＮＰＯ「結いの里」へお届けいたしました。

今後の台湾、神戸、新潟の震災復興交流のきっかけになることができればと思います。

以下に今回の交流会の資料を整理いたしましたので、一部ですが掲載いたします。

「台湾－神戸　震災被災地市民交流会」の開催
及び開催実行委員会の設立について

（趣意書）

阪神淡路大震災から来年１月で 10 年を迎えます。また、今年の９月には、台湾の集集大震災から５年を迎えます。この間、台湾と神戸は、同じ被災地同士として、震災復興に関しての情報交換や交流を深め、震災復興を進めてきました。

台湾と神戸がともに大震災の節目の年を迎えるにあたり、「台湾－神戸　震災被災地市民交流会」を開催いたしたいと考え、この度、そのための実行委員会を設立することといたしました。

この交流会では、震災ドキュメント映画の上映会や、シンポジウムを開催いたします。また、両被災地で行われる震災関連行事に相互に参加していきたいと考えています。

この交流会を通じ、「震災が残したもの」、「震災から学んできたこと」を、未来を支える若者たちに伝え、世界の多くの人々に発信していき、また、台湾と神戸相互の理解を深めていきたいと考えています。

2004 年 6 月 24 日

「台湾－神戸　震災被災地市民交流会」開催実行委員会

委員長　齊　木　崇　人

2004年9月「神戸から台湾へ」	
日付	内容
2004年 9月17日（金）	集合（関西国際空港出発ロビー） 関西国際空港　出発 台北（桃園空港）到着 台北市内巡りをしながらホテルへ 陳亮全先生、新竹氏等と交流
2004年 9月18日（土）	「台北101」見学 台中へ出発 石岡（ダム、お母さん合唱団等） お母さん料理店で晩餐
2004年 9月19日（日）	台中出発 草屯：金鈴園（都市型環境改善） 埔里：長青村（昼食共） 大雁渋水（産業と住宅再建） 桃米（生態（ｴｺﾛｼﾞｰ）村づくり） ※新故郷文教基金会廖嘉展氏と打合
2004年 9月20日（月）	桃米出発→日月潭 集集（駅舎、武昌宮）→濁水 北中寮（老人福祉、龍眼づくり等） 南中寮 商店街の復興（協調再建） 八仙社區（仙鹿布工房）
2004年 9月21日（火） ※921大震災より5年	霧峰光復国民中學校跡 921地震教育園開幕式典招聘 台北へ出発 自由行動
2004年 9月22日（水）	台北（桃園空港）出発 関西国際空港　到着 自由解散

2005年1月「台湾から神戸へ」	
日付	内容
2005年 1月14日（金）	台北（中正機場）出発 関西国際空港　到着 ・真野地区との交流 ・「三ツ星ﾍﾞﾙﾄ」ｲﾍﾞﾝﾄ参加
2005年 1月15日（土）	・真野地区視察 ・神戸の震災概要説明 ・新長田北地区等まち歩き ・御蔵地区との交流 ・野田北部との交流 野田北部との交流会
2005年 1月16日（日）	「震災記録映像上映会」 『再生の日々を生きる』上映 舞台挨拶 『生命（いのち）』上映 中華民国留日神戸華僑総会主催歓迎会
2005年 1月17日（月）	「1.17のつどい」参加 休憩 ・元町・南京町周辺視察 シンポジウム 「台湾−神戸それぞれの震災と復興」 神戸・トルコ・台湾被災市民交流会
2005年 1月18日（火）	淡路島 野島断層記念館視察 実行委員会主催晩餐会
2005年 1月19日（水）	自由時間 舞子ビラ出発 関西国際空港　出発 台北（中正機場）　到着

廖嘉展　新故郷文教基金会理事長　挨拶（平成17年1月18日）

皆様　こんにちは！

私たち台湾からの訪問団が、「台湾－神戸　震災被災地市民交流会」開催実行委員会のご招待により、阪神・淡路大震災１０年の記念行事や神戸の被災地で復興まちづくりに係る皆様との交流会などに参加することができましたことをとてもうれしく思っています。しかし、先月南アジアで起こった津波が人間に多大な被害をもたらしたため、私の心の中ではとても複雑な思いでいっぱいです。

大自然と比べて、人類はなんと小さく、そしてぜい弱であることを私たちは深く思い知らされました。人類は、人と人が、グループとグループが、そして国と国が、互いに両手を開いて、互いに抱きしめ、互いに助け合うべきだと悟ることができるのでしょうか？私たちは、互いに思いやりをもって助け合う新しい世紀がやって来るのを期待しています。そして今、この不確実な時代において、もっとすばらしい未来がやって来るように祈りたいと思います。

もっとも助けが必要な時に、いつも人類はその助ける能力を試されています。台湾９２１大震災の時に貴国より援助を頂いたことや、今でも長く続いている思いやりを感謝申し上げます。今回は、特にこの神戸の街で、私たちが皆様と暖かく交流できることに感謝を申し上げたい。

皆様が台湾へ来られる節は、被災して復興した地区にもお忘れなく来ていただきたいと思います。そこには皆様と同じように、もっとすばらしい未来を築くために努力し、人生に対して信心を持ち、熱情にあふれる一群の人々がいます。

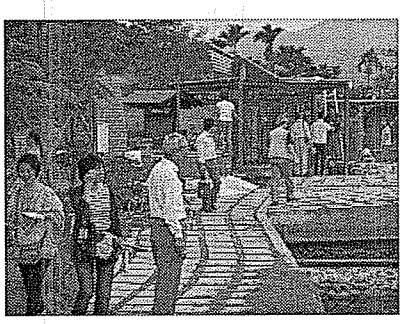
10年前の神戸、５年前の台湾、ともに地震で大きな被害を受け、政府や民間の力を得て、廃墟の中より立ち上がれたことをとてもうれしく思います、これらの経験はすべて私たちの共有の貴重な財産であります。

再度、皆様に感謝を申し上げたい。

最後に大切なお話しがあります。この日本でも昨年10月に新潟中越地震が起きました。その被害の甚大さは台湾にも伝わってきています。報道により知った範囲ではありますが、日本の中山間地域で起こったこの大震災の様子は、私たちが経験した台湾９２１大震災に非常に似通っていると感じており、その復興の道のりを思う時、とても他人事とは思えません。

少しでもお役に立てれば思い、今回来神したメンバーで募金をはかりましたところ。日本円で１６万円のご厚意が集まりました。できましたら、今後、新潟中越で営まれていくであろう、復興のまちづくりを支援する団体にご寄付いただければと思います。どうか「台湾－神戸　震災被災地市民交流会」開催実行委員会の皆さまに託しますので、よろしくお願いいたします。

廖嘉展（台湾　新故郷文教基金会理事長）



040919 埔里水の公園エコビレッジ



050116 台湾－神戸震災記録映像祭



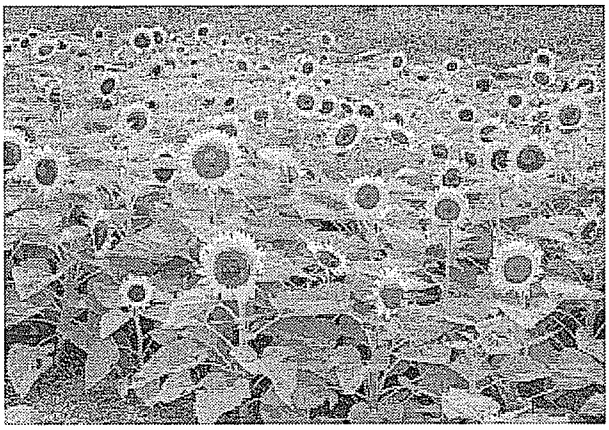
050117 神戸東遊園地追悼の集い

■たるみレポート（その５）五色塚古墳に花を咲かせる

柳田　浩子・大塚　映二（神戸市）

前回に続いて、活躍めざましいヤングミセス（?）によるレポートです。　（大塚映二）

垂水区では“季節の花があるまちづくり”をテーマに住民の方々と一緒に様々な取り組みを行っています。今回は、五色塚古墳に夏の「ひまわり」、秋の「そば」、春の「れんげ」と花を咲かせ、垂水の花の名所のひとつにしたいと活動を続けておられるＮＰＯ輝かすみが丘の小野豊子さんにお話を伺いました。



（ビッグスマイル！！）

○なぜ五色塚古墳に花を咲かせようと思ったのですか？

もともと私達は五色塚古墳のすばらしさを全国に発信するために、平成１２年より『五色塚古墳から明石海峡大橋を眺めつつ明石海峡の音頭を踊ろう』というイベントを毎年実施しているのですが、古墳の周囲は雑草が生えやすく、開催前の草刈が大変だったんです。そこで、花を育てることで雑草が防げないかな、さらに花の名所として五色塚古墳の景観もよくできないかな、と考えたことがきっかけです。

○花づくりの仲間について教えてください。

地域の方々がボランティアとして常時４０人ほど携わってくれています。石ころ拾いにはじまり、種蒔き、水やり、そして雑草とのたたかい…。夏は毎日３人ずつ当番でひまわりの水やりをしました。

花や古墳を愛していただける方ならどなたでも大歓迎、仲間になってもらい一緒に盛り上げていただきたいと、「れんげ通信」を発行するなど、広く呼びかけています。まだまだ募集中です！

○花づくりをされて、特に感じられたことは何ですか？

実は、なかなか花が育たなかったんです。抑えるはずだった雑草はどんどん伸びて、春のれんげはわずかしか咲きませんでした。夏のひまわりはまめな雑草取りと水やりのおかげで見事な花を咲かせることが出来ましたが、秋の“そば”は台風にあい全滅でした。花を育てることって難しいですね。

でも、花が咲いたときには人がたくさん集まってくれたんですよ。花も自由に摘んでもらい、みなさんに喜んでいただきました。花と親しんだ人たちが次の花づくりのお手伝いをしてくれれば、どんどん仲間の輪が広がるし、うれしいですね。

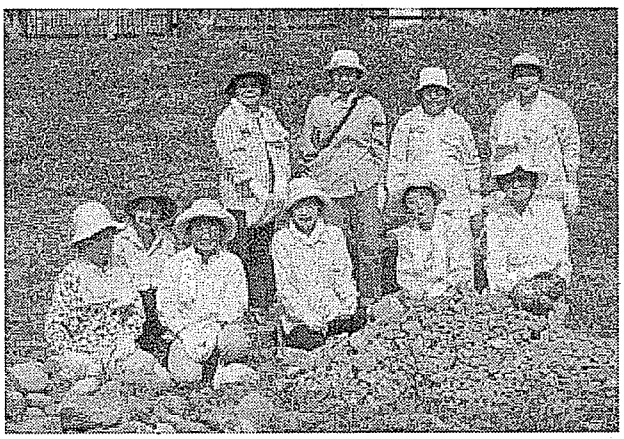
そしてなにより、花づくりをしたことで地域の方々が「花を咲かせよう」という一つの目的のためにともに汗を流し、交流が深まったことが本当にうれしかった。文化財なので整地方法にも制限がありますが、今までの反省を生かし、支援してくださる方々と知恵を出し合って活動を続けていきたいです。

○では最後に、今後の抱負や夢を聞かせてください。

これからも花畑の面積を増やすなど、古墳を舞台とした花づくりをさらに展開していき、たくさんの方に一年中花のある五色塚古墳に来ていただきたいですね。

そして、いつかこどもたちが花いっぱいのれんげ畑でねころんであそぶ日が来るのを夢見ています。

（柳田浩子／やなぎだひろこ）



（ともに汗を流した仲間たち）

■Dr.フランキーの街角たんけん 第11回 31年目の「田園都市」住吉・御影（中編）

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

私が町歩きを始めた約 20 年前は、御屋敷町の横綱といえば、その環境や景観面で、東京の鳥居坂や麻布だったように思う。

しかし、これらの御屋敷街が悉くバブル経済下で実体を失った今、住吉御影の山手地区の町並み・景観は、全国的に見ても貴重な存在となっている。

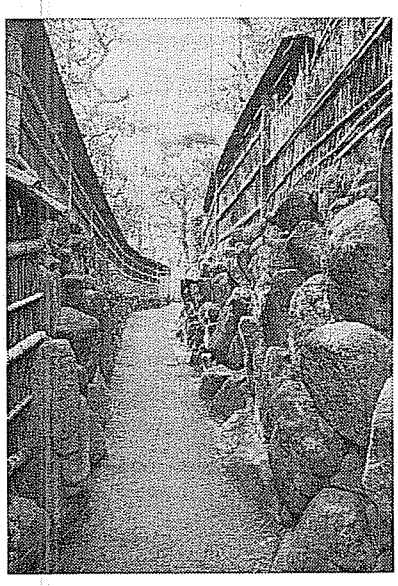
その魅力の素は、一つはなんといっても地場の御影石であろう。住吉・御影の町並みを歩くとき、いたるところで目にするのは宅地工事をすれば出てくる御影石を積み上げた石塀や擁壁である。そして、大変な手間をかけて維持されている生垣や庭木。これらと、どことなく農村地帯の面影を伝える細い街路との組み合わせが、「マイ散歩道」として内緒にしておきたいような空間を各所に作り出しているのである。

そして、震災などで数は減ったが、小寺邸、武田邸、旧小倉邸、そして旧乾邸というキラ星のような大邸宅から、下見板貼の小振りな近代洋風住宅、そして近代和風建築や江戸期の農家住宅、そして清家清、安藤忠雄といった現代建築家の作品まで、バラエティに富む住宅建築のストックが、この町の魅力を高めている。いっぽう、白鶴美術館（嘉納家）、香雪美術館（村山家）、小原豊雲記念館、世良美術館といった質の高いコレクションを有するプライベートミュージアムが集中し、アマチュア音楽家のための活動施設も多く立地していることも、他所では見られないこの地域の特徴だろう（詳しくは。市民まちづくりブックレット No.5「まちづくりと民間文化施設」（神戸東部市民まちづくり支援ネットワーク編）を参照されたい）。

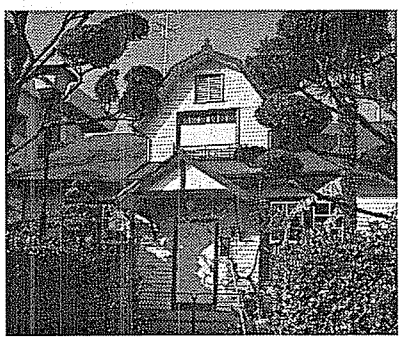
（追記）

一部で報道されたが、2月18日、近畿財務局神戸財務事務所は、神戸市との旧乾邸の管理委託契約について、2006 年 3 月末を期限として更新することを明らかにした。同日、保存要望の署名を同事務所に提出した市民団体「六甲山麓文化を生かそう＜旧乾邸＞活用応援倶楽部」のメンバーとの面談の中で明らかにしたものである。

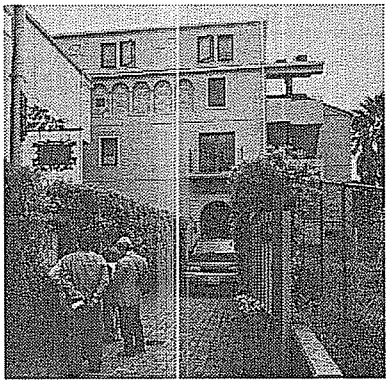
短いとはいえ貴重な1年間の猶予期間ができた。正念場である。旧乾邸のムーブメントに関わる一人として、ご支援、ご声援いただいている皆さんにこの場をお借りしてお礼を申し上げます。　　（この項つづく）



御影山手の小径



住吉山手にあるバンガロー住宅



民間文化施設の例：「御影サーラ・デ・ムスク」

交差点の落とし物・5

囲

中川　紺

入れ物をひろった。

ずんどうのお猪口みたいな形で、小さな足が三つついていた。質感は陶器のようだ。外も中も鮮やかな青色で、白く細い線で幾何学模様が描かれていた。こんな交差点のまん中に誰が落としていったのだろう。でも入れ物には、落ちて欠けたような部分は全く無く、まるで拾わせるために置いていったように見えた。

「小物入れにいいな」

そのまま持ち帰ってしまった。

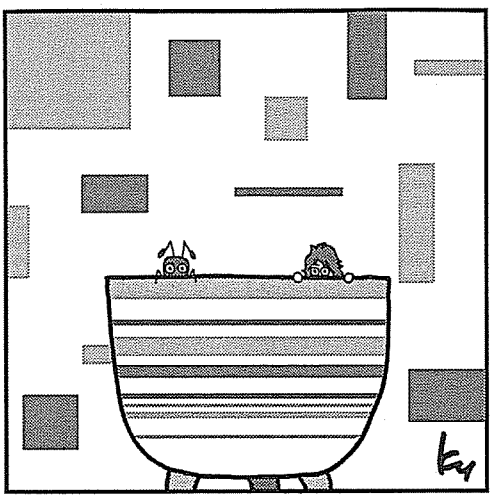
●●

いつものように、胃の痛みで一日が始まる。仕事を休みたいと思うけど、会社の人の反応を考えると、それはできなかった。

去年父親が亡くなってから、社内の私に対する雰囲気はさらに悪くなった。もともと親の紹介、というよりもコネで入ったうえ、仕事のおぼえも悪い私は、何となくお荷物のような存在になっていた。向いていない仕事だと思うが、五年間辞めることができなかった。きっかけが無かったし、何より転職のあてが皆無だった。田舎の母は、父が選んだ会社に私が入ったことをとても喜び、そして今でも私が楽しく仕事をしていると思っている。

口紅を塗って、立ち上がる。机の上のカギを手にして、昨日拾った入れ物を見ると、いつの間にかアリが紛れ込んでいて、銀のピアスのまわりをウロウロ歩いていた。

●●



残業して帰宅すると、アリはまだ入れ物の中を歩き回っていた。じっと観察していると、出ようとはしているのだが、どうやら内側の壁が滑るのでのぼることができないらしい。触ってみると外側に比べてかなりつるつるとしていた。

出られないアリの様子が面白いので、砂糖水を数滴エサ代わり入れて、飼ってみることにした。

数日経つと、アリは以前ほど積極的に壁をのぼろうとしなくなっていた。とりあえずはエサがあることに落ち着いてしまったのか、時々思い出した様に壁に挑戦するものの、あとはピアスの谷間を歩き回っているだけだ。

私みたい、と思った。

出たくても出られない壁に囲まれて、いつの間にか壁を越えることもしなくなって。

「あんたも出るのが怖くなっちゃった？」

アリはそんな言葉を無視してひたすら入れ物の底を歩いていた。

●●

机の上の携帯を取ろうとした拍子に手があたった。落ちる時に椅子の角にぶつかり、パリンと音がして、アリの入れ物は見事に二つに割れてしまっていた。

中のアリは少し離れたところに飛ばされて、外の世界に一瞬だけ戸惑った様子を見せた。けれどすぐにどこかに向かって歩きはじめ、家具の隙間に消えてしまった。

そんな事があってから、ほどなく会社は不渡りを出して、倒産に追い込まれた。

私は今、失業保険をもらいながら、これから何をするのかを考えている。

とにかく、自分で決めようと思う。

あのアリみたいにちゃんと歩けるかどうかは分からないけれど。

（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■水谷頴介先生13回忌記念シンポジューム

－3たび、町住区をめぐって：リレートーク「まち住区と震災復興・都市再生・遊芸空間」－

水谷頴介さんは、私たち支援ネットワークの祖というべき先生で、神戸・阪神間で都市計画と建築の分野で活躍され、1993年2月に亡くなられました。その半年ほど前（92年10月）から2か月に1度、弟子（と自称する者とその友人・知人たち）が集まり、お互いの仕事・研究・業績・失敗などを発表・報告しあう形で、「都市と建築」について勉強・議論をしてきています。

1993年7月10日に追悼記念シンポジウム「水谷論文＝町住区をめぐって」を、2001年9月15日に水谷ゼミ10周年記念シンポジウム「再び、町住区をめぐって」とすでに2回にわたって、水谷先生の博士論文「町住区と市街地再構成計画の研究」（1992年12月）にちなんだ集まりをしてきて、赤本、青本と呼ばれる同時開催したパネル展などの記録集も発行してきました。

そして今回、2005年2月11日こうべまちづくり会館で、水谷頴介先生13回忌記念シンポジウム「3たび、町住区をめぐって：リレートーク　まち住区と震災復興・都市再生・遊芸空間」を開催しました。当日資料として、これまでの水谷ゼミで発表された震災復興や都市再生や遊芸空間に関するものを再整理した冊子を、もちろん、黄本として作成、年末から後藤さんのGU計画研究所で働いている子息の水谷元くんが編集を担当しました。

この催しは、こうべまちづくりセンター・研究ネットワークフォーラム（2月10日～14日）の一環として行われたもので、パネラー・ゲスト・観客総勢70名でした。事前にろくな約束もしていなかったのに、パネラー・ゲストがすべて出席してくれました。さすが水谷先生の威光と思いました。（小林郁雄）





■ 情報コーナー

●被災者復興支援者会議Ⅲ総合フォーラムー安全安心な社会の構築に向けてー

・日時：3月19日(土)14:30～16:30
・場所：ラッセホール2階ローズサルーン(神戸市中央区中山手通 4-10-8、JR･阪神元町駅を北へ徒歩8分)
・内容：最終提言「安全安心な社会の構築に向けて」の総括報告、パネルディスカッション、等。コーディネータ／室崎益輝（(独)消防研究所理事長）、パネリスト／加藤恵正（兵庫県立大学経済経営研究所所長）、岩堂美智子（大阪市立大学生活科学部教授）、小林郁雄（阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク世話人）、立木茂雄（同志社大学文学部教授）、速水順一郎（(社)兵庫県子ども会連合会常務理事）
・問合せ：被災者復興支援者会議Ⅲ事務局（TEL. 078-362-4218）

●日中交流･復興クルーズ2004「記録映像上映会＋報告会」

・日時：3月20日(日)14:00～16:00
・場所：こうべまちづくり会館2階ホール（神戸市中央区元町通4丁目、TEL. 078-361-4523）
・料金：無料（報告書は300円）
・問合せ：日中交流･復興クルーズ2004 実行委員会（マイチケット内、TEL. 06-6304-7800）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm

◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2005年3月56日発行

月刊 きんもくせい

05年3月号
(50+36+NO. 24)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■不可能を可能にする和の力

重川　希志依（富士常葉大学環境防災学部）

19年ぶりという大雪の季節がようやく終わり、新潟県中越地震の被災地では雪解けを待って本学的な復興がはじまります。地震発生からすでに半年近くがたちましたが、被災地の一つである小千谷市では、毎朝8時に出勤し、役所を出るのが午前1時ごろ、睡眠時間は3時間という生活を余儀なくされている職員がいまだにいるのです。この地震では、災害対応に忙殺される被災地職員を支援するために、全国から多数の応援職員が派遣されています。

地震発生直後には、倒壊家屋やがけ崩れ現場からの人命救助、孤立した集落に取り残された住民の避難支援活動に、全国から駆けつけた多数の消防隊員が従事しています。その活動の中で象徴的だったのが，母子3人が車両ごとがけ崩れの下敷きとなった妙見堰の災害現場から，2歳の男児が無事救助された事例です。この救助活動が行われた10月27日，偶然私は小千谷市消防本部に居合わせ，緊急消防援助隊のレスキューチームを乗せた車両が次々と出動していく現場を目の当たりにしました。消防署のガレージは全国から応援活動に来た緊急消防援助隊員の宿営地となっており，消防署の周辺には多数の応援車両が集結していました。

地震発生から既に4日が経過しており，生存者救出はかなり厳しい状況という重苦しい空気の中，出動から数時間後，2歳の男の子が生きていたという報に接したときは，信じられない思いとともに，目の前から出動していった全国の救助隊員の努力に、頭の下がる思いで一杯でした。被災地で活動する応援隊員のみならず、留守を守る隊員の力があったからこそ、このように過酷な災害現場で奇跡的な人命救助活動をすることが可能となったのだと思います。

消防活動以外の様々な業務でも他都市からの応援職員なしにはとても災害を乗り切れなかったという声をたびたび聞きました。私も偶然、小千谷市の災害対応を応援することになりました。当初は建物の被害認定調査とり災証明書の発行，さらに被災者のくらしの再建に向けた支援業務などを手伝いながら痛感したことは，同じ行政の仕事に慣れている職員の応援がいかに重要かということでした。

例えば建物の被害認定調査では、担当課のほぼ全職員が土日もなく、日の明るいうちは外に出て被害調査をし、日没後は深夜までデータの整理やその他の業務をこなすという日々が半月以上続きました。20名前後の職員が15日間で数万棟の建物を見てまわるということは、物理的に不可能です。この作業を支援するために，全国から多くの行政職員が派遣されました。また、り災証明書発行業務の際に使う整理券づくりは、地元につくられた災害ボランティアセンター協力を依頼した結果，派遣されてきた若者が手際よく作業を進めてくれました。

雪解けに伴い、復興作業が本格化すれば再び復旧復興業務に忙殺される職員も多くなることでしょう。災害時には市民・企業・ボランティア・行政・専門家それぞれがお互いに得意とする知識や技術を出し合うことで，不可能と思われることを可能にすることを改めて実感した新潟県中越地震の被災地でした。

■『コンパクトシティ』を考える 12

－「地方自治の母国」英国の地方自治の現況

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

コンパクトシティを考える上で、都市の自治は重要な要素である。英国は「地方自治の母国」として呼ばれてきた。しかし、現状は中央集権型国家である。英国の地方自治はどのようになっているかについて、今回考えていきたい。

1．英国独自の「ローカリズム（地方自治）」

ヨーロッパの中世以降は、国家主権を確立し、絶対主義国家として覇権を競い、近代化の扉を模索した時代であった。大陸諸国の君主が強権による国家の統一をできたのは、強い軍隊と官僚制による中央集権の統治の仕組みであった。

英国は 15 世紀にフランスとの百年戦争に敗れ、大陸とのつながりをたたれ、「島国」としての道を歩まざるを得なくなった。しかしそれが大陸諸国と異なった社会制度を生み出した。

四方を海に囲まれた天然の要塞があったため、陸軍よりも強い海軍を必要とした。やがて海洋国家として世界の海をを征服し、覇権国家となった。

もう一つは、陸軍の力を背景とする官僚制度が育たず、特色のある地方自治が形成され、議会主権の近代民主主義国家を作り出したことである。中央政府は地方（カウンティ）の長官で裁判権を持つ「治安判事」を配して統治してきたが、治安判事には地元の有力者である土地貴族のジェントリを選ぶ暗黙の了解があった。このため、中央政府が不当に地方自治体に対して関与や統制せず、「ローカリズム」すなわち地方自治が発展した。また都市は国王からの特許状で自治を認められてきた。18 世紀には、自治体は自らの財源で地域的に必要な施策を整えてきた。当時の英国を支配してきたのは、個人主義と自由主義であった。そこでは財産権の尊重、契約の自由、身体の自由等の個人の基本的自由が強調され、国家は自由放任主義を基調としていた。国家の干渉が特に問題になることはなかった。この地方自治はアメリカ植民地にも移植されて発展していった。

なお、ジェントリは、歴史的に英国革命（ピューリタン革命・名誉革命）の主役も演じている。

2．近代地方自治制度の確立

産業革命を経て、工業化の進展と資本主義の高度の発達に伴い、都市部には労働者や産業が集中し、社会経済は著しく複雑化し、多くの都市問題と経済不安を引き起こした。このため、中央政府は従来の自由放任の政策から転換して、新たに社会保障制度の確立や経済の統制などの公益的見地からの干渉を加えざるを得なくなった。

都市化の進展で増大する行政需要に対して、「都市自治体法(1935)」が定められ、個別の行政組織を所管する委員会制度が採用された。それまでの行政サービスは、地域のジェントリ、国教会聖職者などの有力市民による別々の目的を持つ複数の団体によって提供されてきた。都市の人口が増え、これらの目的別の種々の組織も大きくなってきたため、それぞれを統一した一つの組織にまとめる必要が生じてきたからである。

19 世紀末に近代的地方自治制度が確立する。地方団体は、地方圏はカウンティ（県に相当）とディストリクト（市町村）の２層制がしかれた。

地方自治の仕組みの伝統的な特徴は、地方議会が主体であることである。選挙で選ばれる地方議員で構成される議会が、自治体としての法人格を持ち、本会議を最高機関とする。地方自治体は「カウンシル(Council)」と呼ばれるが、直訳すれば「議会」である。

このため、日本と大きく異なり、自治体には選挙で選ばれる知事や市長に該当する首長が基本的に存在しない。セレモニーや賓客の応対は、議長が務めるか、多数党の指導者で施策の決定や運営に影響力を持っているカウンシル・リーダーと呼ばれる議員が務めている。

議会の下に各種の委員会があり、合議制で所管分野に関する政策決定・実施を行う機関になっている。各委員会では、委員長、委員（議員）、執行（行政）部局の部長等が出席し、そこで活発な議論がされている。委員会では、議員からの質問は委員長が主に答弁し、答弁できない内容は部長等が答弁することもある。このように英国の地方議会は執行部局と独立ではなく、議会が執行部の上位にあり、執行部を統括する形式である。

3．素人主義でボランタリーな地方議会議員

地方議会の議員は小選挙区から選出され、ほとんどが保守党、労働党、自由民主党の政党に属している。選挙戦は党を中心に行われるため、政党の拘束力が強い。議員は、少額の手当は受けるが、原則として無給のボランティアである。かつてのジェントリのように、別の収入源となる仕事を持ち、地域に貢献したいという熱心なボランティア精神の高い人しかできない仕事である。また、伝統的に議員は、職業とするプロではなく、普通の市民であるべきとする「素人主義」が浸透している。議員活動は、無報酬である上、委員会が夜間に開かれる場合が多く、時には仕事を休んで会議に出席しなければならない。一般住民にとって必ずしも魅力的な仕事ではなく、積極的に議員になりたい人は少ない。

近年の地方行政の政策は複雑化・多様化・専門化してきている。素人であり非常勤の議員が、委員会という「顔が見えない」ところで政策決定を行うことに、不透明性と説明責任の欠如など、市民の間には不満を強く持つようになってきている。

4．「地方自治の母国」の現状

英国の地方自治も中央政府から強い関与を受けている。日本では、日本国憲法で地方自治が保障され、法律に反しない限り条例を制定することができ、独自の行政を展開している。しかし、英国では、憲法に地方自治について規定が無く、独自の立法権と行政権を持つことができず、国会が定めた法律に認められる限りにおいてのみ条例を制定し、行政を実施しているに過ぎない。言い換えれば、法律で認められない行政サービスや「上乗せ横だし」の規制行為は、越権行為と見なされる。

財政的には、国から約９割が一般補助金（地方交付金：日本の地方交付税）として、標準支出に基づいて補助される。ただし、１割程度の特定補助金は、自治・建設・国土・環境のに関わる業務を担当する環境省が握っており、都市行政に関しては財政的には影響を強く受けている。また、実際の行政の執行も、各法律を所管する政府の各省から指導、承認、認可などの形で中央行政のコントロールが拡大している。

英国の国政選挙では、保守党と労働党の間で政権交代が頻繁に起こるため、選挙の公約実現のため法律の制定や改正がその都度行われるのが常である。保守党は小さな政府を目指し、労働党は地方自治尊重の立場をとる。地方行政は、政権交代の度に政策の変更で組織の枠組すら簡単に変わる影響を受けてきた。サッチャー政権下の 1986 年には、2 層制であった 6 つの大都市圏のカウンシル（県）が廃止され、36 の大都市圏ディストリクトが設置された。また、大ロンドン・カウンシルも廃止され、シティを含む 33 の特別区の 1 層制構造となっている。

5．新しい地方自治制度の試み

1997 年に登場した労働党のブレア政権は、選挙公約（マニフェスト）実現に向け、「平等と自由を重視し、個人が自律と責任を自覚し、市場の活用と抑制や分権化を推進する政策への改革」に踏み出した。英国を 12 の地域に分割し、分権化の推進のために、12 の地域議会と議員の選出、地域開発公社を新たに設置する。特に、2000 年に首都ロンドンを統治する新しい自治体「グレーター・ロンドン・オーソリティ」を誕生させ、歴史上初めて公選のロンドン市長を誕生させた。また、25 人の議員は、常勤で有給とし、高度な専門性と実務に精通した議員活動ができるようになった。ほかの自治体でも、直接公選首長を置くなどの新たな制度への移行を義務づけた。さらに、地方行政への住民の直接参加の手法の展開に意欲を示している。

■震災10年を過ぎて、いくつかの提言

小林郁雄（神戸山手大学教授、まちづくり会社コー・プラン アドバイザ）

2005年3月17日で、阪神・淡路大震災からの復興都市計画決定（大部分の震災復興都市計画事業の）から、10年になった。1．17が震災祈念の10周年で、多くの行事が開催され、多くの反省・再起、被災・復興の検証が発表された。

我々都市計画プランナー・まちづくりマネージャーにとっては、3．17がもって瞑すべき10周年記念日である。あの大騒ぎからなんとか復興都市計画に取り組む体制としてのまちづくり協議会システムが確立し、現地相談所と専門家派遣と合わせた3点セットがその後の復興都市計画・まちづくり事業の基本なった。

兵庫県の復興10年総括検証・提言ではまちづくり部会の「復興市街地整備事業における取り組み」の検証担当委員として、１０ヵ年の総括と今後への提言～つね日ごろからの「まちづくり」の重要さ～を、以下の4項目10提案にまとめた。

（1）災害時における復興市街地整備事業のあり方、進め方について

～復興事業は早期・柔軟・多様性を～

1.二段階都市計画決定による事業実施は、平常時のシステムとして参考にすべきである。

2.住民には、生活再建のために、転出を含めた多くの選択肢を提示すべきである。

（2）復興市街地整備事業の実施にあたって

～まちづくり協議会を支える専門家派遣などの支援～

3.専門家を早期にかつ適材適所に派遣する制度が必要である。

4.震災復興では、事業に柔軟に対応できる基金制度が必要である。

5.公団、公社等の公的セクターの経験を継承することが必要である。

6.被災住民を現地に残す工夫と震災前からの歴史、文化、街並みなどの特長を活かしたまちづくりが大切である。

（3）住宅供給、市街地などまちの復興と面整備事業について

～まちづくりとすまいづくりの総合化～

7.復興市街地整備事業では、地域を取り巻く環境変化への対応と特色あるまちづくりが必要である。

8.被災地復興、被災者支援には、市街地再開発事業のような重装備な事業ばかりでなく、被災者などが共同で建替えることを支援する「被災建物共同建替事業」のような制度の活用が有効である。

（4）防災まちづくりの推進

～まちづくりプラットフォームによる安心安全まちづくり～

9.密集市街地の災害危険度評価とその結果の公表が必要である。

10.まちの課題等の情報交換、ワークショップ、リーダー養成などを行う拠点として「まちづくりプラットフォーム」を設置し、住民主体の防災まちづくりを推進すべきである。

1月15日～16日にメモリアルコンファランスin神戸Xが人と防災未来センターで開催され、分科会セッション4「すまい・まちの再建は、どう進んだのか？」のコーディネータを担当した。パネラーに、越澤明（北海道大学）、林泰義（計画技術研究所／NPO玉川まちづくりハウス）、淺野幸子（まちの幸せ探求室／元まち・コミュニケーション）各氏をお呼びし、地元からは鳴海邦碩（大阪大学）、石東直子（コレクティブハウジング事業推進応援団）、中島克元（神戸市まちづくり協議会連合会）各氏という豪華キャストであった。

高齢化という21世紀の大課題を先取りした大都市密集市街地での被災において、震災でのすまい・まちの再建でまちづくり協議会や専門家による支援ネットワークの果たした役割について、2日間の討論の結果、以下の6項目の提言をまとめた。

（1）集合住宅などの協同スペースが重要である。時間的にも空間的に柔軟にそれを運営していくことがもっと重要である。

～2段階住宅供給としてのソフトな住宅供給、安心居住の住まい方を進めていくことが必要であり、下町長屋居住のような形が鉄筋コンクリートの集合住宅にもほしい。

（2）社会実験を重視し、制度化される前にでもこの指

止まれ式で実験的な取り組みをモデル的に進め、一般化へつないでいきたい。

～阪神の経験をどう学び、住民の日常的な意識づくりにどうつなげるか、モデルから一般化へのブレークスルーを探る。たとえば、行政役人こそが地域の人たちと一緒にやるコミュニティのコンサルタントになるなど。

（3）街区基幹施設（公園や道路）不足地区での行政的な防災まちづくり対策を進める。そのための法律的な事前準備をしておかなくてはいけない。

～小規模区画整理・密集事業道路整備・防災公園などの阪神での経験などから区画整理事業は地域まちづくりのための土地の交換分合の制度に変わった。さらに、事業でないとお金が出ない、計画段階からお金が出るしくみがいる。

（4）新しい公共をになうための行政・市民・NPOの新しい関係をつくらねばならない。自律と支援のとても難しい関係のなかでサポートしていく方向が必要である。

～松本地区のせせらぎは、２０００人の清掃活動・再生水の活用実験など、まちづくり協議会の基本活動になっている。面倒で手の掛かるもの（せせらぎ）が地域の人たちのコミュニティをつくる。まちづくり協議会は住民の要望にタイムリーにとりくむ組織であり、合意がなくても日常は過ぎるが、合意形成は納得のプロセスである。

（5）地域まちづくりの根幹は、地域経済である。地域における経済循環とつながるまちづくりが重要である。

～阪神大震災で今なお残された課題であるが、台湾921 地震からのまちづくりや新潟県中越大震災での主要課題である。

（6）防災「まちづくり」にほんとうには誰も取り組んでない。耐震改修や景観問題の前提であり、まちの構造をどうするかである。

～一枚の紙に書いたわがまち（小学校区程度）のアジェンダ（指針・希望・魅力など）が欲しい。年に１回まちの健康診断をみんなでし、壁に貼っておくことから始めよう。

この 10 年の震災復興まちづくりとは結局何であったのか？私の結論は「いろいろな地域における、さまざまな市民による、まちづくりプラットフォームとまちづくりネットワーク運動」であったのではないかと「季刊まちづくり５　震災復興10年のまちづくり」（0501、学芸出版社）に書いた。

阪神大震災からの復興において、まちづくり（運動）でわかったことは、「地域力・市民力・場所力」の３つの力が大規模災害に対し「うたれ」強い都市の基本であるということである。

災害からの被害を最小に抑えるのは「地域の力」である。常日頃のまちづくり活動の積み重ねが非常時の対応力となる。どのような災害の救助救援でも、その地域での住民を中心とした助け合い以外に直後には頼るものはない。すなわち「自分でできることを、自分でする」ことであり、その時「やってないことは、できない」のである。

地域力に限界があり、持続性や展開性に問題があることは明らかで、地域を超えて普遍的な課題を扱うＮＰＯ・NGOやボランティアの協力支援が必要不可欠である。それが「市民力」であろう。

行政や企業、他地域や外国からの救援支援は、そうした「地域の力・市民の力」へのバックアップとして、はじめて効力を果たす。

さらに、地域力と市民力が機能するためには、それらが顔を合わせ出会うことのできる被災地などの現場での「場所の力」が鍵を握っている。その「場所の力」が介在することによって、地域力は「プラットフォーム」を現場にもつことができ、市民力は「ネットワーク」を現場につくることができる。だから場所力は現場力といってもいいかもしれない。

プラットフォームとは、誰もが自由にやってきて、そこからおもいおもいにめざす目的に向かって共に出発する場所である。まちづくりでは自由な論議、自主的な活動ができる場・機会・集まりとしての「まちづくり協議会」がその役割を担い、「自律」がその基本である。

ネットワークとは、構造的なピラミッド型ではなく、網目状に何となくつながった（インターネットのwwwが最もその状態を明確に示している）支援のシステムで、「連帯」がそれらを支える原点である。

こうした「自律と連帯」を合言葉にした、まちづくりプラットフォームとまちづくりネットワークこそが市民活動社会の基本構造である。大震災では、＜まちづくりプラットフォーム＞と＜まちづくりネットワーク＞が、被災地の「現場（リアリティ）」に確立され、被災民の「細部（ディテール）に至るまで行き届くことが＜復興＞である。

■Dr.フランキーの街角たんけん 第13回 31年目の「田園都市」住吉・御影（後編）

中尾 嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

今月は一転、いつもの街角たんけんモードに戻る。

深田池から翠の深い径を抜けると、大林組ゲストハウスの門前に出る。もとは在阪の大手建築業の雄・大林組第２代社長・大林義雄の邸宅として昭和７（1926）年に竣工した。メリヤスで財を成した古川定治郎の所有地を引き継ぎ、建築家の安井武雄に洋風住宅の設計を依頼。その安井の原案に、社長の命を受けた木村得三郎が手を加えて、今日の姿に仕上げた（写真１）。木村は、大林組で主に劇場建築を担当したデザイナーである。洋館に併設して、西川一草亭指導、名匠・北村拾次郎の手になる和館がある。ちなみに、阪急御影駅のホームから見える大林邸内の中国風の楼塔は古川氏の時代に建てられたもの。

大林邸から、阪急神戸線を跨いで南側へ降りる。ここからは居住表示に昔の字名がかろうじて生きている。ちなみにこのあたりは「上ノ山」という。

上ノ山から鵯越の逆落としを髣髴とさせるような急な坂道を下り、老舗予備校の前を過ぎる。都市計画で新設された４車線道路を越えると御影町御影。小磯良平画伯の手ほどきを受けた世良女史の個人美術館や、スクラッチタイル貼の元県立病院長宅の洋館、国登録有形文化財の木水邸（写真２）などが建ち並ぶ、阪急電車の駅前とは思えない、落ち着いた一角である。

木水邸は、京都高等工芸学校（現京都工芸繊維大学）で武田五一の教えを受け、住友本店臨時建築部で室内装飾を主に担当していた小川安一郎の作品。小川は、紅塵荘（昭和３年）などスパニッシュスタイルの邸宅を阪神間で多く手がけたことで知られるが、ここ木水邸は施主からの依頼で、ドイツ壁の荒々しい印象の外観となっている。

バス道を渡ると、律令制の時代を思い起こさせる「郡家」地区である。実際、過去の調査では弓弦羽神社の北側で奈良時代の須恵器や建物跡が発掘されている。同神社の東側には江戸時代創建の民家と、香雪美術館・村山邸が、道を挟んで御影石の塀をめぐらしている。小さな御影石を積んだ外構は、震災前のこの地域で広く見られたしつらえだった。ただし、震災後、区画整理にともなって道幅は以前よりもかなり広くなった。

坂本勝比古氏の研究では、村山龍平は、明治 33（1900）年ごろにここの地所を購入しており、御影・住吉地区の御屋敷街形成の先鞭をつけたことになる。明治41(1908)年、まず真壁造の洋館を建設した

村山邸洋館は、大阪で活躍した建築家であり事業家の河合幾次が設計し、竹中工務店の施工で翌42（1909）年に完成した（写真３）。内部装飾は、明治期に活躍した「装飾師」小林義雄が関与したといわれ、龍平翁ゆかりの薮内流に因んで竹をモチーフに取り込んだ大胆な意匠が見られる（非公開なのが惜しまれる）。大正８年には藤井厚二設計の和館が完成している。こちらも阪神間随一の数奇屋住宅である。（いずれも国登録有形文化財である）。

先人たちが築き守ってきた豊かな住環境を堪能したあと、一休みするなら御影駅近くの喫茶店「ダンケ」に行きたい。まさしく「バタ臭い」バターブレンドの珈琲を味わって、御屋敷街探険の余韻に浸りたい。　（この項、終わり）



写真１　大林邸（出典「工事画報昭和７年版」大林組）

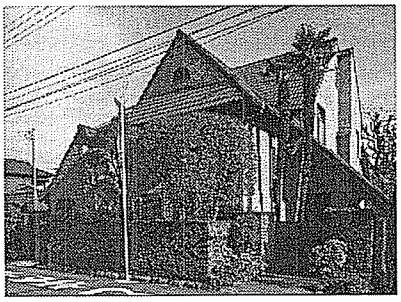


写真２　木水邸

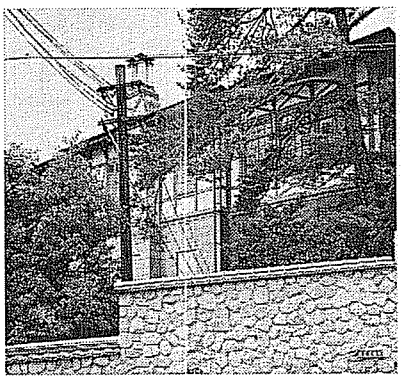


写真３　村山邸

交差点の落とし物・6

霧

中川　紺

何かをひろった。

地面を探っていた手に触れたそれが何か、葉子にはすぐには分からなかったが、顔を近付けて、ようやく自転車の鍵だと判別できた。霧はまったく晴れる様子がなかった。薄紫の濃いもやが葉子の視界を三十センチくらいにまで狭めてしまっていた。

●●

いつの間に、こんな霧になってしまったのか、葉子にはまったく思い出せない。気が付けば視界は遮られ、それどころか音すら何も聞こえない。自分がいる場所がどこなのかさえ分からなかった。

霧には手ごたえは無いのに、まるで何かに閉じ込められたような圧迫感が押し寄せて来る。思わずしゃがみこんで地面に触れた手が見つけたものが、自転車の鍵だった。

●●

自転車……そういえば私、自転車に乗っていたんだ。少し記憶が蘇って来た。でも霧の中を探る葉子の手には自転車どころか何も触れることは無かった。

その時。無音の世界で、微かな音がした。

地面に何かが擦れているような音は、よく聞いてみると車輪が回転している音だった。

誰かが近くにいる。葉子は思わず「すみません！」と声をあげた。しかし音の主は何も答えなかった。

「あのう、ここF町ですよね。何だか急にこんな霧になってしまって……そっちは大通りに出る道ですか？　それとも……」



車輪が回転した。相変わらず声は無かった。このまま霧に閉じ込められているよりは、と葉子は音がする方へ吸い寄せられるように近づいていった。車輪の音は近くなったり、遠くなったりしたが、不思議と何にもぶつかることもなく、道を歩いていた。

キッ。

ブレーキがかかった。葉子を取り囲んでいたものは少しずつ薄くなっていった。まわりに見慣れた風景が浮かんでくる。しばらくして自転車の後輪が見え始める。続いてサドル。あれ、私の自転車だ、これ……。そのまま急速に霧は晴れていった。目の前に現れた「葉子の自転車」には、誰も乗っていなかった。手に持っていたはずの鍵が、いつの間にか自転車に戻っていることに気づいた途端、葉子の意識は遠のいていった。

●●

「……こ……よ…こ……ようこ」

信介の声だった。

視界がだんだんはっきりしてくると、夫の信介の他にも母や祖母が心配そうにのぞきこんでいるのが分かった。

病院のベッドの上で葉子は、自転車で買物に行く途中で、交差点で飛び出して来た子どもをよけて転倒したこと、半日意識不明の状態に陥っていたことを知らされた。

「……ねえ、自転車、どうなった？」

「車輪がパンクして、フレームも少し歪んじゃってる。それと鍵んとこが随分激しく壊れてて。もう新しいの、買ったら？」

「……ううん。あれ、修理する。もっと乗ってあげたいから」

そう言うと葉子は目を閉じた。霧の中で回転する車輪の音が聞こえてきた。（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第４２回連絡会報告
～「北京と京都：歴史都市の保存と再生」～

・日時：２月11日(金)18:00～21:00
・内容：テーマ「北京と京都 歴史都市の保存と再生について」
報告１／「北京の街区空間の変容と保存と再生について」鄧奕、報告２／「京都の街区空間の変容と保存と再生について」小浦久子、コメンテータ／久保光弘、江川直樹

鄧さん（清華大学）より、北京の胡同（フートン）が形成する街区構造について話を聞いた。元の都は大街（約 37m）と小街（約 18.5m）で構成され、その大街区が胡同（約 9.24m）によって分割され、細長い街区に大宅地が 10 戸（平民用は背割で 10 戸）が基本であった。時代とともに土地利用や敷地割は変化するが、基本的な空間単位は持続しており、胡同はコミュニティ単位ともなっている。これは、京都都心部でも同様に街区の４面に向かい合う両側町の構成が今も残り、それが自治の単位である町内を構成していることに近しい。大都市の歴史的都心は時代の要請によって変化せざるを得ないところであるが、こうした都市空間の基本構成を維持することにより、建築物レベルだけでない歴史性の持続を可能とすることができるのではないか。変化を歴史的に繋いでいく手がかりになる。（大阪大学　小浦久子）

■ 情報コーナー

●阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第４３回連絡会
・日時：４月８日(金)18:30～21:00
・場所：神戸市勤労会館 406 号室（JR・阪急・阪神三宮駅より東へ徒歩５分）
・内容：テーマ「団地再生の動向ー明舞と浜甲子園団地」
報告①／明舞団地～ＮＰＯとの協働による再生の取り組み／野崎隆一、報告②／浜甲子園団地～住民参加による団地再生／吉川健一郎（コー・プラン）・問合せ：GU 計画研究所（TEL. 078-435-6510）

●第７５回水谷ゼミナール
・日時：４月22日(金)18:30～21:00
・場所：こうべまちづくり会館６階会議室（神戸市中央区元町通４丁目、TEL. 078-361-4523）
・内容：テーマ「兵庫県下のコンバージョン←→リフォームの事例」
報告①「ワコーレのバリュアップ事業2題」／松尾裕二、有馬博行（和田興産）、報告②「御影の病院→コレクティブハウスへのコンバージョン」／野崎瑠美（遊空間工房）、報告③「太子町の家（明治建築のリニューアル）」／森崎輝行（森崎建築設計事務所）、ｺﾒﾝﾃｰﾀ／三谷幸司（三谷都市建築設計室）
・問合せ：GU 計画研究所（TEL. 078-435-6510）

＜阪神白地まちづくり支援ネットワーク・１７年度予定＞

月　日	テーマ
6月3日 (金)	震災復興住宅１０年検証を検証する
8月5日 (金)	景観法と神戸、阪神間の景観行政
10月7日 (金)	未定
12月2日 (金)	まち協とまちづくりコンサルタントのゆくえ

＜水谷ゼミナール・１７年度予定＞

月　日	テーマ
4月22日 (金)	住宅―事務所のコンバージョン
6月24日 (金)	震災復興マンション再建の結末
8月29日 (金)	最近のランドスケープコンサルタントの仕事
10月28日 (金)	未定
12月26日 (金)	今年出来た私の作品、私たちの作品

「月刊きんもくせい」は、再開して２年がたちました。この間震災１０周年を迎え、阪神淡路地域は、新たなまちづくりへと歩み始めています。
震災１０年を検証したり、地域でのまちづくりを総括する取り組みが行われていますが、「あそこは、今どうなっているのか」「ここは、どう活動しているのか」などの希望がありませんか。またご自身の活動の原稿もどうぞお寄せ下さい。今後「きんもくせい」紙上に掲載していきますのでご一報下さい。

☆★事務局より★☆

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎